

長岡京市文化財調査報告書

第 17 冊

1986

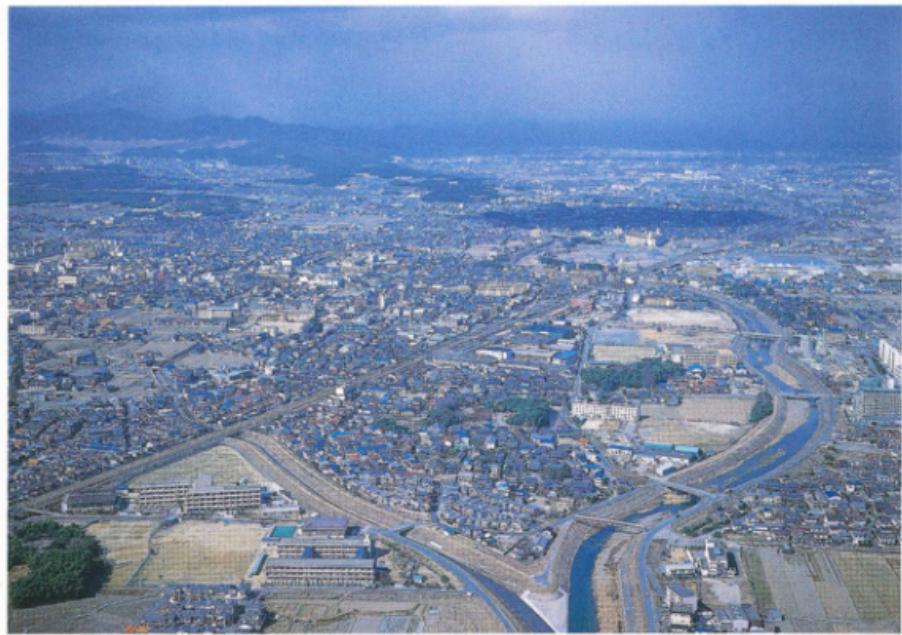
長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 17 冊

1986

長岡京市教育委員会



(1)勝龍寺城跡全景（小畠川と犬川の合流点から北を望む）



(2)勝龍寺城の土壘・空堀残存状況（南から）



(1)神足古墳全景（東から）



(2)神足古墳主体部の遺物出土状況



(3)神足古墳と勝龍寺城土塁（SA 16303）の盛土断面



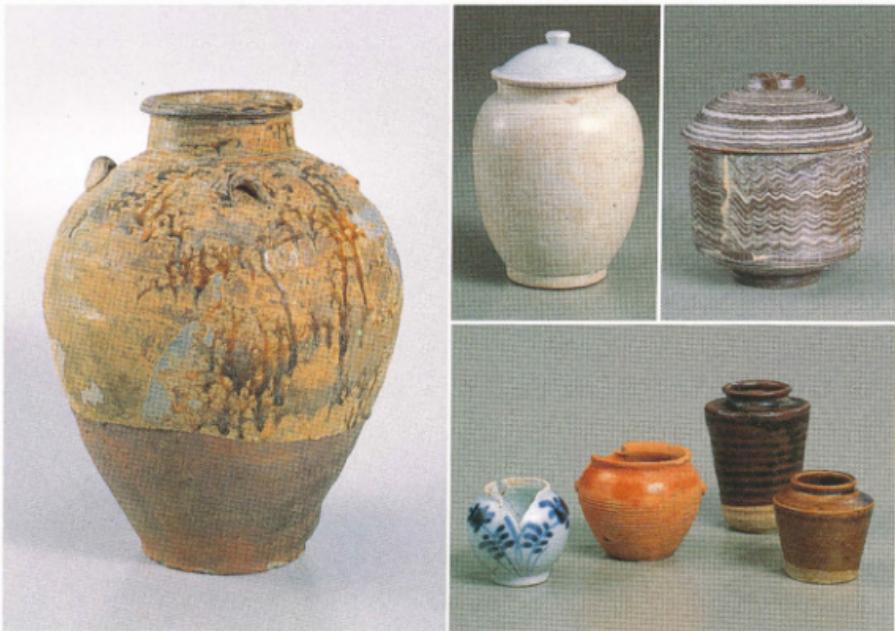
(1)勝龍寺城堀跡（溝 SD16305 A）出土壺（信楽焼の四耳壺＝左・大壺＝右）



(2)神足古墳主体部出土遺物



(1)光林寺火葬墓群（第III期遺構面一東から）



(2)火葬墓出土骨壺（左一丹波焼四耳壺・右上の左一伊万里焼白磁蓋付壺
右上の右一唐津焼刷毛目蓋付碗・右下一陶磁器小壺）

序 文

本市の市民憲章は、昭和52年11月3日に制定され、その中で「学ぶ心と歴史遺産を大切にして文化の豊かなまちをつくりましょう」と唱っています。

また、昭和59年度に策定された長岡市新総合計画の5つの将来像の中では、"さまざまな文化に出会える成熟したまち"を設定しております。本市の文化財行政推進に当っては、これらの基本理念に基づき今日まで鋭意努力を重ねてきました。

その一環といたしまして、昭和57年度に財団法人長岡市埋蔵文化財センターを設立し、発掘調査体制の充実を図るかたわら、昭和59年には長岡京遷都1200年記念事業として長岡市立埋蔵文化財調査センターを建設し、昭和60年10月1日にその調査センターに収蔵されている出土品を一般市民に公開するなど、文化財を広く市民文化の向上に役立てるための施策を推し進めてまいりました。

本書は、昭和60年度中に教育委員会が直営で実施した国庫補助事業の調査成果を掲載しました。その内容としましては、古墳時代後期の群集墳である七ツ塚古墳群第5号墳にかかる調査と長岡京跡および勝龍寺・光林寺の調査等であります。

これらの調査成果は、今後、本市の歴史を解明する上で貴重な資料となるとともに広く市民に活用されれば、幸いと考えております。

最後に調査実施にあたり、種々ご指導ご協力をいただいた諸先生方ならびに土地所有者、また関係者各位に紙上をお借りし、心よりお礼申しあげます。

昭和61年3月

長岡市教育委員会

教育長 湯浅成治

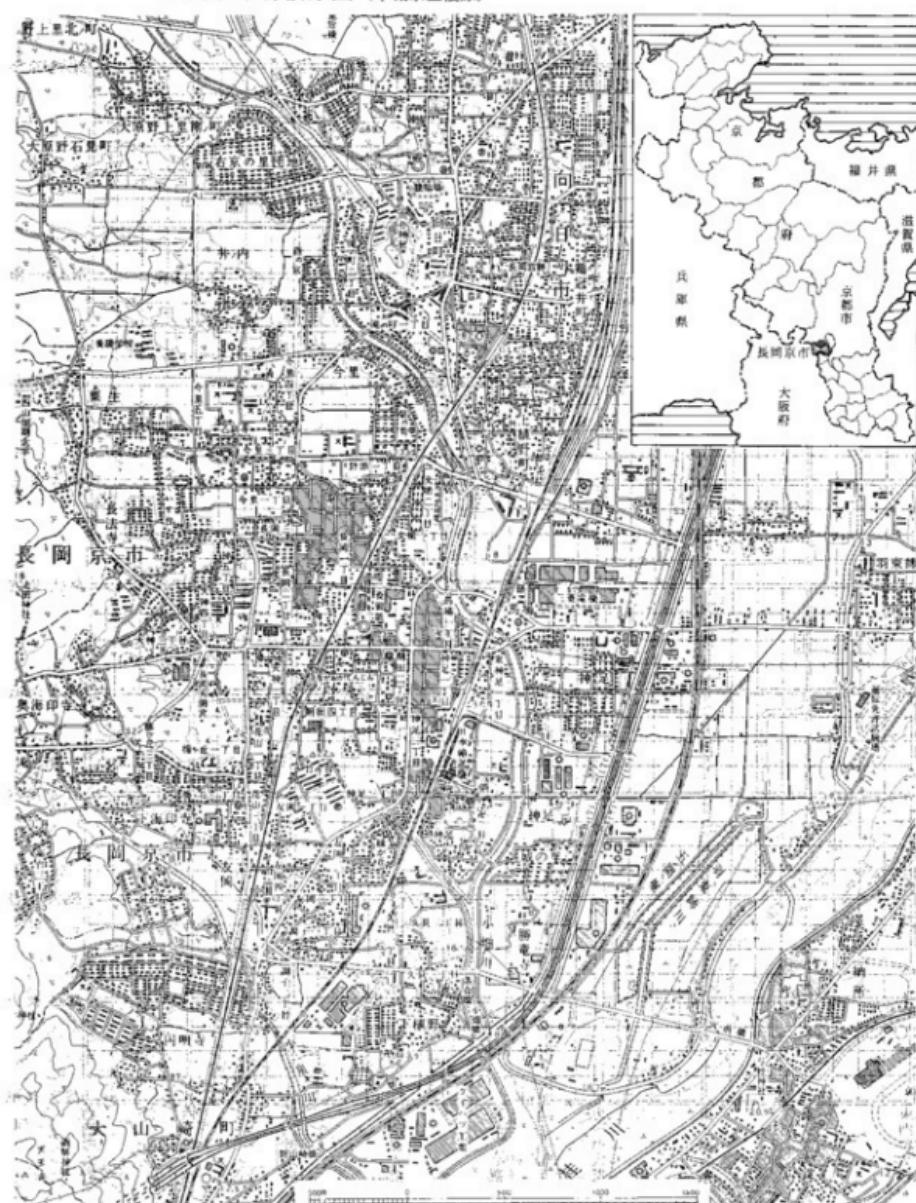
凡　　例

1. 本冊は、昭和60年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長法寺七ツ塚古墳及び長岡京跡の発掘調査の概要報告である。
2. 上記の調査地は付表1のとおりである。その位置は第1図に示した。
3. 長岡京跡の調査地の次数は、長岡京跡左京・長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』昭和52年)による小字名をもとにした地区割に従った。
4. 長岡京内の条坊名は、中山章他「第126図長岡京条坊図」(向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集1982年)による呼称に従った。
5. 各調査報告の執筆者は、各章のはじめまたは文末に記した。
6. 本書の編集は長岡京市教育委員会管理課 中尾秀正が担当した。
7. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には下記の方々の御協力を得た。
 (調査作業員) 岩崎又男・岩岸三郎・田中寅吉・高橋治一・中村正雄・天野菊次郎・麻田安太郎・井本千代治・佐藤昭三・池末安秀・廣沢勝己
 (調査補助員・整理員) 島田吉男・花村潔・山田剛・小島絢子・渡辺美智代・鈴木英美子・岩川絢子・前田明美・桂光良・青木也寸志・戸川隆史・田中智紀・木村弘子・赤木恵・大久保泰江・小田昌子・田中佐知子

付表一 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	土地所有者	調査期間	調査面積	備考
長法寺七ツ塚 古墳群第1次調査	7ANJKK	長岡京市长法寺 北畠21番	佐藤久夫	1985.4.20 ～1986.3.31	450 m ²	現地調査 1983.10.24～ 1983.12.28 長岡京跡右京第138次調査
長岡京跡 右京第168次調査	7ANMKI	長岡京市東神足 二丁目15	㈱ハヤシ 建設工業	1985.4.20 ～1986.3.31	803	現地調査 1984.5.25～ 1984.8.30
長岡京跡 右京第207次調査	7ANMKI-2	長岡京市東神足 二丁目6-15	光林寺 住職 木本弘昭	1985.9.3 ～1985.10.10	110	勝龍寺城跡 神足遺跡 光林寺・慈勝(桟)寺
長岡京跡 右京第213次調査	7ANGKT	長岡京市井ノ内 照本3-3他	長谷川弥一	1985.11.25 ～1985.12.24	360	

長岡京条坊復原図（平城京型復原）



第1図 本報告発掘調査位置図

図 版 目 次

- | | | |
|--------|----------------------------------|-------------------|
| 卷頭図版 1 | (1)勝龍寺城跡全景 | (2)勝龍寺城の土壘・空堀残存状況 |
| 卷頭図版 2 | (1)神足古墳全景 | (2)神足古墳主体部の遺物出土状況 |
| | (3)神足古墳と勝龍寺城土壘 (S A 16303) の盛土断面 | |
| 卷頭図版 3 | (1)勝龍寺城堀跡(溝 S D 16305 A)出土壺 | (2)神足古墳主体部出土遺物 |
| 卷頭図版 4 | (1)光林寺火葬墓群 | (2)火葬墓出土骨壺 |

長岡京跡右京第138次 (7 A N J K K 地区) 調査

- | | | |
|-------|--|-----------------------------------|
| 図版 1 | (1) 七ツ塚古墳群遠景 (1983年, 勧京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影) | |
| | (2) 七ツ塚古墳群全景 (1946年, 米軍撮影) | |
| 図版 2 | 5号墳と周濠 S D 13801検出状況 (1983年, 京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影) | |
| 図版 3 | (1) 6トレンチ全景(西から, 完掘後) | (2) 6トレンチ全景(南から, 完掘後) |
| 図版 4 | (1) 周濠 S D 13801全景(西から, 調査中) | (2) 周濠 S D 13801の遺物の出土状況
(北から) |
| 図版 5 | (1) 1トレンチ全景(東から) | (2) 2トレンチ全景(西から) |
| 図版 6 | (1) 3トレンチ全景(東から) | (2) 4トレンチ全景(西から) |
| 図版 7 | (1) 6号墳全景(南から) | (2) 6号墳墳丘断面(西から) |
| 図版 8 | 出土遺物その1 (土壤 S K 13805・周濠 S D 13801) | |
| 図版 9 | 出土遺物その2 (周濠 S D 13801・溝状遺構 S X 13803・3号墳採集) | |
| 図版 10 | 出土遺物その3 (7号墳採集) | |

長岡京跡右京第163次 (7 A N M K I 地区) 調査

- | | | |
|-------|---------------------------------------|------------------------------|
| 図版 11 | (1) 溝 S D 16305検出の第2・3・4トレンチ全景 (北東から) | |
| | (2) 溝 S D 16305-(B)全景 (第3トレンチ南から) | |
| 図版 12 | (1) 溝 S D 16305-(2)全景 (南から) | (2) 溝 S D 16305断面(第2トレンチ南断面) |
| 図版 13 | 溝 S D 16305出土土師器皿 | |
| 図版 14 | 溝 S D 16305, 空堀 S D 16302出土土師器皿 | |
| 図版 15 | (1) 転讀札 | (2) 墨書き土器(1) |
| | (3) 墨書き土器(2) | |
| 図版 16 | 瓦器, 土師器 | |

- 図版 17 溝 S D 16305(A)出土唐津焼
 図版 18 溝 S D 16305(B)出土唐津、信楽焼
 図版 19 溝 S D 16305(C)出土唐津焼
 図版 20 溝 S D 16305出土瀬戸焼系陶器
 図版 21 空堀から出土した国産陶器（瀬戸、唐津、京焼）
 図版 22 溝 S D 16305(A)・(B)出土染付
 図版 23 土墨・空堀出土の染付、白磁
 図版 24 (1) 輸入磁器 (2) 緑釉陶器
 (3) 小型製品 (4) 近世軒丸瓦
 図版 25 (1) 平安時代須恵器 (2) 平安時代土師器
 (3) 神足古墳出土須恵器蓋坏
 図版 26 古墳時代須恵器、土師器
 図版 27 (1) 弥生土器 (2) 磨製石剣
 図版 28 (1) 鉄製槍先 (2) 鉄製直刀
 (3) 青銅製品

長岡京跡右京第207次 (7 ANN MK I - 2 地区) 調査

- 図版 29 (1) 第IV期遺構全景(南から) (2) 池 S G 20703(南から)
 図版 30 (1) 第III期遺構検出状況全景(南から) (2) 第III期遺構完掘状況全景(南から)
 図版 31 (1) 火葬墓 S X 20732全景(東から)
 (2) 寛永通寶出土状況(火葬墓 S X 20732北西端)
 (3) 唐津焼出土状況(火葬墓 S X 20732北西端)
 (4) 元祐通寶出土状況(火葬墓 S X 20732中央)
 (5) 火葬墓 S X 20719全景(西から) (6) 骨壺出土状況(火葬墓 S X 20719中央)
 (7) 火葬墓 A 列群の細部
 (8) 火葬墓骨出土状況(火葬墓 S X 20731中央)
 図版 32 (1) 火葬墓 S X 20715全景(東から) (2) 火葬骨出土状況(火葬墓 S X 20715中央)
 (3) 火葬墓 S X 20727全景(西から) (4) 火葬骨出土状況(火葬墓 S X 20727)
 (5) 火葬墓 S X 20729全景(西から) (6) 火葬骨出土状況(火葬墓 S X 20729南端)
 (7) 火葬墓 B 列群の細部 (8) 納骨器出土状況(火葬墓 S X 20717中央)
 図版 33 (1) 火葬墓 S X 20706(北から) (2) 骨壺出土状況(火葬墓 S X 20726)
 (3) 火葬墓 S X 20709(東から) (4) 藏骨器出土状況(火葬墓 S X 20720)
 (5) 火葬墓 S X 20708(西から) (6) 石仏出土状況(火葬墓 S X 20708)

- (7) 火葬墓C列群の細部 (8) 一石五輪塔出土状況(火葬墓S X 20708)
- 図版 34 (1) 第II期遺構全景(南から) (2) 第I期全景(南から)
- 図版 35 (1) 土葬墓S K20738(南から)と頭骨、副葬品出土状況
(2) 寝棺墓群(西から)、(左)一土葬墓S K20741、(右)一土葬墓S K20759
- 図版 36 (1) 土壙S K20736(東から) (2) 土壙S K20742(東から)
(3) 土壙S K20758(北から) (4) 土壙S K20743(北から)
(5) 整地盛土と第I期落ち込み(トレンチ東壁)
(6) 整地盛土と火葬墓A列群の土層(トレンチ南壁)
(7) 墓道整地層(トレンチ西壁) (8) 土壙S K20761土層(トレンチ北壁)
- 図版 37 第IV期遺構・包含層出土遺物
- 図版 38 第IV・III期遺構・包含層出土遺物
- 図版 39 第III期火葬墓出土遺物
- 図版 40 第III期火葬墓出土納骨器
- 図版 41 火葬墓出土土師器皿(1)
- 図版 42 火葬墓出土土師器皿(2)
- 図版 43 (1) 第II期土壙出土土師器皿 (2) 長岡京期の遺物
(3) 刀子の線刻画部分
- 図版 44 (1) 伏見人形 (2) 陶磁器片
- 図版 45 (1) 占貨幣と刀子 (2) 火葬墓S X 20715出土金属器
- 図版 46 土葬墓S K20738出土頭蓋骨

長岡京跡右京第213次(7 A N G K T地区)調査

- 図版 47 (1) 調査地全景(南西から、調査前) (2) Aトレンチ全景(南から)
- 図版 48 (1) Bトレンチ全景(上層、南東から) (2) Bトレンチ全景(下層、南東から)
- 図版 49 (1) Aトレンチ溝S D21301(北西から)
(2) Aトレンチ東壁南端の土層堆積状況(西から)
(3) Bトレンチ西壁の土層堆積状況(東から)
(4) Bトレンチ南壁の土層堆積状況(北から)
- 図版 50 (1) 出土遺物(その1) (2) 出土遺物(その2)

挿 図 目 次

第1図 本書報告調査地位置図 iii

長法寺七ツ塚古墳群第1次調査

第2図 調査地位置図	1
第3図 周辺の地形と古墳の分布(地形分類は日下雅義氏の原図による)	3
第4図 6号墳墳丘測量図	4
第5図 6号墳墳丘土層図	4
第6図 七ツ塚古墳群地形測量図	5
第7図 試掘調査地全景	7
第8図 周濠の調査風景	7
第9図 検出遺構図	8
第10図 周濠 S D 13801土層図	9
第11図 C ライン断面写真	10
第12図 D ライン断面写真	10
第13図 周濠 S D 13801実測図	11
第14図 調査地土層図	13
第15図 遺構出土遺物実測図	15
第16図 周濠 S D 13801出土遺物実測図—1	16
第17図 周濠 S D 13801出土遺物実測図—2	17
第18図 遺構出土遺物実測図	18
第19図 3号墳出土遺物実測図	19
第20図 7号墳出土遺物実測図	19

長岡京跡右京第183次(7ANMK1地区)調査

第21図 発掘調査地位置図(1/5000)	25
第22図 溝S D 16305 A出土土師器実測図(1/4)	31
第23図 溝S D 16305 B出土土師器実測図(1/4)	32
第24図 溝S D 16305 C出土土師器実測図(1/4)	33
第25図 土星・空堀出土土師器、溝S D 16305出土轉讀札と埴輪実測図(1/4)	34
第26図 溝S D 16305出土近世陶磁器実測図(1)(1/4)	35

第27図	溝S D16305出土近世陶磁器実測図(2) (1/4)	36
第28図	溝S D16305出土近世陶磁器実測図(3) (1/4)	37
第29図	土星・空堀出土近世陶磁器実測図 (1/4)	38
第30図	中・近世瓦器、土師器実測図 (1/4)	39
第31図	近世擂鉢実測図 (1/4)	40
第32図	中・近世瓦器、土師器(519~522土師器裏)実測図 (1/4)	41
第33図	近世土師器鍋、鉢実測図 (1/6)	42
第34図	近世瓦器鉢、壺実測図 (1/6)	43
第35図	平安時代初期の土師器実測図 (1/4)	44
第36図	平安時代初期・中期の須恵器実測図 (1/4)	45
第37図	古墳時代須恵器、土師器実測図 (1/4)	46
第38図	弥生土器実測図 (1/4)	47
第39図	縄文土器、弥生土器実測図 (1/4)	48
第40図	弥生時代石器(上段)、近世石臼(下段)実測図(石器1/2、石臼1/4)	49
第41図	近世砥石、軒瓦実測図 (1/4)	50
第42図	鉄器、鉄製品実測図 (1/4)	51
第43図	土師器皿の形態別総量比	54
第44図	土師器皿の形態別法量分布図	56
第45図	土師器皿の出土遺構別・形態別法量分布図	57
第46図	乙訓地域の中・近世遺物編年図	59

長岡京跡右京第207次 (7ANMK1-2地区) 調査

第47図	発掘調査地位置図 (1/5000)	61
第48図	調査地土層図 (1/40)	63
第49図	第Ⅳ期遺構配置図 (1/100)	65
第50図	池S G20703の細部 (1~2は構築状況、3~4は遺物出土状況)	66
第51図	池S G20703実測図 (1/20)	67
第52図	第Ⅲ期遺構配置図 (1/100)	68
第53図	石敷溝S D20718実測図 (1/40)	69
第54図	火葬墓A列群 (1/40)	70
第55図	火葬墓B列群 (1/40)	72
第56図	火葬墓B列群の遺物出土状況	73
第57図	火葬墓C列群 (1/40)	74

第58図 火葬墓D列群（1／40）	76
第59図 第II期造構配置図（1／100）	77
第60図 土葬墓S K 20738実測図（1／20）	78
第61図 土葬墓S K 20758実測図（1／20）	79
第62図 土壙S K 20736実測図（1／20）	79
第63図 土壙S K 20742実測図（1／20）	80
第64図 土壙S K 20743実測図（1／20）	80
第65図 第I期造構配置図（1／100）	81
第66図 第IV期出土遺物実測図（1／4）	85
第67図 第III期（火葬墓）出土遺物実測図(1)（1／4）	86
第68図 第III期（火葬墓）出土遺物実測図(2)（1／4）	87
第69図 第I・II期造構・第III期整地層他出土遺物実測図（1／4）	88
第70図 第II期以降出土古貨幣・刀子	89
第71図 土師器皿の形態別・時期別法量分布図	95
第72図 土師器皿の形態別法量表	98
第73図 検出遺構変遷図	100
第74図 光林寺所蔵涅槃図（寛永17年6月15日）	102
第75図 光林寺所蔵涅槃図寄進者名（涅槃図裏面）	102
第76図 調査前の光林寺本堂（南西から、光林寺所蔵）	103
第77図 家老横田主水他、永井直清の家臣の墓	103
第78図 光林寺本堂棟札	103
第79図 「全廊比丘」無縫塔	103
第80図 火葬墓型式分類平面略図	106
第81図 火葬墓の構築法型式分類図	106
第82図 「徳勝寺總境内之図」（明治43年）徳勝寺履歴写	108
第83図 城州乙訓郡神足村光林寺寺地抗木打渡裏書図（寶曆二年）	108
第84図 現在の光林寺（昭和44年）	108
第85図 大正の光林寺	108
第86図 火葬墓S X 20717骨壺埋納火葬骨	110
第87図 火葬墓出土石仏、石塔婆	115

長岡京跡右京第213次（T A N G K T地区）調査

第88図 発掘調査地位置図	116
---------------	-----

第89図 調査地周辺図.....	117
第90図 Aトレンチ検出遺構図.....	114
第91図 Bトレンチ検出遺構図.....	120
第92図 調査地土層図.....	122
第93図 出土遺物実測図.....	124
第94図 井ノ内集落周辺の旧地形と小字名（昭和11年）.....	125
第95図 社乃神神社.....	126

付 表 目 次

付表-1 本報告調査地一覧表.....	ii
付表-2 長法寺七ツ塚古墳群出土遺物観察表.....	22~24
付表-3 神足遺跡の時期区分.....	26
付表-4 勝龍寺城の歴史的画期.....	27
付表-5 遺物出土遺構一覧表.....	52・53
付表-6 土師器皿の形態分類表.....	53
付表-7 陶磁器出土総数及び土師器皿との割合.....	55
付表-8 出土遺物観察表.....	90
付表-9 土師器皿の形態分類表.....	93
付表-10 古貨幣の出土遺構表.....	97
付表-11 土師器皿の形態別出土個数.....	98
付表-12 出土土器総量.....	98
付表-13 検出遺構変遷表.....	100
付表-14 徳勝寺、光林寺略歴.....	101
付表-15 脳頭蓋の計測値と示数.....	114

本 文 目 次

第1章 長法寺七ツ塚古墳群第1次調査概要（長岡京跡右京第138次調査概要）.....	1		
1. はじめに	2. 遺跡の環境と過去の調査	3. 検出遺構	
4. 出土遺物	5. まとめ		
第2章 長岡京跡右京第163次調査概要.....	25		
1. はじめに	2. 検出遺構の時期区分	3. 出土遺物	
4. まとめ			
第3章 長岡京跡右京第207次調査概要.....	61		
1. はじめに	2. 調査経過	3. 検出遺構	4. 出土遺物
5. まとめ	6. 長岡京跡出土の江戸時代人骨について		
第4章 長岡京跡右京第213次調査概要.....	116		
1. はじめに	2. 調査経過	3. 検出遺構	4. 出土遺物
5. まとめ			

第一章 長法寺七ツ塚古墳群第1次調査概要

長岡京跡右京第138次(7 A N J K K 地区)調査概要

1 はじめに

- 1 本報告は、1983年10月24日から12月28日まで、長岡市長法寺北畠21において実施した長岡京跡右京三条四坊十四町・西四坊第二小路推定地および長法寺七ツ塚古墳3・4・5号墳の発掘調査に関するものである。なお当古墳群の性格を明らかにするために、この調査に先だって昭和56年度に実施された6号墳の緊急調査の成果および3・7号墳出土遺物について合わせて収録した。
- 2 本調査は、長法寺七ツ塚古墳3・4・5号墳間を開発する計画が起ったため、これらの古墳の保護対策を講じるための資料を作成する目的で実施した発掘調査である。
- 3 調査は、長岡市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施した。現地調査は長岡市教育委員会社会教育課（現管理課）文化財係中尾秀正が担当し、整理報告は（財）長岡市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、原秀樹が行った。
- 4 調査実施にあたり、土地所有者である佐藤久夫氏、資料置場・飲料水を提供していただいた佐藤友彦・立田恵・真柴勝昭の各氏、地元の武本健治氏ほか近隣土地所有者住民の方々から種々のご協力を得た。また、現地調査から本報告に至るまで、京都文教短期大学教授中山修一・大阪大学教授都出比呂志・（財）京都市埋蔵文化財研究所丸川義広・上村和直・京都市埋蔵文化財調査センター北田栄造・平安高校教諭萩本勝の各氏ほか貴重なご教示をい



第2図 発掘調査位置図

2 遺跡の環境と過去の調査

ただいた。さらに遺物写真は、7号墳のものを元文部技官高橋猪之介氏に、その他を(財)京都都市埋蔵文化財研究所牛嶋茂氏等に撮影・指導していただき、航空写真の一部は(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影のものを提供していただいた。

5 本報告の編集は、原、中尾が行い、執筆は1ー中尾、2の一一部ー山本輝雄、それ以外を原が行った。

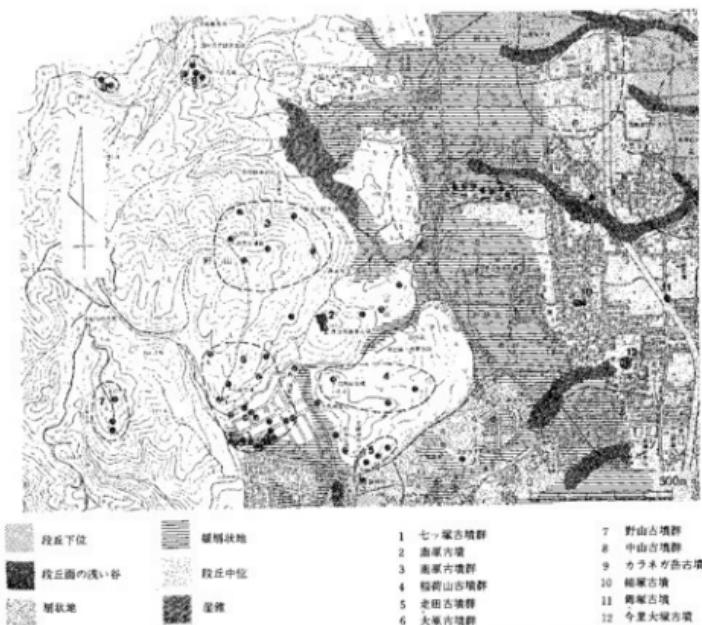
2 遺跡の環境と過去の調査

古墳の立地 七ツ塚古墳群は、長岡京市北西部にある長法寺集落東側の水田の中にあり、東西一列にはば30m間隔で7基の古墳が並び、西から順に1号…7号墳と呼称されている。この古墳群は、西方にある西山山地の山裾に展開する下位段丘面に形成された扇状地上に立地し、南側の谷状に入り込んだ緩扇状地と北側の開析谷にはさまれた舌状を呈する小高い台地上に築造されている。標高は51~45.5mを測る。近年宅地開発により、5~7号墳の周囲は住宅地となり、一望できなくなっている。

周辺の古墳 七ツ塚古墳群の背後の山中は、市内でもっとも数多くの古墳が築造された地域である。前期の古墳には、本市で最古とされる南原古墳がある。この古墳は、平地を望む尾根の頂部に築かれ、これまでの数次の発掘調査で4世紀後半の前方後方墳と判明した。前期末ないしは中期初頭の古墳として、南原古墳の東隣の南原東1・2号墳やこの北約1kmに直線約30mで粘土被の埋葬施設を有するカラネガ岳2号墳がある。これらの前期~中期初頭の古墳はこの地域の古墳時代の首長系譜を解明する上で重要な古墳と考えられている。それ以降、後期までの古墳はほとんど確認されていない。後期に入ると多くの群集墳が築造され、古墳の密集地となる。南原古墳群(6基)・大原古墳群(25基)・野山古墳群(3基)・稻荷山古墳群(3基)・走田古墳群(3基)・中山古墳群(2基)・カラネガ岳古墳群(3基)といった横穴式石室をもつものや、芝12号墳・光明寺古墳・北平尾古墳など陶棺を伴うものなどがあり、当地域の古墳時代後期を特徴付けるものになっている。なお、昨年には南原古墳の東側斜面において、農道敷設工事に伴って5世紀前半と推定される埴輪円筒棺が出土している。

一方平地には、後期の前方後円墳や円墳が築造されている。既に消滅した古墳(細塚古墳・薬師堂古墳など)もあり不明な点が多いが、今里地区の南西部で舞塚古墳・舞塚第2号墳とその南西約250mの今里大塚古墳の3基が確認されている。舞塚古墳は周濠をもつ全長約50mの帆立貝式の古墳で人物埴輪などが出土し、6世紀前半の築造と推定されている。また今里大塚古墳は、巨石を用いた横穴式石室と周濠を有する直径約45mの大規模な円墳で6世紀末ごろの築造と推定され、舞塚古墳とともに、この地域の首長系譜にあるものと推測されている。

過去の調査 七ツ塚古墳群は、昭和7年に7号墳で村道工事に伴う土採り作業中に、主体部付近から出土した台付子持装飾壺など須恵器類の一部が植田小太郎氏によって紹介され世に



第3図 周辺の地形と古墳の分布（地形分類は日下雅義氏の原図による）(1/2000)

(7)

知られるようになった。その後昭和42年に京都府教育委員会実施の地形測量により、初めて墳丘の規模や墳形などが明らかにされた。

(8)

東西に並ぶ7基の古墳は、いずれも水田耕作等のためかなり原形を損なっており、比較的原形を保つ4・5号墳は直径17~18m、高さ3~4mの円墳であると推定された。なお、この4・
5号墳と合わせて3号墳は、江戸時代の長法寺村領地絵図によると、他の古墳と比べ規模が大きくなっている。しかし、その後も本格的な発掘調査は実施されず、古墳群の構造・性格などはまだ明らかにされていない。ただ、6号墳において、駐車場拡幅によって墳丘の一部が削平された際に、
墳丘測量および断面観察が行われているのでここに合せて報告しておく。

七ツ塚6号墳の調査（第4・5図） 昭和56年2月、6号墳の一部が削平を受けているという市民からの通報が市教育委員会にあった。直ちに職員が現地に赴き、破壊の状況を見聞したところ、墳丘の西側が長さ約7m、幅約1.5mの範囲で削平されていること、幸いにも埋葬主体にまで破壊が及んでいないことなどを確認した。この事態を重視した市教育委員会では、京都府教育委員会にその旨を連絡し、善後策について協議した結果、無届出で古墳破壊を行っ

4 遺跡の環境と過去の調査

た土地所有者に対して厳重に注意し、旧状に復元するよう求めるとともに、削平部分について緊急の調査を実施することになった。調査は、墳丘の地形測量と盛土の断面観察を中心とした目的とし、2月18日から20日までの3日間を費した。以下、調査で明らかとなった事項について略述する。

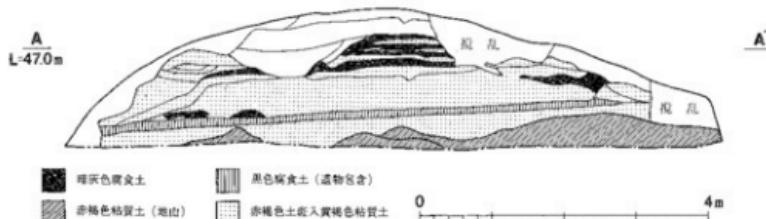
まず、墳形は径約9m、高さ約2m程度の円墳であると考えられているが、標高47m以上の等高線をみると、東および北側が直線的であり、3・5号墳と同じく方墳である可能性も考えられないわけではない。ただし、墳丘裾部の基底線がかなりの部分で削平されており、周濠の有無も未確認である現段階においては、円・方いずれの墳形であるのか確定し難く、将来の詳細な調査を待って判断したい。

次に、墳丘の盛土は、10~40cmの表土（腐葉土）下に、約1mほど残存していた。これは、木の根や後世の攪乱穴によって少なからず削平されており、しかも墳丘西側の断面によるものであって、中央部での盛土はもう少し厚いものと推察される。盛土は、赤褐色ないし黄褐色粘質土の地山上に、暗灰色の腐食土と地山を削った土を交互に積み上げており、上部ほど各層の厚さ（5~10cm）は細かい。このことは、盛土の構築工程を探る上に重要であろう。また、遺物は、攪乱穴から須恵器と瓦器の細片、および盛土中から少量の土師器片が出土しているものの、古墳築造の年代を知る手がかりとなるほどのものではない。

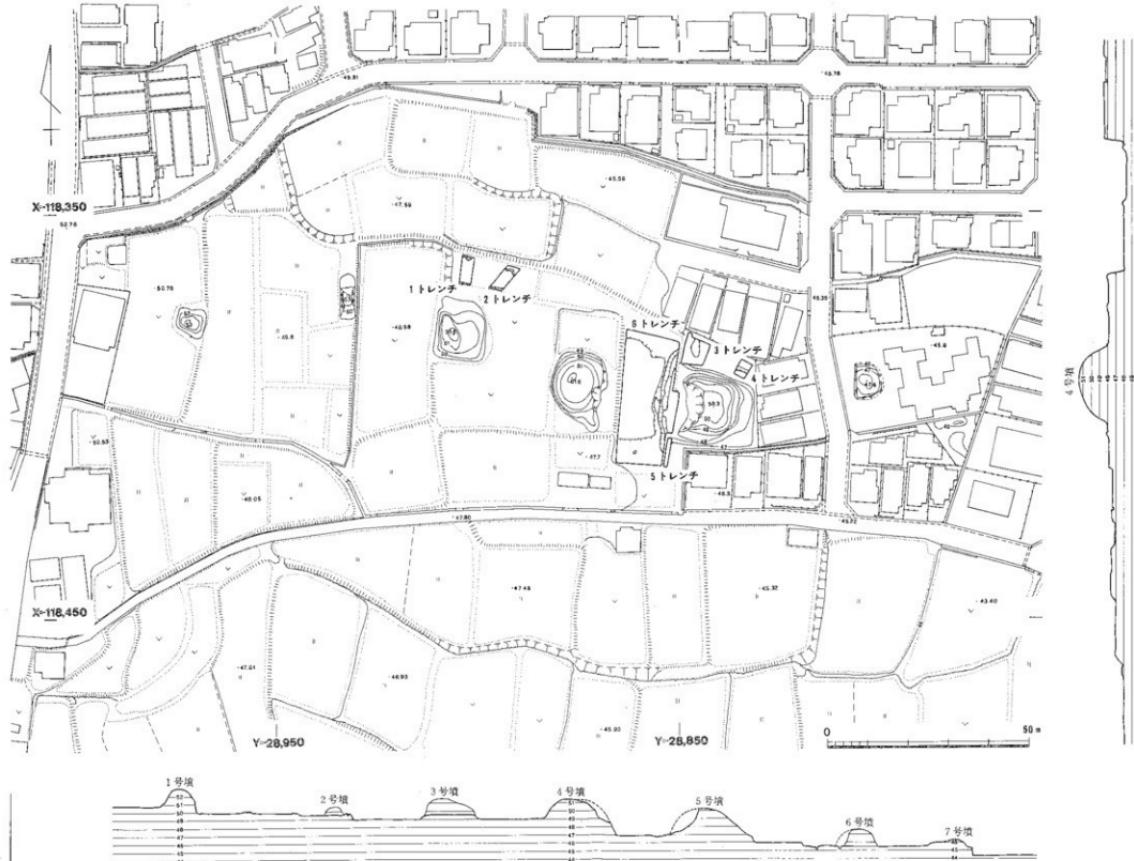
なお、葺石および埴輪などの外表施設は、まったく認められなかった。



第4図 6号墳墳丘測量図(1/20)



第5図 6号墳墳丘土層図(1/80)



第6図 七ヶ塚古墳群地形測量図

3 検出遺構

本調査を実施するに先立ち、事前に遺構の有無を確認するため4・5号墳間に $2 \times 14m$ の試掘トレンチを設定した。その結果、5号墳の周濠と考えられる幅3.5m・深さ0.3mの溝を検出し、さらにこの溝が墳丘の西側全体にのびることが予想された。遺物は少片が出土したのみであった。試掘調査は、昭和58年7月22日～8月1日の延べ8日間行なわれ、図面と写真撮影終了後シートをかけて後日の本調査に備えた。

本調査は、試掘調査の結果より5号墳の周濠の全面調査と、墳丘北側の周濠の有無、および3・4号墳の周濠の有無を確認するために調査予定地内に各々6ヵ所のトレンチを設定した。調査は、全て人力による排土作業を行った。遺構はおもに耕作土・床土を除去した地山面で検出された。地山は黄褐色土、又は黄褐色砂礫層となっている。以下、各トレンチにおける調査と各遺構の概要について述べていきたい。

1・2トレンチ 3号墳の北側に設定したトレンチである。トレンチは台地の縁辺部に位置し、北側に比高差約2mの崖がある。遺構は、当初期待した3号墳の周濠は検出されず、南側の畦畔下でこれと平行する深さ0.1mの溝1条、北側で現地形に沿って北へ傾斜すると思われる不整形な落ち込みが検出された。いずれも調査地外へのびるためその規模等は不明であるが、土取りや耕作に伴うものと考えられる。遺物は出土していない。なお、遺構の検出面はいずれも地山面で、標高28mを測る。

3・4トレンチ 5号墳の北側に設定したトレンチである。遺構は、3トレンチで溝S D 13802と溝状遺構S X13803を、4トレンチで溝S D 13802と同様に北側へ落ち込む溝をそれぞれ検出した。とくに4トレンチで確認した溝は、出土遺物がないためその時期は明らかにし得ない。ただ埋土である黄灰色粘質土は、他の遺構に比べて土が軟かく、しかも1・2トレンチの北側で検出した不整形な落ち込みの埋土と類似することから、土取りや耕作に伴って埋られたものと考えられる。このことから5号墳に関連するものとは考え難い。なお、地山面はいず

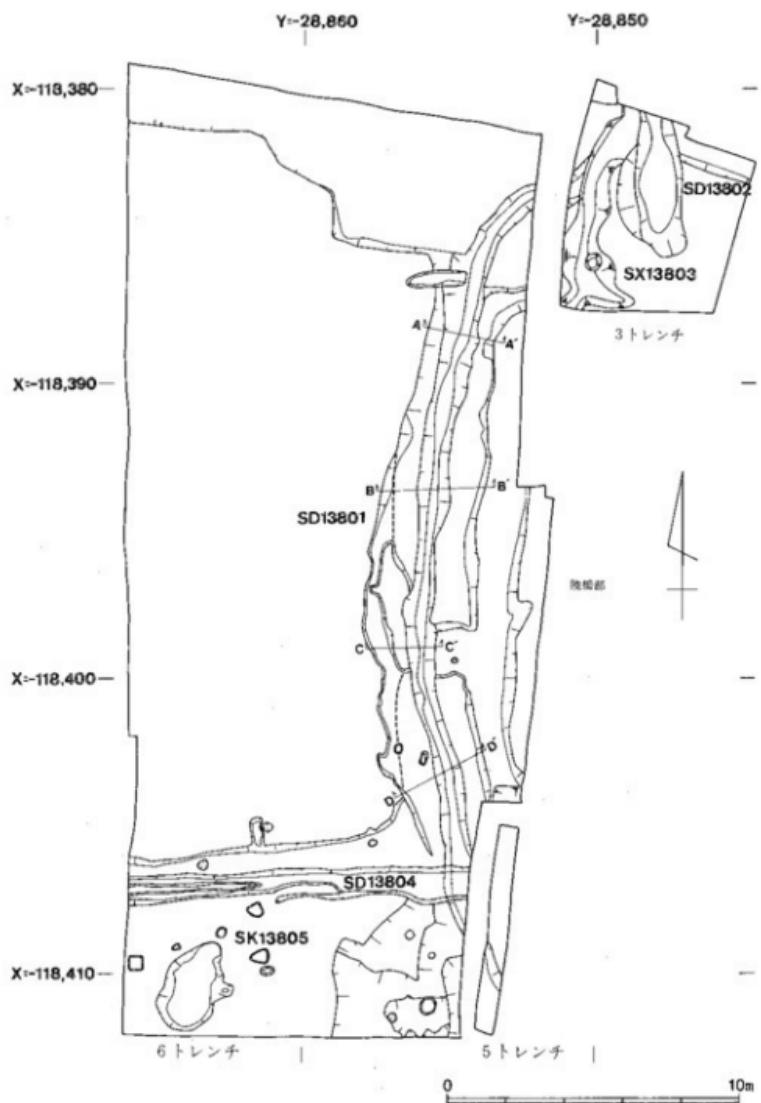


第7図 試掘調査地全景



第8図 周濠の調査風景

8 検出遺構



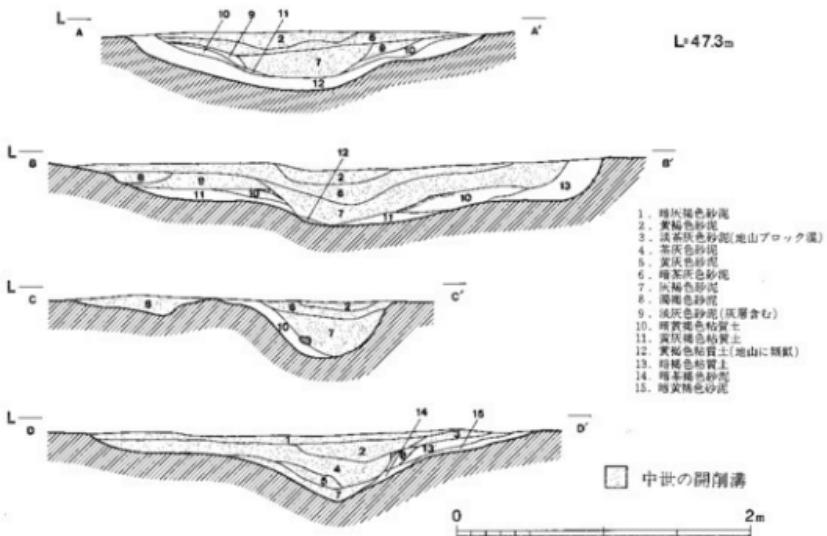
第9図 検出遺構図(1/20)

れも現存する5号墳の墳丘裾から北に向かって緩かに落込み、標高46.4~45.8mを測る。

5・6トレンチ 4・5号墳の間に設定したトレンチである。地山面はトレンチ中央の平坦部で標高47.2mを測り、北東および南東方向に緩やかに傾斜する。この傾斜が埋まって現在のような平坦地となるのは、出土遺物から中世以降と考えられる。6トレンチで検出された遺構は、試掘調査で一部確認していた5号墳の周濠S D 13801およびこれを中世に開削した溝の他に溝S D 13804・土壌S K 13805がある。また5トレンチでは、周濠S D 13801を開削した溝のつづきを検出した。これらの遺構はすべて地山面で検出されている。なお、6トレンチでは、4号墳に伴う周濠等の遺構は検出されなかった。

次に3・6トレンチで検出された各遺構について述べていきたい。

周濠S D 13801(第9・10・11・12図) 6トレンチ東側で検出された5号墳に伴う周濠である。この周濠は、中世に開削された溝によって改変され当初の形状をとどめておらず、その平面形は、墳丘の外側が外方へ張り出した形をしている。周濠の中央付近では、墳丘から外側に向かってのびる凸状の高まりと中世の開削溝に分断された細長い島状の高まりが残されていた。これを断面観察等から復元すると、当初の周濠は、5号墳墳丘側ではほぼ直線的に、反対側はゆるやかに弧を描き、北端と南端の傾斜面で浅くなり途切れていたと考えられる。しかも、中央付近の高まりは、周濠を築いた当初は掘り残され、陸橋部になっていたことが明らかとなった。また、この溝は、周濠を縦断して台地の裾へのび、3・5トレンチまで続いていた



第10図 周濠S D 13801土層図(1/40)



第11図 C ライン断面写真



第12図 D ライン断面写真

ことが判明した。その開削の時期は、溝から周濠内に残された土器とともに13世紀前半の特徴をもつ瓦器焼が出土していることから、ほぼ近接する時期と思われる。遺物は、土師器・須恵器・瓦器・花崗岩の小片などが出土した。

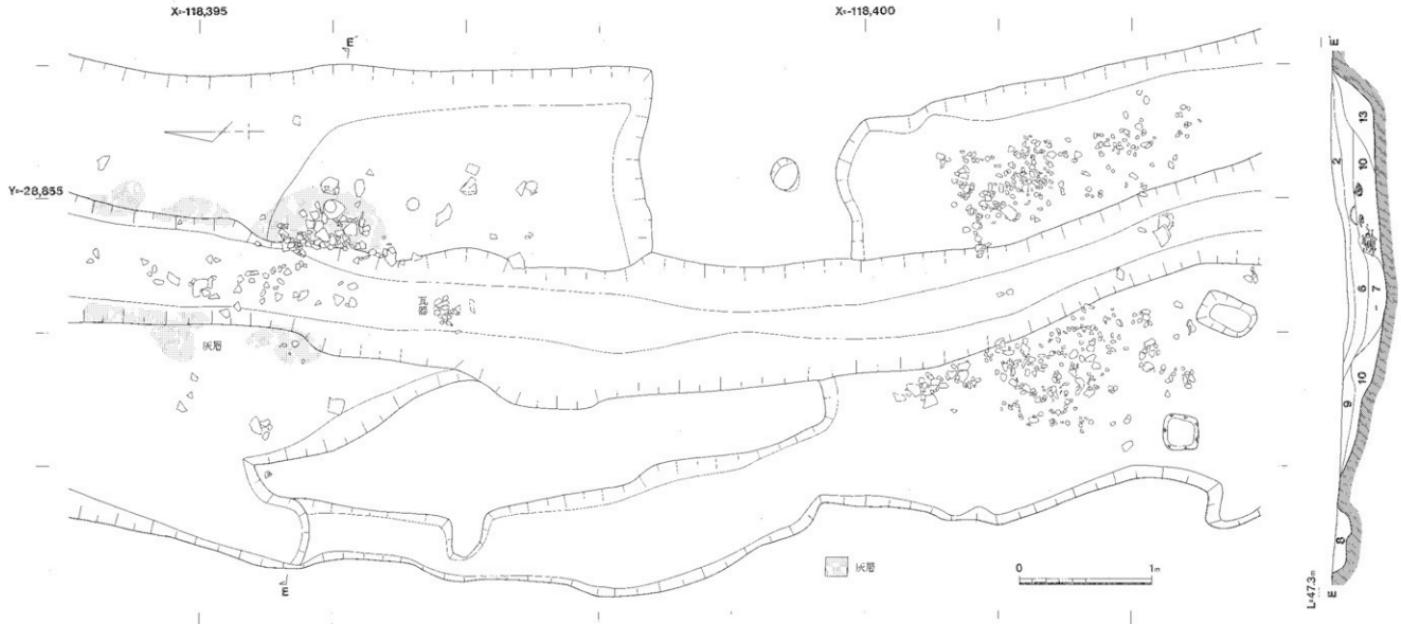
また陸橋部の中央やや南東寄りで検出された柱穴は直径0.2m、深さ約0.2mを測る。この柱穴には遺物がなく、その時期・性格は明らかにし得ない。

溝S D 13802 (第9図) 3トレンチの北端で表土直下より検出された。幅は0.9m以上、深さ0.5mをはかる。埋土は淡黄灰色土である。遺物は土師器と須恵器が出土した。当初遺物が出土したことから遺構と考えたが、層位的に新しく1・2・4トレンチの北部で検出された落込みと同様のものと考えられる。

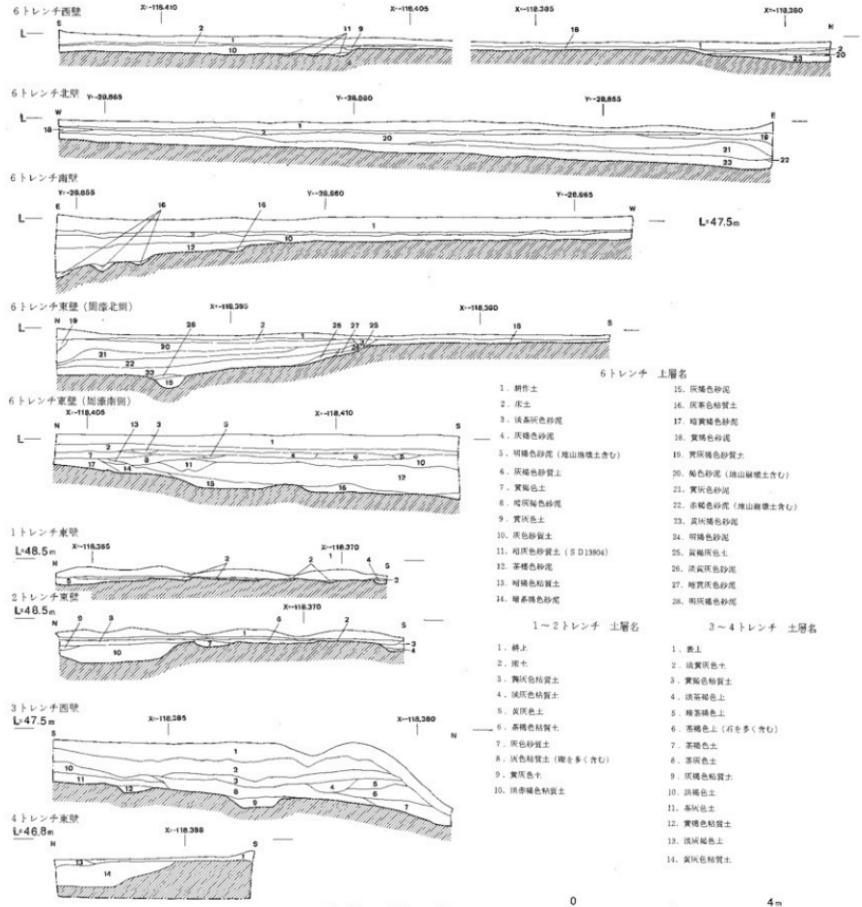
溝状遺構S X 13803 (第9図) 3トレンチの地山面で検出され、5号墳の裾からほぼ真北に向ってのびていく。長さ4.8m以上・幅約1.5~2.2mで最も深い所で約1mをはかる。遺物は土師器と須恵器が少量出土しており、この中には周濠S D 13801から出土した器台の脚部と同様の破片が出土している。埋土は基本的に4層からなり、遺物はおもに第2・3層から出土した。

溝S D 13804 (第9図) 6トレンチ南部のなだらかに傾斜する地山面で検出された東西方向の溝である。西から東に向かって徐々に深く、幅も広くなる。東壁部分では幅約1.1m・深さ約0.2mをはかる。埋土は暗灰色砂質土である。遺物は瓦器の細片が出土した。層位的に、周濠S D 13801が埋没した後で掘られたものである。

土壌S K 13805 (第9図) 溝S D 13804と同じく6トレンチ南部の地山面で検出された。長辺0.7m・短辺0.5m・深さ0.1mをはかり、埋土は地山に類似する黄褐色粘質土である。遺物は甕が一点だけ出土している。



第13图 周秦 S D 13801实测图



第14図 調査地土層図

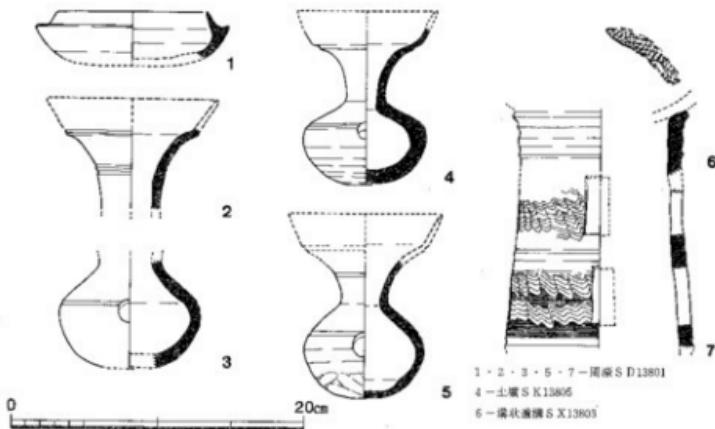
0 4m

4 出土遺物

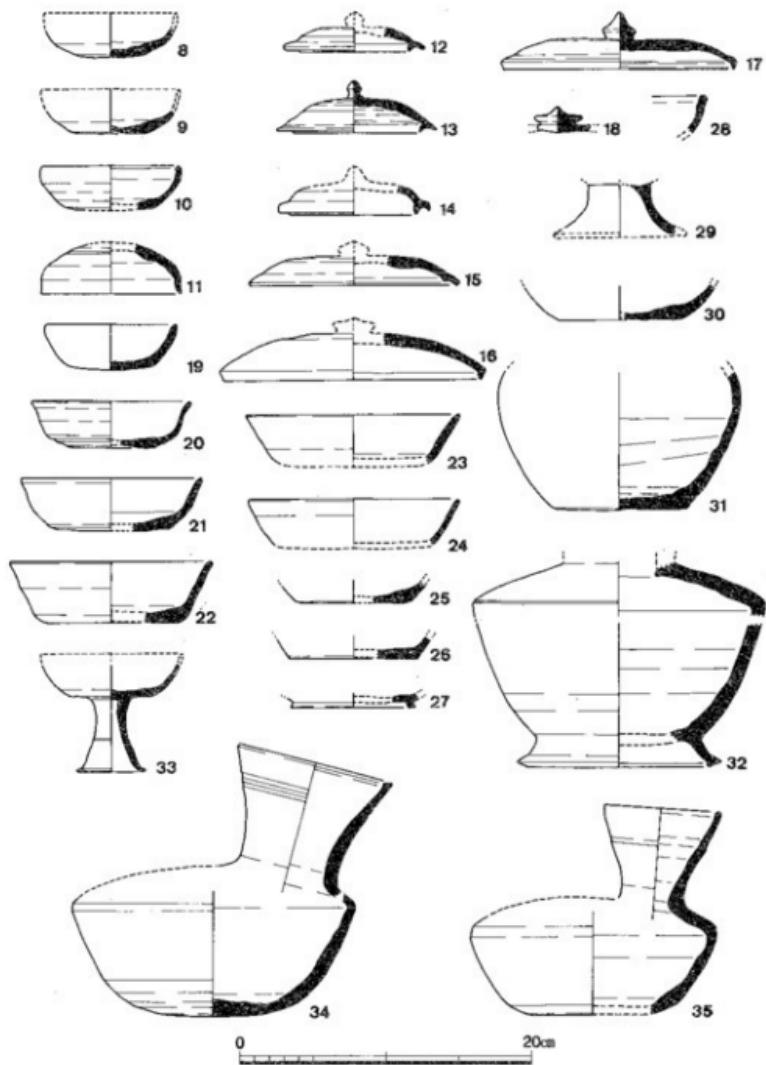
今回の調査で出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦器・陶器・染付・花崗岩片などである。これらの遺物の大部分は5号墳の周濠S D13801から出土したものであり、他の遺構から出土した遺物は極めて少なく、図示できるものも限られている。周濠は中世に開削されたが、7世紀前半代と後半代の遺物を多く出土している。七ツ塚古墳群についてはこれまで墳丘の発掘調査は行なわれていないが、開墾・削平された際に出土した3号墳と7号墳の須恵器が紹介されており、今回は七ツ塚古墳群の築造時期の一端を示すこれらの遺物についても合せて掲載した。¹²⁾なお、器形分類については『平城宮発掘調査報告VII』に準拠した。

周濠S D13801等の出土遺物（第15・16・17・18図） 土師器・須恵器・瓦器・花崗岩片が出土した。これらの遺物はおもに陸橋部をはさんで一段深くなった開削溝の両側から集中して出土しており、部分的に灰層が認められる。遺物は土師器と須恵器が大部分をしめるが、前者については全体に摩滅しており接合・実測できるものは極めて少ない。

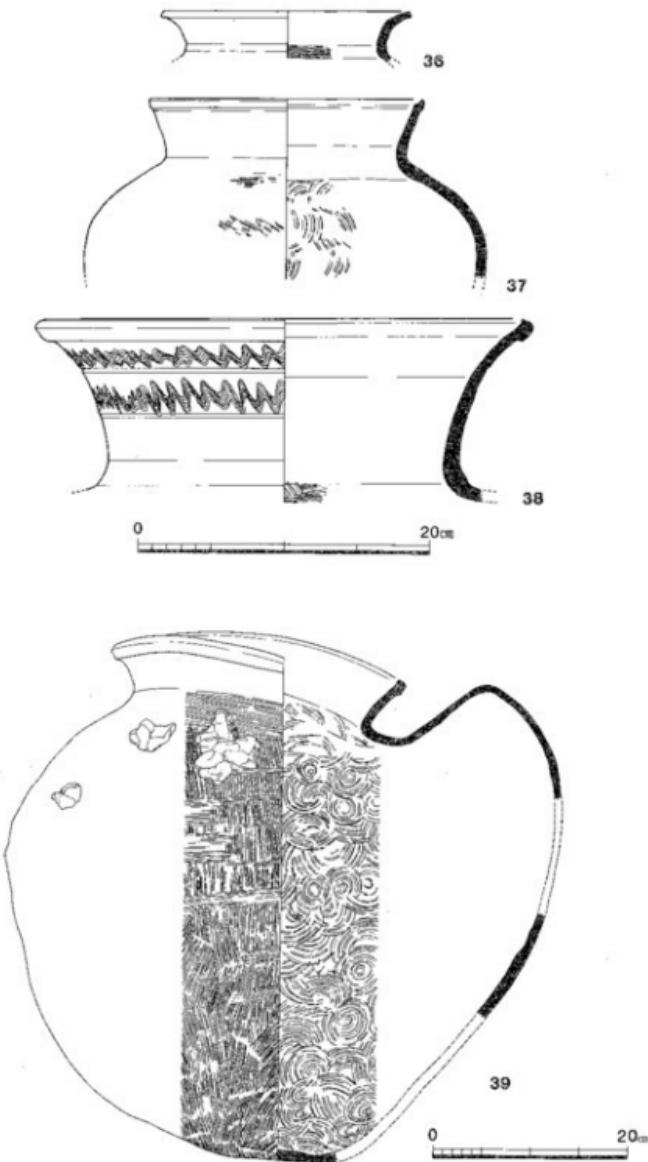
須恵器は、坏H(环身)・坏A・坏B・坏H蓋・坏G蓋・坏B蓋・壺F・壺K・甕・平瓶・高环・甕・脚部片等が出土した。坏身（1）は6世紀以来の定型化した坏であり1点のみ出土した。底部はわずかしか残っておらずヘラケズリは確認されない。甕（2・3・5）は、頭部が小さくすぼみ、口縁部もほぼ体部径と同じである。器台脚部（7）は、溝状遺構S X13803から出土した（6）と同一器形と思われる。坏G（8～10）と坏G蓋（12～14）は、互いにセットとして考えられるものである。8～10は底部をヘラ切りする。12～14は内面にかえりを有する。14は口縁部が下方に屈曲しており、内面のかえりもやや肉厚である。蓋（11）は天井部が



第15図 遺構出土遺物実測図 (1/4)



第16図 周濠 S D 13801出土遺物実測図 - 1 (1/4)



第17図 周濠S D13801出土遺物実測図-2 36~38 (1/4), 39 (1/6)

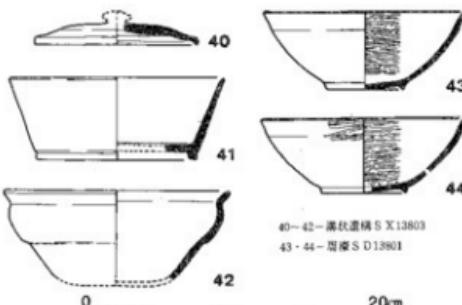
丸味をもち、口縁端部は外反する。短頸壺の蓋になると思われる。壺B蓋（15～18）は、内面にかえりをもつもの（15）と、口縁端部が下垂するもの（16・17）がある。15の内面のかえりは前代に比べて小さくなり退化している。天井部のつまみは、やや扁平な宝珠形つまみをもつもの（18）と、つまみの上半部が尖りぎみに突出するもの（17）がある。壺A（20～26）は25・26の底部を除き、各々体部と口縁部の形態が異なるが、その中でも特に新しい要素として23・24は8世紀以降みられる定形化した壺の形態をもつものである。この中で21～23については、5号墳の埴丘裾部付近と考えられる5トレンチ北端から出土している。また、23・24は壺Aとしたが壺Bの可能性も否定できないであろう。壺B（27）は高台のみの小片である。皿（28）は小片であり口径・器高は不明である。壺F（30・31）は、底部をへら切りした平底の壺で球形の体部をもつと考えられる。壺K（32）は、外方へふんばる高台を有する壺であるが、肩部が直線的にび体部との境は鋭角的である。高壺（33）は、平底を呈する壺部と中位に段を有する脚部とからなる。甕（37～39）は、口径から小型のもの（37）と、大型のもの（38・39）に分けられる。39は1ヵ所からまとめて出土している。

土師器は、壺C・脚部片・甕などが出土した。壺C（19）は、摩滅が激しく調整は不明である。脚部片（29）は、上部に壺がのると考えられ、接合面で剥離したものである。甕（36）は、長胴を呈する甕と考えられる。また、肩平で先端が上方へ屈曲する甕の把手が出土している。

周濠が開削された時期については、周濠の中央を縱断する溝の底から瓦器塊2個体が出土しており、その特徴から13世紀前半に比定される。花崗岩片（67）はほぼ12cm四方・厚さ3～4cmの破片で上下と端面に加工痕をとどめる。色調は、淡褐色を呈し平らな面の一方には火を受けたと思われる痕跡が残る。

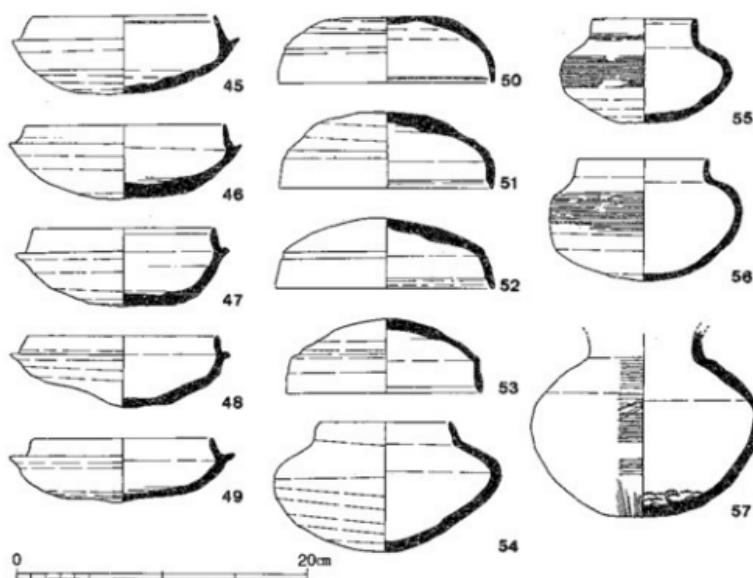
溝状造構S X 13803出土遺物（第18図） 土師器・須恵器が少量出土した。須恵器は、壺B蓋（40）と、壺B（41）がある。40は焼成が甘く、胎土は非常に脆弱である。41は壺Bの蓋である。土師器は、人面土器タイプの壺B（42）が出土した。小片であるが、体部中位に成形時の段を有する独特の形態である。人面や墨線は認められない。

土塼S K 13805出土遺物（第15図） 須恵器が1点出土した。甕（4）は、その特徴より周濠S D 13801から出土した小型の甕と同時期と考えられる。当遺構の周辺には、これ以外に遺物を含まない大小の掘込みが所々にみられる。この甕は遺構に伴うものではなく混入したもの

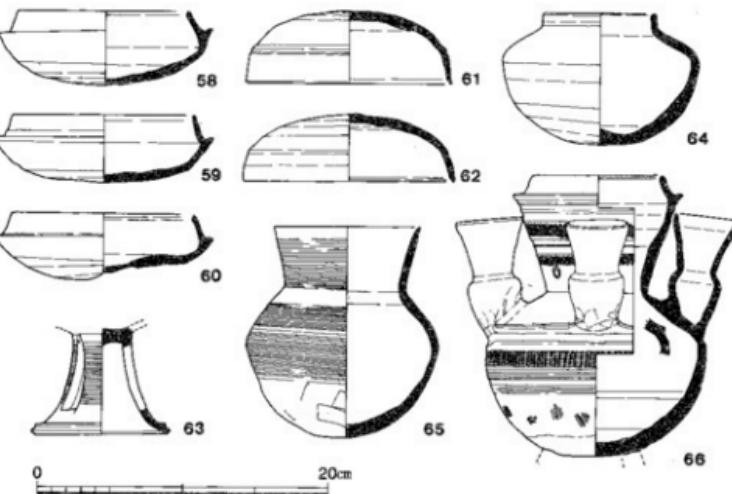


第18図 造構出土遺物実測図（1/4）

40～42—溝状造構S X 13803
43・44—周濠S D 13801



第19図 3号墳出土遺物実測図 (1/4)



第20図 7号墳出土遺物実測図 (1/4)

と考えられる。

3号墳出土遺物（第19図） 墳丘の東半分を開拓した際に出土した須恵器である。全部で13個体あり、環・环蓋・短頸壺・広口壺がある。これらの須恵器は、環と环蓋の特徴からみて概ね陶邑編年のTK10型式に比定される。しかし、環(49)と环蓋(53)については、他の個体に比べて口径がやや小さく、49はたちあがりが低く内傾し全体に浅くなっている。53は天井部と口径部の境目に凹線がみられず型式的にやや新しいものである。同じく短頸壺(54~56)についても、54は肩部が張り底部はヘラ削り調整のみである点から、55・56より新しい要素として識別される。

7号墳出土遺物（第20図） 昭和7年に、村道工事に伴って削平された際に出土した須恵器である。全部で9個体あり、環・环蓋・高環・短頸壺・広口壺・台付子持装飾壺がある。これらの遺物は、環(58~60)・环蓋(61・62)の特徴から陶邑編年のTK10型式に比定される。台付子持装飾壺(66)は、壺の胴部に小窓を4個つけたもので、胴部中ほどに突帯を貼りつける。底部に脚部の接合痕をとどめる。このような壺は桂川右岸地域では、長岡市マト塚（南原古墳群第2号墳）・同走田・同日市物集女車塚などから出土している。

5 まとめ

今回の調査では、5号墳に周濠と陸橋部が付帯することが明らかとなり、なおかつ墳形についても新たな知見を得ることができた。以下、本調査の成果を整理しまとめとしたい。

5号墳の墳形については、これまで径21mの円墳とされたが、周濠の輪郭が墳丘側ではほぼ直線的にのびることが明らかとなり、墳丘測量図とあわせて再検討した結果、ほぼ一辺20mの方墳になると判断される。周濠は、墳丘の北側と南側に設定した3・4・5トレンチでは検出されなかったことから墳丘全体を巡るものではなく、地形の高い西側に限って設定されたと考えられる。また周濠の中央に設けられた陸橋部は、墳丘と墳丘の外を結ぶ墓道としてつくられたものと考えられる。遺物はこの両側から集中して出土した。3号墳については周濠は明らかではないが、墳丘の等高線からみて5号墳と同じく方墳の可能性が指摘される。他は4号墳が円墳である以外、1・2・6・7号墳については不明である。主体部は、3号墳については耕作時の聞き取り調査から木棺直葬と推定されている他はいずれも明らかではない。

周濠とその周辺の遺構から出土した遺物には、环身(1)と器台(6・7)など6世紀代の、遺物がわずかに含まれている。しかし周濠の遺物は、大部分が7世紀中頃から後半にかけてのものである。この中で須恵器環G(8~10)・环G蓋(12~14)と壺(37・38)はTK217型式に比定され、脚部片(29)と小型の甕(2~5)についてもこれに伴うものと考えられる。他の遺物については、おむねTK48型式の範疇に含まれるものと考えられるが、环B(23・24)・环B蓋(16~18)の壺F(31)についてはMT21型式に含まれる可能性も否定できないであろう。本調査においては既述のごとく中世に開削されたために層位的に確認されなかった。

5号墳の築造年代については主体部が未調査のため明らかにしないが、当古墳群が從来より6世紀中頃の築造と考えられていることからすると周濠出土の遺物は隔絶したものとなる。^{1) 2) 3)} この点について山城盆地において7世紀に築造された旭山古墳群・醍醐古墳群・音戸山第3・4・7・8号墳の規模と比べてみると、いずれも墳形は円（方）墳の径（一辺）が6～15m程度であり前代より縮小化しているのがわかる。これに対して5号墳の墳丘は一辺20mと大きく、むしろ前代のものに近いと考えられる。従って墳丘の規模からみれば七ツ塚古墳群は6世紀代に順次築造されたと考える方が妥当であろう。また周濠から出土した遺物については、ほぼ7世紀を通じて墓として認識されていたことを示唆するものと考えられる。

- 注1) 都出比呂志「長法寺南原古墳第3次調査概要」長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告書』第11冊 1983年
- 2) 注1文献と同じ。
- 3) 國内三真、和田晴吾、宇野隆夫「京都府長岡市カラネガ岳一・二号墳の発掘調査」『史林』第64巻第3号 1981年
- 4) 吉岡博之・木村泰彦他「北平尾古墳発掘調査報告」『長岡跨発掘調査研究所調査報告書』第1集 1979年
- 5) 遺跡パトロールにおいて発見された。詳細は『長岡市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 1986年。において報告される予定である。
- 6) 山口博「昭和57年度発掘調査略報」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財情報』第7号 1983年
- 7) 植田小太郎「京都府乙訓都七ツ塚出土の小埴輪付壺」『史想』第9号 1958年
- 8) 京都府教育委員会「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報」1968年
- 9) 長法寺在住、佐藤久夫氏所蔵。
- 10) 西岡巧次「長法寺七ツ塚古墳出土の須恵器」『京都考古』第9号、1974年。
- 11) 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会『高槻市文化財調査報告書』第13冊 1980年
- 12) 奈良国立文化財研究所学報第26冊 1975年
- 13) 保科幸利氏所蔵
- 14) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 15) 本報告に再掲載した中でスケールを $\frac{1}{4}$ にし、45,50の実測図を差しあえ、土器觀察表に一部加筆した。本報告書の番号との対称は、1→50, 2→45, 3→51, 4→46, 5→48, 6→49, 7→52, 8→47, 9→53, 10→55, 11→57, 12→56, 13→54である。
- 16) 京都府教育委員会保管
- 17) 京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部 1968年
- 18) 本村豪章「古墳時代の基礎研究稿—資料編(1)—」『東京国立博物館紀要』第16号 1981年
- 19) 新納泉・宮原晋一他「物集女車塚古墳」向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第12集 1984年 小片のため器形は不明である。

22まとめ

付表2 長法寺七ツ塚古墳群出土遺物観察表

圓満S D13801(備考に注記のないもの)

器種	器形	法 量 口徑cm 器 高	番号	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼成	色 調	備 考	
瓶	体 部	(5.6)	2	○口縁部はラップ状にひらく。 ○底面に2条の武縫を有する。	○内外面ヨコナヂ。	長石、石英微 粒含む。	やや 軟質	淡灰色	側部のみ残存	
			3	○体部は丸みをもち、肩部に四 稜を有する。	○底部は時計回りのへら削りの 後ヨコナヂ。 ○内外面はヨコナヂ。	0.1~5mm大の 長石、チャー トを含む。	灰	淡灰色	無	
		8.4 (10.4)	4	○口縁部はラップ状にひらく。 ○口縁部と体部の武縫を有する。 ○底部に削られた格子縫を残す。	○腹部には時計回りのへら削りの 後ヨコナヂ。 ○腹部は不定方向のへ ら削り。 ○口縫部から体部ヨコナヂ。	長石、チャー トを多量に含む。	堅	淡灰色	S K 13805 出土	
		8.2 (9.4)	5	○頸部と体部に凹線を有する。	○頸部から体部はヨコナヂ。 ○底部は上半部を右回りのへら削 り、下半部は不定方向のへ ら削り。	長石、チャー トを多く含む。	軟質	淡灰色		
			7	○外面上にカキ貝の後痕突起 ○通しは方舟で下方に向ける。	○内外面ヨコナヂ。	磁石 3mm大の 砂粒を含む。	堅	灰色	S X 13803 と 同一器形	
瓶 身	外 身	10.2 (3.6)	1	○たちあきは低い、内傾する。	○底部は自然殻が付着する。 ○内外面ともヨコナヂ。	長石、白雲石 を多く含む。	堅	暗灰色	無	
		9.6 (1.8) (1.5) (3.3)	8 9 10	○10の口縁部は内側に肥厚す る。 ○底部は平底状になる。	○内外面ともヨコナヂ。 ○底部はヘラ切り後ナヂ。底部 内面ナヂ。	長石、チャー ト、石英の微 粒含む。	堅	灰色 暗灰色 暗褐色	無 無 無	
		10.9	3.2	20	○体部は半球形を呈し、口縁部 は外反する。	○底部はヘラ切り。 ○内外面ともヨコナヂ。	長石、チャー ト含む。	軟質	淡灰色	
瓶 身	中 部	12.5	3.6	21	○体部は丸みをもち、口縁部は 外反する。 ○体部と腹部の腹曲部に辺縫を 有する。	○底部はヘラ削り。 ○内外面ともヨコナヂ。				
		13.8	4.1	22	○体部は外上方に直線的にのび る縫部は外反する。	○底部はヘラ切り。 ○内側面ともヨコナヂ。	チャート、長石 0.5~3mm大の 砂粒を含む。	軟質	淡灰色	
		14.6 (3.4) 14.4 (3.1)	23 24	○底部から口縁部は外上方に直 線的にのびる。	○内外面ともヨコナヂ。	長石 4mm大の 砂粒を含む。	堅	淡灰色 暗灰色	無 無	
		8.0 (1.2)	25	○底部は平底で体部は外上方に のびる。	○内側と体部外側ヨコナヂ。	2mm以下の石 粒含む。	堅	灰色	側部5%	
		8.8 (1.3)	26			0.5mm以下の 石粒含む。	軟質	白色	底部5%	
瓶 底 住	底 住	8.5 (0.65)	27	○高凸は下方へ垂垂にのびるが 窓縫はわざわざに片方へふんば る。	○内外面ともヨコナヂ。 ○貼り合高台。	0.5mm以下の 石粒含む。	堅	淡灰色		
		9.5	3.0	21	○天井部に辺縫を有する。 ○口縁部は外反する。	○内外面ともヨコナヂ。 ○天井部はヘラ切り後ナヂ。	長石、チャー ト粒子を多量 に含む。	堅	灰色	軽薄部の墨跡
瓶 蓋	蓋	9.4 (2.7)	12	○天井部中央に乳頭形のつまみ がある。	○天井部はヘラ削り。	チャート、長石 石英の微 粒含む。	堅	淡灰色	外表面は自然 殻が削離する。 例(12, 14)。	
		11.0	3.5	13	○口縁部内面のつまみは壇部よ り下方へののびる。	○口縁部から内面ヨコナヂ。 ○天井部内面に仕上げナヂ(13)、 (14)。	1mm以下の細 石粒含む。	堅	淡灰色	
			14			1~2.5mmの石 粒含む。	堅	青灰色	小片	
瓶 蓋	蓋	14.5 (3.0)	15	○口縁部にかえりのつまみの(15) と下垂するもの(16~17)があ る。	○天井部はヘラ削り。 ○口縁部から内面ヨコナヂ。	1mm以下の細 石粒含む。	堅	淡灰色	外表面は自然 殻が削離する。	
		17.6 (3.2)	16	○口縁部のつまみは腰平なもの (18)と突起氣味のもの(17)が ある。	○天井部はヘラ削り。 ○口縁部から内面ヨコナヂ。	1~2.5mmの石 粒含む。	堅	淡灰色	外表面は自然 殻が削離する。 (16~17) (完和)	
		15.8	3.9	17		(16~17) の右側	堅	淡灰色		
瓶 底	底		28	○口縁部はナヂにより、わずか に屈曲する。	○内外面ともヨコナヂ。	細密 長石含む。	堅	暗灰色	小片	
		8.5 (2.2)	30	○底部は平底である。 ○体部は丸味をもつ。	○底部はヘラ削り。(30)は速時 計削り。 ○内外面ともヨコナヂ。	3mm以下の石 粒含む。	堅	淡灰色	外表面は自然 殻が削離する。	
		9.2 (9.4)	31			2mm以下の石 粒含む。	堅	淡灰色		
瓶 底	底	12.5 (13.7)	32	○底部は外方へふんばる高台が ある。 ○高台縫部は上下に肥厚する。 ○体部は鋭角的に加彫し、屈曲 部に辺縫を有する。	○内外面ともヨコナヂ。 ○貼り合高台。	長石、チャー トを含む。	堅	淡灰色	外表面は自然 殻が削離する。	
		4.8 (7.3)	33	○脚部はラップ状に広がり、源 部が中央に段落する。 ○中部部はよく上方へ屈曲する。	○脚部の成形には芯棒を用いて いる。	0.5mm以下 の石粒含む。	堅	淡灰色		
瓶 底	底	10.8 (18.4)	34	○口縫部は外方に開き、端部 は内傾するなど。 ○口縫部に二条の辺縫を施す。 ○底部はやや斜面を残してある。	○底部をヘラ削り調整し、他は ヨコナヂ。		堅	淡灰色	口縫部は約3~ 4cmの 体部は斜面。 底部は斜面。	
		7.9	14.1	35	○(34)より小型で、口縫部は大 きく広がりラップ状をなす。 ○窓縫は丸くおさめる。 ○口縫部外側に一条の辺縫を施す。 ○脚部には伏せた筋痕が残る。	○底部はヘラ削り調整し、他は ヨコナヂ。	長石、チャー トの微粒を 多く含む。	堅	青灰色	口縫部は約3~ 4cmの 体部は斜面。

器種	器形	法 量		番号	器形の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
		口径cm	器高								
須 恵 器	實	18.6	(12.1)	37	○体部は丸く、口縁部は直立並みに開く。 ○口縁部は ○内面は大きく外反し、底部は厚壁である。 ○波状紋と波模を交互に二段に施す。 ○口縁部は短くゆるやかに外方に傾く。 ○底部は丸く厚壁である。 ○体部は直腹は波模を帯びる。 ○口縁部から体部上半が大きくなりずんでいる。	○体部外表面は叩き後、ナダ。 ○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部内面は叩き後、ナダ。 ○外表面はタテ方向の繊維状叩きの後、頭部から体部中位にかけてカキ目を施す。 ○内面は青滑液の叩き目を施す。 ○口縁部内外面ともヨコナデ。	4mm以下の石 ヤード、青石 含む。	平鐵	淡灰色	口縁 36	
		32.6		38			2mm以下の石 砂混入。	平鐵	灰色	口縁 36	
		30.2	54.3	39			1mm前後の石 砂混入。	堅鐵	淡灰色 (自然陶部分、青 緑褐色)。	体部上半部に 自然焼付等。 体部上半部と 底部空隙と思 われる破片が 付着。	
上 部 器	坪	9.0	3.1	29	○手形は直部と、外上方へのびる 口縁部からなる。端部は丸くおさめる。	○磨滅しており調整不明。	赤色粒、青粒、 チャート、長 石、石英颗粒 子を多く含む。	良	體灰色	赤んでいる光 沢。	
	圓 筒 形 環		(3.5)	39	○器部はラバッ状にひらく。	○磨滅しており調整不明。	2mm以下の石 粒、青粒、 チャート含む。	良	淡黃灰色	輪 36	
瓦 器		16.8	(3.5)	36	○直部と外反する口縁部を有し、 底部は直部。	○直部内面にハケメを施す。 ○内外面ヨコナデ。	赤色粒、灰粒、 青粒、チャー ト含む。	良	明褐色	口縁 36	
	廣	13.9	5.3	43	○口縁部は外反気味に終り、内 面に細い波模を施す。 ○体部は内湾気味に外上方に のびる。 ○高台は断頭三角形。	○内面はヨコナデの後、青滑液を 施す。(43)は見込みにラセン 状と思われる波模を施す。 (44)は、口縁部外表面にも青滑 液を施す。 ○外表面は口縁部ヨコナデ、体部 に撫痕痕が残る。	1mm以下の石 粒を含む。	良	淡灰色		
		14.0	(6.1)	44			1mm以下の長 石含む。	良	深黒色 (一部褐色)	36	

溝状造構 S X13803

須 恵 器	序 B	14.6	5.6	41	○直部・口縁部は外上方にのび る口縁部を有す。 ○底部から直部に下がる高台 を付し外側で接続する。	○内外面とも磨滅して不明瞭。	1mm以下の小 石・砂粒	軟質	淡灰色	輪 36
須 恵 器	蓋	11.2	(1.5)	40	○直部は直立し、端部は丸く おさめる。 ○天井部は半円で、口縁部との 境部はゆるやかである。	○内面ヨコナデ。	1mm前後の石 粒、長石、チ ャート含む。	堅鐵	淡緑灰色	外表面は自然陶 が剥離する。
須 恵 器	蓋			6	○断頭三角形の凸凹を有する。	○上面の接合面は叩き目を有す る。	0.1-3mmの長 石含む。	軟質	淡灰色	
土 器	蓋 B	15.4	(6.0)	42	○口縁部は直く外反し、底部は 上方にまきあげる。 ○内面は丸味をもつて、底部と の境に縫をもつ。	○内面と口縁部外表面ヨコナデ。 ○頂部外表面オサエ。	1mm以下の石 粒を含む。	良	褐褐色	粘土建植が明 顯。

3号墳

須 恵 器	坪 身	12.6 13.9 12.8 13.4 12.6	5.5 5.3 3.8 4.8 4.2	45 46 47 48 49	○たちあらりはやや内彌しての びるもの(45)(46)(47)(49)と、 強く外反するもの(48)がある。 ○天井部は斜方・中水にのびるもの (45)(46)(49)と、中水にのび るもの(47)(48)がある。 ○底部は丸味をもつての(45) (46)(47)(48)と、それに近い もの(49)がある。	○底部はヘラケズリで、他はヨ コナデ。	砂粒、大粒砂 混入	軟質 良 良 良 軟質	灰色 暗灰色 暗灰色 暗灰色 暗灰色	(50)とセッ トで施されたら しく内面が淡 灰色。(45) (49)は他より口 縁が大きい。
須 恵 器	坪 蓋	14.6 14.7 15.0 13.4	4.9 5.3 3.8 5.0	50 51 52 53	○天井部と口縁部との間に凸凹 をめぐらし、内面しながら下 方にのびるもの(50-52)と、 底の直筋を残しながら垂直に 下方にのびるもの(53)がある。 ○天井部は上面丸みのもの(50) と丸味をもつるものがある。	○底部はヘラケズリで、他はヨ コナデ。	砂粒多い。	軟質 良 良 良	灰色 灰色 黑色 暗灰色	(45)とセッ ト。(53)は 他より口 縁が小さい。
須 恵 器	圓 筒 通	6.8 7.0 9.0	9.0 7.9 8.0	54 55 56	○口縁部は内側するもの(54)と 直面に立ち上るるもの(55)がある。 ○底部の張りが大きく、底部も 丸くおさめる。	○底部は全体に丁寧なヘラケ ズリを施し、他はヨコナデ。	軟質 砂混	良 良 良	灰褐色 暗灰色 暗灰色	
須 恵 器	底 口 蓋			57	○体部は全体に丸く上げる。	○体部にカキ目、底部は平行ク タキ目が見られ、内面は荒い 青滑液を施す。	砂質	良	灰色	口底部欠損。

24まとめ

7号墳

器種	器形	法 量		番号	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径cm	器 高							
平 身	11.7 12.6 12.3	5.1 4.6 4.7	58 59 60	○たちあがりは内傾し、口縁端 部は大きくおさめる。 ○底面部は丸棒をもつ。	○底面部をへラケツリ、他は内 外面ともヨコナデ。	長石、チャ一 ト、石英を含む。	良好 良好 良好	淡灰色 暗灰色	(58)(60)に自然 軸付質。 (60)(59)は器 形の蓋が少。	
	14.1 14.45	4.9 4.6	61 62	○口縁部は下方に下がるもの (61)やや下方方に下がるもの (62)があり、端部は共に内傾 する深い凹面を成す。 ○天井部は丸棒をおり、口縁部 との間に棱を成す。	○天井部を時計回りにヘラケ ツリ。 ○天井部内面ナデ。他はヨコナ デ。	0.5~8mmの大 砂粒、チャ一 ト、石英、長 石含む。	良好 良好	灰 淡灰色 暗灰色		
高 环	(底径) 9.0	(7.1)	63	○脚部は基部から下方方に下り 滑落式凸面状を成す。 ○方形透しが三方間に現られる。 ○脚部は大きく張り、底部は丸い。 ○底部は丸い。	○脚部の透し部分にカキ目を施 し、他はヨコナデ。	長石輝石を含 む。	良好	淡灰色 灰色	齊、底部厚	
	7.7	8.9	64	○口縁部は直立し、端部は内傾 する。 ○脚部は大きく張り、底部は丸い。	○体部~底部外側逆時計回りの ヘラケツリ。 ○体部へラケツリ後ナデ。他は 内外面ともヨコナデ。	長石、チャ一 ト、石英粒子含 む。	良好	青灰色		
庄 口 壺	9.9	14.4	65	○口縁部は直立気味に開く。 ○肩部は下方方に下り、屈曲し 底部に至る。 ○底部は丸い。	○口縁部~体部ヨコナデのちカ キ目を施す。カキ目は部分的に にナデ消している。 ○底部は粗いケツリ。	長石、チャ一 ト、黑色斑紋 含む。	良好	淡灰色 淡灰色	口縁一部欠損	
	8.8 小腹 4.2	(19.2)	66	○口縁部は上方方にのび、内傾 して底面部内面に凸筋が一筋め る。端部は丸い。 ○受部の下部に凸筋を一条施し 上段11本、下段7本の波状文 を施す。その下に管状文(椎 突文)を施す。 ○三方通しの脚がつと思われ る。	○体部最大部外側は、カキ目 の複雑なナデ。底部下半外側 ヨコナデの後、部分的にハケ ツリ。 ○他は内外面ともヨコナデ。 ○小型の聯合部外側はナデと オサエ。 ○他は内外面ともヨコナデ。	精良 長石の微粒子 を含む。	良好	青灰色	外側に火ダス がみられる。	
古 付 装 飾 子 持 壺										

26 (財) 京都市埋蔵文化財研究所『旭山古墳群発掘調査報告』 1981年

27 (財) 京都市埋蔵文化財研究所「醍醐古墳群説明会資料」 1985年5月

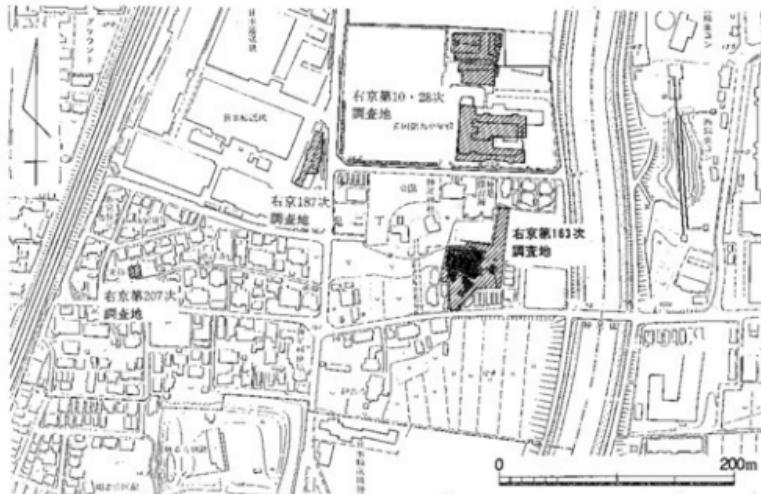
28 3・4号墳は、『音戸山古墳群発掘調査概報』、京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所、1983年に所収。7・8号墳については、昭和60年度の国庫補助事業で報告される予定である。

第2章 長岡京跡右京第163次(7ANMKI地区)調査概要

—右京六条一坊四町・勝龍寺城跡・神足遺跡・神足古墳—

1 はじめに

- 1 本報告は、1984年5月25日から同年8月30日まで、長岡京市東神足二丁目15において実施した発掘調査の出土遺物に関するもので、1985年8月1日から1986年2月28日まで行った遺物整理の成果をまとめたものである。
- 2 本調査は、宅地開発に伴う事前調査で、調査面積は、803m²である。
- 3 遺物整理は、長岡京市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施した。調査員は、長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、岩崎誠が担当した。
- 4 本書作成にあたり、遺物の写真撮影・指導には、鰐京都市埋蔵文化財研究所の牛島茂氏ほかの方々、遺物の検討には、同研究所永田信一、梅川光隆両氏及び、平安京調査会小森俊寛氏らの御助言をいただいた。佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二、鈴田由紀夫両氏からは、伊万里焼に関する御教示を賜った。記して感謝したい。
- 5 本報告の編集・執筆は、岩崎が行った。本書作成にあたり多くの方々の協力があった。⁽¹⁾



第21図 発掘調査位置図(1/5000)

2 検出遺構の時期区分

当調査で検出した遺構や包含層は、縄文時代晚期、弥生時代中期、古墳時代前期・後期、平安時代初期(=長岡京期)・前期・後期、鎌倉時代、室町時代前期、安土・桃山時代、江戸時代前期・中期の各時代にわたっている。その内容は、既に報告済みであるので、省略する。

これらの各遺構や包含層から出土した遺物の時期は、当調査地周辺で今日までに実施された調査成果及び文献史料を踏まえて、神足遺跡原始・古代期、長岡京期、平安京期、神足遺跡中世期、勝龍寺城期、神足遺跡近世期に区分できる。この区分はさらに中・小期に細分することができます。すなわち、神足遺跡原始・古代期は、Ⅰ期(縄文時代)、Ⅱ期(弥生時代)、Ⅲ期(古墳時代)、Ⅳ期(飛鳥・奈良時代)に、平安京期は、Ⅰ期(前期)、Ⅱ期(中期)、Ⅲ期(後期)に、神足遺跡中世期は、Ⅰ期(鎌倉時代)、Ⅱ期(鎌倉時代末から室町時代初頭)に、勝龍寺城期は、Ⅰ期(細川頼春・師氏両氏による築城から細川藤孝改修築の14世紀中葉から16世紀中葉)、Ⅱ期(藤孝改修築から永井直清改修築前の16世紀後葉から17世紀前葉)、Ⅲ期(永井直清居城期間の17世紀前半)に分けた。このうち、弥生時代、古墳時代、室町時代に相当する時期のものは、さらに細分が可能である。また、江戸時代前期に相当する勝龍寺城Ⅲ期以後の遺物もあり、神足遺跡近世Ⅰ期とすることができます。

この時期区分で、検出遺構の変遷を整理したのが、付表一3である。尚、勝龍寺城の変遷を付表一4にまとめた。以下、遺構出土の遺物を中心概観する。

付表一3 神足遺跡の時期区分

時代	時期	遺構・包含層	神足歴史年譜
縄文	I	第6トレンチ包含層(暗緑茶灰褐色土層)	縄麻形石器この時期か?
弥生	II A	溝 S K 16308 土層 S D 16309 土層 S K 16310 16311	乙訓地方の複数的集落 方形周溝墓、土塁墓 壁穴住居
	II B	(第2~4トレンチ包含層(黒色粘質土層)に混入)	
古墳	III A	(第2~4トレンチ包含層(黒色粘質土層)に混入)	集落の中心部が移動
	III B		埴輪円筒棺
	III C	神足古墳 (上屋盛土や溝 S D 16305堆土に混入)	大集落 壁穴住居 塔立柱建物 近くに古墳構築
飛鳥・奈良	IV	(第2~4トレンチ包含層(黒灰褐色粘質土)に混入)	
平安	長岡京	第2~4トレンチ黒色粘質土層	右京六条一坊三・四町藤原邸宅?
平安京	I	土質盛土に混入	
	III	溝 S D 16305に混入	
鎌倉	神足寺世	I 溝 S D 16305に混入	1216年神足寺、瀧ビット群
	II	土質 S A 16301下層ビット群	神足左近次郎信朝(友)活躍 井戸ビット群 土塁
室町	I	第6トレンチビット群 標例 S A 16306	細川頼春・師氏基城(1339年)
安土・桃山	勝龍寺城	II 溝 S D 16305 C 壁土 空堀 S D 16302下層	細川藤孝改修工事、居城(1571年) 明智光秀敗戦(1582年)
江戸		III 溝 S D 16305 B 壁土 空堀 S D 16302下層	永井直清改修工事、居城(1633年) 直清、高橋へ(1649年)
	神足近世	I 溝 S D 16305 A 壁土 空堀 S D 16302・16304上層	

3 出 土 遺 物

当調査で出土した遺物は、土師器、陶・磁器、石器及び石製品、木製品、金属器がある。その時期も、縄文時代から江戸時代にわたり、多種多様である。時期別に量を見ると、近世の遺物が最も多く、遺構別では、溝S D16305出土の遺物がほとんどである。また、その溝が、勝龍寺城に関連深く、堀と推定されることや、墨書き器を伴出したことから、本報告のメインとする。この他、主なもののみ概観し、他の遺物は、資料紹介にとどめ、機を改めて検討したい。

溝S D16305出土遺物 当溝は、A・B・Cの3期があり、各期ごとに、遺物の特徴が見られる。近世の遺物に限って見ると、土師器、陶磁器、瓦器の他、少量の鉄製品や石製品がある。付表一7は、瓦器及び鉄製品や石製品を除いた出土破片数と、その割合を算出したものである。この表では、陶磁器の全ての破片の数を数えたが、土師器に関しては、小片を入れると膨大な量となり、陶磁器のしめる割合が読みとりにくくなることから、あえて、3%以上残存するものに限って算出した。土師器の總破片数と対比すると、90%以上が土師器となることは明らかである。

この表では、溝S D16305のC期と、それ以後の時期（A・B期）との間に、少しはあるが、土師器の減少、国産陶磁器の増加、輸入磁器の減少が見られる。また、輸入磁器の各個を見ると、他の国産陶磁器や土師器の年代より古い型式のものが多分に含まれている。これは、当出土遺構が溝である性格上、はたして伝世品なのか、混入品なのか明らかにし得ない。また、各層の堆積が複雑な部分もあり、一部に取り上げ上の問題もあるが、本論ではその資料をできるだけ除外している。しかし、現地での取り上げ事実を曲げずに図化している。

まず土師器について見ると、皿類が最も多く、各期を通して90%以上をしめる。形態は、A～D、H～Pの13種がある。このうち、A形態の一部とB、C形態のものは、長岡京期の土師器坏、皿類であり（第35回585～591他）、除外する。A形態の皿はわずかに内湾しながら外開きに広がる口縁をもち、口縁端部を丸くおさめるもの（a）と、肉厚の底部から尖り気味に薄くした口縁をもつものの（b）、全体に肉厚で口縁端部の外面を丸くしたもの（c）、口縁部のナデが強く、外反気味のもの（d）、口縁部のナデが丁寧で、底部との境が明瞭なもの（e）などがある。皿A dは、A形態の中では特異であり、大分類を別に設定すべきものであるが、今回は、整理の都合上、儘とした。皿Dは、扁平な形態で、口縁の大きな巻き込みに特徴がある。

付表一4 勝龍寺城の歴史的画期

(年表)	地 保 四 年	1216年	「主麻賀要駒原町付注道狀」
I	春 庚 二 年	1329年	稚川郷春、源氏基城
	文 明 元 年	1469年	高山義教居城
	二 年	1471年	野田忠吉指手北口攻める
	永 祥 三 年	1560年	石成宣道城主を博家が攻め落とす
	五 年	1562年	細川家の居城となる
II	元 亀 二 年	1571年	細川重政改修工事
	大 正 三 年	1573年	足利義満城
	六 年	1578年	細川忠興へ毛塙ぐ
	十 年	1582年	明智光秀と山崎合戦で敗績
III	寛 永 十 年	1633年	水井清清二万石城主改修
	慶 安 二 年	1649年	直清の家老櫻田正水以下衆臣光林寺へ守候 水井清第三万六千石へ高橋へ
IV			勝龍寺城崩城

皿Hの形態は、平底に、屈曲して外開きに伸びる口縁をもつものである。皿I形態は、平均的な器壁の厚さで作られているものが多く、平底あるいは、やや上げ底となった底部から、ゆるやかに内溝しながら外に聞く口縁をもち、端部は丸くおさめているものである。内面に刷毛目整形痕を残すものが多い。皿J形態は、皿H形態の中間的形態であるが、全体に整った形を作られているものが多い。皿Kは、深みのある皿で、丸味のある形態をしており、半球形に近いものもある。小型品には、器壁の薄いものも多いが、大型品は概して厚手である。皿Lは、皿Kと同様に深いものであるが、口縁部は強くななるため、外反している。皿Mは、平底から直立又はやや外傾する口縁部が、直線的につくられているもので、小型品のみである。皿Nは、平均した厚さで作られた製品で、底部からなめらかに内溝しながら立ち上がる口縁をもち、比較的整った形をしている。皿Oは、薄い器壁で均一に作られており、他の皿類と胎土も異なる。砂や小石の少ない良質の粘土で作られている。皿Pは、いわゆるヘソ皿である。ここで出土しなかった皿E～Gは、平安時代（E・F）、鎌倉末期～室町時代（G）のある種の皿に設定しているもので、ここでは使用しなかった。また、皿O、皿Pは、出土量が少ないとえに数片であり、他の土師器皿よりもかなり先行する時期のものである。

さて、ここで試みた形態分類により、溝S D16305及び他の関連遺構（空堀 S D16302・4土塁S A 16301・3）から出土した土師器皿の法量分布を見ると、形態ごとに法量の分布を異にしていることが明らかである（第44図）。量的に多い形態の土師器皿について今少し細かく見ると、3%以上の残存率の個体総数中、35.2%をしめる皿Aaは溝S D16305のA期からC期にかけて30%以上もあり、B・C期に少しばかりの増加が見られる。全期間を通して、法量にさほど変化は見られない。大きさには、大中小の3種がみられるが、各期を通して、大型と中型の法量に境がない。皿Kは、13.2%をしめ、そのうち、B期が最も多く、A期から急増し、C期には再度下降する傾向にある。法量は各期を通して変化ではなく、大きさから、大・中・小に分かれる。そのうち、小型のものが最も多く出土した。皿Nは13.2%あり、C期からA期にかけて直線的な伸び率を示す。また法量の大小から、I・II・III・IVの4つに明確に分かれており、整った形であることがうかがえる。皿Hは、11.6%をしめ、そのほとんどがC期の堆積土中から出土したものである。B期にも少量見られるが、A期からは1点のみである。各形態に表わされた時期別の量の差は、第43図を一見して明らかであり、各形態の時期差による変化は第45図に表われている。

当溝から出土した陶磁器類には、唐津、瀬戸、伊万里、信楽、備前、丹波、京焼等の碗・皿・壺・鉢等がある。このうち食器類は、唐津、瀬戸、伊万里がほとんどで、調理用器や貯蔵用器は信楽、備前、丹波が大多数をしめる。食器類について時期別に見ると、当溝のC期では、瀬戸焼系が唐津焼系よりわずかに多く、37.7%対31.2%であり、この両者が陶磁器全破片数の約70%をしめる。伊万里染付や京焼が少量あるが、混入品と考えている。B期は、瀬戸焼系が

やや減少し、唐津焼がこれを凌ぐようになる。また、伊万里焼系の染付や青磁、白磁や京焼系陶器が出現する。このため、瀬戸焼系と唐津焼系が陶磁器全破片数中63.8%となり、割合が少し低下する。A期は、瀬戸焼系が26.7%と、3割を下まわる。しかし唐津焼系は、C期からさほど変化もなく、3割強(31.7%)を保っている。また、瀬戸系に従来の黄瀬戸や黒瀬戸等に加えて、志野・織部が出現する。

当溝の出土遺物中には、特筆すべきものも少なくない。例えば、最下層から出土したものには、第24図263と264の2枚の皿と同一層から出土した「⁽³⁾奉轉讀□□×…」と読める轉讀札(第25図・図版15-(1)327)がある。また、C期埋土から出土した土師器皿と瀬戸焼系の皿の底部外面に墨書のあるものが出土しており、土師器皿には「幢侍」図版15-(2)(241),「者」(243),「□京」(242)と判読できるものがある。墨書された土師器皿は、皿Hの形態の大皿に限られている。これらの注目すべき遺物を含む溝S D16305 Cは、細川藤孝の修理増改築の工事(1571年)に伴って設けられた堀と考えられることから、16世紀後葉の遺物群と思われ、土師器の形態、特徴、伴出陶器の内容等とも矛盾しない。このことから墨書は細川藤孝の家臣に関連するものと思われる。また、16世紀末には、勝龍寺城は山崎合戦(1582年)に際し、明智光秀軍の拠点とされており、光秀の家臣に関連するものでないとは断定できない。しかし、光秀軍の本拠地となっていたのはごく短期間であったと思われ、その可能性は薄いと考えている。これを藤孝の家臣に関連するものとすれば、当調査地が「山城国西岡御領知之地図」から、神足屋敷とされていることと結びつく。「幢侍」は、職名・身分を表わしたものと思われるが、他の墨書とともに、内容が判然としない点惜しまれる。

この他、A～Cの各期から瓦器の鉢・羽釜・鍋類や、丹波、信楽、備前の擂鉢や壺、土師器の鍋などが出土した。

土壙 S A16301, S A16303, 空堀 S D16302出土遺物 土壙や空堀から出土した遺物は、溝S D16305 A～C期の埋土出土遺物の範囲を出るものはない。空堀の上下2層からなる埋土の下層には土師器皿Hが多く、上層では少ない傾向にあり、土師器皿の法量分布や、特徴も、溝S D16305 A～C期と類似する。陶磁器類では、下層からの良好な資料はなく、上層から伊万里、唐津、瀬戸等が出土している。さらに、土壙や空堀の表土からは、溝S D16305には見られなかった陶磁器類の仏飯器や灯明皿や柿釉を施した円窓付鉢など、神仏関係の器種と思われるものがある。これらは、調査地の北西に隣接する神足神社に関連する遺物と思われる。また、特記すべき遺物に、空堀 S D16302埋土から鉄製の槍先が出土した(第42図728・図版28-(1))

溝S D16305や、土壙・空堀から出土した遺物には、上記した近世の遺物の他、中世の瓦器や土師器・輸入磁器、平安時代の須恵器や土師器、綠釉・灰釉陶器等も出土している。第25図298は、第6トレンチのピット群より出土した皿Pで、皿Hを伴って出土し、14世紀後半から15世紀前半頃と思われる。これと合わせて溝S D16305で出土した皿G(第25図280)は、勝

龍寺城築城と相前後する時期のものであり、遺構や遺物の出土量が少ないとはいえ、興味深い。

神足古墳出土遺物 神足古墳からは、須恵器の蓋坏・高坏・壺類と土師器の高坏が出土している。土師器高坏を除いて主体部の小口から出土したもので、黄色粘土でおおわれていた。坏身・坏蓋とも、天井部や底部がヘラ起こしの痕を広い範囲に残し、ヘラ削りは必要最小限におさえられている。蓋は、口縁部内面に沈線をもつものと、丸くおさめるものがある。身の口縁部は、立ち上がりが短く、外反しながら内側に伸びる。高坏は、口縁に沈線をもつ坏蓋と同様のものを倒立させて坏部とし、これに短い脚部を付けたもの（第37図639）と、長脚の2段3方透しを有し、坏部中央に櫛描波状文を施したもの（第37図640）がある。壺類は、聴と直口壺がある。聴は、小さな球形の体部に漏斗状に開く大きな口頭部を有するものである（644）。直口壺は、最大径が体部上半にあり、体部からゆるやかに屈曲して直立する口縁部を有するもので、体部上半から口縁部下半にかけて、カキ目がみられる（645）。短脚の高坏（639）と直口壺（645）は焼が甘く、灰白色のものである。土師器の高坏（651）は、主体部の南西側辺で出土したもので、同時期の副葬と思われる。また、当古墳の上面から直刀一口が工事中に採集されている。出土位置等詳細は明らかでないが、当古墳に伴う副葬品であろう。

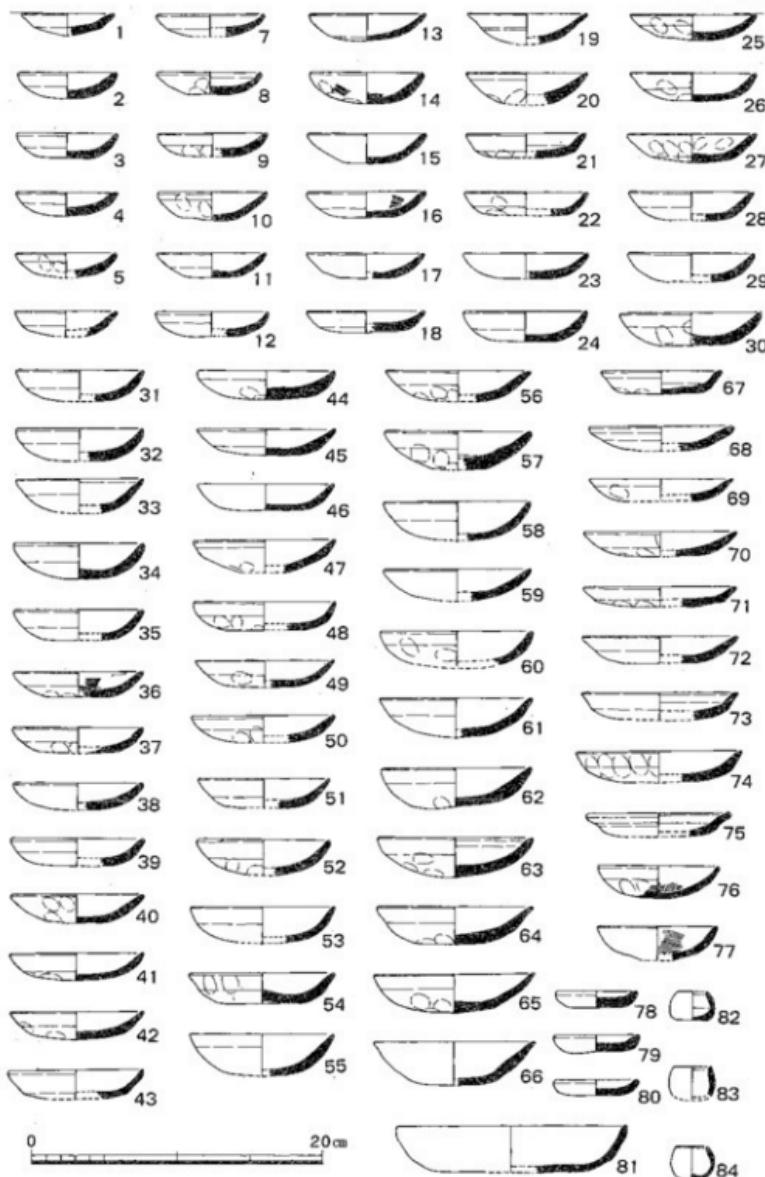
古墳時代の遺物は、この他、土壙や空堀から須恵器の器台や高坏・壺・甕等の破片等が出土している他、小片が近世遺構の埋土内から出土している。また、溝S D16305の遺構面となっていた平安時代の包含層から、庄内式土器と思われる破片が数点出土している（第39図680他）。

土壙S A 16301下層遺構出土遺物 土壙の下層からは、弥生時代の溝や土壙が検出され、中でも溝S D16309と土壙S K16308は、良好な弥生土器が出土した。溝S D16309からは、中期前半の壺が2個分出土している。両個体とも、体部上半に櫛描波状文を数条描き、
は体部上端に一条の直線文を配している。いずれも口縁部内面に刷毛目を残している。この形態の壺は、乙訓地方では最も変遷のよくわかる形態であり、畿内第II様式の新しい段階と考えられる。

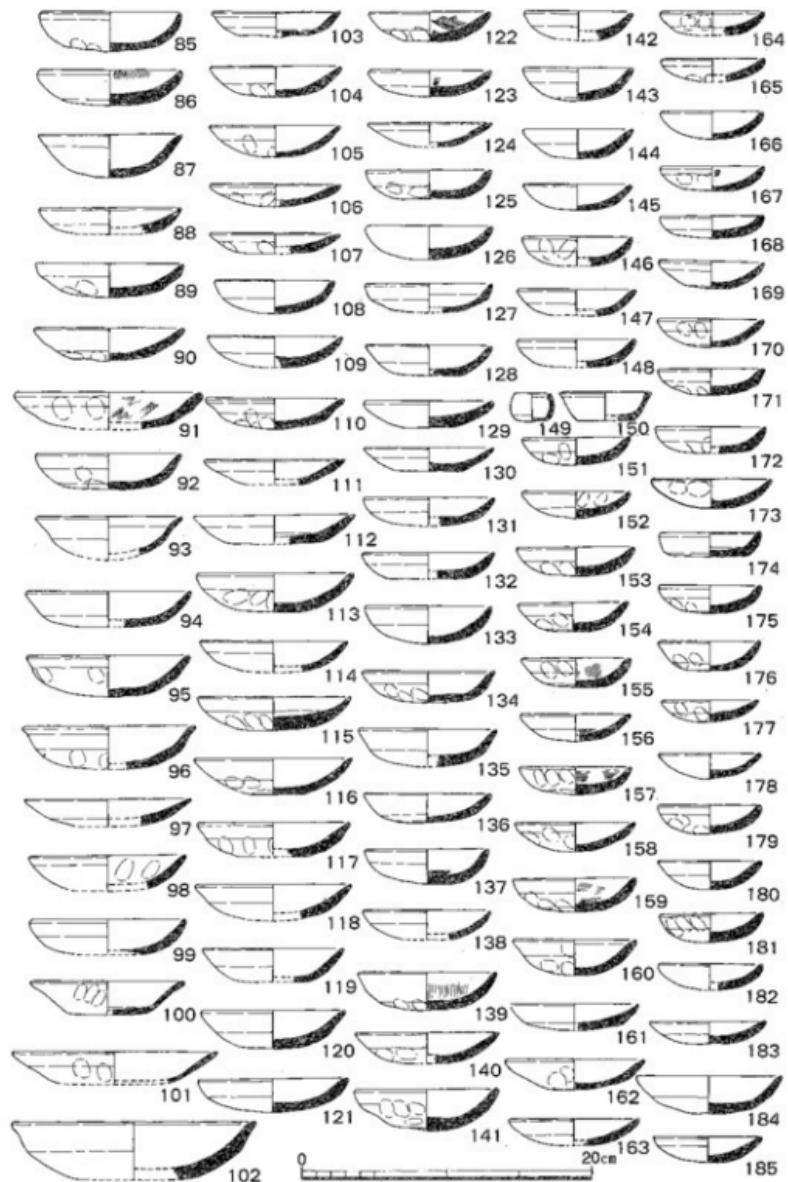
土壙S K16308出土土器には、中期前半の甕がある（第39図668）。この甕に伴って、中型の磨製石剣（第40図685）の完形品が出土した。

弥生時代の遺物は他に、土壙盛土や溝S D16305の埋土から、中期から後期の遺物も出土しており、神足古墳封土からは、石包丁の破片等も出土している（第40図上段）。

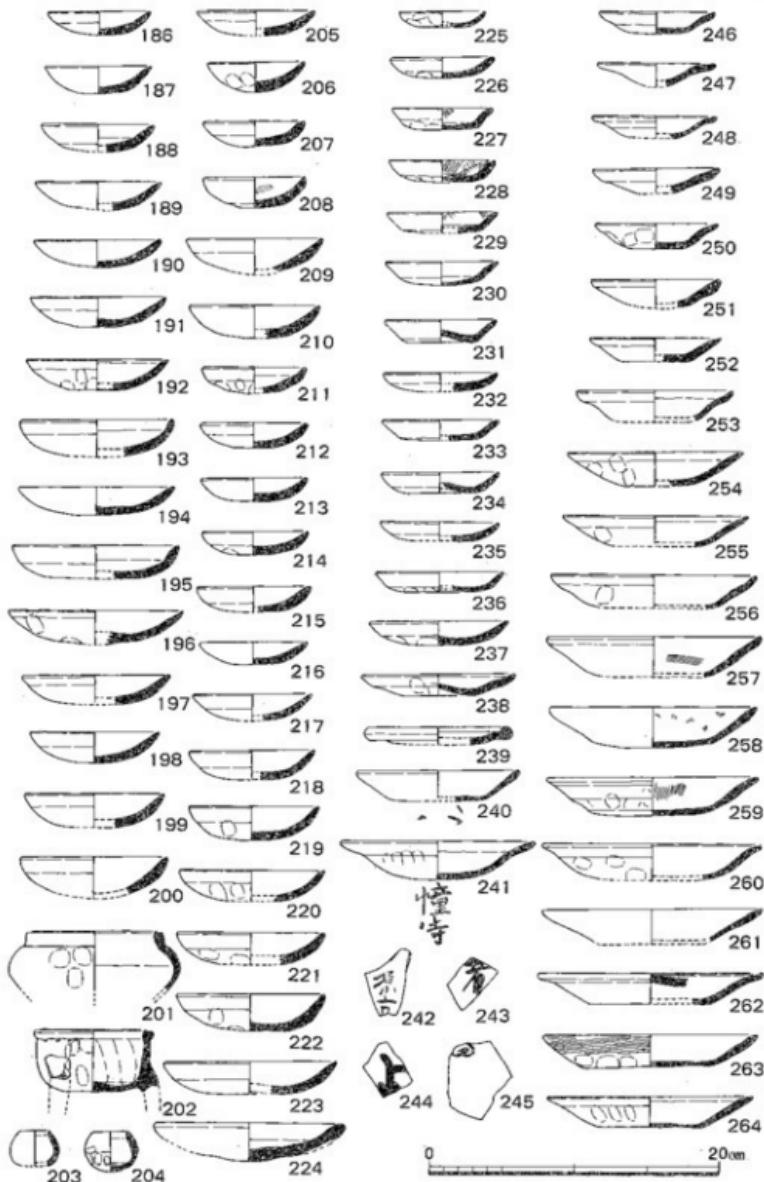
第6トレンチ包含層出土遺物 第6トレンチの南半分で検出された茶色土層系の包含層からは、縄文時代後期の土器片が少量出土した（第39図683・684）。しかし、遺構や伴出遺物はなく、また、細片のため、時期を決定するには及ばなかった。



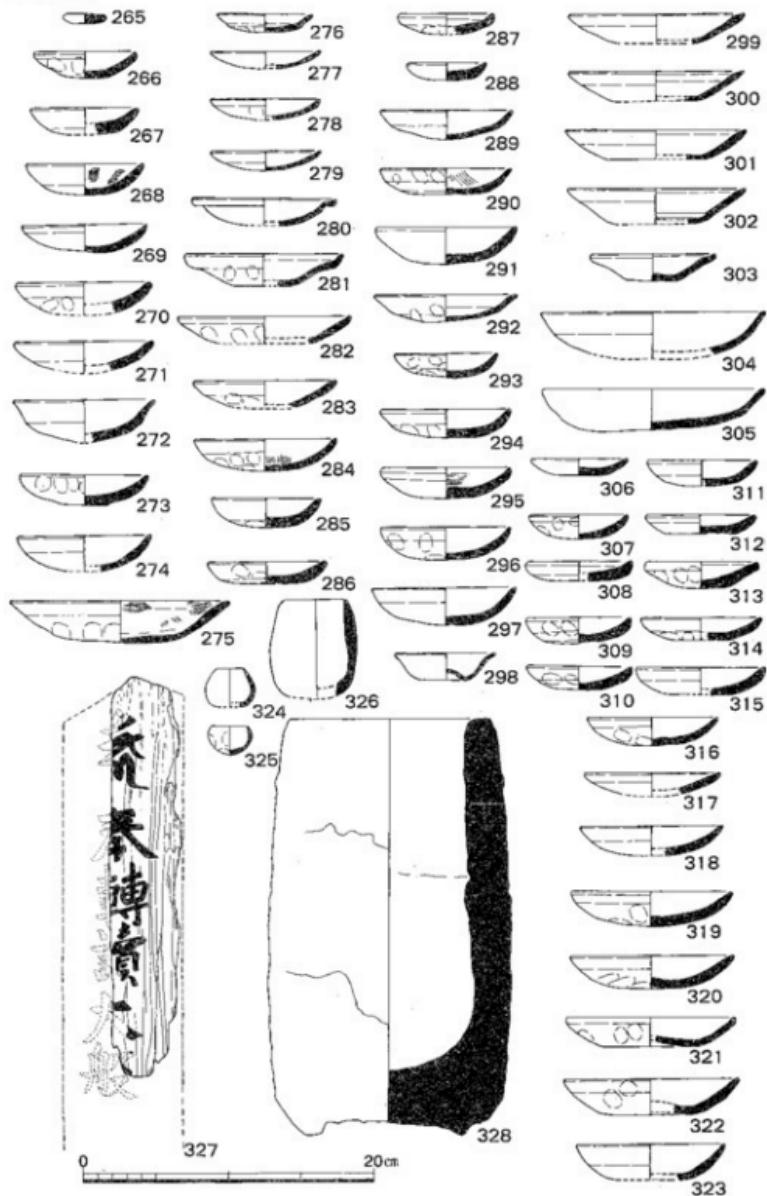
第22図 溝S D16305A出土土師器実測図 (3/4)



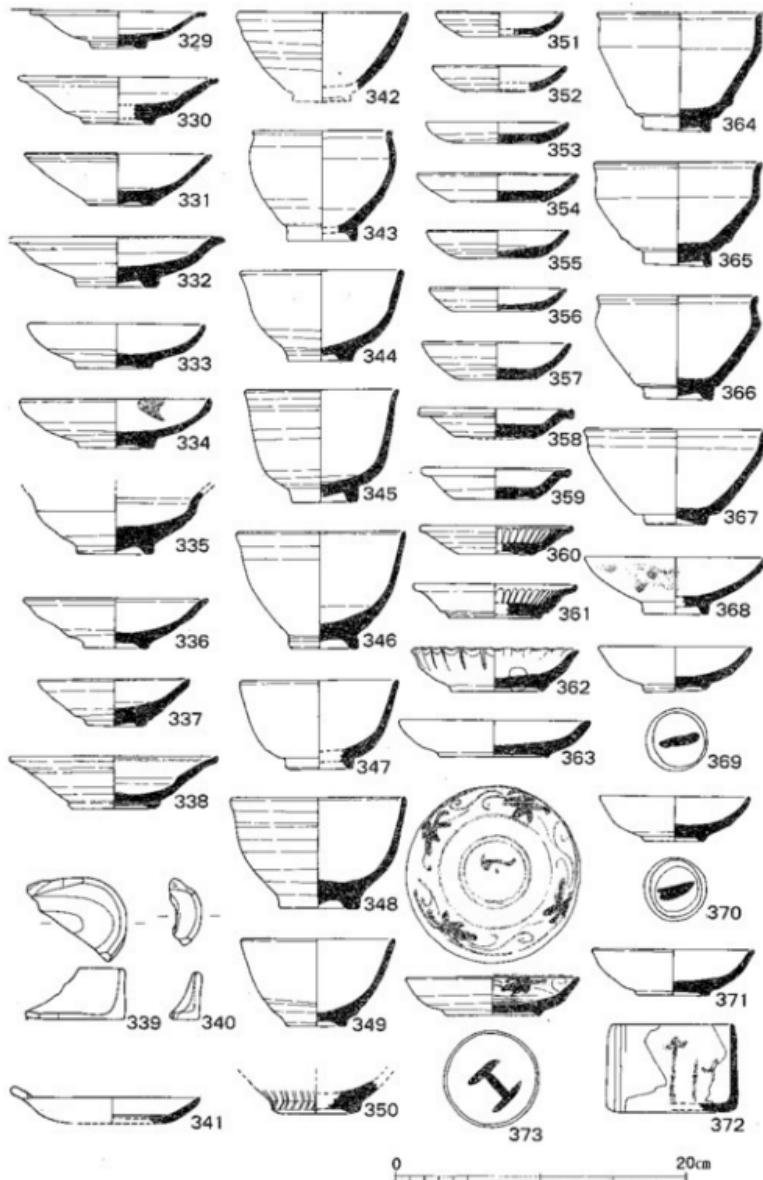
第23図 溝S D16305B 出土土器実測図



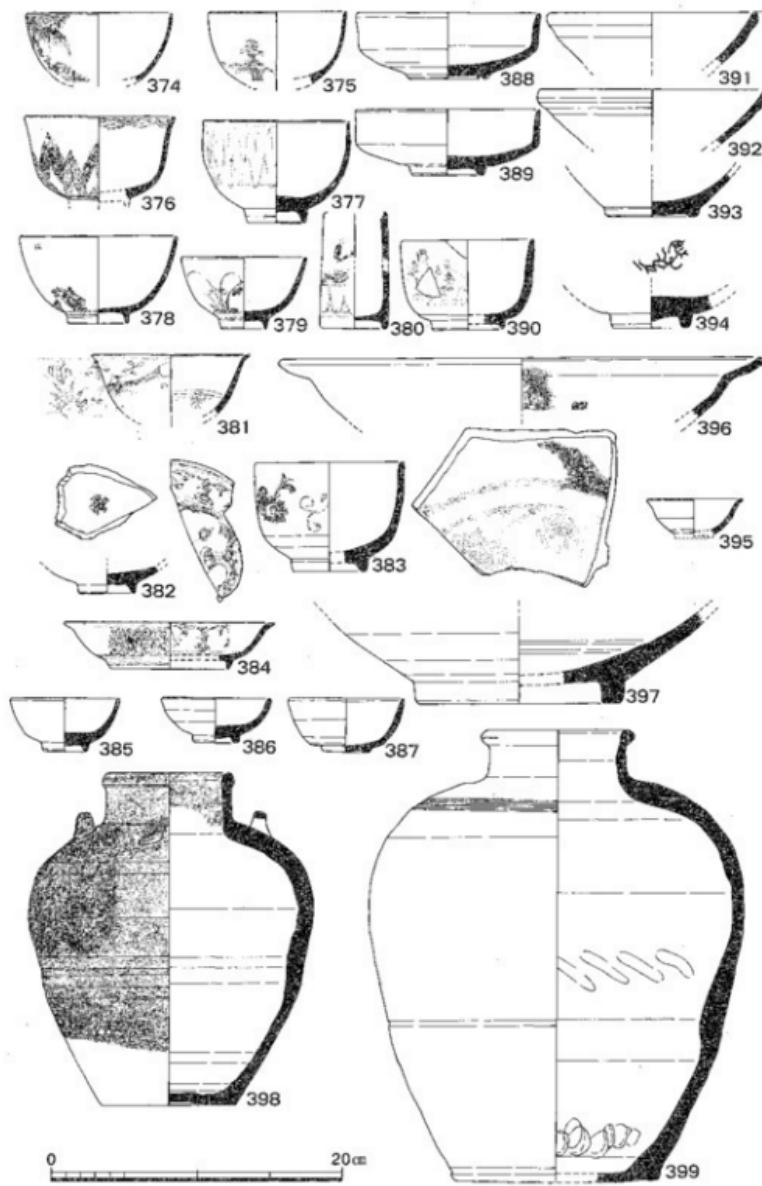
第24図 溝S D16305C出土土師器実測図



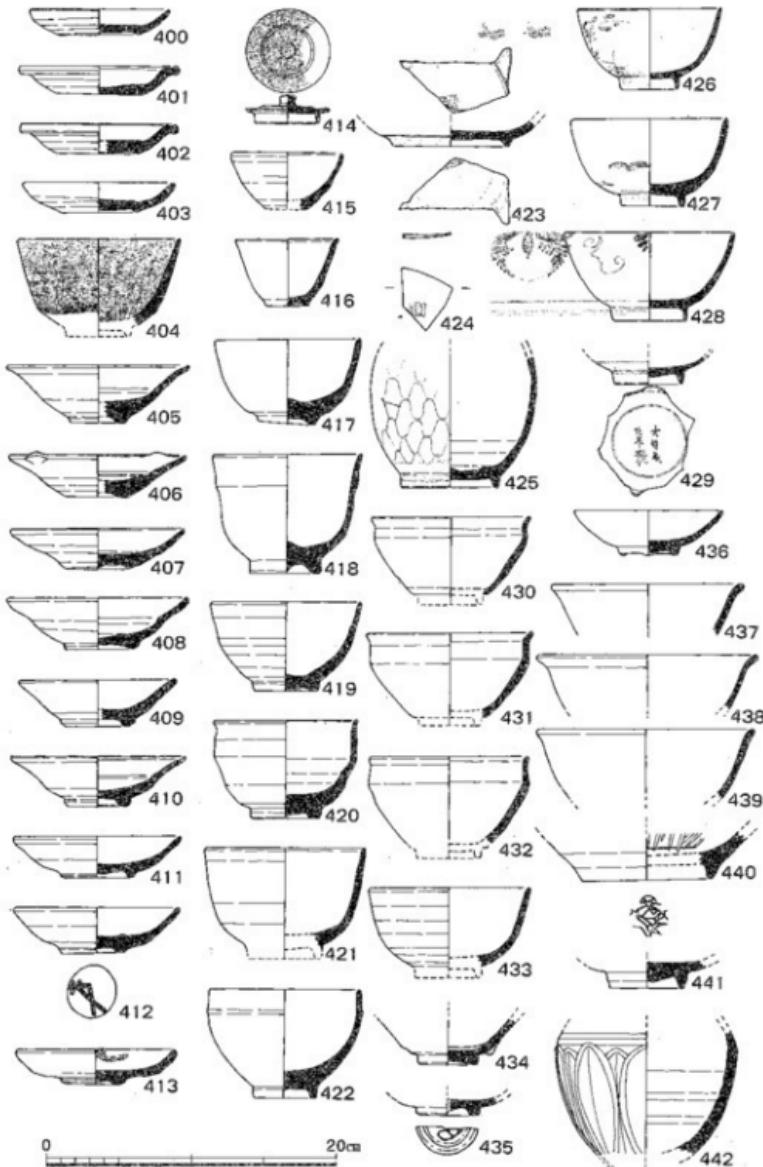
第25図 土壙・空堀出土土師器、溝S D 16305出土轉讀札と埴場実測図(34)



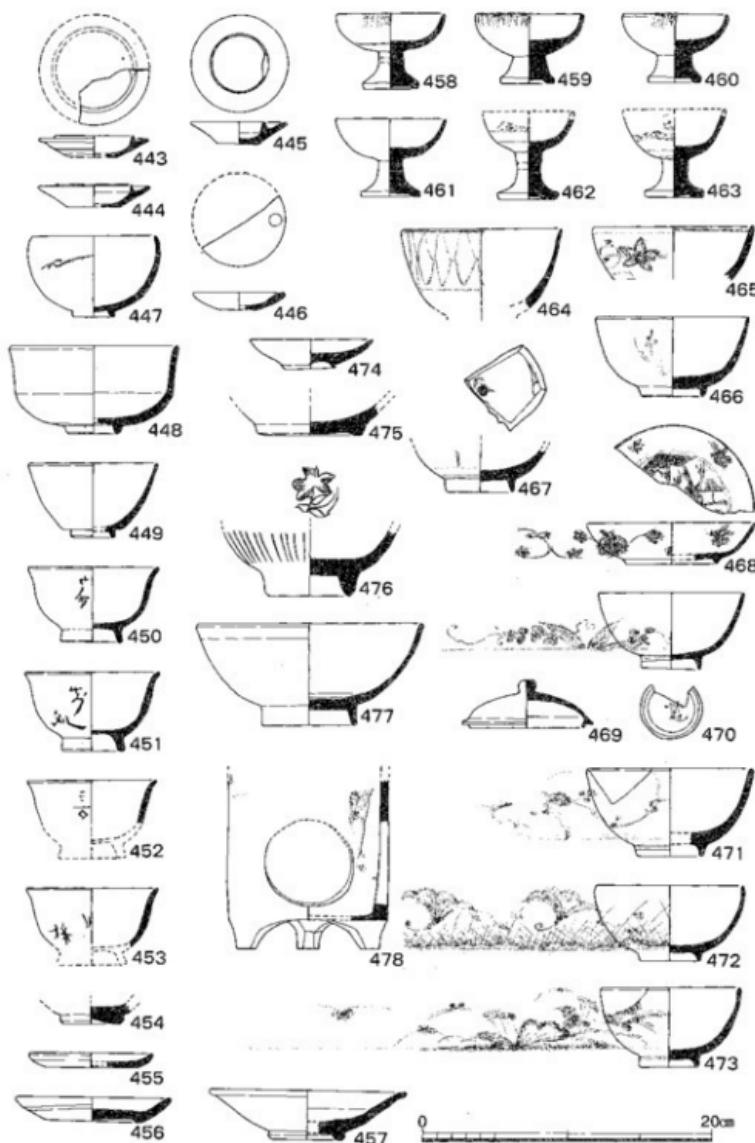
第26図 溝S D16305出土近世陶磁器実測図(1)(4)



第27図 溝S D 16305出土近世陶磁器実測図(2)(3)



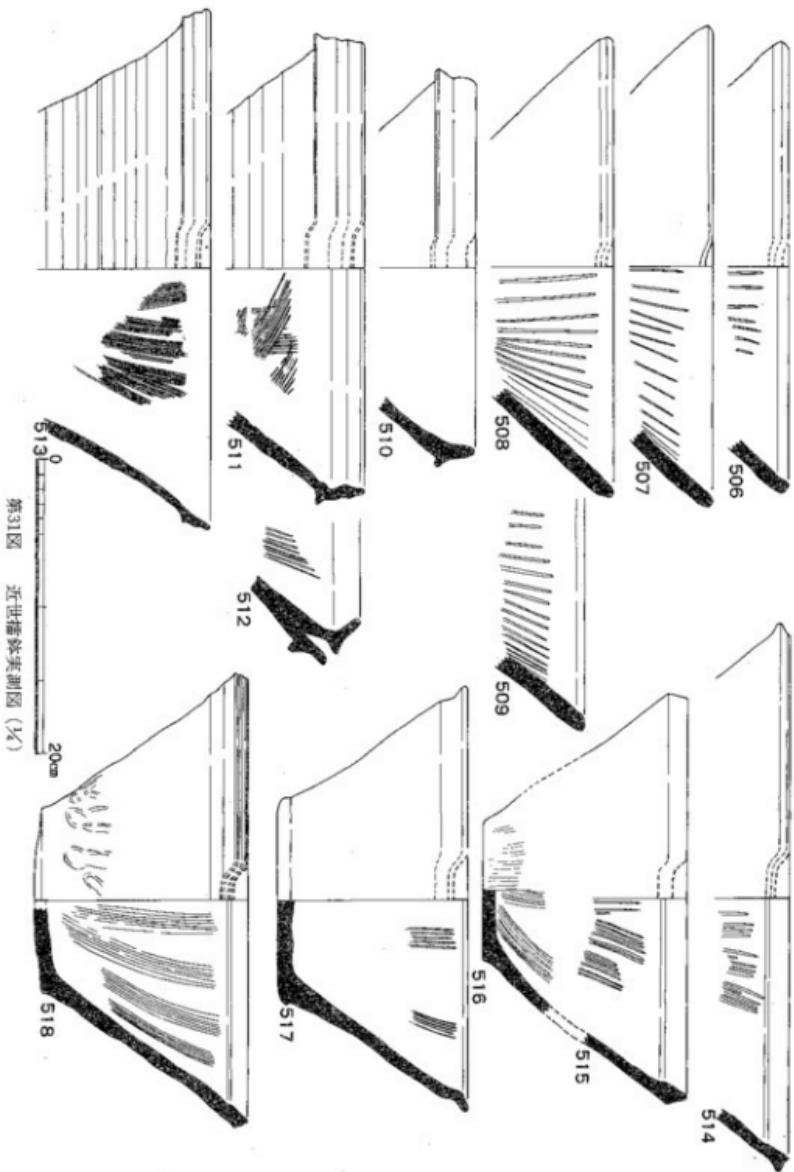
第28図 溝S D16305出土近世陶磁器実測図(3)(1/4)



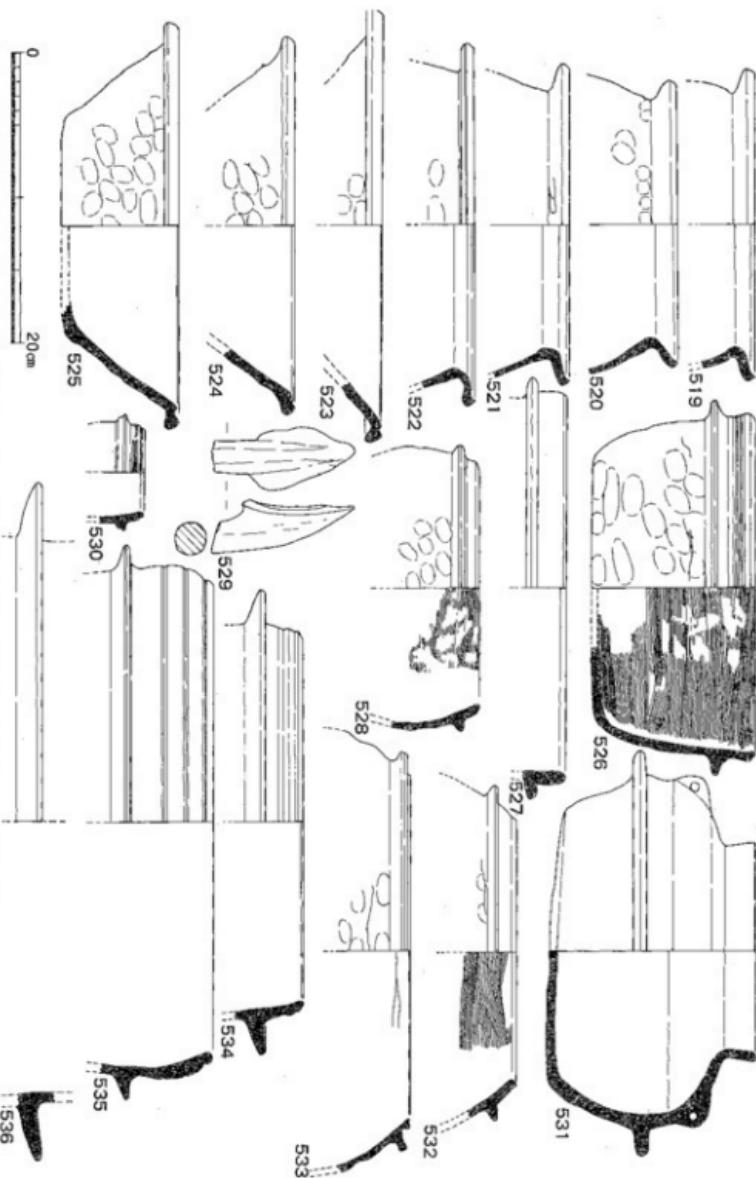
第29図 土塁・空堀出土近世陶磁器実測図(1/4)



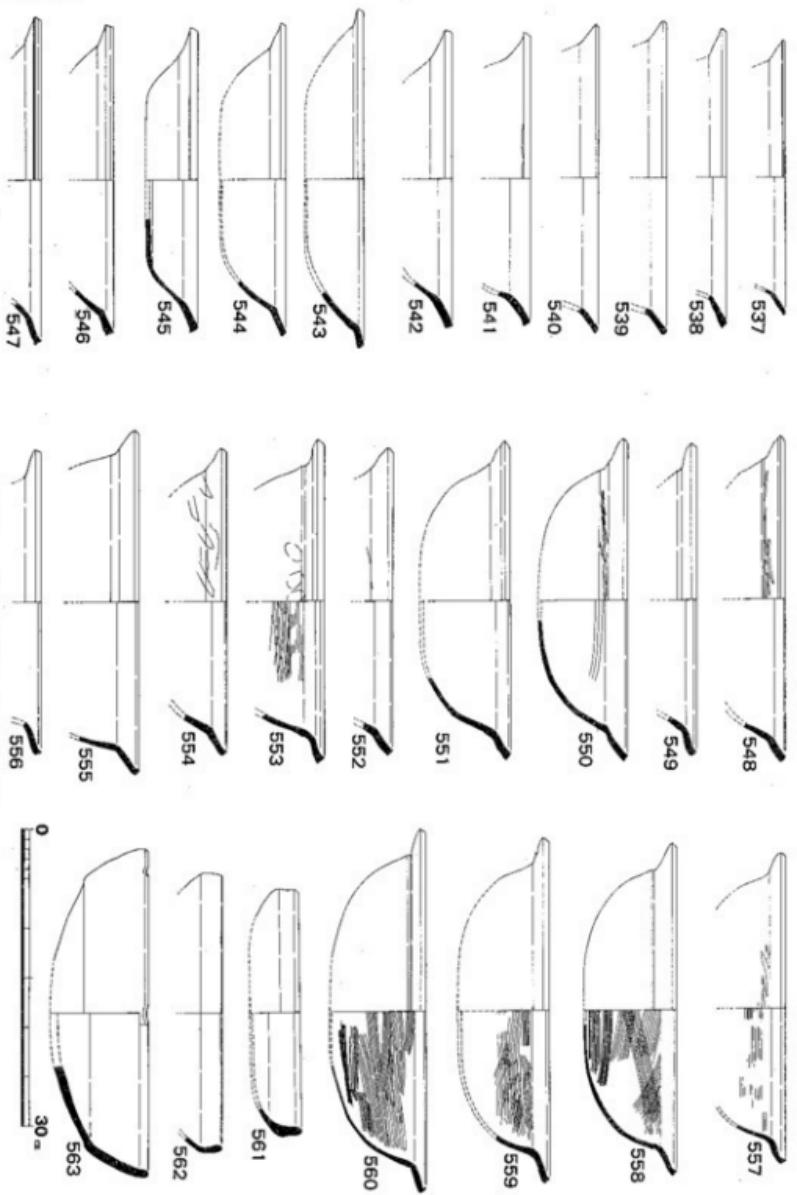
第30図 中・近世瓦器、土器実測図(34)



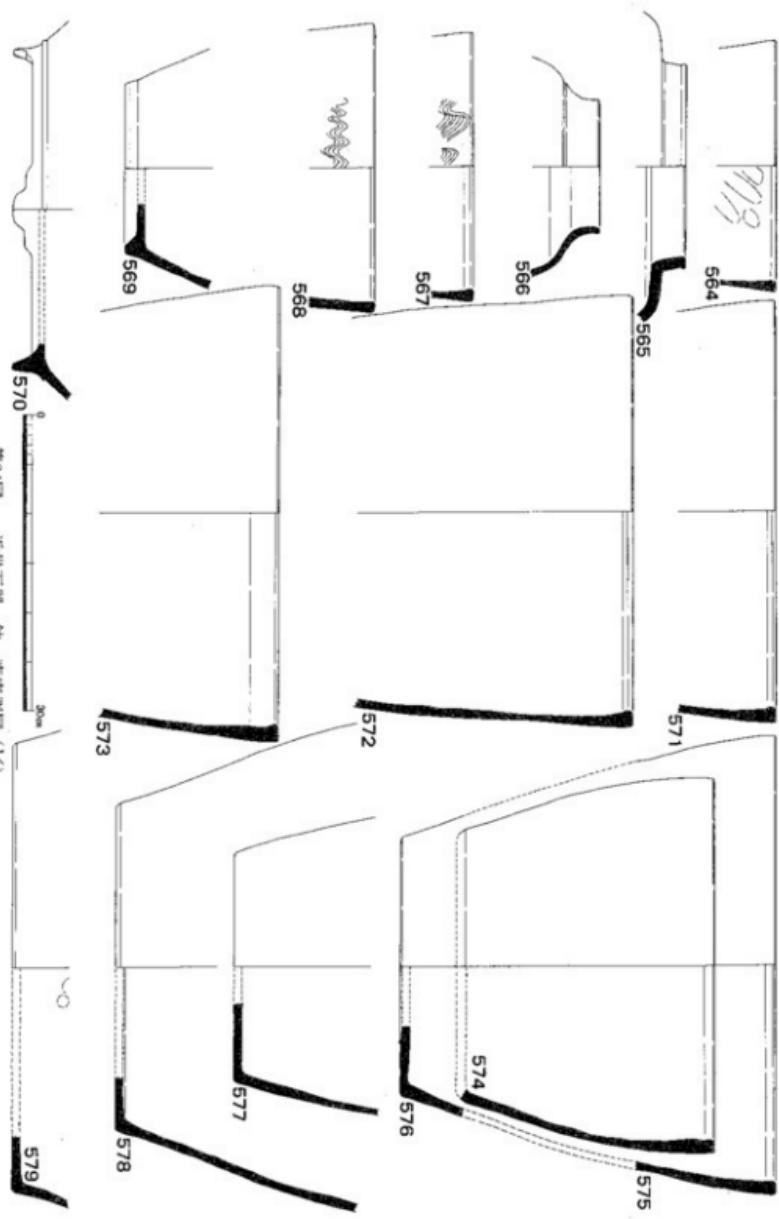
第31図 近世檜木実測図(4)



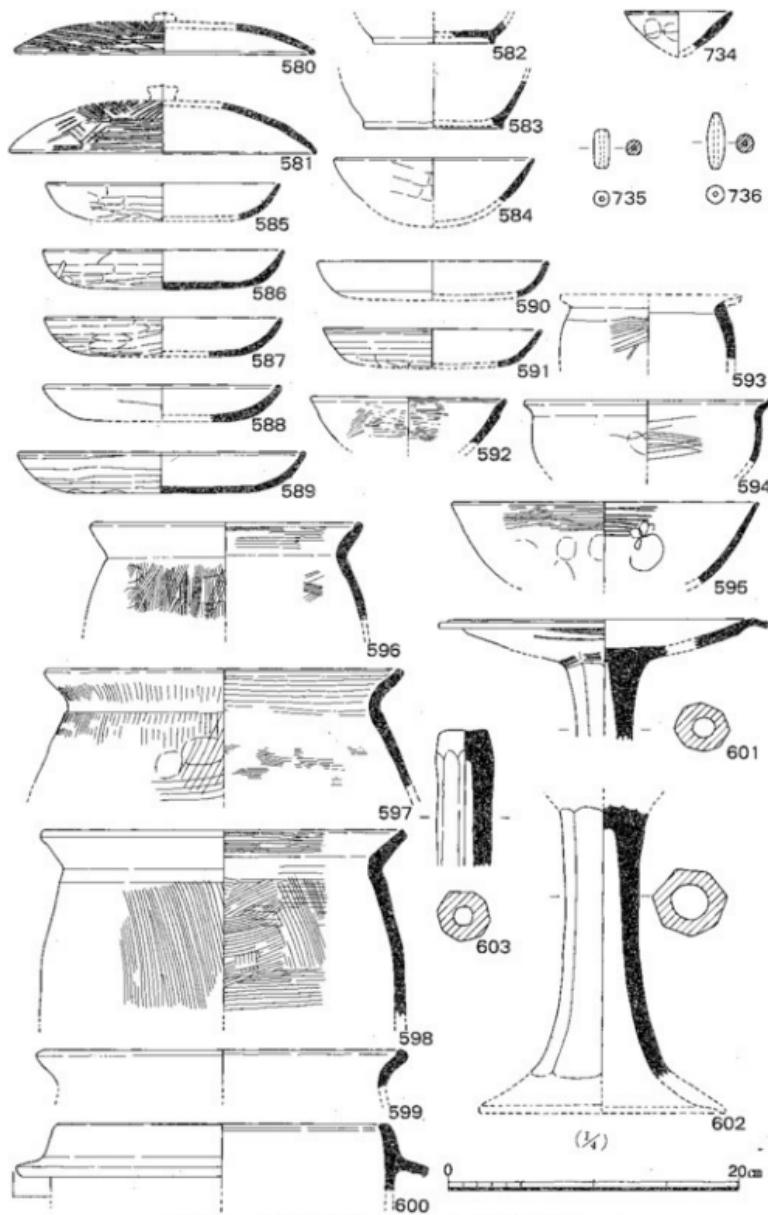
第32図 中・近世瓦器、土器器（519～522土器器）実測図 (4)



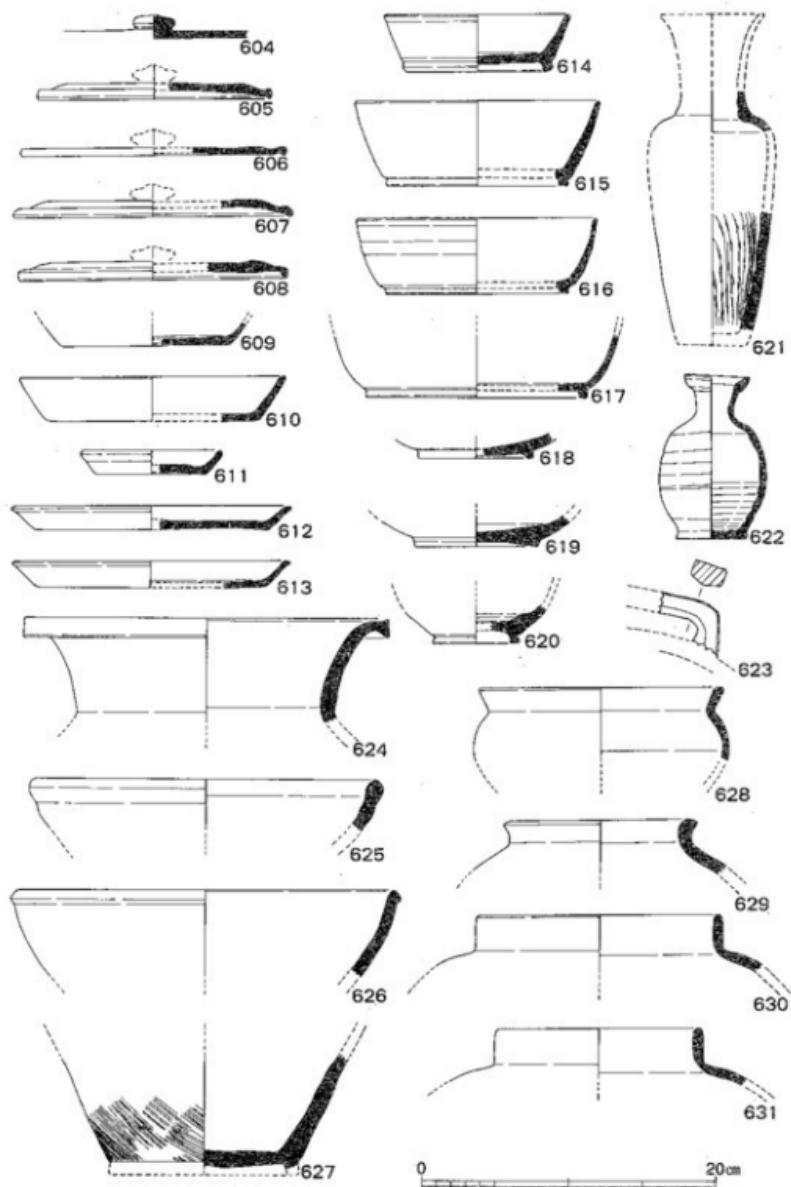
第33図 近世土器器形・跡実測図(%)



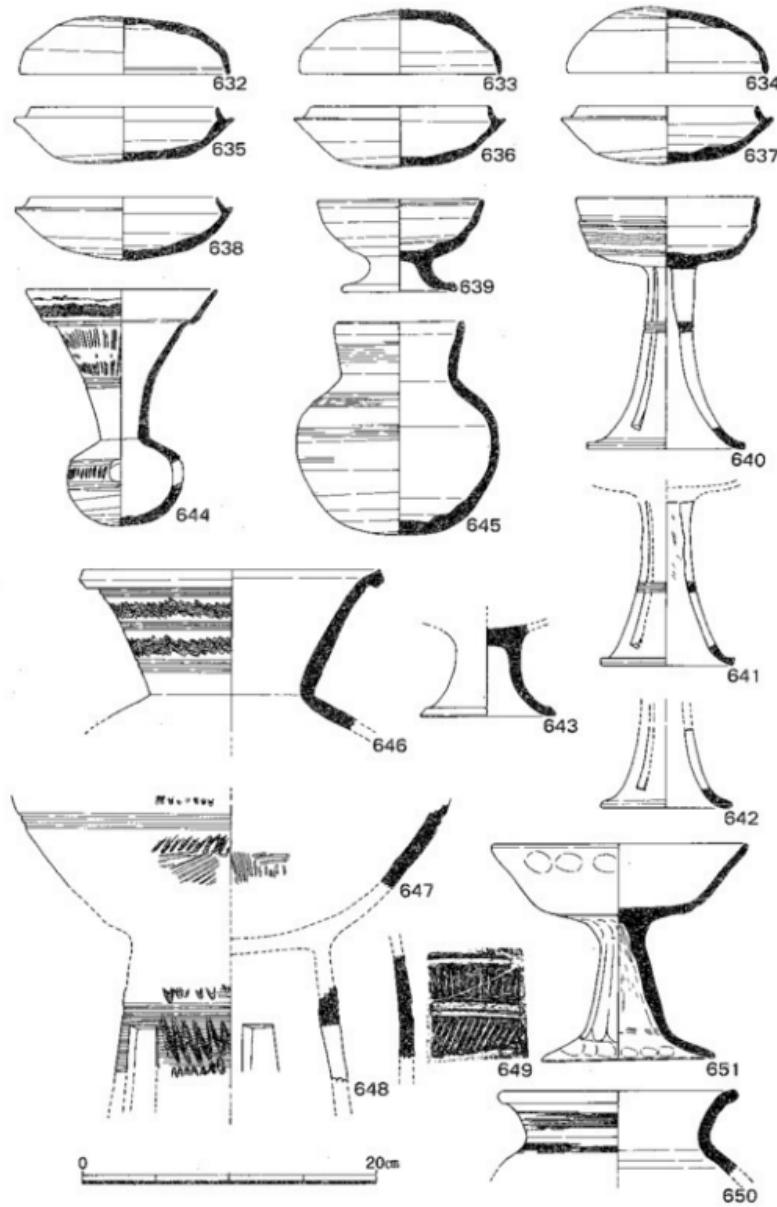
第34圖
近世瓦器・鉢・壺実測図(%)



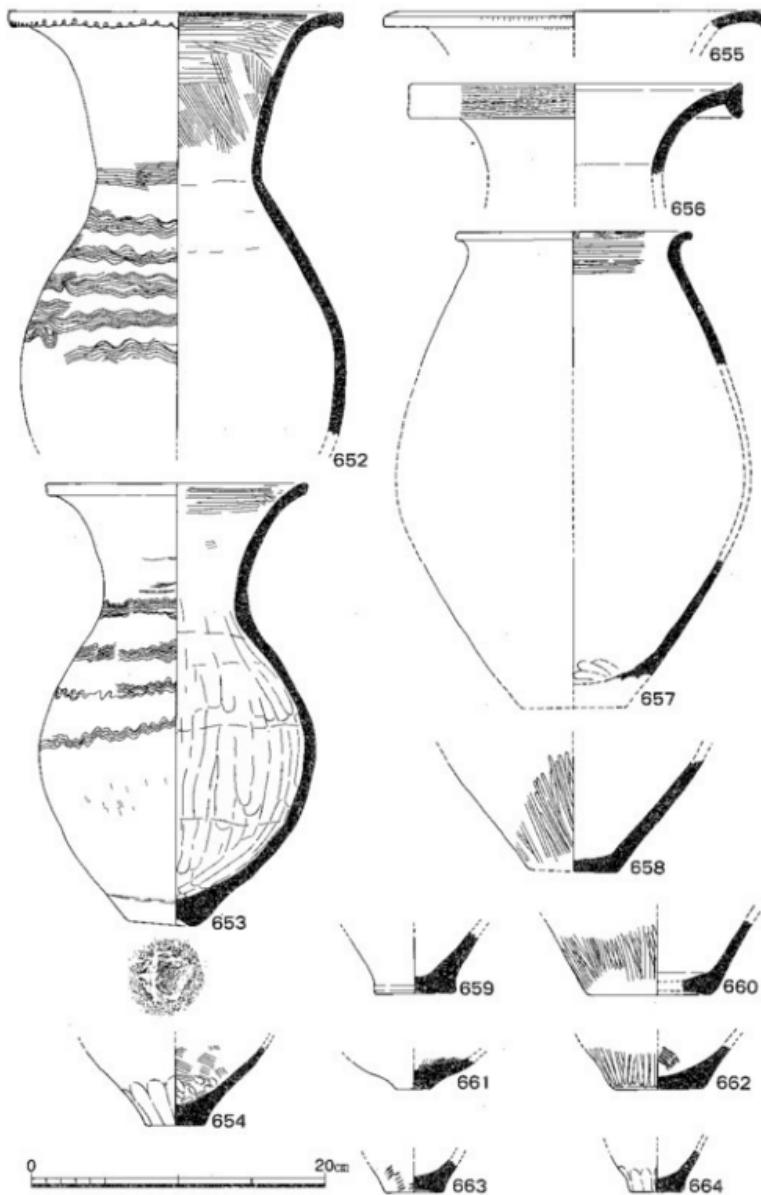
第35図 平安時代初期の土師器・黒色土器実測図



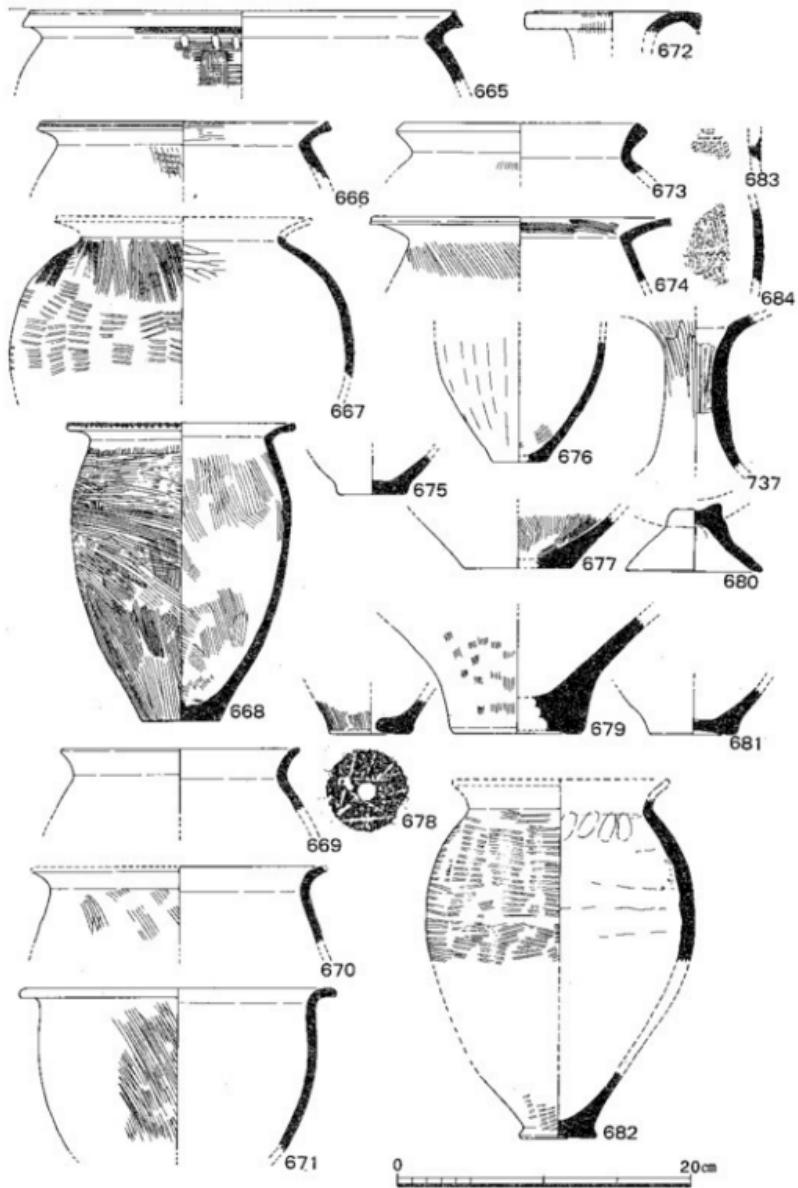
第36図 平安時代初期・中期の須恵器実測図(34)



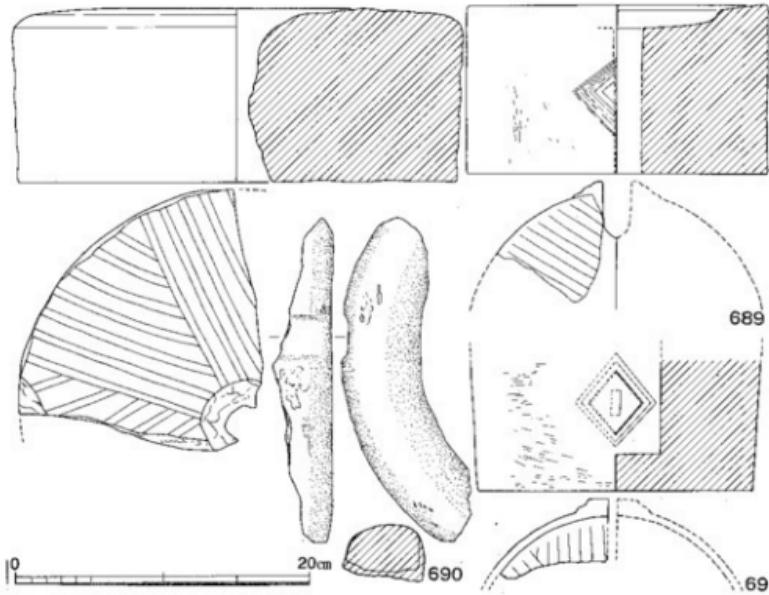
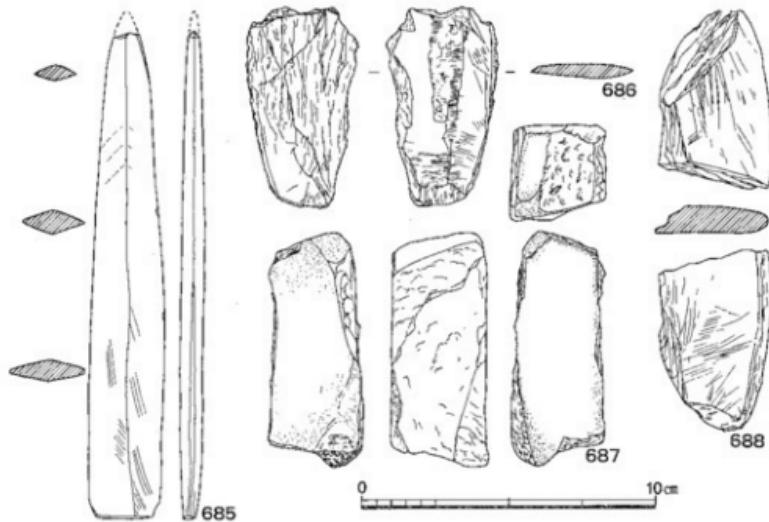
第37図 古墳時代須恵器、土師器実測図 (4)



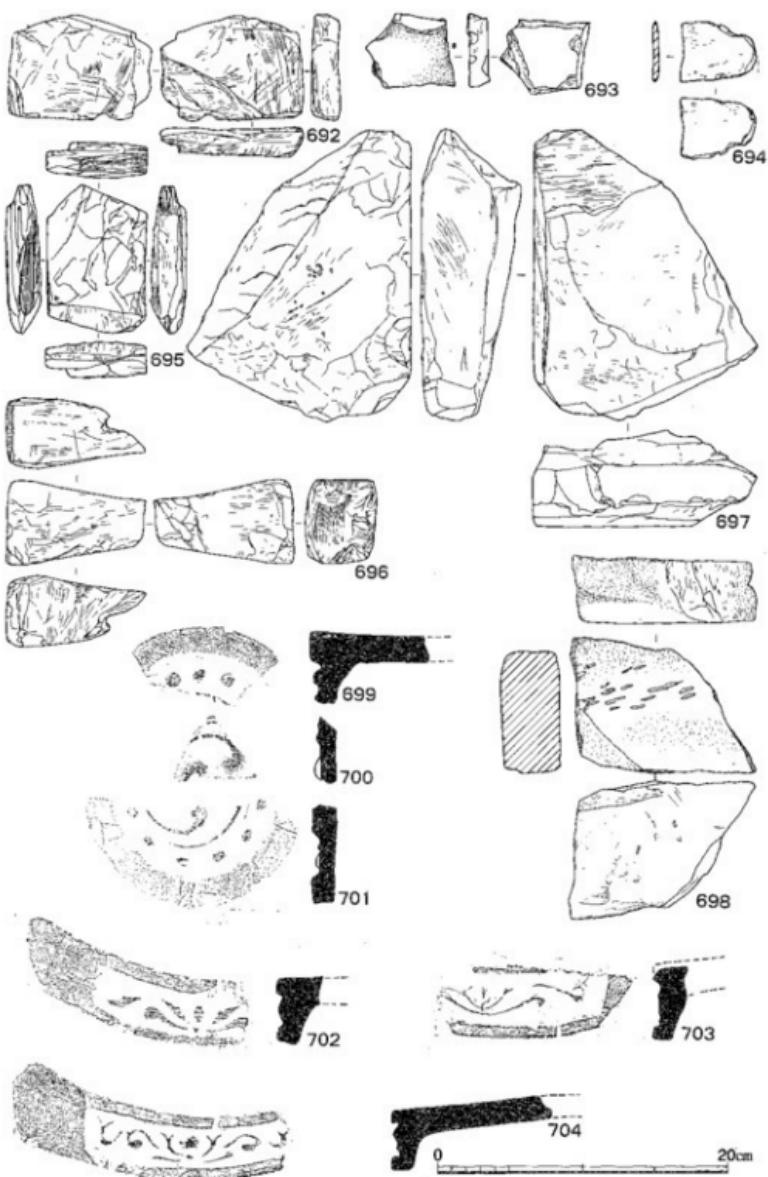
第38図 弥生土器実測図(34)



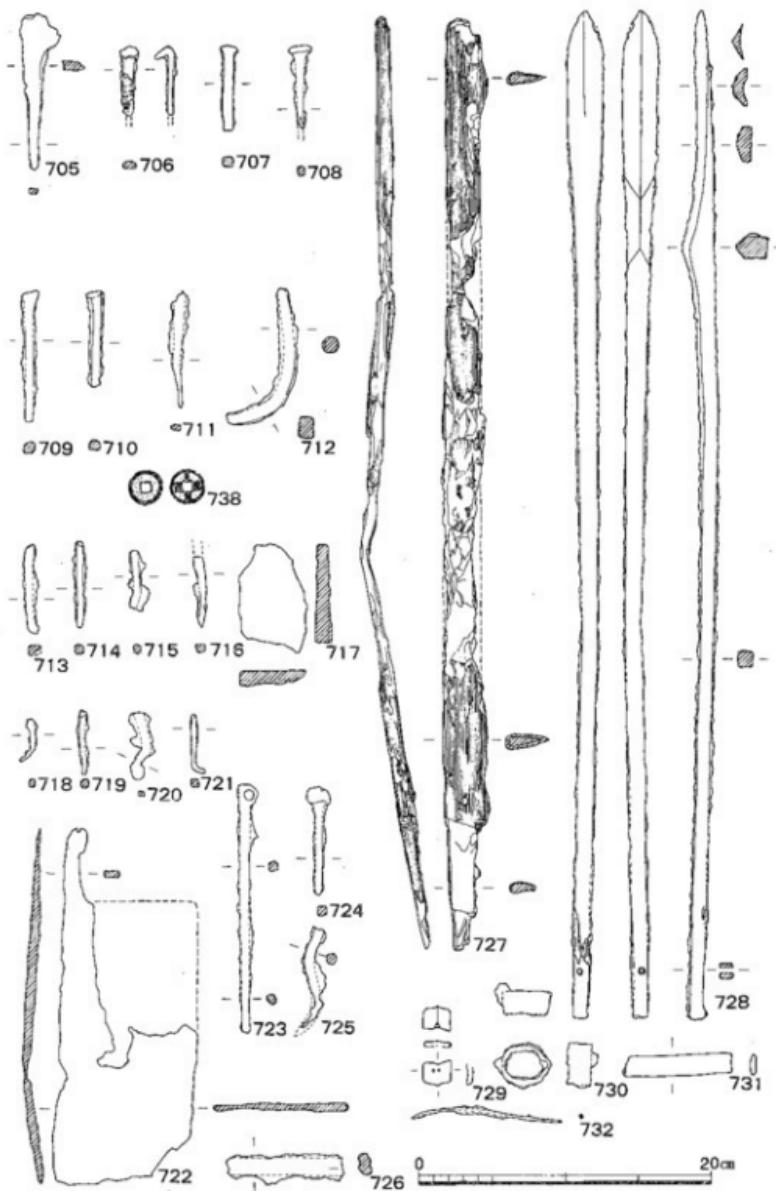
第39図 龍文土器、弥生土器実測図(1/4)



第40図 弥生時代石器（上段）、近世石臼（下段）実測図（石器 $\frac{3}{4}$ 、石臼 $\frac{1}{4}$ ）



第41圖 近世砥石、軒瓦実測図(3)



第42図 鉄器、鉄製品実測図 (1/4)

付表一五 遺物出土遺構一覧表

第26回	
SD16305A	329 330 331 332 334 335 339 340 343 344 345 346 352 356 359 361 363
SD16305B	365 366 368 371 372 373
SD16305C	333 336 337 338 342 347 348 349 351 353 355 358 360 367 369
土星・空堀	341 350 357 362 364 370 354
第27回	
SD16305A	374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 389 391 392 393
	394 395 397 398 399
SD16305B	390 396
SD16305C	387 388
第28回	
SD16305A	404 408 434
SD16305B	400 401 402 405 406 407 414 417 418 423 424 425 426 427 428 429 431
SD16305C	435 440 441 442
	403 409 410 411 412 413 415 416 419 420 421 422 430 432 433 436 437
438 439	
第29回	
土星・空堀	443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459
	460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473
第30回	
SD16305A	483 490 493 497 498 499 501 502 503 504
SD16305B	484 485 500
SD16305C	479 481 482 733 488 491 505
土星・空堀	487 489 492 494 495 496
6トレス落込み	480 486
第31回	
SD16305A	506 514 516 517
SD16305B	508 509 515 518
SD16305C	510
土星・空堀	507 511 512 513
第32回	
SD16305A	519 520 524 529 534
SD16305B	523 531 535
SD16305C	522
土星・空堀	521 525 526 527 528 532 533 536
6トレス落込み	530
第33回	
SD16305A	538 540 542 544 545 546 548 550 551 552 556 557 559 560 562
SD16305B	537 539 541 543 547 549 555 561 563
SD16305C	553 554 558
第34回	
SD16305A	564 566 567 570 571
SD16305B	565 568 569 572 573 574 579
SD16305C	575 576 577 578
第35回	
SD16305A	584 585 590 591 598 600 602 736
SD16305B	586
SD16305C	589 599 735
土星・空堀	592 593 603
黒灰褐色粘質土	580 581 582 583 587 588 594 595 596 597 601 734
第36回	
SD16305A	604 605 606 613 614 617 624 629
SD16305B	612 616 618 620 628 630
SD16305C	609 610 631
土星・空堀	607 608 611 619 622 623 625 627
黒灰褐色粘質土	615 621 626
第37回	
SD16305A	650
SD16305B	646
土星・空堀	641 642 643 646 647 648 649
神足古墳	632 633 634 635 636 637 638 639 640 644 645 651

第38図	
S D 1 6 3 0 9	652 653
土 留・空 堀	654 656 657 658 659 660 661 662 663 664
6ト レ 落ち込み	655
第39図	
S D 1 6 3 0 5 A	737
S D 1 6 3 0 5 B	679
S D 1 6 3 0 5 C	675 678
S K 1 6 3 0 8	668
土 留・空 堀	665 666 667 669 670 671 674 676
6ト レ 茶色土層	683 684
6ト レ 落ち込み	677
黒灰褐色粘質土	680 682
古 墓 封 土	672 673 681
第40図	
S D 1 6 3 0 5 A	688 690 691
S K 1 6 3 0 8	685
土 留・空 堀	686 688 689
古 墓 封 土	687
第41図	
S D 1 6 3 0 5 A	699 700 701
S D 1 6 3 0 5 B	695 696 703
S D 1 6 3 0 5 C	697
土 留・空 堀	693 698 702 704
6ト レ 黒褐色土層	692
6ト レ 落ち込み	694
第42図	
S D 1 6 3 0 5 B	721 722 724
S D 1 6 3 0 5 C	728
土 留・空 堀	705 706 708 711 715 716 729 730 732
空堀 S D 1 6 3 0 2	728
6ト レ 黑褐色土層	707 709 710 712 713 714 717 718 719 720 723 724 726 731
神 皇 古 墓 上 面	727

付表一六 主要器皿の形態分類表

4 ま と め

以上、出土遺物の代表的なものを概観した。このように、縄文時代から近世にかけての遺物が大量に出土し、考察すべき問題点も数多い。本報告では、近世、とくに、勝龍寺城に関連する土師器皿を中心に見て、その変遷・変化を具体的に明らかにすることことができた。土師器皿の形態による法量差、例えば、皿H、皿K等に表われる時期別出土等の差、各陶磁器のしめる割合等に時期差が認められることなどである。しかし、近世陶磁器の問題や、墨書の意味するもの等、今後の課題も多い。

また、勝龍寺城関係以外の神足遺跡に関連する遺物の内容をまとめることができなかつた。⁽³⁾しかし、弥生時代の遺物については、「長岡京」に私案をまとめたことがあり、多少の変更すべき点もあるが、本調査での出土遺物の位置付けは、これを参照されたい。また、中世遺物については、詳しく述べる機会を得ていないが、一応、第一図に示した変遷を考えており、当調査の出土遺物を含めることによって、最大100年単位で当地域の変遷がたどれるのではないかと考えている。本来ならば、中近世の遺物は、京都市域の調査例で具体的に示されたものを対比するのが望まれるところであろう。しかし、都の外と内の性格差は大きく土器に現れており、⁽⁵⁾例えば、高环形土器は、平安時代以後当地域から姿を消し、土師器皿類の精良なものもほとんどなく、本報告で皿Gとしたものもごく少量であることなど、直接結びつけるよりは、当地域の内容を明らかにしてからの仕事とする方が妥当と考えている。このことから、詳細の説明を⁽⁶⁾加えるに至らなかったが、検出構造の時期区分の項で述べたことを基に、第46図の編年表を作成提示し、批判を待ちたい。

注1) 土器の復原には長谷川睦、藤本滋子の、土器実測等には白川成明、近藤志津子の、本書校正には小塙礼子の御協力を得た。

2) 岩崎誠「長岡京跡右京第163次

(7 ANMKI地区) 調査概要」長岡

市教育委員会『長岡京市文化財

調査報告書』第15冊1985

3) 注2文献第34図。

4) 岩崎誠「乙訓地方の自然と遺跡

(2)桂川右岸の弥生遺跡」長岡京跡

発掘調査研究所『長岡京』第29号。

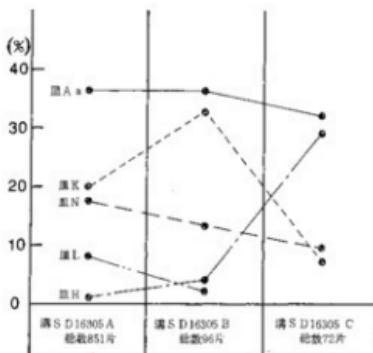
5) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調

査会『京都市高速鉄道遺跡調査年

報』I~III 1980~1982年

6) 向日市及び長岡市の報告書を

参考にした。



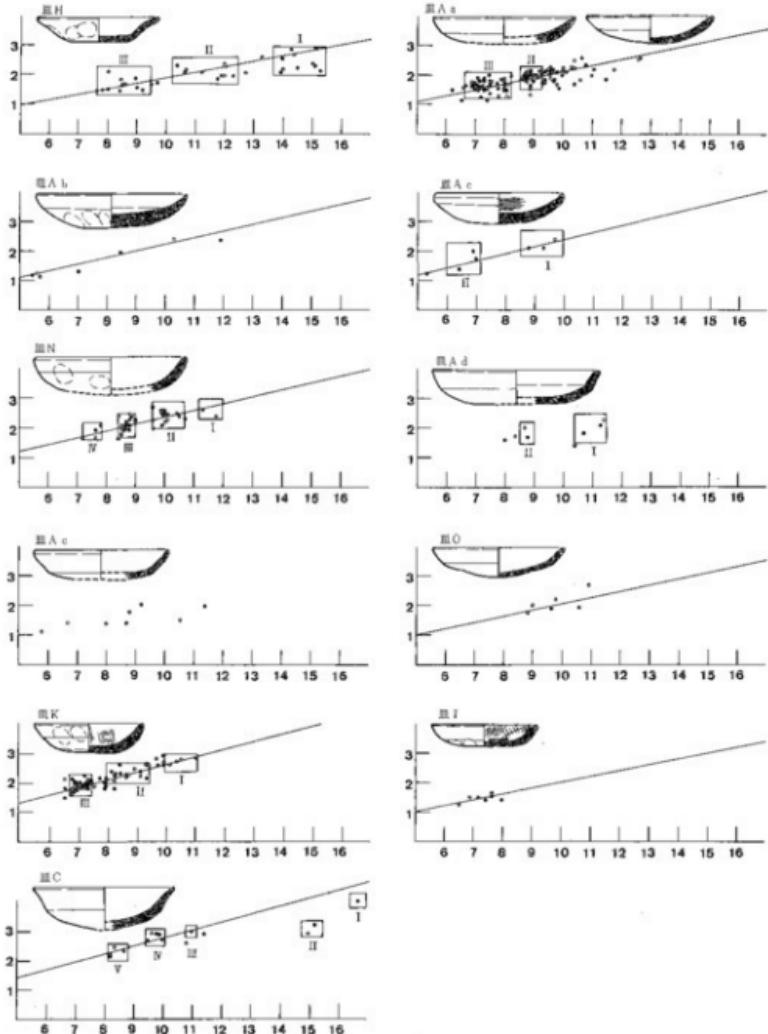
第43図 土師器皿の形態別法量比

付表一7 陶磁器出土総数及び土師器皿との割合

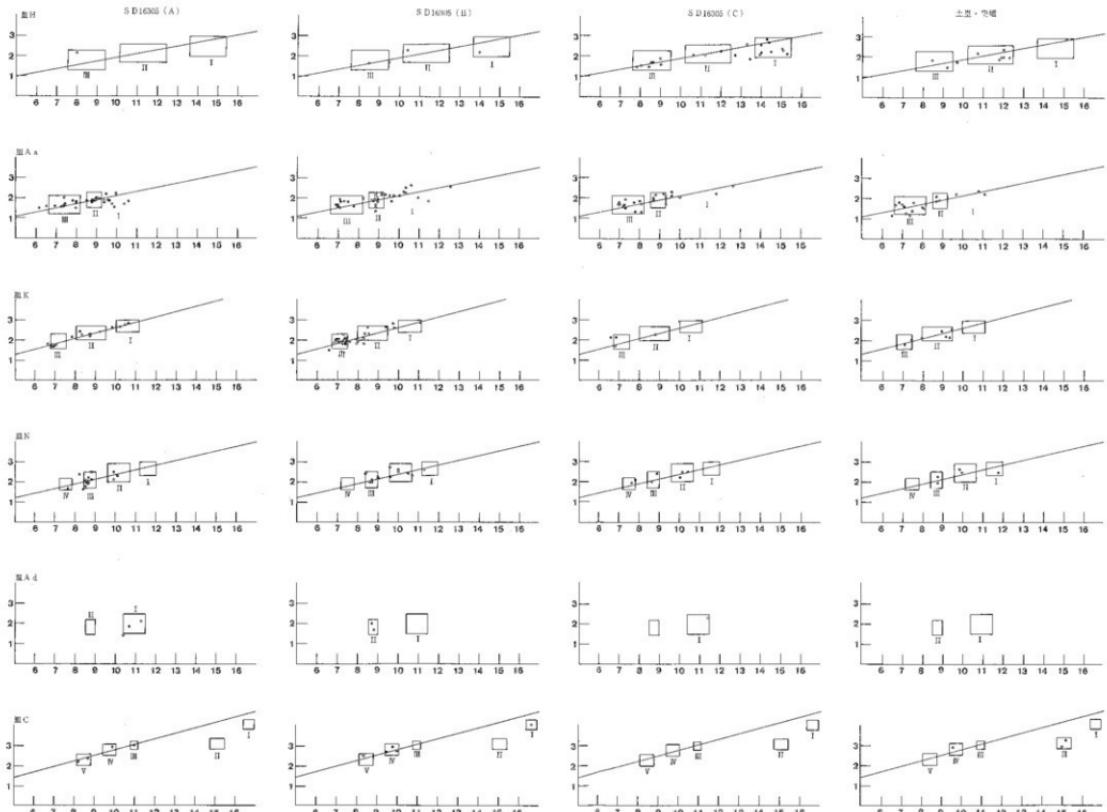
出土 出土地 陶磁器	SD 16305			土 器 空 堀	その 他	合 計
	A 期 (%)	B 期 (%)	C 期 (%)			
瀬戸 焼	32(26.7)	46(30.9)	29(37.7)	45(26.8)	5	157
碗	16(50.0)	25(54.3)	15(51.7)	21	3	80
皿	12(37.5)	16(34.7)	13(44.8)	8	1	50
壺	3(9.4)	4(8.7)	1(3.4)	12		20
他	1(3.1)	1(2.8)		4	1	7
吉津 焼	38(31.7)	49(32.9)	24(31.2)	50(29.8)	2	163
碗	27(71.1)	28(57.1)	17(70.8)	16	1	89
皿	6(15.8)	14(28.6)	6(25.0)	17		43
壺	5(13.2)	5(10.2)	1(4.2)	15	1	27
他		2(4.1)		2		4
京 焼	4(3.3)	3(2.0)	1(1.3)	11(6.5)	1	19
碗	4(100.0)	1(33.3)		9	1	15
皿		2(66.7)	1(100.0)	1		4
不明 陶器	1(0.8)		1(1.3)	1(0.6)		3
陶 器	75(62.5)	98(65.8)	55(71.5)	107(63.7)	8	342
伊万里 焼	35(29.2)	43(28.9)	14(18.2)	57(33.9)	12	161
	26(74.3)	32(74.4)	11(78.6)	35	11	115
	4(11.4)	8(18.6)	2(14.3)	14	1	29
	4(11.4)	3(7.0)		1		8
	1(2.9)		1(7.1)	7		9
篠 磁 器	110(91.7)	141(94.6)	69(89.6)	164(97.6)	20	503
青 磁	3(2.5)	4(2.7)	5(6.5)			12
碗	3(100.0)	3(75.0)	4(80.0)			10
皿		1(25.0)	1(20.0)			2
白 磁	7(5.8)	4(2.7)	3(3.9)	5(3.0)		19
碗	5(71.4)	1(25.0)		2		8
皿	2(28.6)	3(75.0)	2(66.7)	3		10
壺			1(33.3)			1
輸入 磁器	10(8.3)	8(5.4)	8(10.4)	5(3.0)		31
合 計	120(100.0)	149(100.0)	77(100.1)	168(100.6)	20	534.

	總破片数	SD 16305 A	SD 16305 B	SD 16305 C
土 師 器	399(42.8)	67(35.8)	86(36.6)	57(42.5)
国産 陶磁器	503(53.9)	110(58.8)	141(60.0)	69(51.5)
輸入 陶磁器	31(3.3)	10(5.3)	8(3.4)	8(6.0)
合 計	933(99.9)	187(99.9)	235(100.0)	134(100.0)

()は百分率=%、但し土師器皿は34以上の破片の数である。



第44図 土師器皿の形態別法量分布図



第45図 土器類の出土遺構別・形態別法量分布図

時代年代	土器 燒・环・皿	須恵器 周 環 皿	黑色土器 瓦器 土師器 羽釜	鍋	須恵器・陶器 灰 体(出土地・遺跡)
平安 後醍醐院					(向日市玉置院南地, 青川①)
900					
1000					(美河衣市御所村, 青川 S 五 1001)
1100					(長野市高瀬町・保津跡, 青川 S 13002) (長野市西神明町, 青川 S 13002)
1200					
1300					(長野市古文政遺跡, 青川 S E 6001)
1400					(長野市久賀・上原 S K 1901) (長野市神足跡・七日月 S K 2006)
1500					(長野市古山田山, 青川 D 1801)
1600					(長野市神足跡, 青川 S E 1801)
1700					(長野市古山田山, 青川 D 1805-C)
江戸時代 元禄年間					(長野市古山田山, 青川 D 1805-B)
戸戸城田跡					(長野市古山田山, 青川 D 1805-A)
1800					(長野市神足跡, 青川 A 1801)

神足遺跡一帯に当調査で出土した土器をもとに試た。不足分は、既存分の一部で補つたが、割合は各器種とも子孫のものと見受けられる。番号は、報告書掲載のままで付してある。

下の點は、年代記を表わすが、等分したものではなく、各々の開拓は最近のものではない。

）内は、基準資料として使用した出土地を示した。

第46図　乙訓地域の中・近世遺物編年図

第3章 長岡京跡右京第207次(7A N M K I—2地区)調査概要 —右京六条一坊十二町・勝龍寺城跡・神足遺跡・光林寺・徳勝(祥)寺—

1 はじめに

- 1 本報告は、1985年9月3日から10月10日まで、長岡市東神足二丁目6-15において実施した長岡京跡右京六条一坊十二町推定地、勝龍寺城跡・神足遺跡・光林寺・徳勝(祥)寺の発掘調査に関するものである。
- 2 本調査は、光林寺の本堂改築工事に伴う事前調査で、調査面積は約110m²である。
- 3 調査は、長岡市教育委員会が主体になり、国庫補助事業として実施した。調査員は、(財)長岡市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、岩崎誠が行った。
- 4 現地調査から本報告に至るまで、光林寺住職木本弘昭氏をはじめ、檀家絶代・役員など檀家の方々には文化財に対する深いご理解とご協力を得た。また、多くのご教示をいただいた京都文教短期大学教授中山修一氏、古文書の解読をしていただいた同志社大学教授井ヶ田良治氏並びに乙訓の文化遺産を守る会古文書部会の西田泰彦・平栄一郎の両氏、徳勝寺関係図面・古文書を提供していただいた山口孝太郎氏、出土した人骨の鑑定および原稿執筆をしていただいた京都大学教授池田次郎氏、遺物写真の撮影・指導をしていただいた御京都市埋蔵文化財研究所牛鳴茂氏ほかの方々にお世話をになった。記して感謝したい。
(注1)
- 5 本報告書作成にあたり多くの方々の御協力を得た。
- 6 本報告の6は池田次郎、北川賀一両先生の御寄稿を掲載し、他を岩崎が執筆・編集した。



第47図 発掘調査位置図(1/5000)

2 調査経過

当調査地は、小堀川と大川に挟まれた洪積段丘の先端部に位置し、南に傾斜する立地上にある。調査地の西方約100mに国鉄東海道本線があり、国鉄神足駅の南約300mに当調査地が位置する（第47図）。当対象地の南方約200mには勝龍寺城本丸跡が残り、西方約150mには土壘や空堀を見ることがある。

当地は、長岡京跡の六条大路に面した右京六条一坊十二町の宅地部分に推定されているばかりでなく、細川藤孝が勝龍寺城主の時期の、松井ヤシキが構えられた所から掲手門にかけての位置に推定されている。⁽²⁾さらに、当対象地の北に広がる段丘上には、弥生時代中期と古墳時代後期を中心とする神足遺跡があり、その範囲を確認する上で重要な所でもある。

このように、当調査地及び近隣地には、長期にわたる時代の遺跡が密集しており、度重なる調査が実施され、多くの成果が知られている。神足遺跡については10回にも及ぶ発掘調査が行われている。⁽³⁾この遺跡の南東端では縄文時代後期の遺物が出土し、この時期の集落が重なっていることが予想されている。⁽⁴⁾弥生時代中期については、竪穴住居址群からなる住居域と方形周溝墓群や土塙墓群からなる墓域によって構成されていることが具体的に明らかとなり、その規模や出土遺物から、乙訓地方の撫点的集落とされている。⁽⁵⁾古墳時代に関しては、中期の埴輪円筒棺が検出されており、後期では大規模な集落であったことが知られている。⁽⁶⁾また、後期には古墳が築かれ、神足古墳が現存している。⁽⁷⁾

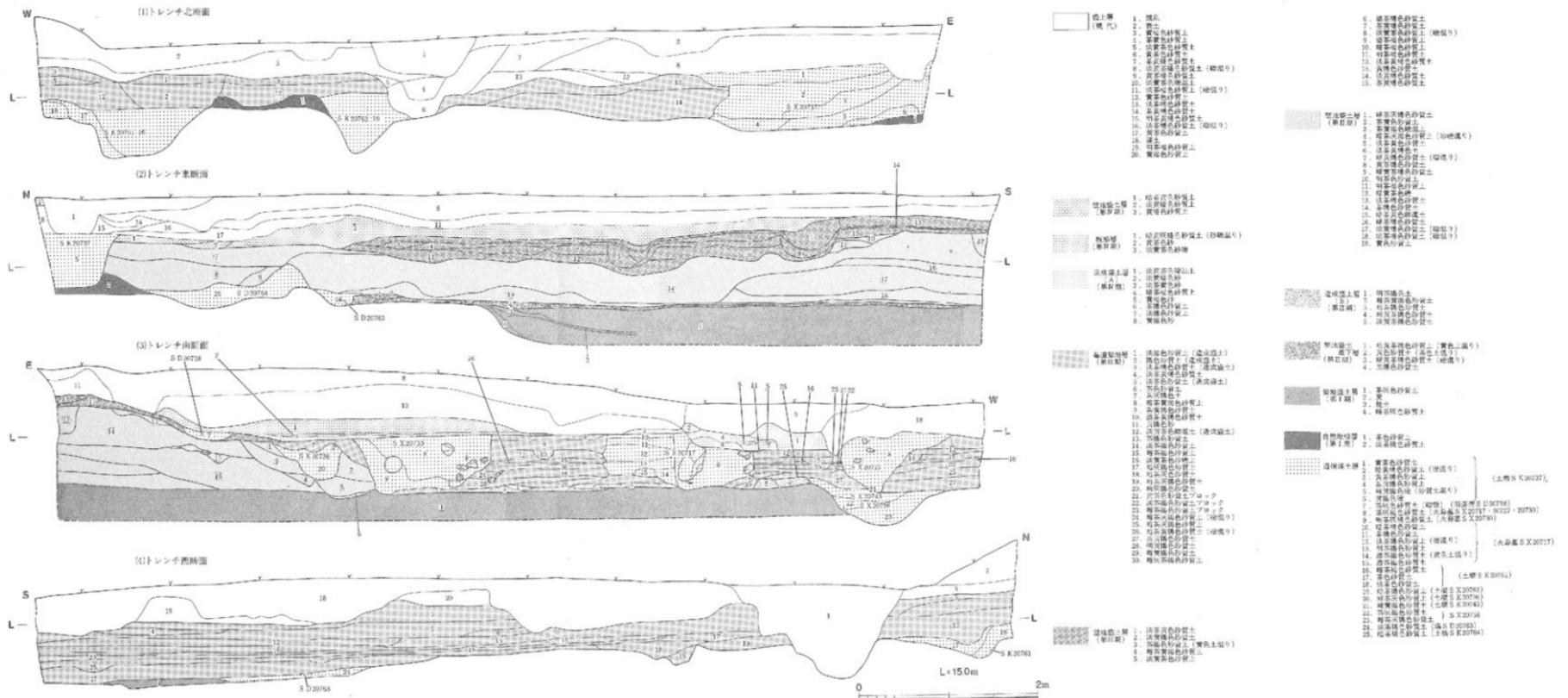
当調査地周辺で実施された長岡京の調査では、朱雀大路の西側溝と思われる溝や藤原氏の邸宅と推定される官人の邸宅址が明らかにされ、木簡や墨書き器等の出土など、多岐にわたる成果が結実している。

中世以降は、勝龍寺を中心とした集落が連鎖と統く。神足遺跡での調査では、鎌倉時代の井戸や墓、柱穴等、集落や墓地に関する成果があり、当調査地にも及んでいることが想定される。

室町時代から江戸時代前期にかけては、勝龍寺城に関する調査成果がある。当調査地の西方には、土壘、空堀が残っている。西端で行われた調査では、勝龍寺城に附隨する施設であることが立証され、その規模や構造が具体的に明らかにされた。当調査地の北約20mには、勝龍寺城の土壘が築かれていたことは、以前から伝えられているところであり、当調査地は勝龍寺城内に含まれている。当城には寛永10年から16年間、永井直清が居城していたと言われている。

現在の光林寺には、永井直清の家臣達が寄進した祝迦涅槃図が保存されている。また、同家臣横田主水等の墓碑が、光林寺の脇墓に並び置かれている。

このような歴史的環境下にあるため、光林寺本堂改築工事に伴い、工事計画床面を全面調査することになった。その面積は110m²である。調査は重機により盛土を除去し、以下人手により調査を始めた。遺構検出面は西に深く、東に浅くなっていた。この面で、石組みの遺構の一



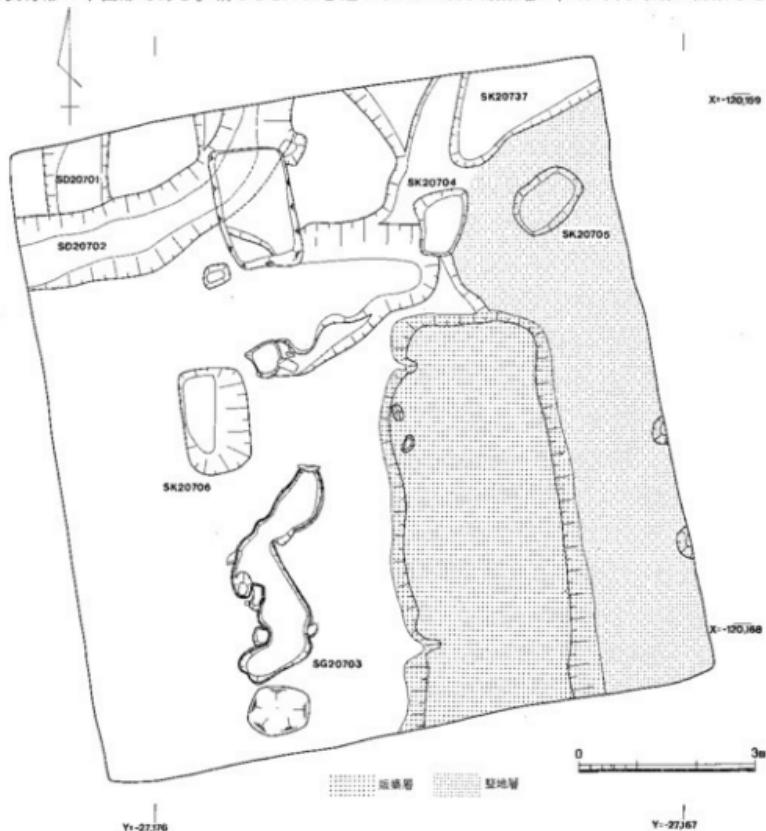
第48図 調査地土層図 (1/40)

部と池状の遺構を検出した。石組み遺構は、層位関係から池より古いことが明らかになり、この段階では、少なくとも2面の遺構面があることを確認した。池状遺構を除去し、石組み遺構を面向的に捕えた段階で、この遺構が火葬墓であることが明らかになった。このため、光林寺住職及び檀家の総代、役員の方々と協議し、9月14日に当寺住職による供養がとり行われた。

さらに下層からは土葬墓が検出され、この面を掘り下げた段階で無遺物地山層に達した。すなわち、合計4面の遺構検出面を確認し、これを古い順に第Ⅰ期…第Ⅳ期と呼ぶことにした。

3 検出遺構

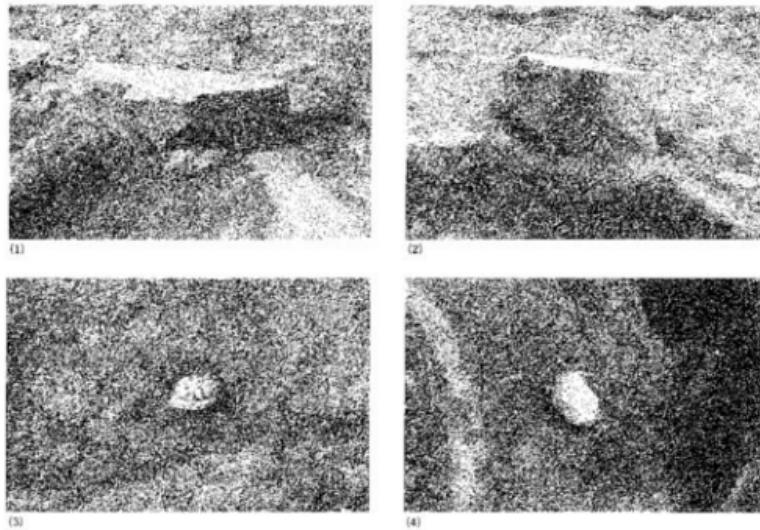
第Ⅳ期 (第49図、図版29-(1)) 泉水状の池や版築層の他、溝・土壙等の検出された遺構面の時期である。このうち、土壙 S K20704、S K20705、S K20706が最も新らしい。いずれも長方形の平面形である。溝 S D20702と池 S G20703及び版築層は、ほぼ同時期の構築と思われる。



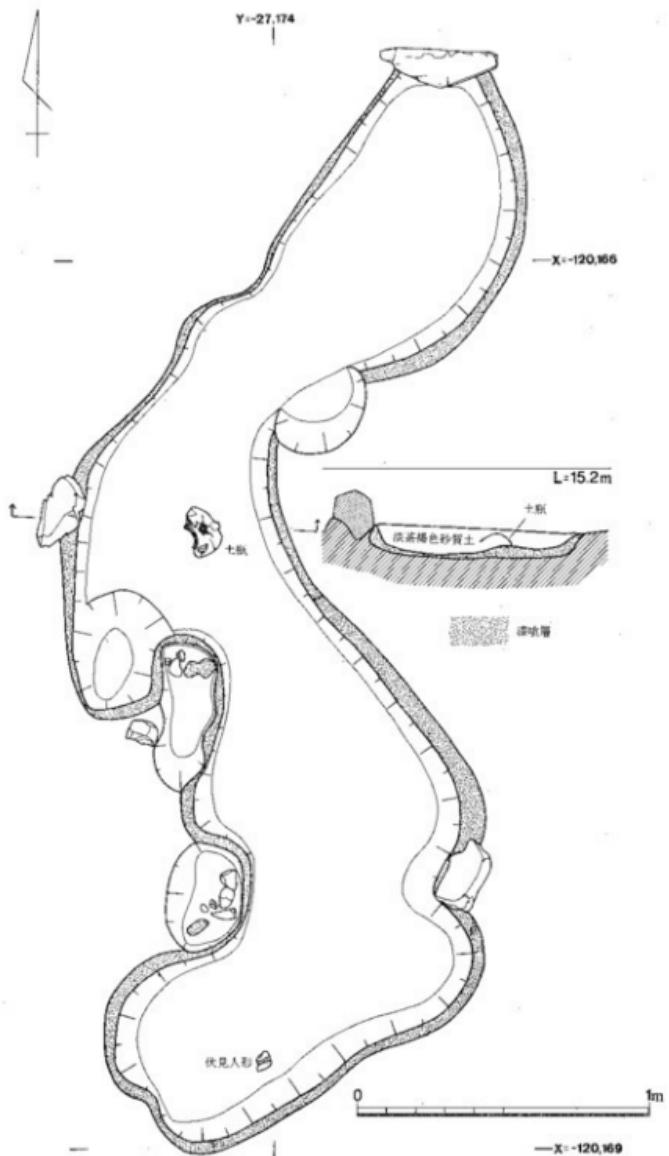
第49図 第Ⅳ期遺構配置図 (1/100)

れる。この遺構検出面の北端部は、溝 S D20702を境に一段高く、段丘疊層が露頭している。東側は整地盛土と版築によって一段高い面を築いている。この結果、調査トレンチの北辺側と東辺側が高く、他の低く平坦な大部分と隔離している。池 S G20703は、低く平坦になっている中央部より検出された。版築上からは、柱穴や根石等の建物基礎構造は検出できなかった。しかし、整地盛土の上層に、重みにより沈み込んだとみられる部分的な層の褶曲状沈み込みが観察できた（第48図(2)）。この層の沈み込みは建物の柱の重みによると考えられ、整地盛土上に建物が建てられていたと考えられる。版築層は、整地盛土層を西へ広げ、付け加えるかのように敷かれていた。整地盛土上の建物を西へ増築した際のものと思われる。層位関係では、整地盛土の後に版築されていることが確認される（第48図(3)）。

池 S G20703 (第50・51図、図版29-1(2)) 漆喰により固められた池で、S字形の平面形に築かれている。各屈曲部や北端部には、人頭大の河原石や割石が置かれている。また、置き石の見られない屈曲部には、石の抜き取り穴がある。これらの石は、漆喰を張ると同時に、計画的に据えられたもので、石の下半部は漆喰に封じ込められていた（第50図(1)・(2)）。池の西辺中央部の張り出した部分に、円形の柱穴状に深くした所があり、深さ約0.3mを測る。池自体の規模は、全長3.7m、幅0.9~0.4mで、深さ0.1mを測る。小規模な池ではあるが、漆喰で築き、置石がある等、平面形や構築法に装饰性があり、泉水として築かれたものと思われる。埋土は一層で、池の中央部から土瓶（第50図(4)）が、南隅から伏見人形（第50図(3)）が出土した。土瓶はほぼ完形に復元することができた。



第50図 池 S G20703の細部（1～2は構築状況、3～4は遺物出土状況）



第51図 池 S G 20703実測図 (1/20)

第III期 (第52図、図版30-(1)・(2)) この時期の遺構は、石敷きの溝と火葬墓等からなる遺構群で、第IV期検出面の版築層と造成盛土を除去した段階で明らかになった。火葬墓は、いずれも石組みにより築かれており、南北方向に配列した3列と、東西方向に配列した1列からなる（第52図）。東西方向の火葬墓列群（以下、火葬墓D列群と呼ぶ）は墓域の北限を画しており、この列群より北側は一段高く、段丘疊層が露頭している。また、南北方向の3列の火葬墓群との間に、幅約0.6mの空間があり、墓道としている。南北方向の各列は、相互に平行して築かれている。南北方向の火葬墓列のうち、東端の列群を火葬墓A列群、中央の列群を火葬墓B列群、西端の列群をC列群と呼ぶ。この南北方向の各列群間に墓道としての空間があり、C列群の西側にも認められる。各墓道は、砂層や砂質土を幾層にも重ねて構築されている。この墓道の規模は、各々異なり、火葬墓A列群とB列群の間は1.2m、火葬墓B列群とC列群の



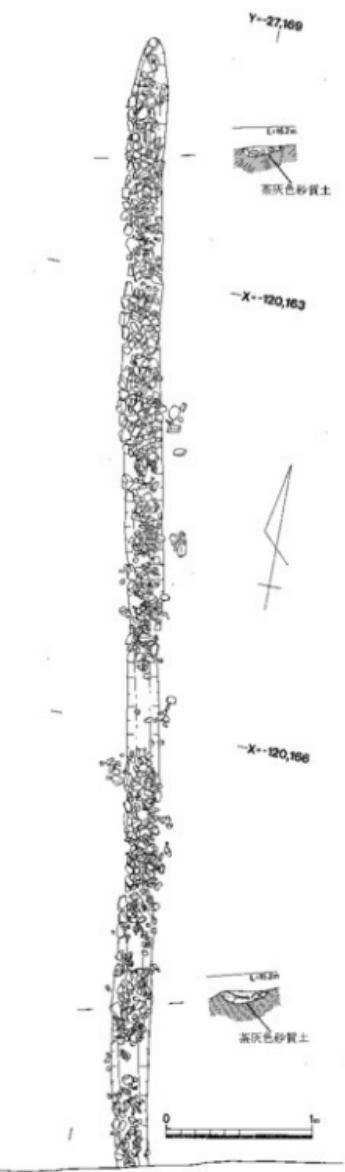
第52図 第III期遺構配置図 (1 / 100)

間は0.8mを測る。また、火葬墓A～C列群とその間にある墓道は、さらに南へ伸びている。石敷きの溝SD20718は、南北方向の火葬墓A～C列群と平行しており、A列群との間は約1.6mを有する。しかし、その空間地には、火葬墓列群の各間に見られた重層した土層は認められず、墓道としての空間地ではない。石敷きの溝より東側は、なだらかに高くなり、トレンチ東端近くで平坦面になる。この比高差は、0.4mを測る。

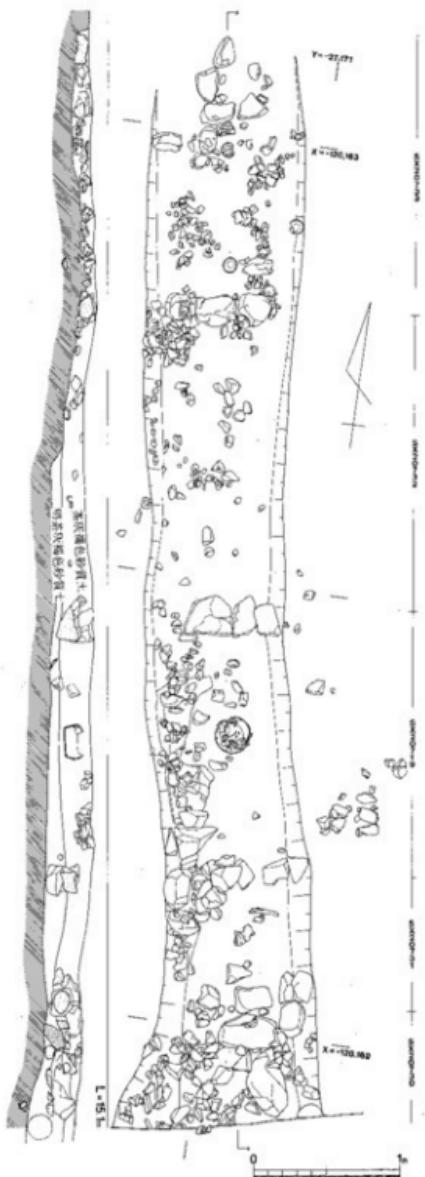
溝SD20718（第53図） 当溝は、整地盛土上に設けられた南北方向の溝で、幅0.3m、深さ約0.1mを測る。溝内は全面に小石を敷きつめていた。溝内の底に敷かれた石には小ぶりのものを使用し、溝の両肩には、やや大きめの石を使用し、石の長径を溝の方向に沿って並べている。このことから、素掘りした溝の両肩に長い石を並べ、その間に小石を敷きつめて造られたと察せられる。

この溝は、整地盛土の西辺に沿って掘られている。溝北限と整地盛土の北限との間は約1.5m、溝西肩と整地層盛土西限との間は約1mで、整地盛土の構築と当溝の設置とは関係深いと思われる。おそらく、整地盛土は建物の基礎構造のために造られたもので、当溝はその建物の雨落ち溝としての機能を果たしていたのではないかと思われる。

火葬墓A列群（第54図） A列群は南北方向に、幅約1mの溝を掘り、トレンチで南北の長さ約7.3mにわたって検出された。この溝は、0.3～0.5m角程度の石を切断する形で、並べて区画し、5基の火葬墓を築いている。火葬骨は、各区画内の一ヶ所又は数ヶ所に集中して検出されることが多かった。各区画の上面には小石が散乱し、また一部分では密集していた。おそらく、全面に小石が敷きつめられていたのであろう。このような、5つに区切られた各



第53図 石敷溝SD20718実測図(1/40)



第54図 火葬墓A列群 (1/40)

区画を北から順に、火葬墓S X20733, S X20732, S X20719, S X20731, S X20730と呼び、これについて概観する。

火葬墓S X20733 東西幅約1mの南北溝を南北1.8mに区画されたもので、火葬墓A列群の北端に位置する。南側の区画石列は、火葬墓S X20732の北区画を兼ねる。火葬骨は、当区画内全体に散乱し、まとまりは認められなかった。度重なる納骨により搅乱された骨片であろう。納骨器は、小壺が一点出土した。しかし、鉄釘が数点出土していることから、木箱による納骨の可能性がある。納骨後は、上面に小石を敷いたと思われる。当区画の北端部には、区画石列に使われた石とほぼ同じ大きさの石で小さく方形に配置した部分があり、当火葬墓は、2基に分かれる可能性がある。

火葬墓S X20732 (図版31-(1)~(4))

東西幅約1mの溝を、南北2.1mに区画されたものである。南側の区画石列は、火葬墓S X20719の北区画と兼用である。火葬骨は、北西端と中央部北よりの位置に多く散乱していたが、まとまった状況ではない。それぞれの骨片集中部分には、一文銭が一枚ずつ出土した。北西端のものは寛永通寶を石組みの間に、中央のものは元祐通寶を、それぞれ裏面を上にして検出された。いずれも骨片より上で出土した。北西部の骨片直上では、唐津焼の皿底部片が、内面を上にして出土した。

火葬墓S X20719 (図版31-(5)・(6))

東西幅約1mの溝を南北約1.8mに区画

されたものである。南側の区画石列は、火葬墓S X20731の北区画と兼用である。当区画の中央部には、有蓋骨壺が置かれて、火葬骨が納められていた。この骨壺の上半部は西方に押し壊されており、壺の肩部から蓋までが骨とともに、当区画西辺にまで散乱していた。骨壺の北側にも小量の火葬骨が散乱していたが、木箱に当骨壺が納められ、埋納されていたため、上半部分が削られた際に、木箱と骨壺との間の空間にこぼれ落ちたものと考えられる。

当区画の西辺では、北と南を区画する石とはほぼ同じ大きさの石が配列してあるのが検出された。この西辺中央部の列石上には、小壺が2個置かれていた。東辺には石列は認められない。

火葬墓S X20731 (図版31-(7)・(8)) 東西幅約1mの溝を、南北1mに区画したものである。南側の区画石列は、当火葬墓のための石列であり、南に続く火葬墓S X20730とは兼用していない。元来兼用の石列として置かれて、後に整備され、個別の区画となつたと考えられる(図版31-(7))。火葬骨は、当区画のほぼ中央部にまとまって検出された。その範囲は、ほぼ方形にまとまっており、火葬骨のまとまり状況から、約0.5m四方の木箱による埋納と考えられる(図版31-(8))。

火葬墓S X20730 当火葬墓は、火葬墓A列群中では最も大きな石を使用している。区画石列は東辺と北辺で確認された。西辺には小石しかなく、南辺は調査トレンチよりさらに南であり、石列の有無は確認できなかった。東辺の石列内には、五輪塔の水輪部が転用されていた。当火葬墓の北辺区画石列は、火葬墓S X20731の南辺区画石列群の南に接して配列されており、石の大きさは、ひとまわり大きい。この石列から南は、火葬墓A列群を構成している南北溝の西脇が広がり、最大幅1.4mを有する。当火葬墓は、区画石列の大きさが火葬墓A列群内で最も大きいこと、区画石列が当火葬墓のためにのみ置かれた状況であること、火葬墓A列を構成する溝に乱れがあること等から、A列群中では最も新らしく築かれたものであろうと思われる。

火葬骨は、トレンチ南辺にかかる部分の当区画中央部付近に散乱していたが、まとまりはなかった。

火葬墓B列群 (第55図) 3列の南北方向に長い火葬墓群の中央で検出された墓群である。各火葬墓列群のうち最も幅が広く、約1.6mを測る。南北長7.8mを検出したが、さらに南へ伸びている。この溝は、東西方向の石列により7区画に分けられている。区画石列の大きさは、火葬墓A列群に比して不揃いで、区画も明瞭さを欠く。また、南北溝を東西方向の石列で区画したものをさらに南北方向の石列で縦に2分したものも含まれている。上面に敷かれた小石は、他のどの列群よりも多く残り、敷きつめた状況が良好な形で観察できた部分がある。当列群の7区画を北から順に、火葬墓S X20715, S X20716, S X20720, S X20722, S X20728, S X20729, S X20717と呼び、以下にこれを概観する。

火葬墓S X20715 (図版32-(1)・(2)) 火葬墓B列群の北端にあり、北辺と南東隅、北西隅に区画石及び石列があるが、西辺には小石しか検出されなかった。東西幅約1.6mの溝を、



第55図 火葬墓S X 20716

南北1.2mに区画したものである。当区画内のほぼ中央部に火葬骨が集中して検出された。この火葬骨に混じって、焼成を受けた鉄釘等が出土した。また、焼成を受けていない鉄釘も数点あり、納骨に木箱が使用されたと考えられよう。

火葬墓S X 20716 大石による区画石列はみられない。しかし、火葬墓S X 20715の南東隅の区画石と火葬墓S X 20720の北東隅の区画石を当区画に兼用していたと思われ、この両区画石間の上面には、小石敷が方形の面として検出された。小石敷は、東西幅約1.6mの溝内におさまり、南北0.9mの範囲である。このほぼ中央部に少量小片の火葬骨が出土した。また、西半部ほぼ中央からは、小壺が1個出土し、壺内には歯が納められていた。

火葬墓S X 20720 東西幅約1.6mの南北溝に北東部と南東に区画石を置き、南北約0.9mに区切ったものである。東辺には長さ約0.7m、厚さ0.2m、幅0.4mの大きな石を置いている。西半分の上面には小石が散乱し南西端にやや大きめの礫が置かれていた。

火葬墓S X 20727 (図版32-(3)・(4))

東西幅約1.6mの南溝を、南北1mに区切ったもので、さらにこれを南北に2分している。当墓の場合、四周を区画する石が列として並べておらず、北東隅、西北隅、南辺中央東寄りの各個所に1~3個の石が置かれているに

すぎない。また、南北に2分する区画石も、中央やや北寄りに1個の大石が、置かれている状況で検出された。北辺は、火葬墓S X20720の南辺を一部壊して広げており、火葬墓S X20720の南辺区画線上に当墓の骨壺が埋納されていた。この骨壺は、当墓東半分区画の中央北寄りに置かれたものである。壺内には、ほぼ大人一体分と思われる火葬骨が埋納されていた。また、当墓東半分区画中央部には、直径0.2mの範囲に火葬骨が集中し、その直上に、合口にした土師器皿が置かれていた。土師器皿の中には、灰とともに、粉状の火葬骨片が納められていた。西半分区画範囲内には、納骨器はみられず、土師器皿が3枚重ねにして置かれていた他、小骨片がまばらに出土しただけである。

火葬墓S X20728 東西幅約1.6mの溝を、南北2mに区画したものである。石列による区画は、南西隅と東辺中央部で検出されたが、他の辺では確認されなかった。しかし、上面に敷かれた小石のうち、やや大きめの石が北辺、東辺、南辺の各所に見受けられ、その範囲を知ることができる。また、東辺のはば中央部に、墓碑の基礎と思われる花崗岩製の作工石の破損品が置かれていた。上面に敷かれた小石は、この東辺部南半分で原状を保った状況で検出された。この小石敷の下からは、平安時代の軒平瓦が出土した。火葬骨は、当墓区画の南西隅近くに、少量がまとめて出土した他は、各所に散乱していた。

火葬墓S X20729 (図版32-(5)・(6)) 東西幅約1.6mの溝を、南北1.2mに区切ったものである。西辺には整然と並べられた石列を検出したが、南辺の東半分は火葬墓S X20717により壊されていた。火葬骨は中央部南寄りに、一辺約0.4m程度の方形に近い平面形で集中して検出された。この骨群は、火葬墓S X20717の北区画石列上に一部が乗り、それより新らしい埋葬であることが知られる。その埋葬形態は、鉄釘が骨に混じっていたことから、木箱による埋納と考えられる。また、火葬骨とともに、熱で癒着した六文銭や、ガラス玉、管状容器等が混じって出土した。上面の石敷きは、北辺中央部に見られる。

火葬墓S X20717 (図版32-(7)・(8)) 火葬墓S X20729の南東部を一部破壊して築かれたもので、東西幅1.6mの溝の東半分、南北0.8m、東西0.8mの方形に区画されている。周囲を大きな石で区画し、中央部には四耳壺を倒立させて置かれていた。壺内には、大人一体分と思われる火葬骨が納められていた。蓋の痕跡は認め



第56図 火葬墓B列群の遺物出土状況

られなかつたが、木や衣、紙等により封じてあつたと思われる。

火葬墓C列群 当列群は、南北に長く配列された火葬墓列群のうち、最も西側の列群である。A・B両列群と異なり、四つの石列が明瞭で、共通する区画石列を持たず、各墓が独立して築かれている。区画に用いられた石も、0.3m前後のものが最も大きく、大小の差が少ない。火葬墓A・B両列群では、中には大きな石が使用されたりしているが、当列群では、そのような列はない。

当列群は、調査区内で南北7.4mにわたって検出され、さらに南へ伸びている。当列群の検出範囲内では、7基の墓が並んで構成されており、北から順に、火葬墓S X 20726、S X 20712、S X 20711、S X 20710、S X 20709、S X 20708、S X 20707と呼ぶ。これらの各規模は、火葬墓A・B両列群に比して小規模である。しかし、区画石は堅固に築かれている。また、A・B両列群に見られた大型の藏骨器や、まとまった火葬骨は検出されなかった。以下に各個の火葬墓について概観する。

火葬墓S X 20726 (図版33-(1)・(2)) 火葬墓C列群の北端で検出されたものである。このC列群内にあって、当火葬墓と後に見る火葬墓S X 20709だけが、四つに石列を持たない例である。しかし、当墓は、四つに小石を残し、その規模は、東西0.75m、南北0.85mであることが確認できる (図版33-(1))。

当墓の南西部には、白磁製の骨壺が埋納されていた。壺内には、数点の火葬骨が納められていた。この骨壺の南東傍からは、小壺が出土し中に歯が納められていた。この他、区画内にも



第57図 火葬墓C列群 (1/40)

少量の火葬骨が散乱していた。

火葬墓S X20712 南北、東西ともに1mの方形に区切られたものである。西半分は石列が見られず、小石が並んで置かれていた。東半分は良く残り、当墓の構築方法を知ることができる。すなわち、長軸をもつ人頭大の石を周囲に置いて四角く区画し、納骨後埋め戻して小石を敷き、その上に上面が平坦になるように、平らな面をもつ石数個を置いている。おそらく、この上に墓碑が置かれていたのであろう。小石敷きの上に置かれた石のひとつには、砾石が転用されていた。当墓内からは、火葬骨の小片が散乱した状態で出土したが、納骨器はなかった。

火葬墓S X20711 南北1.4m、東西0.8mの方形区画をもつ墓である。火葬墓C列群内では、周囲の石列が最も良好な形で検出された。東辺の区画石列は、ほとんど現位置を保っており、西辺がやや乱れている。上面では、当墓の東辺に添って小石敷が認められた。墓内からは、火葬骨の小片が散乱して出土したが、他に埋納物は出土しなかった。

火葬墓S X20710 南北1.4m、東西0.8mの方形区画で、北西隅の区画石を欠損している。南辺は南へずれて広がっている。東辺の石列は、他の各辺の石列よりも、やや小さめの石を使用している。墓内部からは、小片の火葬骨が少量出土したが、散逸的であった。

火葬墓S X20709 (図版33-(3)・(4)) 当墓には、周囲を区画する石がなく、上面に黄色砂質土を張っていた。その範囲は、火葬墓S X20710の南辺石列と火葬墓S X20708の北辺石列との間にあり、平面形は、東西0.8m、南北1m前後の方形である。黄色砂質土の上には、小石が部分的に認められたが、敷いたものかは判然としない。当墓の北東隅寄りには、刷毛目唐津の蓋物が置かれ、蓋の上に拳大の割石が置かれていた。蓋物内には、火葬骨が数片納められていた。

火葬墓S X20708 (図版33-(5)~(8)) 当墓は、周囲の石列が散在しており、荒い区画となっている (図版33-(5))。その範囲は、東西1.2m、南北1.8mである。また、区画に使用された石も、他の墓と異質で、花崗岩製の墓碑等を使用している。例えば、南辺には石仏を裏面を上にして (図版33-(6))、西辺では五輪塔火輪部を倒立した状態で (図版33-(7))、東辺部では一石五輪塔を横転させて (図版33-(8))、それぞれの区画に転用している。

火葬骨は、当墓内全域に散らばり、まとまりはなく、また納骨器等も出土しなかった。

火葬墓S X20707 火葬墓C列群で最も南に検出された。当墓は、火葬墓A列群の各墓の区画と直線的に繋がらず、全体に東寄りに築かれている。周囲の石は比較的整った形で方形に配列され、南北1m、東西0.9mの規模をもつ。配列された周囲の石の組み合わせの際、透間を小石で埋めている。西辺に置かれた区画石沿いには、上面に敷かれた小石が残る。墓の内部では、南西隅の区画石と西辺の区画石の間に挟まれた状態で、少量の火葬骨が、まとまって出土した他、火葬骨小片の散乱が見られただけで、納骨器等は、出土しなかった。

火葬墓D列群 (第58図) 当列群は、火葬墓地の北限に位置し、これより北は一段高くなっている。当列群は、東西方向に並べられた火葬墓群で、全長3.7mを検出した。この並びに

76 検出遺構

は、4つの区画が認められ、各墓の構築方法は、火葬墓C列群で見られた各墓と同方式のものである。しかし、残存状況は悪く、後世の搅乱が著しい。当列群を構成する4区画を東から順に、火葬墓S X20735、S X20734、S X20714、S X20713と呼び、以下にこれを概観する。

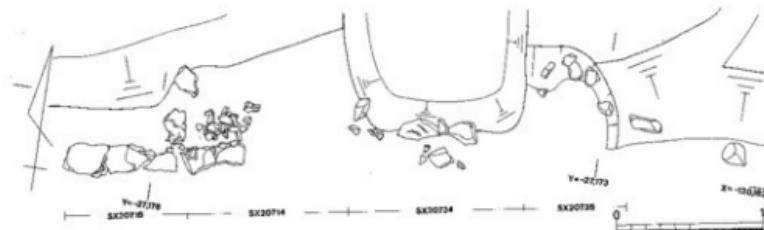
火葬墓S X20735 火葬墓D列群の東端で検出されたもので、少量の小石群が検出された。当墓の北側は一段高く、段丘礫層が露頭している。この高まりを切土して、当墓の面積を確保している。その規模は、南北0.8m、東西0.8m前後の方形であったと思われる。墓内からは、土師器の皿が数点出土したのみであった。

火葬墓S X20734 当墓は、大部分が北側からの後世の搅乱により破壊されている。しかし、南端部には、区画石列の一部が原位置を保っていた。その周辺には、小石も少量確認され、墓の構築に使用されたものが崩落したものと思われる。正確な規模は知り得ないが、石の分布状況から、南北0.8m、東西1.0m前後の方形区画であったと思われる。

火葬墓S X20714 当墓では、東半分は消失しているが、南西部に区画石列の一部が検出された。また、そこには、小石が集中して見られ、上面に石敷きのあったことが推定できる。西辺の区画は、北西部で一ヶ所だけ残っており、当墓の規模を、東西1.2m、南北0.8m前後であったと考えられる。

火葬墓S X20713 当墓は、火葬墓D列群の西端で検出されたもので、南辺の区画石列の一部を良好な形で検出できた。しかし、西辺の区画石列は検出されず、東西の範囲が明らかでない。北側も、当調査で検出した第Ⅳ期の溝S D20702によって削られている。

その他の遺構 当遺構面では、前記した火葬墓の他に、土壙S K20737、S K20724、溝S D20725、S D20732がある。土壙S K20737は、トレーニング西辺の整地盛土と北辺の段丘礫を掘ったものである。深さは0.6mを測る。北側は、トレーニングの北西端にかかり、これよりさらに北へ伸びるため、全形及び平面規模は明らかでない。土層は6層からなり、その中には、大量の礫を含む層がある（第48図-1）。その他の土壙や溝は、火葬墓A列群と火葬墓B列群の間にある墓道に掘られたもので、いずれも浅く、深さ0.1m前後である。

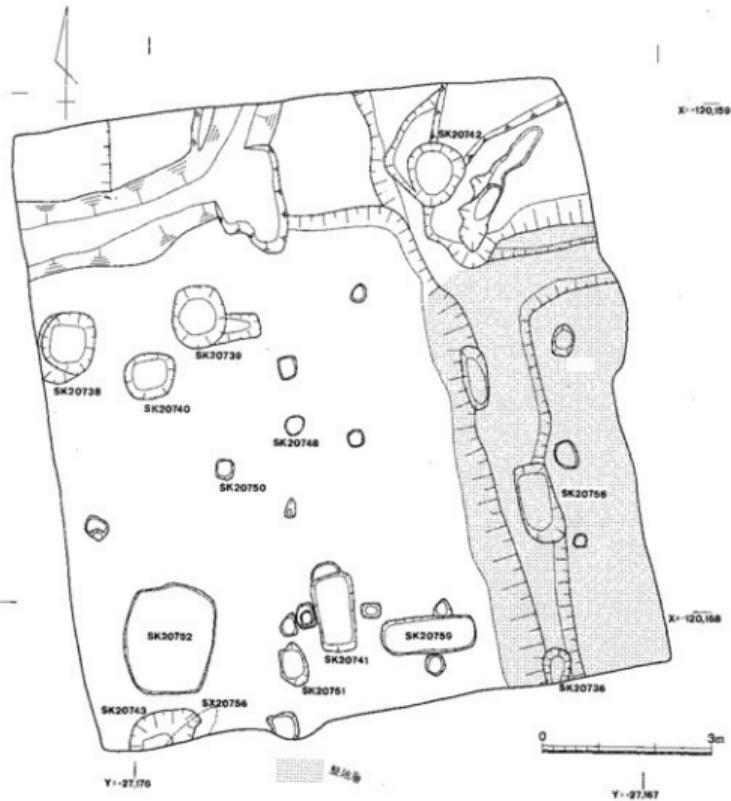


第58図 火葬墓D列群 (1/40)

第II期（第59図、図版34-(1)） 第III期の火葬墓を除去し、墓道整地層や整地盛土の上層を掘り下げた段階で、土葬墓をはじめ、土壇やピット等が検出された。この検出面を第II期とした。トレチ北辺部は、第IV期の面から見られた段丘礫層が露頭し、一段高まっている。トレチ東辺部では一段高くなっている。第III期の建物の基段と思われる整地盛土部分で、この層は大きく2層に分かれ、その上層を除去した段階で、土壇やピットが検出された。この第II期の面は、III期の墓域部分を平均0.4m、整地盛土部分を平均0.2m掘り下げて明らかになった。北部にある高まりの比高差は、最大0.5m、東部の整地盛土の高まりの比高差は、最大0.8mを測る。

当面で検出された遺構には、一部にまとまりが認められる。すなわち、土葬墓の座棺によるものは北西部に、寝棺によるものは南東部に集まり、整地盛土下層上面には柱穴がみられる。以下に、各遺構ごとに概観する。

土葬墓SK20738（第60図、図版35-(1)） 土葬墓の中で、最も残りが良好なものである。平面形は橢円形で、長径2.3m、短径2mを測る。段丘礫層を、深さ1.4mまで掘り下げ、底面



第59図 第II期遺構配置図 (1/100)

78 検出遺構

は直径1.2mの円形になっている。埋土は1層からなる。当墓壙内の深さ0.6mの位置から東よりに、頭骨が検出された。深さ0.8m以下には、他の骨類が出土した。これらは、頭骨の下方から放斜状に検出され、その位置関係から、足や腕の骨と思われる。また、当墓の掘り形や人骨各部の検出状況から、座棺による土葬と察せられる。頭骨が南西を向き、他の骨類が北西から南西方向に放斜状にあることから、ほぼ西向きに埋葬されたことが窺える。

副葬品には、刀子と六文銭がある。この二者は、墓壙の北西部から出土し、六文銭の上に刀子の柄部分が重なる状態で検出された（図版35-（1）右下）。六文銭は、表面を上にし、六枚重ねにした状態で出土した。その出土位置が、骨の出土した最も深い位置と同じ深さであることから、棺の上に置かれ、棺が腐って陥落した際に落ち込んだとは考えられず、副葬された原位置を保っていると思われる。

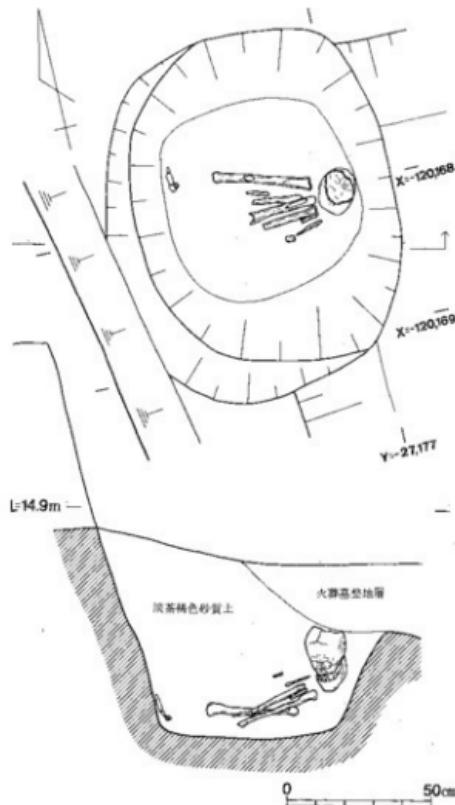
土葬墓SK20739 当遺構は、直径1m、深さ0.8mを測る土壙である。土壙内からの出土品ではなく、埋土は1層であった。掘り形の形態、規模から、土葬墓SK20738と同様な座棺であったと思われる。

土葬墓SK20740 当遺構は、東西0.9m、南北0.8mの楕円形に掘られた土壙で、深さ0.7mを測る。埋土は1層からなり、壙内からの出土品はない。

掘り形の規模は、土葬墓SK20738やSK20739に比べてやや小さいが、形態から、座棺による土葬墓と思われる。

土葬墓SK20741 当墓は、長さ1.7m、幅0.8mの長方形に掘られた土壙で、深さ0.35mを測る。長軸は南北方向にある。埋土は1層であり出土遺物はなかった。当土壙の北辺は、二段に掘られている。

当遺構の性格は、出土遺物がないため、明らかでないが、平面形が長



第60図 土葬墓SK20738実測図（1/20）

方形であり、棺を埋めるに充分であることと、同形態の土壙が東に隣接していること等から、寝棺による土葬墓と判断した。

土葬墓 S K20759 土葬墓

S K20741の東側で検出された土壙で、長さ1.7m、幅0.6m深さ0.3mを測る。埋土は1層で、出土遺物はなかった。平面形と規模から、寝棺による土葬墓と思われる。

土葬墓 S K20758 (第61図)

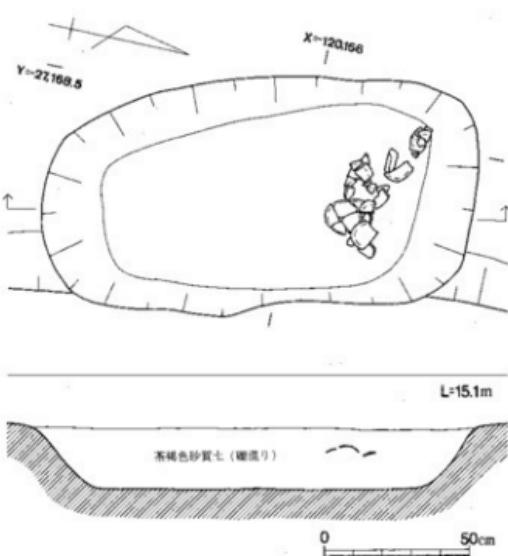
当遺構は、整地盛土の下層上面で検出された土壙である。東西1.5m、南北3.4mの南北に長い長方形で深さ0.3mを測る。

埋土は1層である。この層の中ほど、当土壙の北寄りの位置から、土師器の皿9枚と土師器の砂片が集積した状態で出土した。この土師器類は、棺埋葬の際に行われた供養に使用したもののが副葬されたと思われる。また、土壙の規模が棺埋葬に充分であることから、寝棺による土葬と考えられる。

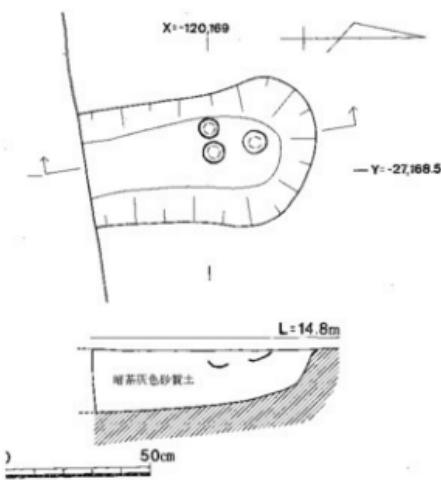
土葬 S K20736 (第62図) 当土壙

は、南北に長い楕円形のもので、北半分を検出した。南半分は、トレンチ南辺以南に伸びる。検出できた長さは0.3mで、幅0.2m、深さ0.25mを測る。検出面は、整地盛土の下層上面である。埋土は1層で、上面からは、土師器の皿3枚が出土した。

土葬 S K20742 (第63図)



第61図 土葬墓 S K20758 実測図 (1/20)



第62図 土葬 S K20736実測図 (1/20)

80 検出遺構

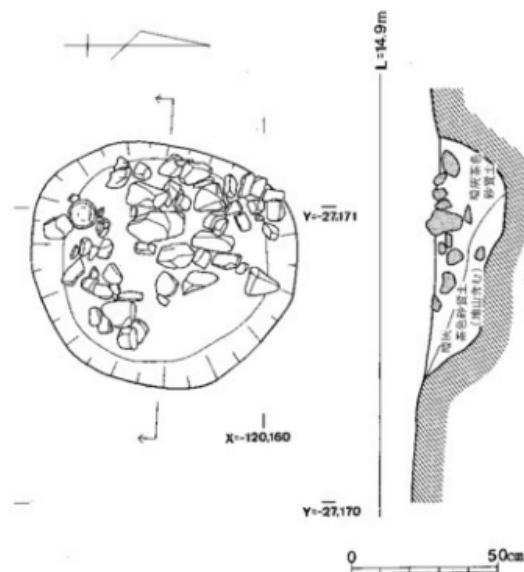
表面に小石が集積した土壌である。直径1.6mのほぼ円形で、深さ0.4mを測る。埋土は2層からなり、小石の礫群は、上層で検出された。また、この礫に混じって、土師器の皿が出土した。当土壌の掘られた目的は明らかでない。

検出面は、トレンチ北辺で露頭している段丘の上面である。当土壌の東半部は、当調査の第III期にあたる土壌SK 20737により、一部が削られている。

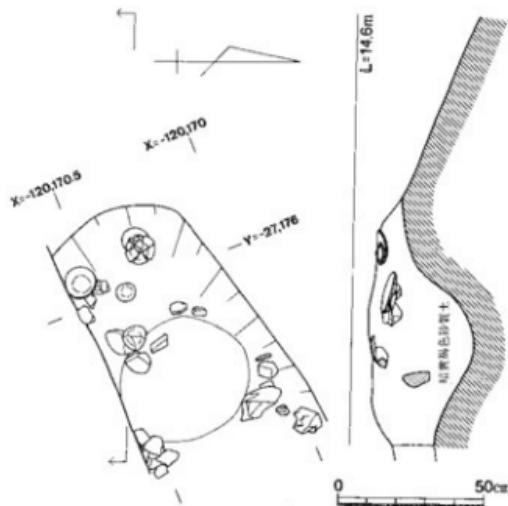
土壌SK 20743（第64図）

当遺構は、トレンチ南西端で、北半分が検出された土壌である。平面形は不正形な半円形で、南半分はトレンチ南辺より南に広がる。直径約1.3m前後の円形になると思われる。深さは、0.65mを測る。上面から、土師器の皿六枚が出土した。また、少量の礫が散乱し、東端は、礫の詰った溝状の遺構SX 20756により削られている。

その他の遺構 以上の他、浅い土壌SK 20752やピット等がある。ピット53では、小石の礫が一面に詰っていたが、その性格は明らかでない。



第63図 土壌SK 20742実測図 (1/20)

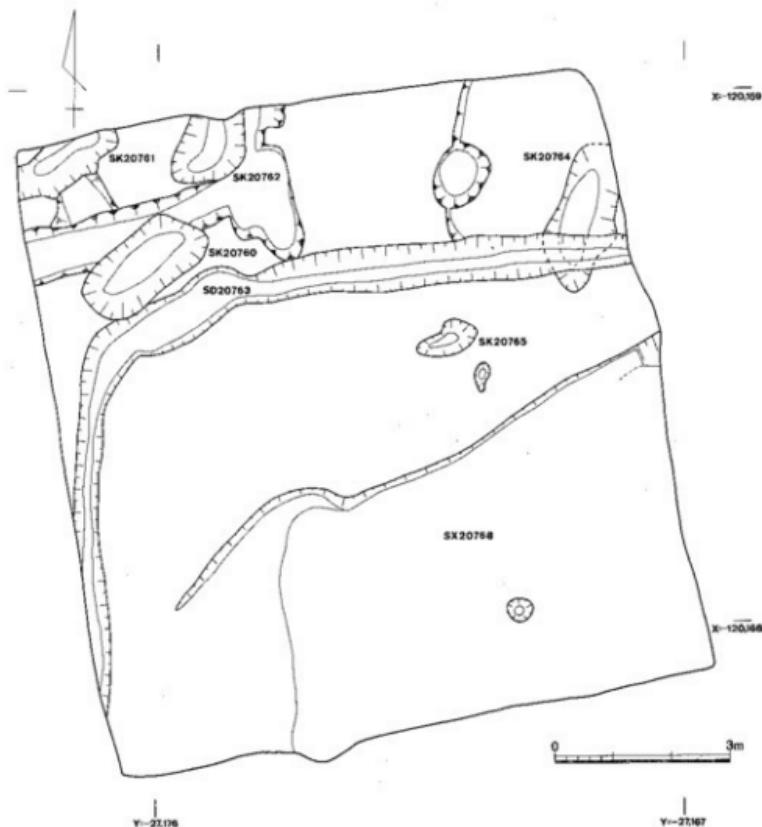


第64図 土壌SK 20743実測図 (1/20)

第Ⅰ期（第65図、図版34-(2)） 当期は、第Ⅱ期の整地盛土と造成盛土を除去した段階で検出された遺構面の時期である。遺構は、土壙や溝、ピットからなる。検出面の北辺部は段丘礫であるが、南へ傾斜する地形であり、南部は段丘礫上に堆積した砂層又は砂礫層からなる。この地層の変更する位置には、その変換線にそって、溝 S D 20763が巡っている。いずれも無遺物層で、当調査区の地山と判断した。

トレンチの北半部は、段丘礫を掘り込んだ土壙が主であり、南半部は、南東方向へ傾斜する落ち込みが大部分を占める。この落ち込みの上面からは、ピットを1個検出したが、意味不明である。

当時期は、2小期に分かれ、溝 S D 20763の掘られた時期が最も新しく、土壙 S K 20762の掘られた時期が最も古い。しかし、他の各遺構との前後関係は、出土遺物から見ても明らかでなく、また、遺物を出土しない遺構が多かった。



第65図 第Ⅰ期 遺構配置図 (1/100)

以下に、各遺構を概観する。

溝 S D 20763 当溝は、L字形に曲がるように掘られた溝で、地山層の土質変換線にそっている。埋土は1層からなり、平均的な深さに掘られている。その規模は、幅0.8m、深さ0.1mで、東西9m、南北7mを検出した。当溝は、さらに東と南へ伸びている。南北方向の部分はやや幅狭で、その幅約0.4mを測る。

土壙 S K 20760 当土壙は、トレンチ北部の段丘礫を掘られたものである。その平面形は、幅0.6m、長さ2.3mの長方形に近い形状で、深さ0.45mを測る。出土遺物はなく、掘られた目的は明らかでない。埋土は1層であった。

土壙 S K 20761 当遺構は、トレンチ北西端で検出された土壙で、不正形な形状であった。深さ0.4mを測り、平面形は長方形に近いが、北端と西端はトレンチ外に伸びるため、明らかでない。遺物の出土はなかった。

土壙 S K 20762 当土壙は、不整形な土壙で、北側がトレンチの外へ伸びる。深さ0.4mを測り、埋土は1層である。埋土からは、長岡京期の遺物が出土し、この時期に掘られたものと考えられる。当土壙の埋土は、土壙 S K 20760やS K 20761と同じ土質と色調であることから、この各土壙は、同時期のものと考えられる。検出面は、トレンチ北部にある段丘礫層上面である。

土壙 S K 20764 当遺構は、トレンチ北西部で検出された土壙である。平面形は不正形な長方形をなしている。南半分の一部は、溝 S D 20763に東西方向に上面を削られ、北西端はトレンチの東方へ伸びる。このため、正確な規模は明らかでないが、北東—南西方向に長く、その長さ2.5mを測り、北西—南東方向の幅1mを測るものと思われる。埋土は1層からなり深さ0.6mを測る。埋土の土質、色調とも土壙 S K 20762等と類似するが、遺物は皆無であった。

落ち込み S X 20768 当遺構は、トレンチの南東部に向って低くなる落ち込みである。工事施行者との協議で、新築本堂の基礎工事の関係上、深さに問題があるとし、完掘することができなかった。このため、当遺構の時期や、堆積土の状況等、細部において明らかにできなかった。従って、部分的に知り得たことを記し、近隣地での調査の資料としたい。

当落ち込みは、当調査トレンチ内で北肩と西肩が検出された。北肩は北東—南西方向にあり、西肩はほぼ南北方向にある。北肩の東方はトレンチ外に伸び、西肩の南方もトレンチ南辺より南に伸びる。北肩では、トレンチ東辺にかかる部分で一ヶ所サブトレンチを設け、傾斜の状況と土層の検出を行った。この結果、深さ約0.4mの落ち込みで、埋土は4層からなることを確認した。このうち、上から1層目と3層目は厚く、4層目は部分的であり、2層目は薄く堆積した炭混じりの灰層であった。このサブトレンチでは、遺物は得られなかった。西肩は、北肩ほど明瞭に落ち込まず、なだらかに東方に傾斜していた。当遺構の埋土は、当遺構面で検出されその他の遺構とは、質感や色調あるいは埋土の層序のいずれにおいても異質なものである。

以上、当調査においては、第Ⅰ期から第Ⅳ期にわたって、層位的に検出された。これらの各時期の遺構は、光林寺以前と、光林寺関連遺構の2大別が可能であるが、その歴史的位置付けは後述することにし、以下に、各期の出土遺物について概観する。

4. 出 土 遺 物

当調査で出土した遺物には、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器の他、土製品、金属製品、ガラス製品、瓦がある。これらの遺物は、平安時代初期から前期、鎌倉時代末期、江戸時代前期～中期に相当するもので、江戸時代のものが最も多い。以下、時代別に概観する。

平安時代 土器の総出土量の4.1%が長岡京期のもので、須恵器が47.3%，土師器が52.7%をしめる。やや土師器の方が多い。須恵器には、壺A・B、環B蓋、鉢、壺等があり、壺類、甕類、壺類が、28～29%とほぼ同じ割合である。破損した際の破片の出る割合を考慮すると、壺類が最も多く、蓋の12.9%がこれに次ぐ。壺の中では、B類が多く、A類は少ない。土師器は、壺、皿類が最も多く、土師器破片総数の63.3%をしめ、中でも皿類が多い。壺類は出土しなかった。これに、甕、高壺が次ぎ、蓋の小片が少量ある。皿類は、外面全面ヘラ削りのc手法が最も多く、口縁ナデ、底面ヘラ削りのb手法が少量みられる。土師器には、白色の砂粒を多く含むものと、赤色粒子を多く含むものがある。この他、少量の製塙土器がある。

土壙 S K20762からは、土師器ミニチュア甕（第69図175）と、須恵器壺B（177）、壺B蓋（176）の他、土師器皿A、高壺等の小片があり、形態と手法から長岡京期と思われる。近世の遺構や包含層にも長岡京期の遺物があり、II期では7.4%，III期では2.1%，IV期では2.7%の割合で出土した。この他、長岡京期以後の軒平瓦が2点出土している（第68図93）。

鎌倉時代末期 土器の総出土量の4.9%が鎌倉のもので、そのうち土師器は8.8%，瓦器は91.2%をしめ、その他、須恵器や陶器が少量ある。土師器のうち、皿が最も多く58.6%をしめ、他に少量の紅壺がある。瓦器は、壺、皿類が最も多く（54.5%）、鍋、羽釜がこれに次ぐ。須恵器のほとんどは片口体で、他に壺、甕類が少量ある。これらのほとんどが版築層から出土したものである（第66図11）。同時期の単純包含層や遺構は検出されなかったが、近世の遺構や包含層から出土し、第II期では11.6%，III期では2.3%，IV期では5.4%をしめる。

江戸時代前期 第II期の遺構及び包含層から出土した遺物である。この時期に相当する遺物は、第69図153～174に示した第II期の遺構出土のものがある。まとまって遺物が出土した遺構には、土壙 S K20743、S K20736と土壙墓 S K20758がある。ほとんどが土師器の皿である。同時期の遺構、包含層出土遺物総破片数中、80.1%が同時期の遺物であり、そのうち土師器皿は、98.8%をしめる。他に、染付や青磁、唐津焼系陶器の小片が少量ある。土師器皿は、大小2種がある。大皿は、口径9～10.4cm、器高2.3～2.4cmを測り、小皿は、口径7～7.8cm、器高1.6～1.8cmであり、法量にまとまりが認められる。いずれも、器壁は平均的で口縁部を丸くお

さめるものが多い。これらの特徴は、勝龍寺城址第III期皿A aとしたものと共通する特徴をもつ。その割合は、土師器皿のうち、74%をしめる。このことから、17世紀代から18世紀初頭と思われ、当調査の第III期遺構群の一時期=正徳三（1713）年より先行する時期に比定できる。この時期の土墳墓S K20738からは、六文銭として古寛永の六枚重ねと、御身刀一口が出土した。刀子柄部は紐で縛っており、周辺に木質を残す。寛永通寶は、未使用銭と思われる。この他、整地盛土最下層からは、唐銭や北宋銭の渡来銭又は、ビタ銭と呼ばれるものが数多く出土した。第67図202と203は剣刀と思われる刀子で、202は、鉄製の刀身に青銅製の鞘を被せている。203は銀製と思われる。

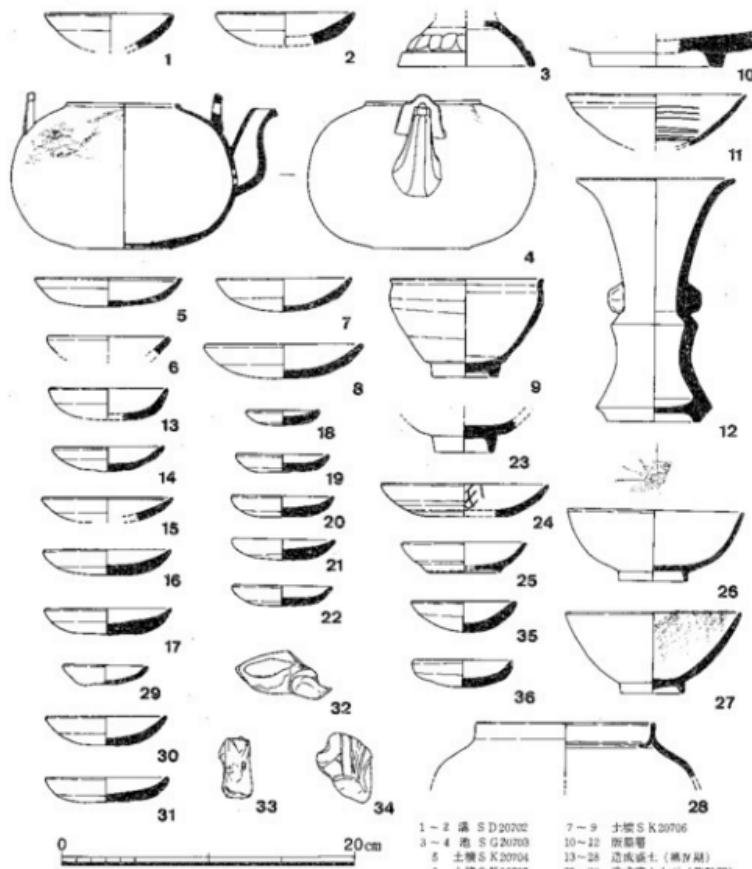
江戸時代中期前半 第III期の遺構及び包含層から出土した遺物で、正徳三年三月十四日の墨書をもつ陶器と相前後する時期に捕えられる。同時期の遺構や包含層出土遺物総数の75.4%が正徳三年前後と思われるもので、そのうち土師器の皿が96.9%をしめ、他は国産陶磁器類であった。土師器の皿は大中小の三種があり、形態からは大きく4形態に分類できる。勝龍寺城の形態分類に対比すると、A、H、K、Oの4形態に相当する。A形態はさらにa、b、cに小区分に相当するものがある。そのうち、A aに分類したもののが最も多く、81.6%の割合をしめる。しかし、A bに分類したものが多くなっており、13.8%の数値を示す。

陶磁器類は、伊万里焼系の染付や青磁が1.2%，瀬戸焼系の陶器が0.9%，唐津焼系の陶器が0.3%の他、備前、信楽、京焼、丹波等が少量ある。これらの陶磁器には、骨壺として使用されたものがある。骨壺は、瀬戸焼系の小壺が5個体及び蓋が1個あり、最も多い。次に、伊万里焼系の白磁蓋付壺、染付の小壺、染付の壺蓋の、合計3個体分がある。その他、丹波焼の皿耳壺、信楽焼の壺、土師質の有蓋骨壺の大型品や刷毛目唐津の蓋物、土師質の施釉小壺がある。

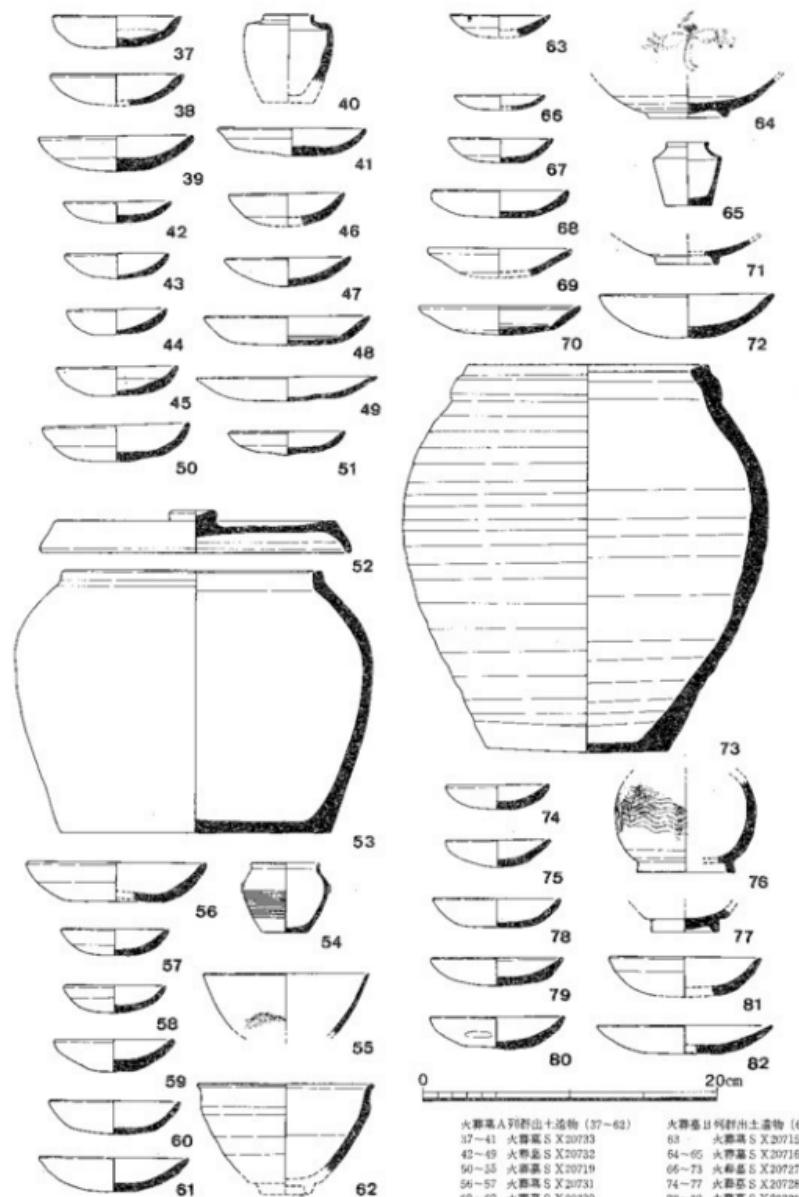
土器類の他、火葬墓から、六文銭として副葬された寛永通寶が出土した他、北宋銭等が出土した。六文銭として火葬骨とともに埋納された寛永通寶は、いずれも焼成を受けており、亡骸とともに茶毘に付されたものであり、六枚が融着している。火葬墓中から出土した他の古貨幣は、散乱した出土状況であり、焼成を受けた痕跡はない。火葬墓S X20709出土の寛永通寶は、古寛永であるが、他の寛永通寶は新寛永である。第76図の180と182は、通の「」と永字に特徴があり、背「文」字錢の同範銭であることが確認できた。これらの新寛永の出土した遺構や層は、寛文八（1668）年以降であるといえる。火葬墓S X20708、12、15、16、17、28、29、31、32、33、37、38の各々からは、鉄釘や金具類が出土した。S X20715出土の釘を見ると一寸五分（4.5cm）、一寸二分（3.6cm）、一寸（3cm）、八分（2.4cm）、七分（2.1cm）、六分（1.8cm）、五分（1.5cm）、四分（1.2cm）、三分（0.9cm）の各寸法のものがある。このうち五分釘が最も多く、七分、三分と続く。また、その形態は、頭部と身部が同じ厚さで作られ、幅は先端から頭部に向って広がり、上端を折り曲げることによって頭部をつくり出しているもの（A形態）と、頭部を扁平に作り、身部と同一面上に円形に作り出しているもの（B形態）と、身部に帽子状

に円形の頭部をつくり出したもの（C形態）の3種がある。A形態の釘は、六分釘に一点見られるが、一般的でない。B形態のものは、最も多く、大型の釘から、小型の釘まで各種があり、三分釘は全てこの形態のものである。C形態の釘は、一寸、五分、四分があり、装飾効果を意図して使用されたものと思われる。

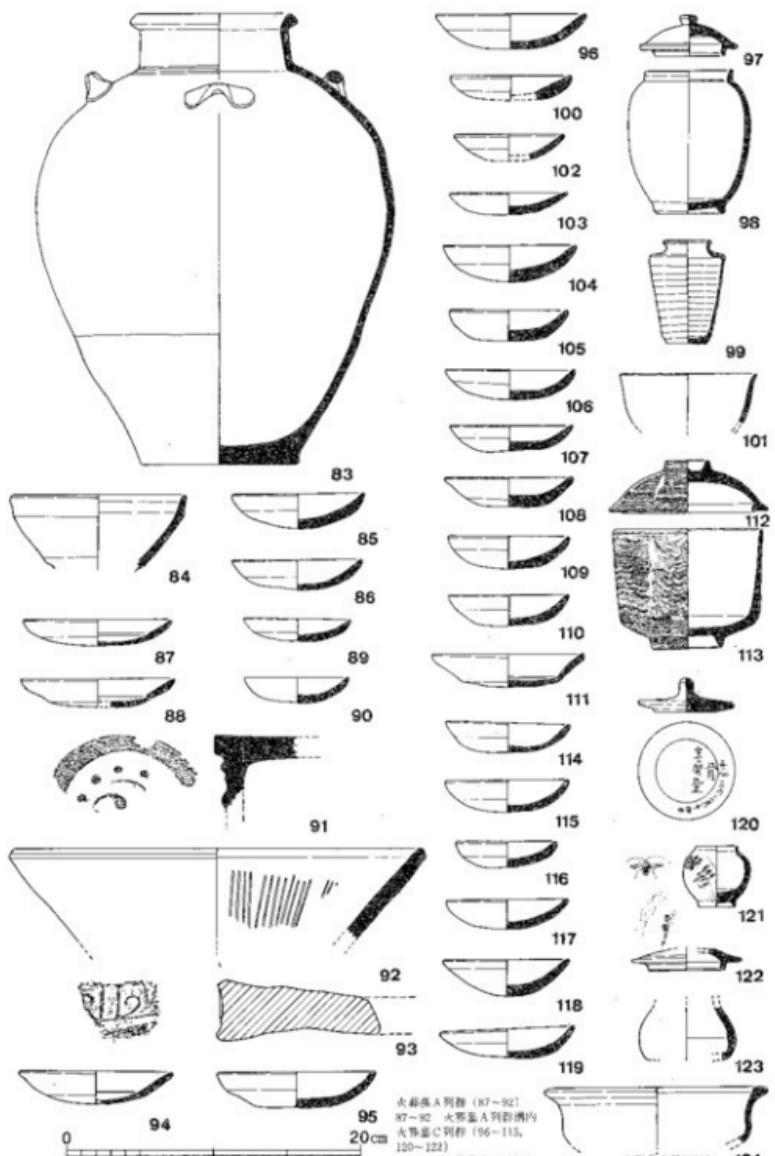
江戸時代中期後半 第IV期の遺構や包含層から出土した遺物である。同時期の遺構や層から出土した遺物のうち、92.0%が近世の遺物であり、そのうち94.5%が土師器皿であった。土師器の皿は、勝龍寺城での分類に従えば、A類とK類があり、A類が97.9%をしめている。A類の小分類では、a類が26.5%、b類が71.4%であり、当調査のII期、III期の割合と逆転している。また、A b類は、硬質で陶質に焼き上がったものが多く、焼成時に炭素の付着した製品は見られない。陶磁器類では、染付等を含む磁器が、同時期の遺物の2.8%である他は、瀬戸、唐津、信楽、備前、京焼、丹波等が少量ある。



第66図 第IV期出土遺物実測図 (3)

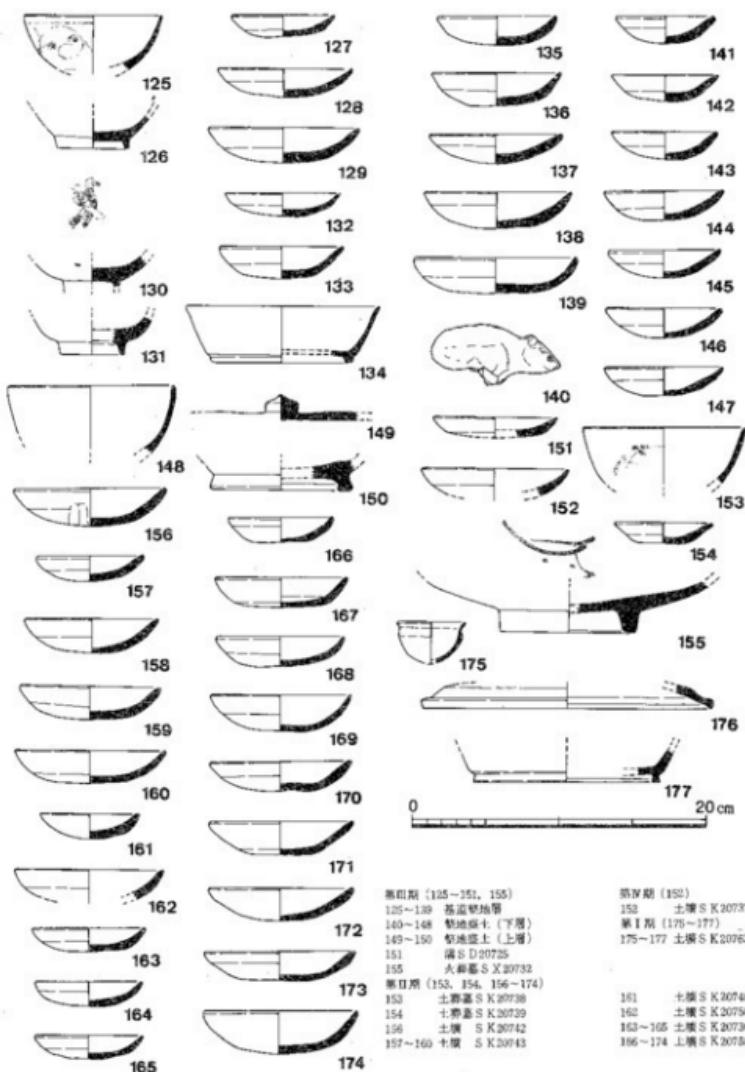


第67図 第III期(火葬墓)出土遺物実測図1(3/4)

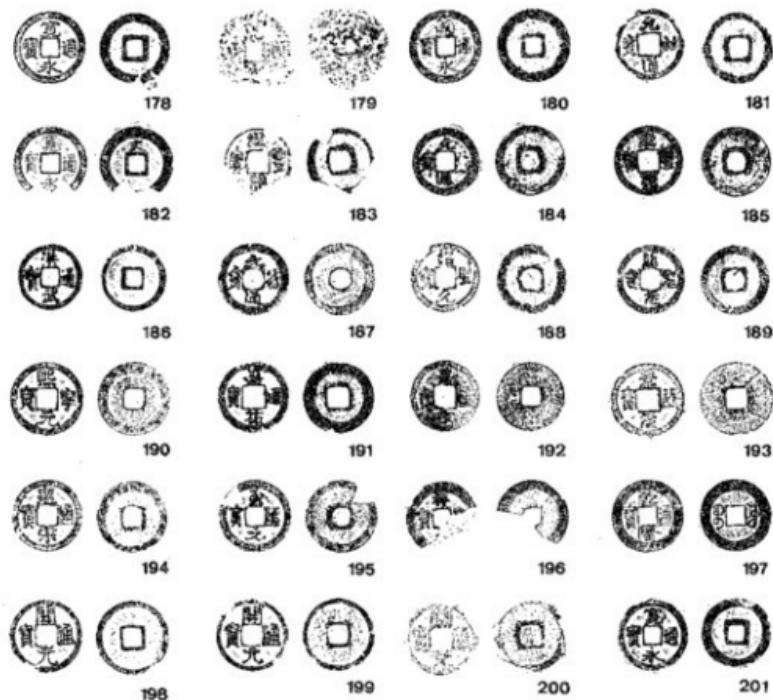


大墓墓室A列群 (83~86, 95~98, 123~124)
83~86 大墓墓 S X20717
93~95, 123~124 大墓墓室B列群構内

火葬墓 A 列群 (87~92)
87~92 火葬墓 A 列群構内
火葬墓 C 列群 (96~115,
120~122)
96~99 火葬墓 S X20726
100~101 火葬墓 S X20718
102 大墓墓 S X20711
103 大墓墓 S X20710
104 大墓墓 S X20709
105~113 大墓墓 S X20708
114~115 大墓墓 S X20707
120~122 その他



第69図 第I・II期造構・第III期整地層出土遺物実測図(34)



第70図 第II期以降出土古貨幣・刀子

付表-8 出土遺物観察表

時期	器種	法 印 口徑(cm)	重 量 表面(cm)	番号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	新土・成 土	色 調	土器番号
IV	国 産 磁 器 期	上	7.8	9.3	34	○丸型の体部に、両どりをした口部を付す。耳は三山形。 ○口取付位置には、五枚花弁状に六個の流出孔をつる。 ○底部は、やや凹面状の平底。	○全面に丁寧なナデ。 ○内面全面と外面上部4／5まで施釉。 ○底部内面に、ハリ穴えのきの円割内基が残る。 ○口縁部は砂ハギ。 ○内外側の施釉には、貫入が見られる。 ○向裏面に、深青色と淡茶褐色の薄い色で松の絵を配する。	○紐器の良質な粘土で焼成。 施釉は少し青味がかった淡灰黄色。	4 種固 66
		(青 (生花) 地 器)	(11.0)	(13.4)	156	○頗る広い底部から、屈曲して外薄しながら伏まる体部を持つ。そのため、体部と底部の境が明瞭な棱線で区切られている。体部の最大径は、この棱線にあり、最小径は、体部下部1／3にある。体部の上端は再び屈曲し、大きく外反して広がる。このため、口縁部と体部の境は明瞭な棱線によって分かれている。口縁部と底部の境は、底部に近づくにつれて、一対の波状浮文を配す。 ○底部は輪高台。	○底部以外全面ナデ。 ○底部は削り出し輪状高台。 ○口縁部上半から外面全面に厚い白土を施し、高台側地面のみ砂はぎ。 ○口縁部内面下半にシボリ目有。 ○高台接地面に耐火砂が一部に付着。	○精良な施釉で焼成。 施釉は青色但し、高台部分は複数白色に施釉。施釉は青灰色。	12 種固 66
		否 (青 地 器)	(15.2)	(5.0)	108	○口縁部から底面部にかけて、S字型に曲がる筋条をなし、口縁部、底部、底部の境がない。 ○口縁部は、外反した先端部を内側へ巻き込むようにして肥厚させ、上方に幅広い面をつくりだす。 ○底部欠損するか三足か。	○内外面全面ナデ。口縁部と体部の間に、口縁部巻き込みの際の隙の僅いナデ。 ○施釉は、口縁内面から外面全面に施す。	○極度に良質な粘土。 施釉は淡灰白色。	124 種固 68
III	国 産 磁 器 期	否 (輪 付)	(5.2)	(2.5)	168	○受け部が口縁部より水平に外へ傾り出す。 ○口縁部は、やや内彎気味で輪高台状にくり出す。 ○大井部は、肩平であるが、97は丸底を有す。 ○97は、つまみを持ち、その形状は、上端に平坦な舟形の耳を持ち、上部1／2の位置に最大径のある斜出変形である。 ○168は、大井部を丸くぐつ、つまみを持つと思われる。 ○口縁部は、122の場合内削する明瞭な面を有つが、97は、やや丸底を持つ。 ○受け部端面は、122の場合丸くおきめ、97の場合明瞭な面を持つ。 ○97は、98の妻とセット。	○口縁部内外面と、受け部はナデ。 ○天井部内外面はカキ目。 ○つまみはヘラ削りか。 ○123は、呂側で受け部と天井部の間に輪縫を一条巡らし受け部上面に施書き文を描く。大井部の文様は不明。	○極度で良質。 施釉は白色。	123 種固 68
		(白 地 器)	4.8	2.8	29	○受け部が口縁部より水平に外へ傾り出す。 ○口縁部は、やや内彎気味で輪高台状にくり出す。 ○受け部端面は、122の場合丸くおきめ、97の場合明瞭な面を持つ。	○口縁部内外面と、受け部はナデ。	○極度で良質。 施釉は白色。	44 (2) 97 種固 68 國版 40
		A	6.0	9.2	30	○輪脚圓形の体部に、輪高台を持つ。 ○口縁部は、体部から屈曲してやや外反気味に斜く直立する。 ○口縁部は、ほぼ水平な面を持つ。 ○輪高台の接地面は、平坦面でなく、陥っている。	○底部以外は、全面ナデ。 ○底面外周は、ヘラ削りのまま。 ○ねじは、口縁部外周中位から底面までと内面に施すが、高台接地面は砂ハギしている。内面の施釉は浅く、少數の墨を入れて、体部をこらすが。	○未地はやや粗く施釉があまり、少しお質。	98 種固 68 國版 40
	器 壹	B	3.0	4.2	6	○瓶蓋形をした短深窓の小形で、横筋の体部に、屈曲して粗く直立する口縁部と、輪高台がつく。 ○最大径は、体部上半にある。 ○口縁部は、平坦面を持つ。 ○輪高台の接地面は、丸くおきめる。	○全面ナデ。 ○体部には、呂構で、草花文と飛翔文を施す。その位置は文様の隙にある。 ○ねじは、口縁部内面を除いて、全面に施すが、口縁部端面と高台接地面には施さない。 ○体部内面は、稍墨を入れて、部分をこらし施釉する。	○極度で良質。 施釉は白色。	121 種固 68 國版 39
		C			110	○竈の底部片であり、詳細不明。 ○内部熱融であることから、鉛融液のようなるものかと思われる。 ○輪高台の接地面は、尖る。	○底部内面中央部にヘラ削り痕を残す。 ○高台内外面は、ヘラ削りのまま。 ○高台接地面は、砂ハギ。	○極度で良質。 施釉は白色。	126 種固 69

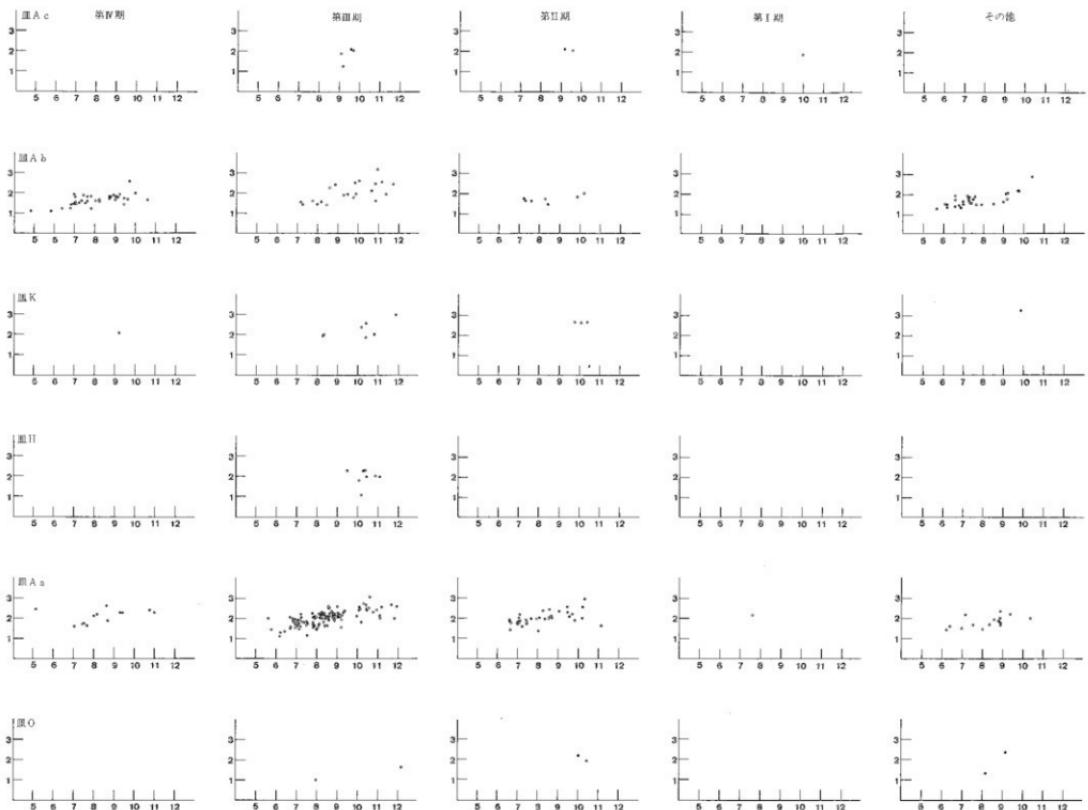
時間	器種	器形	法 面 寸 寸 (cm)	底 面 寸 寸 (cm)	実測 番号	形態の特徴	成形・調整の特徴	粘土・焼 成地は ○硬質 ○良好	色調	土番号
IV 期	陶				100	○底部の高台部分のみで、上部は詳細不明。 ○高台は、輪高台でやや深い。	○内部ナデ、高台部分は、へラ削りのまま。 ○剣は全面に施し、高台接地面のみ鉛ハギ。 ○内面見込みと高台接地面部分に、耐火砂の付着。 ○高台外側面と体部外面に、赤褐色による擦が見られる。	○精良 ○硬質 ○良好	赤地は 白色 釉薬は 灰色	23 神園 66
III 期	陶	A (11.2) (5.0)	175			○内溝する口縁を持つ。 ○端部は丸くおさめる。 ○いわゆるも部を欠き、詳細不明。他の破片に高台接地面を輪高台しているものがある。 ○125は小ぶり。	○内外面ナデ。 ○外面に凸溝で装飾するものが多く、唐草文(125)や山文(15)を描くものの他、日文文様がある。 ○高台接地面に、耐火砂の付着がある。	○精良 ○硬質 ○良好	赤地は 緑色 釉薬は 白色	55 神園 44-(2)
		(9.3) (4.5)	109						赤地は 白色 釉薬は 緑色	125 神園 44-(2)
II 期	陶				166	○底部片で、全体の形状は不明。 ○輪高台を有すが、接地面欠損。	○体削りや及び外面はナデ、上半は欠損。 ○輪高台内の底部は、へラ削り削り取った。 ○内外面全面に施錆。 ○表面による装饰が、内面見込みと、体部外面、高台外面にみられる。	○やや粗 ○気泡 ○釉は ○良好	赤地は 灰白色 釉薬は 青白色	136 神園 69 国版 44-(2)
					33	○内溝な味の大きく聞く形狀。 ○口縁を欠き、上半は不明。 ○高台は、輪高台で、接地面は平坦。	○外面から高台部までへラ削り。 ○内面見込みがわずかに一段削り、口縫と内面とは、板様による唐草文文様の装飾がある。 ○内面見込みに、外羽による同様化した文様が描かれている。 ○物は内外全面に施され、高台接地面のみ鉛ハギ。 ○赤褐色内面に耐火砂が付着。	○精良 ○硬質 ○良好	赤地は 白色 釉薬は 青白釉 色	64 神園 67 国版 44-(2)
IV 期	陶	A (11.0) (5.0)	143			○内溝する口縁を持つもので、凹窓病と変化ない。 ○底部欠損。	○内外面ナデ。 ○外面に、凸溝による文様を有す破片のため意匠不明。	○精良 ○硬質 ○良好	赤地は 白色 釉薬は 青白色	153 神園 65 国版 44-(2)
		A (12.2) (4.8)	160			○球形の丸い器体に、輪高台がつく。 ○高台は、直立して比較的高い外側面、接地面、内側面の各面が直線的な面をなし、各面の接縫が傾斜的に角ばる。 ○口縁は丸くおさめる。	○体部下端の高台と接する部分及び、高台内底面の中央部のみへラ削りを残し、他は全面ナデ。 ○端は、内面と外面のナデ調整部分に地錆。 ○施墨の貫入芝し。 ○高台内底面に「富永」の印刷あり。 ○内面見込みより前に、山水の具象化した文様が描く。	○精良 ○硬質 ○良好	赤地は 灰白色 釉薬は 淡灰釉 色	26 神園 66 国版 38
I 期	陶	C 12.0 5.5	149			○やや内溝氣味に膨出狀に広がる深い器体のいわゆる井戸茶碗。 ○底部には、輪状高台を削り出す。 ○高台は、断面三角形に近く、接地面は、傾斜性的一面である。 ○高台内の底部は、肉厚。 ○口縁は丸くおさめる。	○体部外縁の上部1/4と内面全面をナデ。 ○体部外縁の下部3/4以下を削りまでへラ削り。 ○端は、内面全面と体部外縁と施錆し、高台にはかからない。 ○物は某釉系である。 ○口縁の一回り、端部から体間にかけて井戸による斜筋文様が描かれている。	○粗底質 ○粘土 ○硬質 ○良好	赤地は 灰白色 釉薬は 法螺灰 色	27 神園 66 国版 38
		D 10.8 6.7	46			○やや内溝氣味に広がる体部から、少しつまつて外にする口縁を有するもので、いわゆる天目茶碗である。 ○体部から口縁部への移行は漸次的で、境は明瞭でない。 ○体部と底部の境は屈曲し、波線によって明瞭である。 ○底部には、輪高台を削り出しが高台の裏張りが深く、底面が内側になっている。 ○脚口無。	○高台内面から体部内面まで全向ナデ。 ○物は、内面全面と、体部下半3/4まで施錆する。 ○釉薬は黒釉系。	○精良 ○硬質 ○良好	赤地は 灰白色 釉薬は 黒茶色	9 神園 65 国版 38

時期	器種	器形	法 量 口径(a) 腹直(b)	実 量 腹直(c)	実 割 番号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 色 相	色 調	土器番号	
IV 期 期	國 皿	A	(11.4)	(2.2)	162	○平底に、ゆるやかに内湾しながら広がる形態である。 ○口縁部は丸くおさめる。 ○底部と口縁部の境は、漸次的で不明瞭。	○内面から口縁端部外側までナダ。 ○口縁部下半から底部につけてはヘラ削り。 ○内外面全面に輪を施す。 ○口縁部の一回に、ヘラ搔き、斜格子文を配す。	○土焼成 ○あまい 色 ○軟質	24 神國 66		
		B	(8.8)	(2.1)	41	○ゆるやかに内湾しながら広がる口縁に、斬面三角形に近い高台を付す扁平な形態である。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○潮戸底。	○内面から口縁端部外側までナダ、以下をヘラ削りする。 ○高台内底部外側には、井干形のトチノ脚を観す。 ○内面から、高台内面まで全面に施輪。	良質 硬質 良好	25 神國 66		
		C			165	○盤とでも言ふべき大皿。 ○器壁の厚い製品で輪状高台部分の破片。 ○唐津窯。	○内面に砂附土目を残す。 ○155は、二種唐津の大皿と思われ、一部に緑色釉がかかる。 ○外面部へラ削り、内面ナダ。	○良質 ○硬質 ○良好	10 神國 66 国版 44-(2)		
	產 有 蓋				91					155 神國 66	
			9.0	3.6	2	○風呂の天井部に輪高台状のつまみがつく。 ○天井部と受け部の境は不明瞭で、受け部下端は平坦面。 ○口縁部は、受け部より内あり、短かく鋭く外反して下方に向く。 ○つまみの端部受け部外縁、口縁端部とも丸くおさめる。 ○蓋付碗(13)とセット。 ○唐津窯。	○天井部内面から受け部外側までナダ。天井部から、つまみ内面までへラ削りか。 ○口縁部及び受け部下端を除いて全面施輪。 ○受け部下端には、耐火砂が付着。 ○輪面は内面鉄釉のみで、外面は鉄釉の上に刷毛目文を施す。	○良質 ○硬質 ○良好	122 神國 66 国版 40		
	陶 碗 付 蓋	A	11.2	8.0	3	○内湾気味の底部を屈曲して直立する体部を持つ。 ○底部には、輪状高台を付す。 ○口縁部は丸くおさめる。 ○唐津窯。	○全面ナデか。 ○全面に雅輪を施す。 ○輪の内容は蓋(12)と同様でいわゆる刷毛目唐津。	同上	同上	113 神國 66 国版 40	
		B	11.4	8.7	151	○内湾してわずかに広がる体部と、輪状高台がなる。 ○口縁部は丸くおさめる。 ○底部と体部の境は、屈曲しており、明瞭である。	○内面全面から、体部下方1/4までナデ以下をへラ削り。 ○輪面は内底と体部外側までかかり底部及び高台には施輪しない。	○良質 ○硬質 ○良好	148 神國 69 国版 38		
		(12.0)	(8.0)	38	○特徴は、9と同様。	○特徴は9と同様。	○良質 ○硬質 ○良好	62 神國 67 国版 38			
	器 碗	D			40	○体部以上を丸くが、筒形態である。	○底部片。 ○輪状高台接地面に底部糸切痕を残す。	○良質 ○硬質 ○良好	77 神國 57 国版 44-(2)		
		D	(12.0)	(5.7)	37	○高台が輪高台とならず、平面か凹レンズ状になる。他のDと同じ。	○Dと同じ特徴。 ○但し、高台部分等の無施輪部分に輪面を施す。	○良質 ○硬質 ○良好	84 神國 68 国版 38		
		B	6.6	2.4	77	○平底な、円錐状の形態で、内柱状のつまみをつける。 ○内面は中央で平底。	○底面に輪糸切痕を残す底面を残して全面ナデ。 ○天井部のみ施輪。 ○「正徳三年巳三月十四日 全鄉比丘……」と墨書きあり。	○良質 ○硬質 ○良好	120 神國 68 国版 38		

時期	器種	器形	法 量		実測 番号	形態の特徴	成形・調整の特徴	胎土・焼 色	土器番号	
			口径(cm)	高さ(cm)						
III 國 產 期	D	E	3.4	7.0	4	○平底にて、圓錐台の体部をもち、外反する口縁部を付す小さな器である。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○人(99)小(46)の2種があり、梅状の体部をもつもの(40)もある。	○体部にロクロ目を残し、底部外面には、回転未切り瓶を残す。 ○大型品は、口縁内面から、体部下半1/4まで施釉し、小型品は内面全面と体部下半1/5まで釉を施す。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は 淡灰黃 色 釉質は 黑茶色 から淡 黃茶色	99 神國 68 65 67 40 神國 67 国版 39
			3.3	6.9						
			3.0	4.3	5					
			(3.5)	(5.2)	171					
	F	G			160	○体部片であり口縁、底部は不明。 ○最大径を体部下端にもち頸部がつまる。	○内外面ナデ。 ○釉面は、内面全面と、体部下端まで。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は 淡灰黃 色 釉面は 黒褐色 44-(2)	
			4.6	4.9	35	○最大径を体部上部に置く平底窓で、口縁が短く外反する。 ○一对の円形浮文を有す。	○体部下半にカキメと施す。 ○他は内外面ナデ。 ○底面には、回転未切瓶を残す。 ○釉面は、体部上端の肩部に施釉する。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は 黄褐色 釉面は カキメ	
	H	I				○平底からロクロ目を残しながら馬蹄型立形の体部をつくり出し、頸部に幅広い凸帯を設けて短かい口縁部を付している。 ○口縁端部には、細広い齒をつくり出す。 ○器全体に、石ハゼが見られる。	○内外面全面ナデ、底部外面も丁寧なナデ。 ○体部下半1/6より下部がそれより上部の色と異っており、形状変化の感と思われる。 ○内面には、水漏れ防止用の釉を施す。	○珪石を 多く含み 石ハゼが 多い ○良好	素地は 赤褐色 釉面は 灰白色 73 神國 67 国版 40	
			9.6	30.7	99	○頸部側立形の底部に、直立する頂部と外反する口縁部を持つ平底の器。 ○肩部に2対の紐掛け把手を持つ四耳器。 ○体部上端の頸部との境近くに二重の沈臼を施す。	○粘土紐巻き上げによる2-3段階積み成形。 ○内外面全面ナデ。 ○口縁端部内面から、体部下半1/3まで施釉。	○珪石、 瓦石チー ト等をさ む ○硬質 ○良好	素地は 赤茶褐色 釉面は 黄褐色 83 神國 68 国版 40	
VI 期	器	J			43	○底部片、輪高台部分。 ○高台の各面は手揉で各面の接縫は鋭利。	○内面ナデ、外面は高台近くまでナデ、以下へラ削り。	○良質 ○硬質 ○良好	素地は 黄褐色 釉面は 白色 71 神國 67	
III 期	III 師 器	壺 蓋用 査	21.0	2.9	123	○水平な天井部に屈曲させて口縁部をつくり出す。 ○つまみを有し、上面が四面状に形づくる。 ○有蓋型53とセット。	○内外面全面ナデ。	○石英、 チヤ ト、 石密等 を含む ○やや放 射状 ○良好	黄褐色 52 神國 67 国版 39	
		有 蓋 壺	17.2	17.9	124	○底広い平底にて、最大径を上部にもつて体部を有し、内側してつまみを有する所を上方に屈曲させて口縁部をつくり出す。 ○口縁部は堅かく、端部には平底面をつくる。	○内面は網毛目成形の後ナデ調整。 ○底面と体部外側は丁寧なナデ。	同上	同上 53 神國 67 国版 39	

付表一 9 土師器皿の形態分類表

A a 類			A b 類	L 類	H 類
2	74	135	5	72	48
7	75	136	15	96	70
8	78	137	16	118	87
13	79	138	17		88
14	80	139	18		94
29	81	141	19		111
30	82	142	20		
31	86	143	21		
35	90	144	22		
37	95	145	36		
38	100	146	41		
39	103	154	42		
43	104	156	50		
44	105	157	51		
46	106	158	85		
47	107	159	89		
56	108	160	128		
57	109	161	151		
58	115	166	163		
59	116	168	164		
60	117	169	165		
61	119	170			
63	127	172			
66	129	173			
67	133	174			

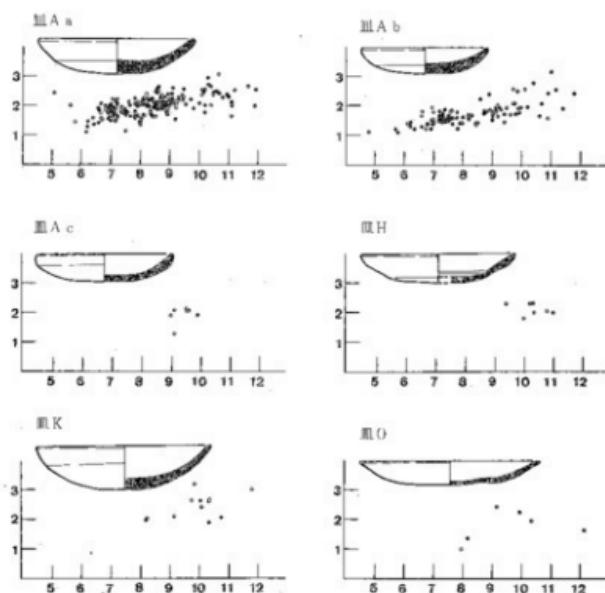


第71図 土器の形態別・時期別法量分布図

表-10古貨幣の出土遺構表

番号	錢 貨	出 土 遺 構	G (mm)	N (mm)	T (mm)	g (mm)	n (mm)	t (mm)
179	6枚重なっている 寛永通寶	SS29						
181	元祐通寶	SS32中央部	(25)	20	<9>	9	7	<8>
180	裏に「文」有 寛永通寶	SS32北西肩	25	19	10	8	6	9
178	6枚重なっている 寛永通寶	SK20738	25	19.5	10	7	5.5	<9>
193	景祐元寶	整地盛上層(II期)	(26)	20.5	<9.5>	9	7	8.5
187	穴が八角形 元符通寶	整地盛上層(II期)	25	18	9	8	6.5	9
190	熙寧通寶	整地盛上層(II期)	25.5	20	9.5	8.5	6.5	9
196	祥□□寶	整地盛上層(II期)	(25.5)	(17.5)	(10)	(7.5)	(5.5)	(9.5)
199	開元通寶	整地盛上層(II期)	25.5	21.5	9.4	8.5	7	<8.5>
195	至道元寶	整地盛土最下層	25.5	19.3	9.6	8	6	<9.3>
198	開元通寶	整地盛土最下層	25.5	21	9.4	8	6.5	<8.5>
188	紹聖元寶	整地盛土最下層	24.5	18.5	8.6	<8>	<7>	<8>
189	紹聖元寶	整地盛土最下層	24	18.3	8.5	8	7	8.4
194	皇宋通寶	整地盛土最下層	25	19.8	9	8	7	8.6
200	開元通寶	整地盛土最下層	(26)	(21)	(9.5)	9	7	(8)
191	嘉祐通寶	整地盛土最下層	(25)	19	<9>	9	7	8
183	元豊通寶	整地盛土最下層	(23.5)	(20.8)	(8.5)	9	7	(7.5)
	祥符通寶	整地盛土最下層			(8.5)	(8)	(6.3)	(7.5)
182	裏に「文」有 寛永通寶	2区淡茶褐色砂質土	(25.5)	20	(10)	7.5	6	9.5
197	裏に文字有 乾隆通寶	表採	25	18	10	7.5	5.5	9
186	洪武通寶	工事中採集	23	18.5	8.6	7.5	5.5	8
184	元豊通寶	工事中採集	24	17.8	8.9	7.8	6	8
192	嘉祐通寶	工事中採集	25	20	9	9	7	8
185	元豊通寶か?	工事中採集	24.5	19.5	9	8.5	6.5	8.5

() は破損著しいもの <> は部分的に破損しているもの



第72図 土師器皿の形態別法量表

付表-11 土師器皿の形態別出土個数

A a	37(74.0)	111(73.0)	13(26.5)
A b	5(10.0)	21(13.8)	35(71.4)
A c	2(4.0)	4(2.6)	0
H	0	8(5.3)	0
K	3(6.0)	7(4.6)	1(2.0)
O	2(4.0)	2(1.3)	0
形態	(98)	(100.6)	(99.9)
時期	II期50個	III期152個	IV期49個

個数は%以上残存点数を示す。
()内は%を示す。

付表-12 出土土器總量

I 期	49 (10.0)	0	0
II 期	96 (8.2)	135 (11.6)	923 (79.5)
III 期	73 (2.1)	82 (2.4)	3282 (95.3)
IV 期	40 (2.7)	81 (5.4)	1385 (92.0)
合 計	258 (4.2)	298 (4.8)	5590 (91.0)
時期	古代	中世	近世

数字は絶破片点数を示す。
()内は、%を示す。

5 ま と め

今回の調査は、長岡京跡に関するものはもとより、神足遺跡や勝龍寺城に関する遺構、遺物の存在、ならびに、永井氏縁の光林寺に関する遺構、遺物の検出、出土が期待された。その詳細については、今見てきた通り、江戸時代までの遺物が大量に出土し、遺構は、江戸時代のものが主であった。

これらの遺構は層位的に検出され、第Ⅰ期から第Ⅳ期にわたる変遷が認められた。出土遺物から各期の年代を求めるに、第Ⅰ期は長岡京期とそれ以後、第Ⅱ期は江戸時代寛永年間以後、第Ⅲ期は、江戸時代正徳三（1713）年前後、第Ⅳ期は、18世紀後半以後と見ることができる。各時期の遺構及び遺物包含層を表にまとめると付表-13になり、その変遷を平面図で表わしたのが、第73図である。今少し、この変遷を掘り下げ、周辺地の遺跡や文献に現われた史跡及び歴史の沿革に対比してみることにする。

当調査地の北西に隣接して、神足遺跡がある。この遺跡は、弥生時代と古墳時代を中心とする幅広い時代の複合遺跡であることは、はじめの項で紹介した。この遺跡が当調査地まで広がっているか否かを明らかにすることは、当調査の目的のひとつであった。しかし、当調査では、遺構、遺物とも長岡京に関連するものが最も古く、それ以前のものは全く検出されなかった。このことから、遺跡の範囲外であろうとの感が強い。ただし、調査トレンチの大部分は、近世の切土や遺構によって削られており、断言するには及ばなかった。

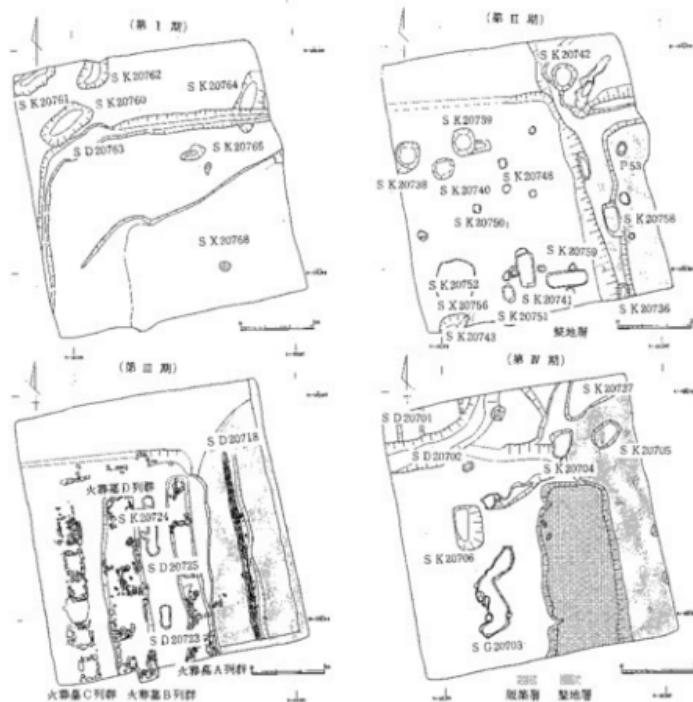
長岡京に関しては、右京六条一坊十二町の宅地部分の推定位置にある。この時期のものは、第Ⅰ期の面で検出された。しかし、トレンチ北辺部の段丘疊層の高まり部分から、数基の土壙が確認されたにとどまり、遺構の語るところは少ない。遺物は江戸時代の各層に混じって出土し、中でも第Ⅳ期の版築層から多く出土した。第Ⅰ期同一面で検出された他の遺構は、いずれも長岡京期より新しく、特に溝S D 20763や落ち込みS X 20768及びその上面から検出された遺構は、最も新期のものである。

鎌倉時代の遺構・遺物は、今日までの神足遺跡に関する調査で、当調査地周辺にまで広がっていることは、充分に考えられることであった。しかし、当時期の遺構も、近世の遺構等による搅乱が著しく、検出されなかった。ただ、整地盛土（下層）の茶褐色砂質土層から、江戸時代の遺物に混じって、多くの土器類が出土した。このことから、当調査地にも、中世遺跡が広がっていたことは確実と言える。

室町時代には、当調査地周辺を本拠とした神足左近次郎信朝（友）が活躍する。また、南方に位置する勝龍寺城本丸が、細川頼春・師氏によって、暦応二年（1339）年に築城されたという。当調査では、この時期の遺物や遺構はなく、神足氏や初期の勝龍寺城に関連する成果は得られなかった。

付表—13檢出遺構變遷表

時代	平安時代長岡京期	江戸時代前期～中期	江戸時代中期	江戸時代中期以後
時期	8世紀末以後	17世紀前半～18世紀前半	18世紀後半	18世紀後半以後
遺構面	第一期	第二期	第三期	第四期
遺構	土壙 S K20760	土葬 墓 S K20738	火葬墓 A列群	池溝 S G20703
	" S K20761	" S K20739	" B列群	" S D20701
	" S K20762	" S K20740	" C列群	" S D20702
	" S K20764	" S K20741	" D列群	土壙 S K20704
	" S K20765	" S K20758	溝 S D20718	" S K20705
	溝 S D20763	" S K20759	" S D20723	" S K20706
	落ち込み S X20768	土壙 S K20736	" S D20725	
	ピット	" S K20742	土壙 S K20724	
		" S K20743	墓道	
		" S K20751		
包含層		" S K20752		
		ピット		
整地盛土	整地盛土 " (最下層) 造成盛土 (B)	墓道整地層 整地盛土	版築層 整地盛土 造成盛土 (A)	



第73図 検出遺構変遷図

付表一四 德勝寺・光林寺略歴

西暦年	年号年	徳勝寺略歴	光林寺略歴	備考	遺構検出面
1471年	文明二年			野田氏、搦手北口攻撃 (第1期の面の一部か?)	
1486年	文明二年		○滋林開拓	(元亀二年)1571年両寺とも勝龍寺城内に含まれる。	
1493年	明応二年	○建立			
1595年	慶長十年	○神足明神御旅所文義故…除地			
1619年	天和五年		○光林寺開創(往古は惠林院)		
1624年	寛永年中		○徳勝寺へ僧地移築	1653年水井直清、勝龍寺城主となる	
1640年	寛永十七年		○水井溝上30人 「駿遊混築園」寄進	1649年、直清、高権へ	○第Ⅲ期の面 土葬墓
1661年	寛永年中	○光林寺の末寺となり、真言宗から淨土宗へ改宗	○徳勝寺の本寺となる		
1673年	延寶七年	○石川主殿領、両寺を検地 2,276坪余	内光林寺の僧地284坪余		
1713年	正徳三年		○寺地間数吟味へ284坪余	○火葬骨泡墨書	○第Ⅲ期の面 火葬墓
1750年	寛延三年				
1752年	寶曆二年	○魔寺となる 1,978坪	○解体木造棟板 ○測量、杭打ち		○第Ⅳ期の面 泉水
1873年	明治六年	○墓地は村金所として残す	内光林寺の僧地 240坪		
1985年	昭和六十年	○本堂改築			○右京第207次調査

「野田泰忠軍忠状」によれば、応仁の乱に際し、文明二(1470)年、勝龍寺城搦手北口を攻めたと伝える。当調査地の南隣には、「西ノ口」の小字名が見られ、この付近に搦手北口があったとする説が有力である。今回の調査における第I期の面で検出された、落ち込みS X 20768には、薄く堆積した炭層があり、野田軍忠状の搦手北口攻撃に関連するのでは、という疑問を残す。しかし、この落ち込みは、一部の確認しかできず、遺物の有無も明らかでないことから、即断を避けたい。尚、同一面で検出された溝S D 20763は、落ち込みS X 20768の北肩及び西肩に、ほぼ平行して掘られており、同時期の、相互に関連し合う遺構である可能性がある。

元亀二(1571)年には、細川藤孝が勝龍寺城を改修し、外堀や土塁が当調査地の北側から西方にかけて築かれたと言われている。天正六(1598)年には、細川ガラシャで名高い明智光秀の娘玉が、藤孝のもとへ與入れしている。この勝龍寺城は、天正十(1582)年において、光秀が山崎合戦の拠点とした。桃山時代には、このように、勝龍寺城に関する記録が散見でき、当調査地は、土塁や外堀と本丸の間に位置し、城内にあったことが知られている。しかしこのような歴史的背景がありながら、今回の調査では、これらを裏付けるものは得られなかった。

当調査の第II期にあたる整地盛土(下層)にある黄色砂質土層からは、渡来鏡が多く出土し、これより新期の遺構等からの出土品に、仏具的内容あるいは、仏教的要素の強い遺物があり、墓地の存在等から、第II期以降は寺に関連する遺構と考えられる。

当調査対象地は、光林寺境内にあり、調査トレンチの東半分は、調査前まで建てられていた本堂の西辺部にかかる。また、トレンチ設定位置の西方には、墓地が南北方向に長くある。調査では、人骨を出土する墓地を検出しているが、現存するこの墓地は諧墓であり、当地域における両墓制の成立を考える上で、興味深い。このようなことから、当調査の第II期以後の遺構と光林寺との関連性を明らかにするため、光林寺の履歴にそって、検出遺構の位置付けを試みたい。

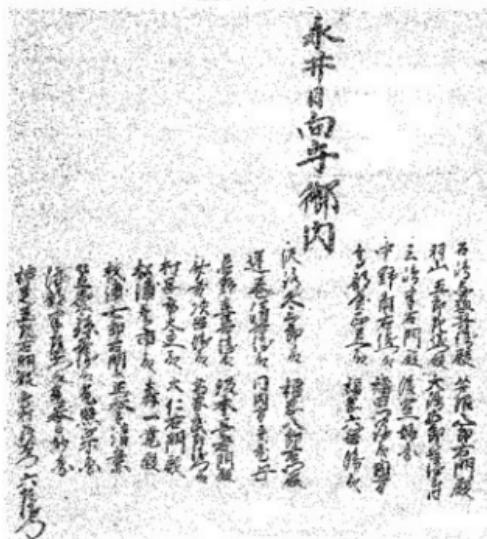
光林寺現住職木本弘昭氏によると、当寺は、元米勝龍寺の東方にあったと伝えられている。また、当寺が現在地へ移るまでは、調査地の東方約20mにあった徳勝寺（現在は建物を残し、地図に徳詳寺とある）の土地であったという。光林寺には、当寺に関する文書はなく、徳勝寺跡にも、これに関するものはなかった。しかし、幸にも、徳勝寺の廃寺に関する書類が、神足在住の山孝太郎氏によって、保管されていた。この文書からは、徳勝寺とともに、光林寺に関することも知ることができた。この史料に、光林寺所蔵の「祇迦涅槃図」（第74図）の裏書き（第75図）と、今般の改築に伴い解体された本堂（第76図）の棟板（第78図）の両資料及び「長岡町二千年」の記述を加えて、徳勝寺並びに光林寺の略歴をまとめるところと、付表-14のようになる。

当調査地の変遷を理解する上で、当調査地点に重きを置き、その歴史的画期を付表-14から求めると、以下の3期に分けることができる。この3期は、各々前期と後期に細分することができる。

第1の画期—徳勝寺と光林寺が、別人が別所に、時期を逸て建立された時期である。当地は、この時徳勝寺の土地であったが寛永年中に光林寺が現在地へ信地して移って来た。両寺が



第74図 光林寺所蔵涅槃図
(寛永17年6月15日)



第75図 光林寺所蔵涅槃図寄進者名
(涅槃図裏面)



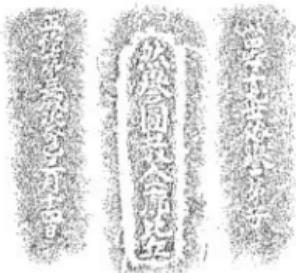
第76図 調査前の光林寺本堂（南西から、光林寺所蔵）



第77図 家老横田主水他、永井直清の家臣の墓



第78図 光林寺本堂棟札



第79図 「全勝比丘」無縫塔

独自建立から、光林寺移動までは、徳勝寺の空地であるから、徳勝寺期と呼ぶことにする。尚、光林寺の旧来の位置は、「おばた川側字ゑぎの前」又は「会下之前」と記されている。小字名には、このような地名が見られない。しかし、土地の人達の話によると、長岡京市神足焼町の内にあった地名と伝えられている。当調査地の東400mに南流する小畠川の東で、現在の松下電子工業長岡工場の中に位置したらしい。

第2の画期—光林寺が、「恵ヶの前から現在地に移された時に第2の画期が求められる。第2の画期から、次に述べる第3の画期までを、第1次本堂期と呼ぶことにする。その時期は、本堂解体時に発見された棟札の年号から、17世紀前半から1752年までとする。

第3の画期—光林寺の本堂が、調査前まで建てられていた本堂に改築される時期を第3の画期と見る。この時期から、今般の改築工事による本堂解体までを第2次本堂期と呼ぶことにする。その期間は、本堂棟札（第78図）から、1752～1985年であることが明らかである。

当調査の絶対年代が明らかなものは、第III期面で出土した火葬骨壺の蓋があり、この面の一時期を1713年に求めることができる。その年号及び戒名の一致する文字の刻まれた無縫塔が、現在の詣墓の墓列に置かれているのが確認できた（第79図）。また、火葬墓S X20708は、一石五輪塔を石組みに転用しており、18世紀初頭以降まで続いていることが知られる。現在整備された詣墓の墓碑を見ると、実年代の明らかな墓碑の内、17世紀後半のものが最も古い。第III期の火葬墓群は、これより古くはならないであろう。従って、この時期を第一次本堂の後半に求めることができる。すると、第II期の土葬墓の時期はこれより古く、しかも古寛永鉄造年代以後に限られてくる。第II期の座棺墓に副葬された古寛永鉄が、その型式から寛永14（1637）年以後であることが知られる。従って、この時期を17世紀中葉から後半にかけての時期が与えられ、第I期本堂期の前半に対比できる。付言すれば、現在地にある光林寺を開山した光譽上人（延寶五年=1677年没）の時期と考えられる。また、第II期の火葬墓の時期と、第III期の火葬墓の時期は、明らかに隔離しており、一時的にせよ重なった状況は認められない。これは、層位的にも明らかである。しかし、出土遺物からは、極端な時代幅は考えられず、むしろ連続しているものと解される。すなわち、第II期と第III期は、17世紀中葉から18世紀前半までの連続した時期の中に置くことができ、その間に土葬墓が埋め立てられて、火葬墓が整然と配されるようになったことは明らかである。この埋葬形態の変化と、大がかりな墓地の整備は時を同じくしている。この変革期の頃を明治六年の「庵寺御届書」に見ると、寛文年中（1661～1673年）に光林寺と徳勝寺が本寺と末寺の関係となり、徳勝寺は真言宗から浄土宗へ改宗したとされている。興味深い記事ではあるが、第II期から第III期への変化との関連は明らかでない。宝暦二年の文書には、寛永年中に現在地へ移したと書かれていることから、明治のこの記事は、寛永年中の誤りである可能性がある。

第II期、第III期を通して、トレンチ東辺で確認された整地盛土は、建物のための基壇と考え

られる。調査による第II期、第III期の面が、光林寺の第I期本堂に相当することから、その基壇状の整地盛土は、光林寺本堂の基礎構造ではないかと思われる。第III期の溝S D20718は、これに付随する雨落ち溝であろう。

この第III期で検出された4列の火葬墓群は、火葬墓A列群とB列群に共通性があり、C列群とD列群に共通性があることは、遺構の項で述べた通りである。すなわち、A・B両列群は、溝を掘りこれを石列によって各墓を区画しているもの（B型式と呼ぶ）であり、C・D両列群は、各墓が個別に一線上に並べて築かれたもの（A型式と呼ぶ）である。これらは、各墓ごとに構築方法を見ると、第81図のa～eに細分することができる。これを簡単に記すと、以下の通りである。

- a 方式一方形の墓壙を掘った後、長方形を程する石で四周を囲み、木箱に納めた火葬骨を埋葬して四周の石組みの上面まで埋め戻し、小石を全面に敷き、さらにこの上に上面が平坦になるように数個の石を列べ置くものである。火葬墓S X20711等がある。
- b 方式一墓の区画を石で表わさず、両隣りの区画石を利用してしているもので、その間に黄色砂質土を敷いたものもある。構築は、墓壙を掘り、火葬骨を納めて埋め戻して築かれている。火葬墓S X20709がある。
- c 方式一墓壙を掘り、火葬骨を埋納後、四周を小石で区画したものである。火葬墓S X20726がある。
- d 方式一区画石は四周ではなく、相対する2辺にのみ認められるもので、この区画石は、両側に築かれた墓の区画と共有するものである。火葬墓S X20732等に見られる。
- e 方式一両側の墓に共通する区画石をもち、しかも、他の一辺にも区画石を並べるものである。火葬墓S X20719などがある。

この分類を基に、統計を見ると、次の①～⑤までのことが明らかである。

- ① C・D列群はA a型式が最も多く、A b型式が一部あり、A c型式は1例のみである。
- ② A・B列群はB d・B e両型式がほとんどで、B a型式が一部にある。
- ③ A・B列群のB a型式で築かれたものは、B d又はB e型式のものを一部破壊している。
- ④ B d・B e型式のものは、度重なる埋葬の痕がみられ、石の動きが著しいものもある。
- ⑤ A型式のものは、一部に火葬後の骨を選んで仏だけを納骨するための小型の骨壺による埋葬が見られ、大型のものはないのに対し、B型式のものは、大人一体分の火葬骨を埋納できる大型の骨壺による埋葬が一部にあり、仏だけを埋納するものはない。

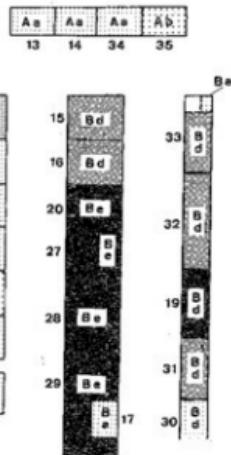
これを模式図に表わしたのが第80図で、その位置関係や分布状況が一見して確認できる。このうち、A a型式とB a型式は、墓そのものの構築方法に相異点が認められないことから、基本的に同型式と見てよく、この型式は、B a・B e両型式よりは新しいことが、火葬墓S X20729とS X20717の関係から明らかである。すると、A・B列群の中では、火葬墓S X20727の

東半部、S X20717, S X20730, S X20733の北東隅の各墓が新期のものであることが明らかであり、C・D列群は、A・B列群より新たに築かれたものであることが知られる。また、埋葬形態は、火葬骨一体分全てを木箱又は大型骨壺等に納めて埋葬する方法から、遺骨して仏だけを中型骨壺等に納めて埋葬する方法への変遷がたどれる。さらに、遺骨して仏だけを骨壺に納めたと思われる小壺による埋葬法は、A・B・Cの各列群に認められるが、いずれも中央部からの検出列ではなく、追葬や子供用の骨壺と思われる。この種の小壺には、歯のみを納めたものがある。C列群にみられた中型骨壺も、検出位置は中央でないことから、この種のものも、追葬であろうと思われる。C列群には、やや主軸を逸れた一基が南端にあり（火葬墓S X20707）、また、北端のA c型式の墓（火葬墓S X20726）

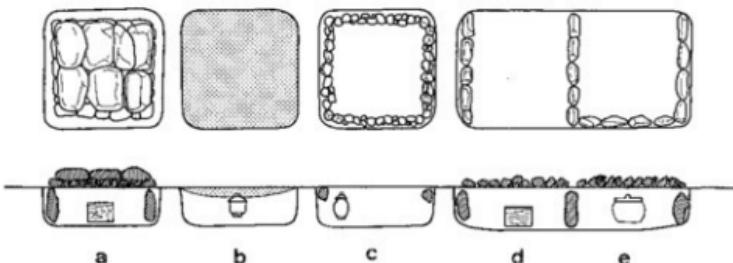
は同列群でも異質の感がある。さらに、C列群のA b型式の墓（火葬墓S X20709）とその南の墓（火葬墓S X20708）は、これより北に列する墓より構造が簡素で、また石仏等を転用しているなど粗雑であることから、同列群内でも新しいと思われる。

一基の墓のしめる面積を見ると、C・D列群は平均しており、ほぼ $0.8m^2$ である。A・B列群のものは、 $0.8m^2$ のものから $20m^2$ のものまであり、大小さまざまである。

A・B列群の差は、家族人数の差や身分あるいは社会的地位の差が考えられるが、明らかでない。しかし、何らかの当時の社会制度と関わっていることは認められよう。このような差は、少なくとも当火葬墓地のC・D列群が構築される段階では認められなくなっている。



第80図 火葬墓型式分類平面略図



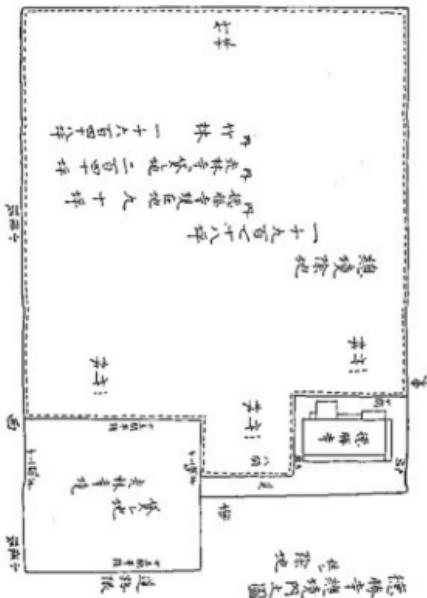
第81図 火葬墓の構築法型式分類図

そして、C列群の構築時期は、一石五輪塔等の転用（第87図）と、正徳三年銘の骨壺が当墓列群の擾乱により破壊されたと考えられることから、古くとも18世紀前葉以後であると言える。

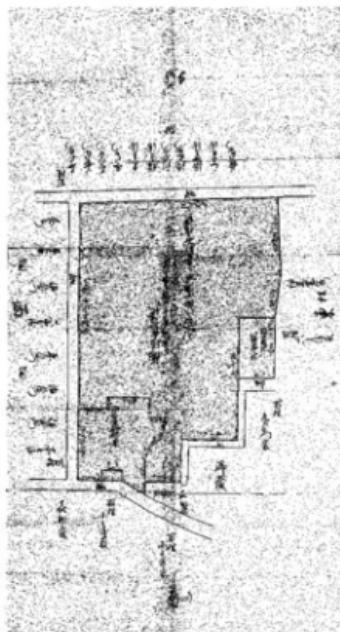
第IV期の遺構面は、層位関係から、古くても第III期の骨壺の蓋に墨書きされた正徳三年まで遡ることはない。このことから、18世紀中頃以後と考えられ、光林寺の第2次本堂期と比定することができよう。この本堂は、今般の改築に伴い解体された光林寺本堂である。しかし、第2次本堂が、そのままの形で現在まで続いたとは思われない。幾度かの部分的な増改築が予想される。従って、この本堂の変遷を見るため、これに関する資料として、絵図や地図を見ると有効であろう。しかし、寶曆二年の文書と明治の徳勝寺履歴写の絵図（第82・83図）では、徳勝寺と光林寺の位置関係は知り得るが、光林寺の建物は明らかでない。また、徳勝寺に関する絵図は付されているが、光林寺関係のものはない。これは、文書の主旨からして当然のことでもある。今日知り得るのは、大正11年測図の京都市土木局都市計畫課修正の地図（第85図）が最も古い。これに表された建物と、現在の地図に表された建物（第84図）を比較すると、大略ではあるが、変化が認められる。例えば、大正の建物は、南北12m×東西20mの長方形の平面形で、東辺のやや南よりに1m×3mの張り出しが認められるが、現在の地図では、南北13m×東西19mの長方形の平面形に、西辺北端に1m×3mの張り出し、北辺やや西よりに1m×6mの張り出し、東辺の南端に、大正11年の地図にみられる張り出しの南に4m×3mの張り出しが認められる。各地図の精度も問題であるが、基本形がほとんど変化していないことや、方位が同じであること等から、大正の地図にみられない張り出し部のほとんどは、大正11年から昭和44年の間に増築された部分と考えられる。はたして、大正の地図に表された建物が、寶曆二年の原形を保っていたかどうかは、はなはだ疑問が残る。しかし、長方形の基本形は変わらないと思われる。第III期の面と第IV期の面の間に造成盛土があり、墓地が埋め立てられていることや、新たな整地盛土や版築層が、トレチ西半分で検出されていることから、これらの作業は、現在にまで残った本堂の建築に伴う一連の作業としてなされたものであろう。そして、版築層が、第III期の整地盛土の西側に張り出す形であることから、第1次本堂の位置より、やや西よりに建てられたか、又は、西へ2間分長く建てられたものと思われる。同一面で検出された池S G20703は、この本堂に付隨する泉水であったと思われる。残念なことに、解体された寶曆二年の棟札をもつ本堂を実見する機会が得られなかつた。

現在では、当寺にある墓は詣墓となっている。当地域の埋葬を調査しなければ、明らかなことは言えないが、おそらくは、当所が第III期まで埋葬であったものを、第3の画期において尚墓制が取り入れられ、詣墓とされ、第IV期遺構面以後（=第2次本堂期）は、別所に埋葬を設けたのではないかと考えている。

本報告では、光林寺と永井直清あるいはその家臣との関連まで論及するまでには致らなかつた。光林寺には、家老横田主水を始めとする直清の家臣の墓があり、また、家臣と在地有力者



第82図 「徳勝寺總境内之図」(明治43年) 徳勝寺履歴写



第83図 城州乙訓郡神足光林寺寺地
抗木打渡裏書図(寶曆二年)



第84図 現在の光林寺(昭和44年)



第85図 大正の光林寺(大正11年測図)

により涅槃図が寄進されている。家老等の墓は、元来勝龍寺の東にあり、これを移したと伝えられるが、詳細は明らかでない。いずれにせよ、永井家と光林寺には、欠かせぬ関連が見受けられる。

注1) 現地及び整理について、白川成明、本田祐生、安藤道了、長谷川暉、藤本滋子、近藤志津子、小塙礼子各氏の御協力を得た。

2) 岩崎誠「長岡京跡右京第163次(7ANMKI地区)調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第15冊 1985

3) 長岡京跡右京第10・16・24・28・61・163・172・184・187・209次調査として実施されたもので、神足遺跡に関する多くの成果が得られている。

4) 注2文献と同じ。

5) 長岡京跡右京第187・209次(7ANMTT地区)調査では、住居址群が、長岡京跡右京第10・28次(7ANMMB地区)調査では、方形周溝墓群と土墳墓群が検出されている。これらの調査における出土量は豊富で、そのうち、磨製石劍の多量出土など、特異な内容を含んでいる。

6) 山本輝雄・久保哲正他「長岡第9小学校建設にともなう発掘調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 1980

7) 注2文献と同じ。

8) 注6文献と同じ。

9) 長岡京跡右京第94次(7ANQUD地区)・右京第102次(7ANMMK地区)の両調査では木簡や墨書き土器が、長岡京跡右京第10次(7ANMMB地区)・右京第77次(7ANKSM地区)では、墨書き土器が出土地している。

岩崎誠「長岡京跡右京第94次(7ANQUD地区)調査略報」助長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センターワン年報』昭和57年度 1983

岩崎誠「長岡京跡右京第102次(7ANMMK地区)調査概要」助長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 1984

山本輝雄・久保哲正他「長岡第9小学校建設にともなう発掘調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 1980

山本輝雄・木村泰彦「長岡京跡右京第77次(7ANKSM地区)調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 1982

10) ホトケは、一般的に喉仏を示すが、当調査で骨壺内から出土したものからは、頭頂骨、蝶形骨、遊離歯、頸椎、顎骨等さまざままで、適当に選骨して、納められている。

6 長岡京跡出土の江戸時代人骨について

昭和60年の長岡京跡右京第207次調査において、18世紀初頭に埋葬されたと推定される火葬骨と、それ以前にさかのばるとみられる座棺埋葬の土葬骨1体が出土した。火葬骨は骨壺内に埋納された5体のほか、数ヶ所から検出されている。

(1) 火葬骨

性、年齢の判定は多くの場合困難であり、記載のないものは成人骨である。

火葬墓 S X 20707

粉状になった人骨片。

火葬墓 S X 20708

側頭骨の錐体の破片2～3点。

火葬墓 S X 20709（骨壺内）

頭蓋冠の破片、左上顎骨、下顎骨、第1および第2頸椎の破片、遊離歯12本が検出された。上、下顎骨は小さいが、第2大臼歯が著出しているので小児骨とみられる。

火葬墓 S X 20710

頭蓋のごく小さい破片が数点。

火葬墓 S X 20711

遊離歯1本のみ。

火葬墓 S X 20712

粉状に近い細片。

火葬墓 S X 20715

左右の大腿骨、上腕骨、尺骨、右腓骨、脛骨など長骨骨体の小破片が多い。それ以外に、頭蓋骨、下顎骨、遊離歯8本、肋骨、肩甲骨、寛骨、左右の距骨、舟状骨、楔状骨、指骨5本が同定できた。

火葬墓 S X 20716

頭蓋骨片2～3点と遊離歯7本。

火葬墓 S X 20717（骨壺内）

破片数は著しく大量で、大きな破片が多い。長骨の骨体の変形も強く、多くのものは白色を呈する。

頸椎、尾椎以外の椎骨、肋骨、左右の肩甲骨と寛骨、右膝蓋骨、左距骨、左右の踵骨、すべ



第86図 火葬墓 S X 20717骨壺(83)埋納火葬骨

ての四肢長骨の骨端と骨体、頭蓋骨が同定された。寛骨の形状から男性と判定できるが、四肢長骨は頑丈で、後頭骨の骨壁はきわめて厚い。頭蓋骨としては、後頭骨以外の脳頭蓋骨、左右の上顎骨、下顎骨の右半分が残存する。上顎右の第1小白歯と第1大臼歯の歯槽が閉鎖しており、矢状縫合と人字縫合はまだ消失していないが、縫合部は癒合している。これらから判断すると、被葬者の死亡時年齢は壮年後半もしくは老年前半と推定される。

火葬墓S X 20719（骨壺内）

人骨片の量は中程度で、破片は小さく、焼骨特有の変形は弱い。頭蓋骨片が最も多く、長骨骨体の破片がこれに次ぎ、それ以外に胸椎、肋骨、肩甲骨、寛骨の小片と遊離歯6本が同定された。頭蓋骨としては左右の側頭骨と頭頂骨、後頭骨、蝶形骨、下顎骨が、長骨としては上肢骨と大腿骨が残存する。頭蓋冠の骨壁は薄く、縫合は明瞭に認められ、長骨は弱小であるので、小兒骨の可能性が高い。

火葬墓S X 20720（骨壺内）

火葬墓S X 20717に次いで破片数が多い。人骨の色調は黒色、ネズ色、茶色と変化に富み、長骨の変形は強い。四肢長骨の破片が最も多く、頭蓋骨、椎骨がこれに次ぎ、それ以外に肋骨、肩甲骨、中手骨、指骨、寛骨、左膝蓋骨、左右の距骨が検出された。長骨では上肢、下肢骨のほとんどすべての骨が、椎骨では胸椎と腰椎が、頭蓋では頭蓋冠の骨と右上顎骨、下顎骨が同定された。長骨は頑丈で、下顎左の側切歯の歯槽が閉鎖し、椎骨の骨体には嘴状の骨増殖が認められるので、被葬者は壮年後半の男性であった可能がある。

火葬墓S X 20726（骨壺内）

頭頂骨、蝶形骨など頭蓋骨片が数点と遊離歯2本、および第1、第2頸椎だけである。変形はほとんどみられない。

火葬墓S X 20727

破片数は少なく、破片の大きさも小さい。上腕骨、大腿骨、脛骨など四肢長骨と頭蓋冠の破片が比較的多く、それ以外に椎骨、肋骨、肩甲骨、寛骨、踵骨の破片が僅か残存する。頭蓋骨は薄く長骨は、小さいので若年個体の遺骨と推定される。

火葬墓S X 20728

頭蓋冠と下顎骨の小破片がごく少量検出された。

火葬墓S X 20729

小破片であるが、量的にはかなり多い。大腿骨、上腕骨、桡骨、尺骨などの四肢長骨がやや多く、後頭骨、側頭骨、頭頂骨、下顎骨など頭蓋骨がこれに次いで多い。第2～第4頸椎、胸椎、肋骨、肩甲骨、右月状骨、左舟状骨、中手骨、寛骨、踵骨が検出され、遊離歯10本が残存する。後頭骨の骨壁が厚いので男性とみられるが確かではない。

火葬墓S X 20730

112 長岡京跡出土の江戸時代人骨について

椎骨、肋骨、長骨骨体のいずれもきわめて小さい破片がそれぞれ数点ずつ残っている。

火葬墓 S X 20731

量的に少なく、やや大きな破片が若干あるが多くは小破片である。頭蓋冠、下頬骨など頭蓋骨と、左右の上腕骨、尺骨、大腿骨、脛骨など四肢長骨片が多く、胸椎の破片数点と肋骨2～3点が残存する。頭蓋冠の骨壁は薄く、下頬の第3大臼歯は末萌出、長骨は小さいなど、被葬者が小児であった可能性が高いことを示している。

火葬墓 S X 20732

破片数はきわめて少なく、頭蓋冠、右上頬骨、大腿骨、脛骨が同定された。これも頭蓋骨の厚さ、長骨片の大きさから小児骨とみられる。

火葬墓 S X 20733

遊離歯1本と長骨のきわめて小さい破片1点。

これら以外に、整地盛土層(頭蓋骨、長骨)、S K20743(骨粉)、S K20758(頭蓋骨)、S K20738(頭蓋骨)、S K20742(長骨)、S K20737(骨粉)、2区第III期造成盛土の淡茶褐色砂質土(大腿骨)、4区S D20722(長骨)、トレンチ西部(骨片)から1～2点、多くて数点の骨片が検出された。

(2) 土葬骨(図版46、付表-15)

土葬墓 S K 20738

頭蓋骨、第1および第2頸椎、左右の大軀骨、脛骨、腓骨が残存するが、頸椎と下肢骨はいずれも小破片で、頭蓋骨だけがよく残っている。しかし頭蓋の骨質はきわめて脆弱である。

頭蓋骨は、脳頭蓋の後方半分を大きく欠損するが、顔面頭蓋は比較的よく残っている。欠損部は左右頭頂骨の冠状縫合よりの部を除く大部分、後頭骨の後頭平面、底部、前頭骨と左側頭骨のそれぞれ一部、左右の頬骨弓、鼻骨下部、下頬骨の左右の関節突起と筋突起などである。上顎左右の中切歯と右の側切歯、下顎左の第2大臼歯以外の歯は、上下顎に釘植しているが、第3大臼歯は末萌出で、下顎右の第1、第2大臼歯は脱落し歯槽が閉鎖している。

眉弓の隆起は強く、項線も明瞭であるなど男性的特徴が顕著であり、大臼歯の磨耗は強いが、小白歯とくに下顎の小白歯にはほとんど磨滅が認められず、冠状縫合は内板では消失しているが外板では明瞭に認められる。これらを総合すると、被葬者の死亡時年齢は壮年後半と推定される。

脳頭蓋の最大長は計測できないが、かなり長く、最大幅は中程度であり、長軸示数は中型の下限あたりに入るとみられる。耳プレグマ高は著しく低い。左の舌下神経管の二分以外に特記すべき頭蓋小変異は出現していない。

オトガイ高が高いため顎高はそれほど低くないが、上顎高は著しく低い。頬骨弓幅、中顎幅とともに正確に測れないが、頬骨弓幅は130～133mm程度、中顎幅は95mmと推定され、コルマンの顎示数は中型と大型の境、上顎示数は大型、ウィルヒョーの上顎示数は大型の下限に入る。眼

窓示数は中型、鼻示数は低型と中型の境にある。鼻根部はやや陥凹しており、歯槽側面角は正確には測れないが、歯槽性突顎はかなり強い。眼窓間幅は狭く、鼻根部の扁平性は弱い。下顎骨体は高く、厚い。

本資料の計測値と示数を近畿地方の江戸時代人である堺環濠都市遺跡(池田・片山, 1984), 堺向泉寺跡遺跡(池田・片山, 1983), 大阪吉原墓地(欠田, 1959)出土の男性と比較した。

長岡京跡資料は、脳頭蓋の最大幅は他の近畿江戸時代人と大差ないが、高径が著しく低い。顎面の幅径もほとんど一致するが、上顎高が低い。したがって顎示数ではあまり差はないが、上顎示数は小さい。眼窓示数、鼻示数は大阪とはほぼ一致し、堺環濠都市よりはるかに低いが、これは後者の方を特異とみるべきである。下顎骨の骨体は他よりも高く厚い。

以上、長岡京跡出土の江戸時代男性の特徴は、脳頭蓋および上顎高が低く、下顎骨が高く頑丈である以外、大阪出土の江戸時代人によく似ている。

文献

池田次郎・片山一道「堺市向泉寺跡遺跡近世墳墓群出土の人骨について」(堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第12集 1983 pp. 70~86)

池田次郎・片山一道「堺環濠都市遺跡—調御寺跡—出土の近世人骨について」(堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第20集 1984 pp. 178~195)

欠田早苗「畿内人頭蓋骨の人類学的研究現代畿内人骨と江戸時代後期墳墓骨について」『人類学報』 25: 53~83 1959.

付表-15 頭蓋骨の計測値と示教(男性)

	長岡京跡	環濠都市	界	大阪
	長岡京跡	環濠都市	向泉寺跡	吉原墓地
2a ナジオン・イニオン長	(170)	165		
5 基 底 長	(95)	103	102	100.7 (22)
8 最 大 幅	140	140	138.5 (2)	140.6 (3)
9 最 小 前 頭 幅	(90)	92	89.0 (2)	92.6 (5)
10 最 大 前 頭 幅	124	109	111	114.6 (3)
20 耳 ブレグマ 高	111	119	121.0 (3)	118.5 (2)
22 カロッテ 高	(104)	107		109.4 (2)
24 横 弧 長	(315)	314	328.0 (2)	324.5 (2)
26 正中矢状前頭弧長	129	123	125.0 (2)	125.4 (2)
29 正中矢状前頭弦長	110	111	110.0 (2)	109.9 (2)
32(l)前 頭 傾 針 角	62	63	67	64.0 (2)
32(5)前 頭 臂 曲 角	(129)	133	129	
% 脳耳ブレグマ高示数	79.3	85.0	88.5 (2)	
% カロッテ高示数	(61.2)	64.8		62.2 (30)
% 横前頭示数	(72.6)	84.4	82.0	80.5 (29)
% 横前頭頂示数	(64.3)	65.7	67.9	65.8 (30)
% 矢状前頭示数	85.3	90.2	87.0	87.0 (37)
40 頭 長	(101)			99.8 (11)
42 下 頭 長	(118)	113		
43 上 頭 幅	(100)	103	103	103.3 (23)
44 両 眼 窩 幅	93	96		98.3 (23)
46 中 頭 幅	(95)	95	95	99.9 (22)
47 頭 高	119	137		
48 上 頭 高	62			68.4 (12)
50 前 頭 窩 間 幅	16	16		18.8 (24)
F 鼻 根 横 弧 長	19	20		
51 眼 窩 幅	40	42		42.0 (23)
	41	43		
52 眼 窩 高	(41)	36		33.7 (23)
	34	36		
54 鼻 幅	(25)	22		26.7 (23)
55 鼻 高	(49)	57		52.0 (23)
57 鼻 骨 最 小 幅	5	3	10	7.7 (23)
61 上 頭 骨 幅	59	62		64.2 (20)
69 才トガイ高	35			
69(3)下 頭 体 厚	15	12	13.0 (3)	
72 全 側 面 角	87			80.9 (9)
% 頭 示 数 (v)	(125.3)	144.2		
% 上 頭 示 数 (v)	(65.3)			67.7 (10)
% 眼 窩 示 数 (v)	80.0	85.7		80.1 (23)
% 前眼窩間示数	82.9	83.7		
% 鼻根臂曲示数	17.2	16.7		19.2 (23)
% 鼻示数	84.2	80.0		
% 前頭両眼窩示数	(51.0)	38.6		51.8 (23)
	(90.0)	89.3		89.4 (22)

吉原墓地の()内は例数



(1)



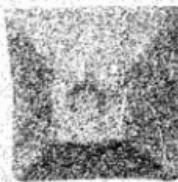
(2)



(3)



(4)



(5)

- (1) 石仏（火葬墓 S X 20708出土）
(2) 石仏（溝 S D 20702出土）
(3) 墓碑基部（火葬墓 S X 20708出土）
(4) 一石五輪塔（火葬墓 S X 20708出土）
(5) 五輪塔火輪部（火葬墓 S X 20708出土）

第4章 長岡京跡右京第213次（7ANGKT地区）調査概要

一右京南一条四坊四町・一条四坊一町・南一条大路一

1はじめに

- 1 本報告は、1985年11月22日から12月24日まで、長岡京市井ノ内頭本3—3他において実施した長岡京跡右京南一条四坊四町・一条四坊一町・南一条大路推定地および上里遺跡の発掘調査に関するものである。
- 2 本調査は、重要遺跡確認調査の一貫として行ったもので、調査面積は約360m²である。
- 3 調査は、長岡京市教育委員会が主体になり、国庫補助事業として実施した。現地調査は長岡京市教育委員会管理課文化財係中尾秀正が担当した。
- 4 調査後の遺構・遺物の図面整理および製図は、中尾、渡辺美智代、赤木恵が主に行なった。
- 5 調査実施にあたり、土地所有者である長谷川弥一氏をはじめ、乙訓若竹苑ほか近隣住民のご協力を得た。また調査中には、京都文教短期大学教授中山修一氏、(財)長岡京市埋蔵文化財センター等からご指導、ご援助を得た。
- 6 本報告の編集・執筆は中尾が行なった。



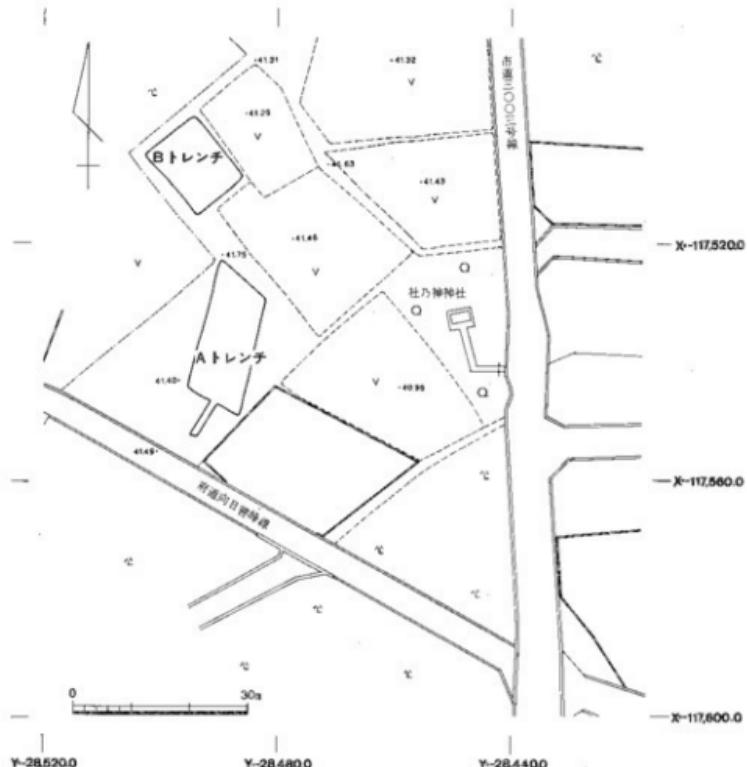
第88図 発掘調査位置図 (1/5000)

2 調査経過

当調査地は、長岡市の北部にある井ノ内地区の集落から西約100mの地点で、標高約41mの洪積台地の縁辺部に位置し、北方約150mに善峰川旧流路によって形成された氾濫低地との傾斜変換線が東西に通っている。当地はかつて竹藪であったが、現在開墾され畑となり、周辺まで宅地開発が進んできている。

長岡京条坊復原によると、当地は右京南一条四坊四町・一条四坊一町にあたるとともに調査地のはば中央部を南一条大路が東西に通ると推定される。また、縄文時代～古墳時代の集落遺跡である上里遺跡の範囲にある。

当地の周辺には、西方約400mの竹藪中に古墳時代後期の前方後円墳である井ノ内車塚古墳が、その西方に後期の芝古墳群があり、円墳・方墳・前方後円墳などが散在している。一方、



第89図 調査地周辺図 (1/1000)

南方に弥生時代～古墳時代の集落遺跡である井ノ内遺跡が広がり、古墳時代後期の小西古墳・⁽¹⁾稻荷塚古墳、中世の井ノ内城館跡などが確認され、当地のすぐ南西の小字宮山には「統日本紀」大寶二（702）年7月4日条にみえる乙訓坐火雷神社（現角宮神社と推定）の旧社殿があったと推定されている。さらに北方約130mの所にナイフ形石器が発見された頭本遺跡がある。⁽²⁾

また周辺での発掘調査では、調査地のすぐ東側で行われた右京第21・27次調査のうち府道向日善峰線より北側で、奈良時代の溝・中世の溝・土壌や縄文土器（後期）・平安時代の土器類が出土している。またこの道路の東側にある乙訓若竹苑建設の際に行われた右京第107次調査⁽³⁾で、古墳時代後期の土壙墓2基とともに中世の集落に関係する溝・土壙などが検出され、さらに当地南東での右京第48次調査で、中近世の遺構とともに弥生時代中期の溝が発見されている。

ところで、今回の調査は長岡京跡とくに南一条大路の検出と合せて、上述した先土器時代から中近世に至る遺構を検出する目的で実施した。

調査トレンチは南一条大路推定地に幅約10m×長さ約21mの南北トレンチ（Aトレンチ）を設定した。しかし、調査が進むにつれて南一条大路に関係する遺構等が検出されなかったため、Aトレンチの北西に幅10m×長さ約13mの東西トレンチ（Bトレンチ）を新たに設定した。

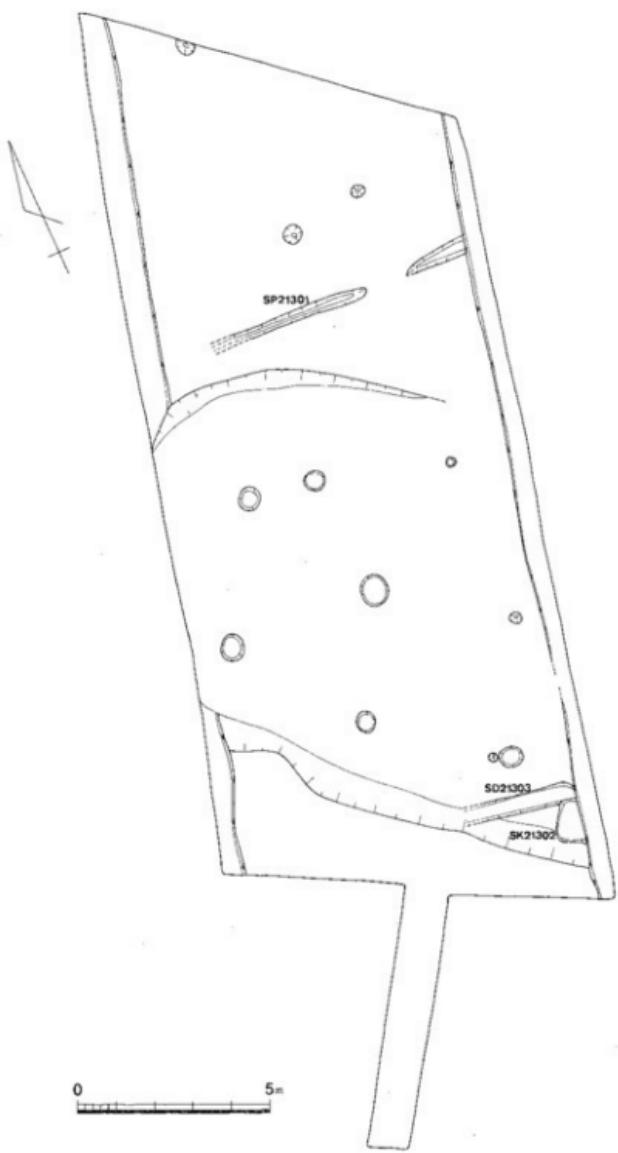
調査はAトレンチで耕作土を重機で除去した後、人力で遺構の検出に努めた。Bトレンチでは、耕作土が浅かったため、当初から人力で作業に取りかかった。調査の結果、当初の期待に反し、南一条大路は検出されず、おもに近世以降の溝・土壙などが検出されるにとどまった。調査後、重機および人力によって旧状に復した。

3 検出遺構

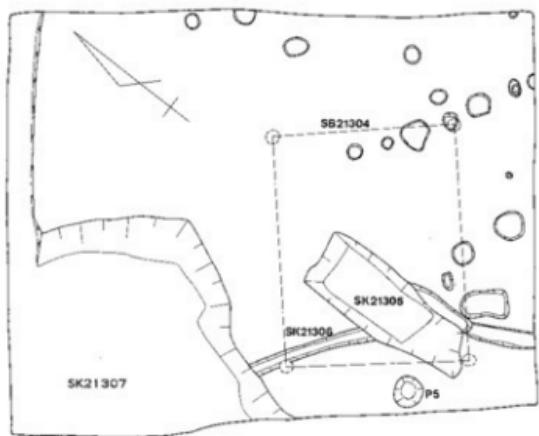
調査地の基本層位は、耕作土の直下で暗褐色砂礫又は暗黄褐色土の地山となり、Bトレンチでは耕作土と地山との間に厚さ0.2~0.3mの褐色土が堆積している。以下、各トレンチごとに調査の概要を述べていく。

Aトレンチ（第89・91図、岡版47—2・49—1・2）

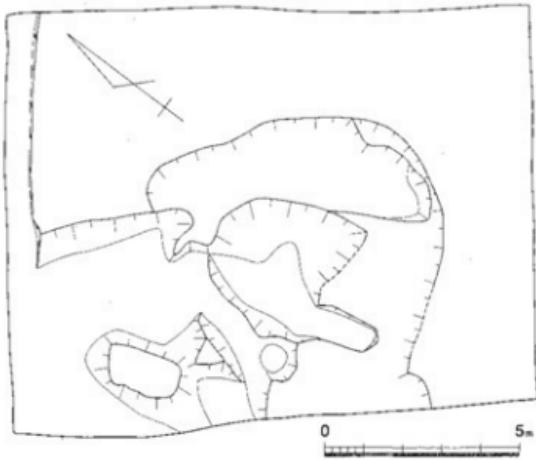
基本層位は、耕作土の直下で暗褐色砂礫又は暗黄褐色土の地山となる。地山面には、トレンチの中央部から南部にかけ、地形に沿って北西から南東にゆるやかに斜傾する幅約10m、深さ約0.5mの凹地があり、現在のように平坦化される以前は起伏をもつ地形であったことが明らかになった。この凹地には、南端の一部に茶褐色土が堆積し、その上を褐色土が全域を被った後、東部の南端の一部が土壙SK21302により開削され、人頭大～拳大の礫、礫まじりの褐色土・淡茶褐色土・淡茶褐色砂礫が堆積している。さらにその上を暗褐色土が被っている。これらの土層中からは、古墳時代から中世にかけての須恵器・土師器・平瓦・瓦器などとともに近世以降の陶磁器・瓦・錢貨（寛永通寶）・鉄器（鎌など）が出土している。



第90図
Aトレンチ検出遺構図



上層遺構



第91図 B トレンチ検出遺構図

検出された遺構には、溝S D21301・土壌S K21302・溝S D21303と柱穴群がある。

溝S D21301 北部の地山上面で検出したほぼ真東西方向の素掘り溝で、幅0.3~0.4m、深さ0.2mを測る。部分的に後世の削平を受けているが西から東へ流れる。埋土は暗灰色砂質土で、須恵器（甕）片と土師器片がわずかに出土した。

土壌S K21302 凹地に堆積した褐色土上面から掘り込まれた土壌で、東西2.5m以上を測る。人頭大~拳大の礫と礫まじりの褐色土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。おそらく開懸中に出た礫を埋めるために掘られた土壌であろう。

溝S D21303 凹地の地山面で検出された東西方向の溝で、幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は拳大の礫が混じる淡茶褐色土で、遺物は出土しなかった。

なお、凹地の地山面で検出された柱穴群は、径0.2~0.8mの円形の掘形で、埋土はすべて暗灰褐色土である。一部の柱掘形から須恵器・土師器とともに近世以降の陶磁器類の破片が出土している。

B レンチ（第90・91図、図版48・49—3・4）

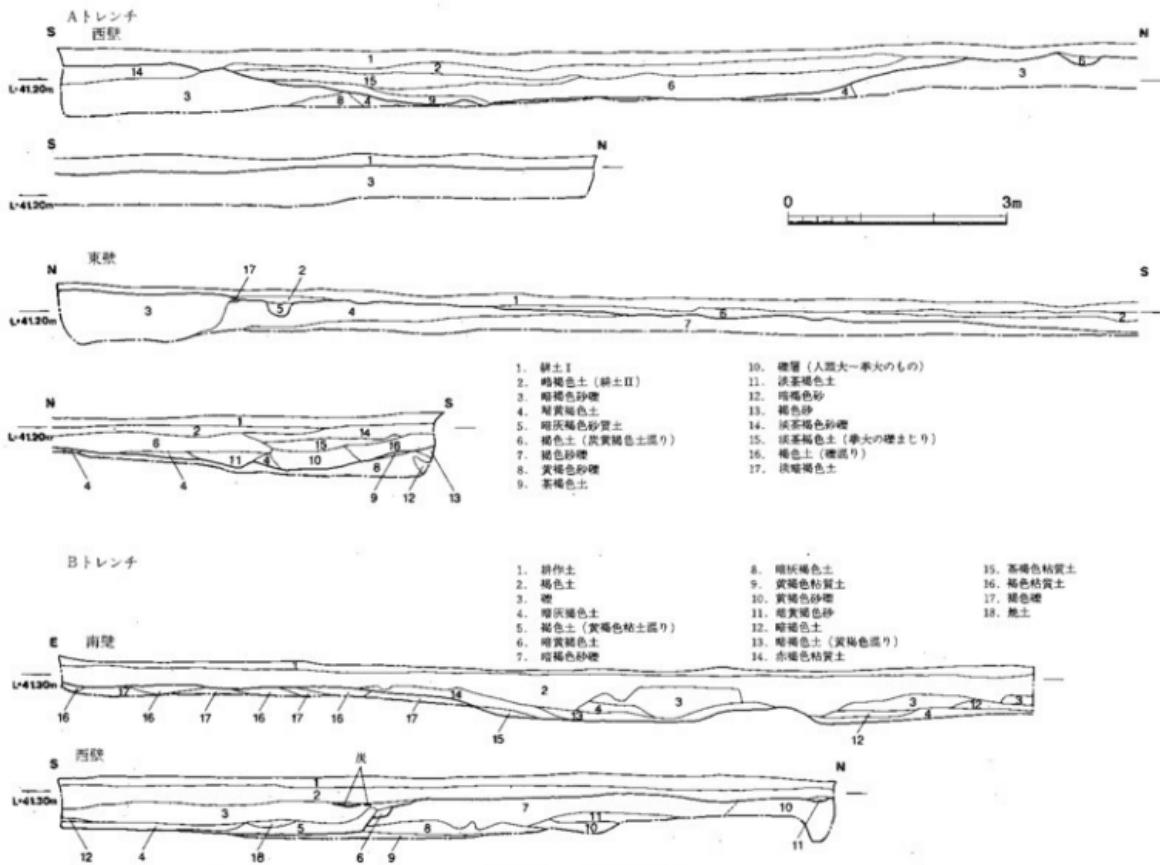
遺構は、上層と下層の二つに大別される。上層では、耕作土直下の褐色土上面で検出された掘立柱建物S B21304と、褐色土を除去した段階で検出された土壌S K21305・溝S D21306土壌S K21307・柱穴群がある。さらにその下層では土師器・須恵器の破片と鉄器（釘）を含む赤褐色粘質土・拳大の礫・茶褐色粘質土・黄褐色粘質土が混じる褐色土が堆積した自然の凹地が確認されたが、遺構は検出されなかった。

掘立柱建物S B21304 レンチの東部で検出された1間四方の東西棟で、東西4.7m、南北5.8・6.0mの柱間を測る。径0.35m前後の円形の柱掘形で、埋土は暗灰褐色土（黒炭混り）で中から須恵器甕の少片が出土している。この建物は、柱掘形が小規模で柱間が広いことから、おそらく農作業用小屋程度の簡単な建物と思われる。

土壌S K21305 レンチの東南部。赤褐色粘質土上面で検出された北西~南東方向の土壌で、幅1.7m×長さ4.6mの長方形を呈する。深さ約0.8mで、北西から南東にしだいに浅くなる。埋土は上から0.1mまで褐色土、その下は礫となり、中から土師器・須恵器の破片とともに近世以降の陶器・瓦・鉄器などが出土している。おそらく開懸中に出た礫を一括して投棄したものであろう。

溝S D21306 レンチの東南部。赤褐色粘質土および褐色礫（地山）の上面で検出された、やや北側に彎曲する溝で、途中土壌S K21305に、西側を土壌S K21307によって削平を受けている。埋土は褐色土で、中から土師器皿の小片がわずかに出土している。

土壌S K21307 レンチ南西部。赤褐色粘質土・黄褐色粘質土（地山）の上面で検出された不定形な落ち込み状の土壌で、深さ0.5mを測る。中に掌大~拳大の礫、焼土、黒炭、暗灰褐色土、暗褐色土などが堆積し、土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・瓦とともに近世以降の陶



第92図 調査地土層図

磁器の破片が出土した。とくに礫層を除去した段階で、焼土が2ヶ所で集中し、うち1ヶ所で焼土塊が認められ、中から竹の炭片などが出土している。

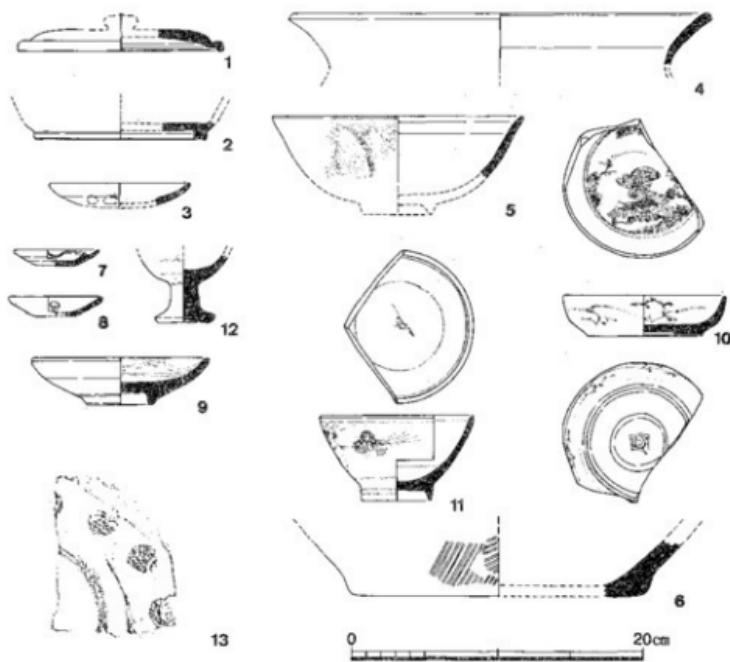
柱穴群 トレンチの北部および東半部の暗褐色砂礫および黄褐色土の地山上面で検出した円形又は階円形の掘形の柱穴群で、埋土は褐色土で、遺物は出土していない。

3 出土遺物（第92図・図版50）

本調査では、古墳時代から近代に至る各時代の遺物がコンテナ3箱出土している。その種類も、土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・陶器・磁器・瓦・鉄器・銭貨など各種である。近世～近代にかけてのものが大半を占め、古い時期の遺物はほとんど新しい時期のものと共に伴っている。これらの遺物は、ほとんど包含層から出土し、多くは細片化しているため実測不可能であった。

Aトレンチでは、(1・5・7・8)が暗褐色土層から、(3・13)が褐色土層から出土している。Bトレンチでは、(4)が褐色土層から、(11・12)が礫層から、(9・10)が暗灰褐色土層から、(2・6)が土壤S K21305から出土している。

皿(3)と蓋(4)は土師器で、(3)は二次焼成を受け暗茶褐色を呈する。环B(1)と蓋(2)は須恵器である。(5)は輸入磁器の青磁碗で、鑄連弁文を有する龍泉窯系のもの。(6～8)は陶器。(6)は甕底部で、外面に右上り方向の平行タタキを行い、茶褐色の釉を施す。内面は粗くなれる。(7～8)は灯明皿。(7)は受け付皿で切り込みを有するもので、外面は口縁部を横なでし、以下底面まで削る。内面のみに黄灰色の釉を施す。口径4.9cm、器高1.1cmを測る。他に口径10cm前後の大きい受けが付くものがあり、内面に黄灰色又は灰色の釉を施しているが、切り込みの有無は不明である。(8)は皿状の体部中段に小突起を付して芯立てとするが、小突起の上部は欠損しているので不明。外面は口縁端部を横なでし、以下底面まで削る。内面および口縁外面の一部に黄灰色の釉を施す。(7～8)は京焼で、18世紀前半以降と思われる。(9～12)は国産の染付。皿(9)は口径に比べ小振りの輪高台に浅い体部がつく。総釉で内面に松葉文を描き、見込蛇ノ目釉ハギである。皿(10)は広い口径の体部に蛇の目高台がつく。総釉で、内外面とも貫入が多くみられる。外面に唐草文を描き、見込みに山水図を描く。茶碗(11)は口径10.2cm器高5.8cmで、高台は径5cmで口径の約1/3と大きくゆるやかに内脣しながら立ちあがる。総釉で、外面に草花文を描き、コンニャク判による菊丸文を施し、高台外面には團線がめぐる。内面には見込みと口縁部に團線がめぐり、見込みに文様を施す。仏飯器(12)は脚台に小碗をのせた形態で、碗部は内脣する。文様は体部を破損しているため不明。(9～12)はいずれも伊万里産で18世紀末以降と思われる。(13)は軒丸瓦で、左巻きの三巴文で、その周りに珠文をめぐらす。瓦当面は平滑で、良好な焼成で銀化し光沢もみられ、18世紀以降と思われる。

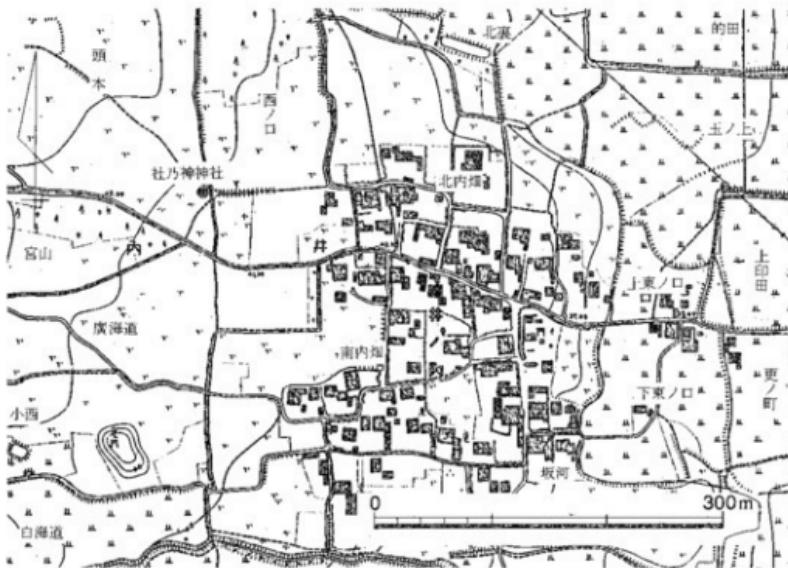


第93図 出土遺物実測図

4 まとめ

今回の調査で検出した遺構は、ほとんど18世紀末以降のもので、当初期待していた長岡京跡および上里遺跡に関するものは検出されなかった。ただAトレンチで検出した溝S D21301は、須恵器と土師器の小片をわずかに出土したのみで、その時期を明らかにし得ないが、ほぼ真東西方向をもつもので留意される。また出土遺物に近世以降の陶磁器類などとともに古墳時代後期からの土器類の破片があることは、周辺の発掘調査で確認されている古墳時代から中世にかけての遺構が当地まで広がっていたことを裏づけていると思われる。

また、近世から近代までの遺物の中に土師器の小皿や陶器の灯明皿が比較的多く出土しており、調査地の東隣にある「社乃神神社」(第94図)との関連が注目される。ちなみにこの神社についてふれておこう。この神社は、南北にやや細長い、約260m²の敷地のほぼ中央に南面した、幅2.5m、奥行1.5mの祠があり、その前に唐獅子と石灯籠が1対ずつ置かれている。この神社の由来等について、神社の土地所有者である井ノ内南内煙在住の岡本隆氏は、「この地は古くから地元の人たちが「お札」を焼く場所であった。それを祖父が大正末から昭和初に祠を建



第94図 井ノ内集落周辺の旧地形と小字名（昭和11年）

て祀ったのが始まりで、お札には「神符」と書かれており、お札を焼くのは神を捨てるることと考え、捨（シャ）が社（シャ）になって「社乃神神社」となった。祠の中には人頭大の岩3個があり御神体として祀られている。」と言う。

このように、この神社の創建は新しいが、古くから「お札」を焼く祭場の地であったと伝えられるが、その性格と起源については明らかにされていない。いま、当地の位置と集落との関係、御神体、「神符」と書かれたお札、「シャノカミ」の社名などから、その性格と起源について検討してみよう。

当地は小字「頭本」の東端で、現井ノ内集落の西境にある。現井ノ内集落の周辺（第93図）には、集落の東方に「上東ノ口」「下東ノ口」、北方に「北内畠」「北裏」、南に「南内畠」、西に「西ノ口」と言った地名が遺存し、市内の開田・勝竜寺・友岡の各地区に見られるように、これらの地名は集落の東西南北の方向と合せて



第95図 社乃神神社

村の出入口を意味していると思われる。ところで、現井ノ内の集落の形成過程については、これまでの研究の中で、南北朝時代に「井内」と「野村」の二村が独立していたが室町時代に集村化したものではないかといわれ、先にみた地名はそれ以降に形成されたものとみてよからう。

このような現井ノ内集落の西の境の入り口に位置している当地が、かつての「お札」を焼く祭場であり、岩を御神体として祀られていることから、もともと当地が塞の神・境の神としての性格をもっていたのではないかと想起させる。この信仰は、境内に邪神（疫靈惡鬼）が入りこまないように、また反対に境内での災を起さしめる邪神を境外に追いやるために境を守る神を祀るというもので、自然石や石碑に道祖神あるいは塞の神・歳の神とだけ刻んだものなどが安置されている場合が多い。この信仰は、道祖神などが多くのこる東日本によくのこっているが、かつては西日本も含めて全国に広がっていたと推測されており、長岡京市長法寺にも「祭ノ神」という小字が残っている。また、京都市右京区嵯峨愛宕町にある愛宕神社を信仰する、いわゆる愛宕信仰においても、火防の神・火伏の神としての信仰性格とともにこの塞の神・境の神としての性格が認められ、村の入口といわれる所に愛宕様の札を竹にはさんでおく習俗が伝えられている。⁽⁶⁾

さらに窺って考えると、当社の社名『社乃神』は「^{セイ}^ノ^{カミ}」が「^{セイ}^ノ^{カミ}」が転じたものと解すことができるのでなかろうか。

しかし、その結論は今日井ノ内地区の産土神として祀られる角宮神社や井ノ内集落の研究と合せて、今後の研究に委ねなければならないことは記すまでもない。

注1) 長岡京跡右京第21・27次調査において、幅1.7m、長さ約23m以上の方形区画の北西隅に想定される溝が検出され、何らかの施設をとり囲む外郭施設と推定され、13世紀初頭前後の中世居館跡に關係するものとみられている。

2) 高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1979)、1979年

奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1980)、第2分冊、1980年

3) 山下 正「長岡京跡右京第107次」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第8巻、1983年

4) 『京都府の地名』平凡社 1981年「井内村」項(283頁)

5) 桜井徳太郎編『民間信仰辞典』東京堂出版 1980年「道祖神」項(202頁)

6) 同上 「愛宕様」項(9頁)

図 版

長法寺七ツ塚古墳群第1次調査

図版
一



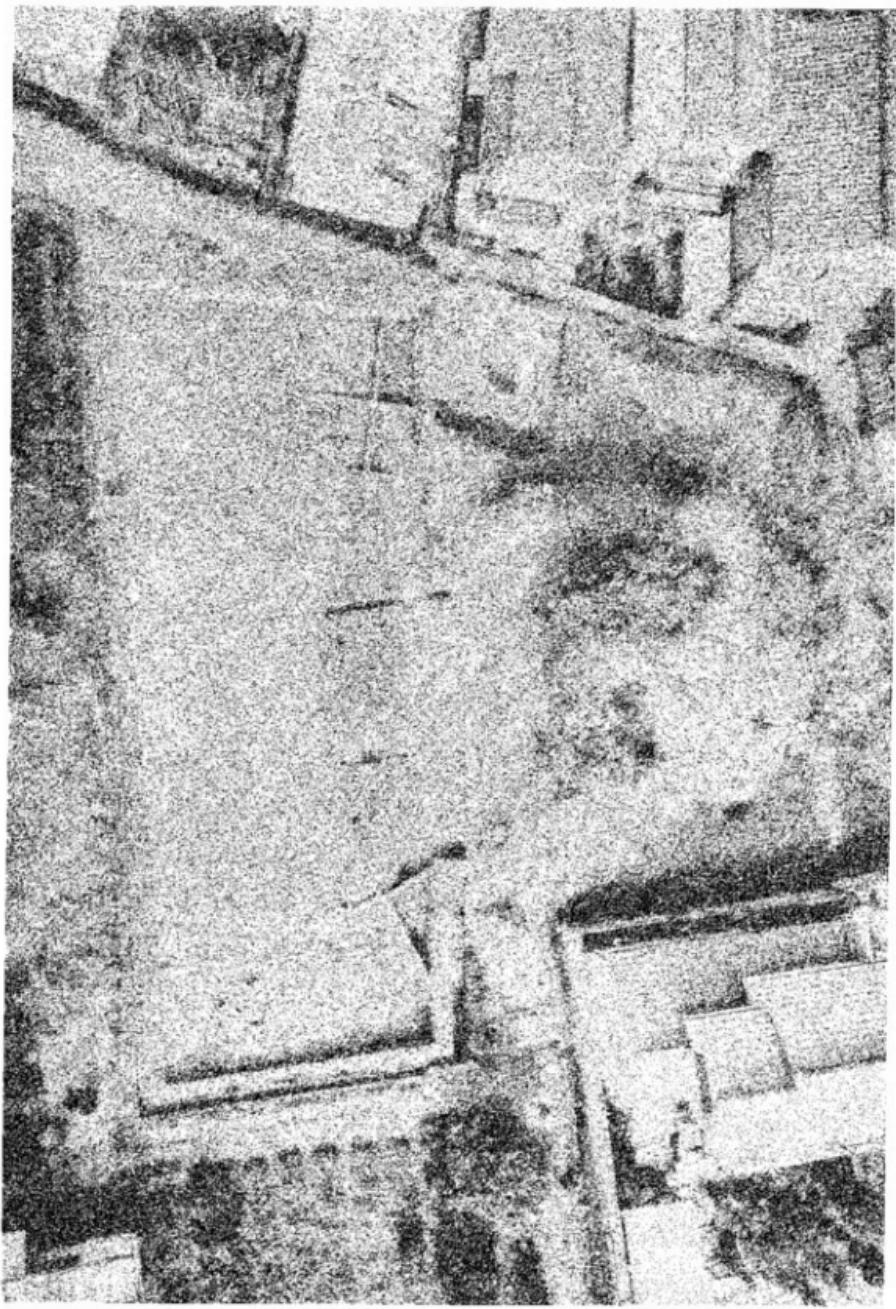
1 七ツ塚古墳群遠景 (1983年、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影)



2 七ツ塚古墳群全景 (1946年、米軍撮影)

長法寺七ツ塚古墳群第1次調査

図版二

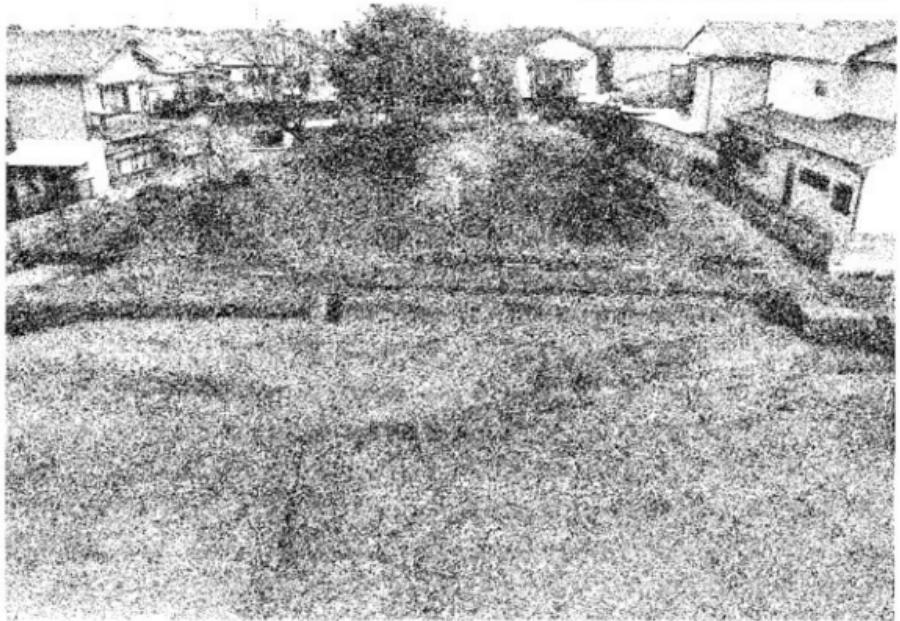


5号墳と周濠 SD13801検出状況

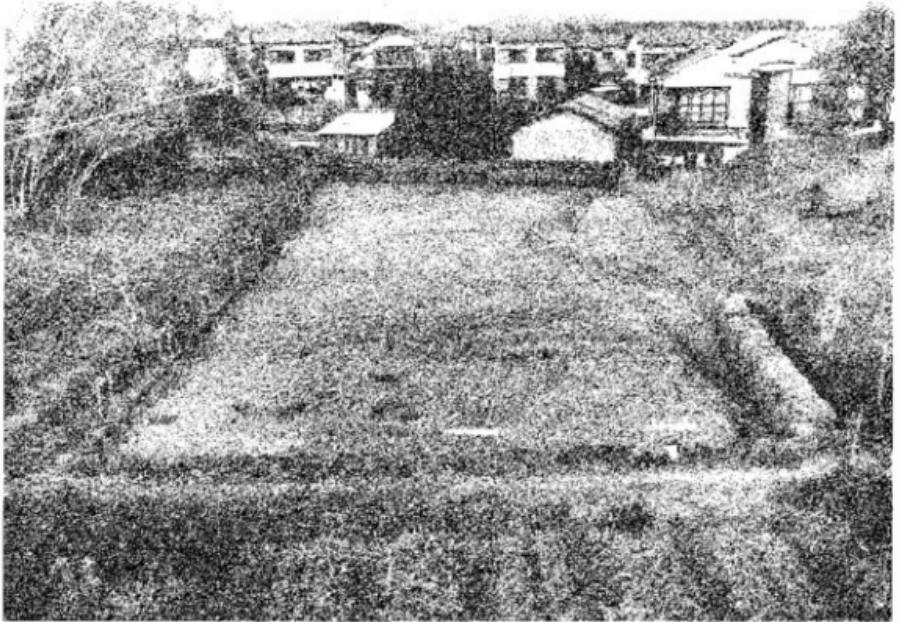
(1983年、京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影)

長法寺七ツ塚古墳群第1次調査

図版三



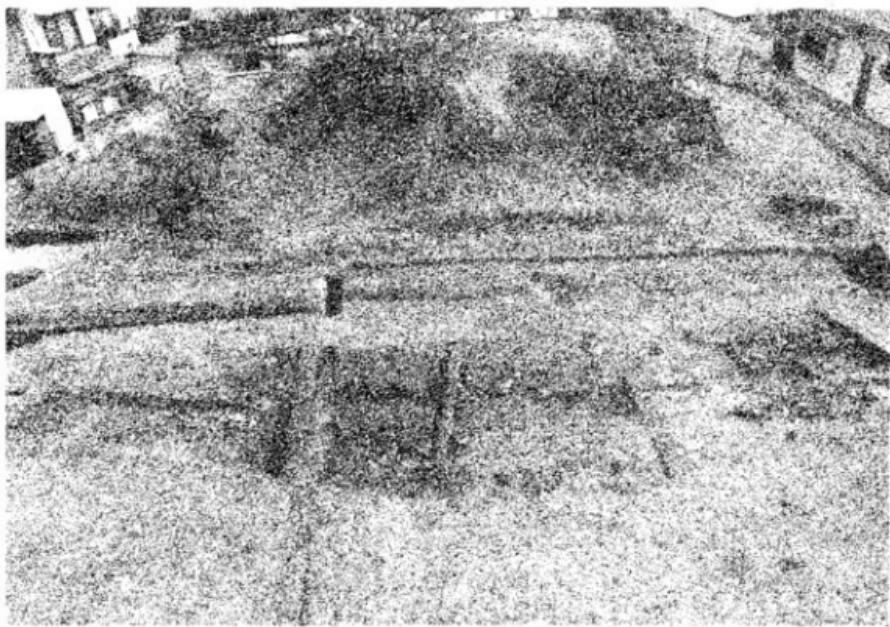
1 第6トレンチ全景（西から、完掘後）



2 第6トレンチ全景（南から、完掘後）

長法寺七ツ塚古墳群第1次調査

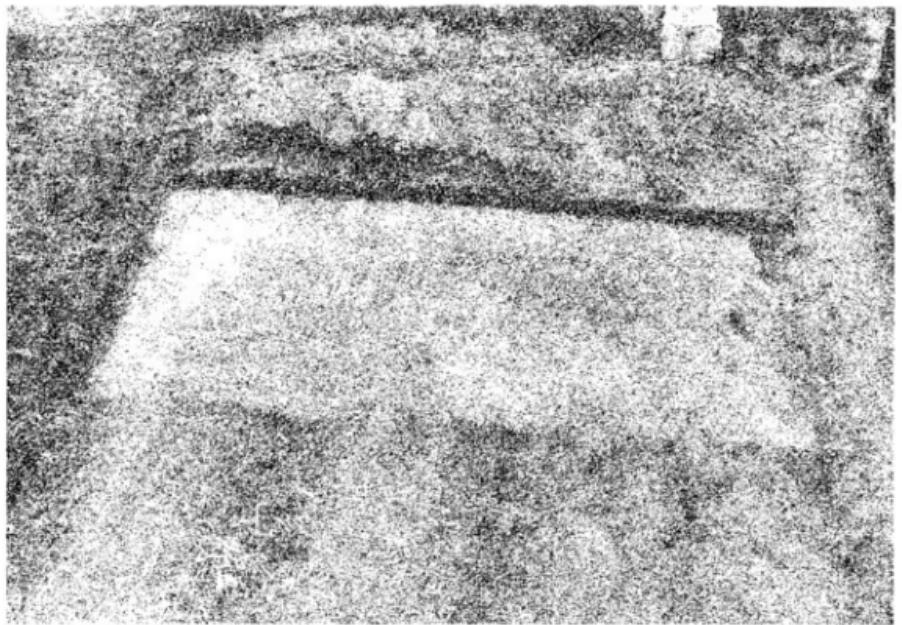
図版四



1 周濠 SD13801全景（西から、調査中）



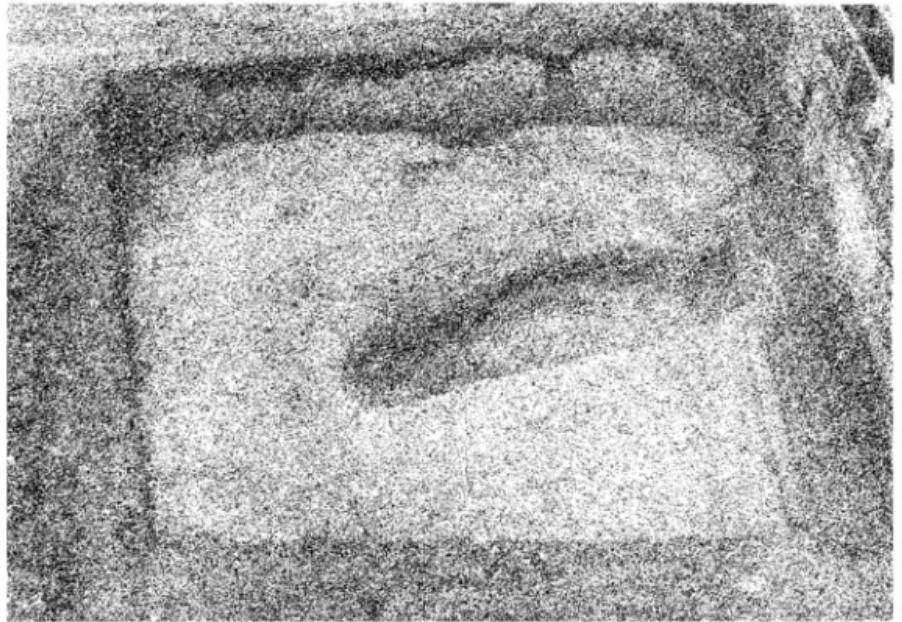
2 周濠 SD13801の遺物
の出土状況（北から）



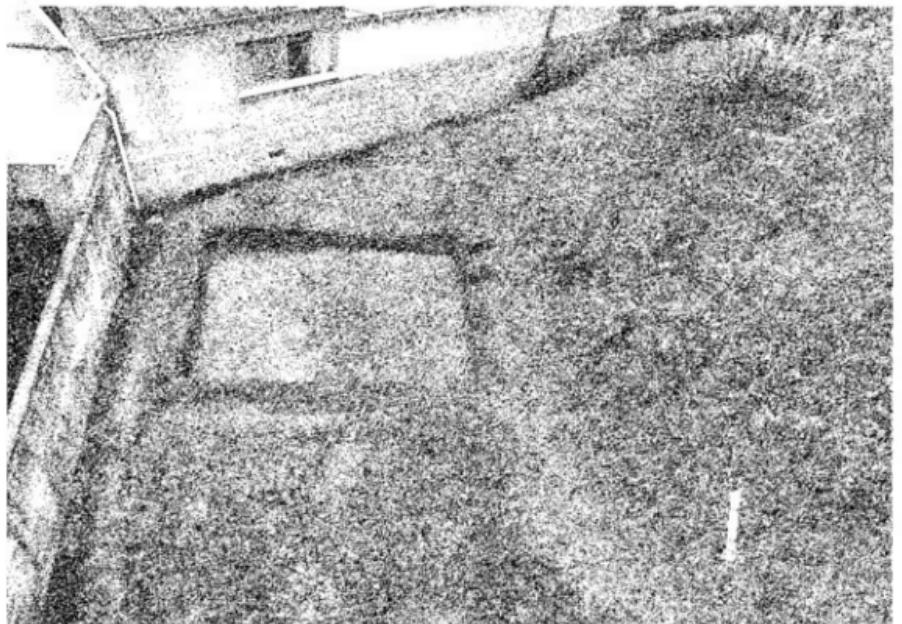
1 第1トレンチ全景（東から）



2 第2トレンチ全景（西から）



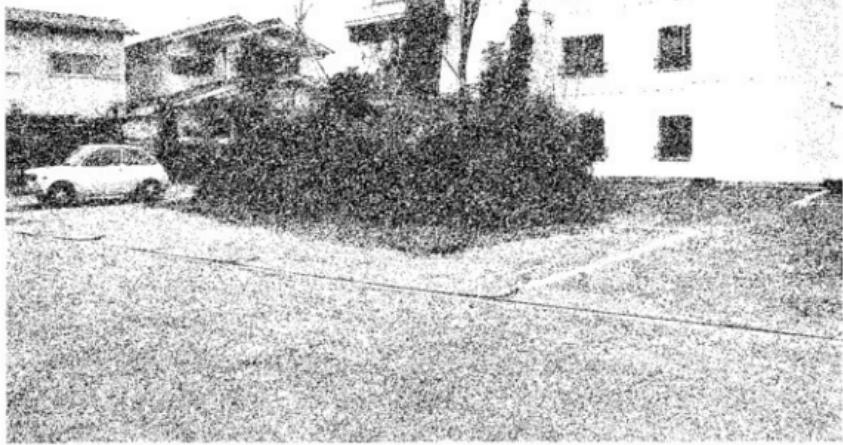
1. 第3トレンチ全景（東から）



2. 第4トレンチ全景（西から）

長法寺七ツ塚古墳群第1次調査

図版七



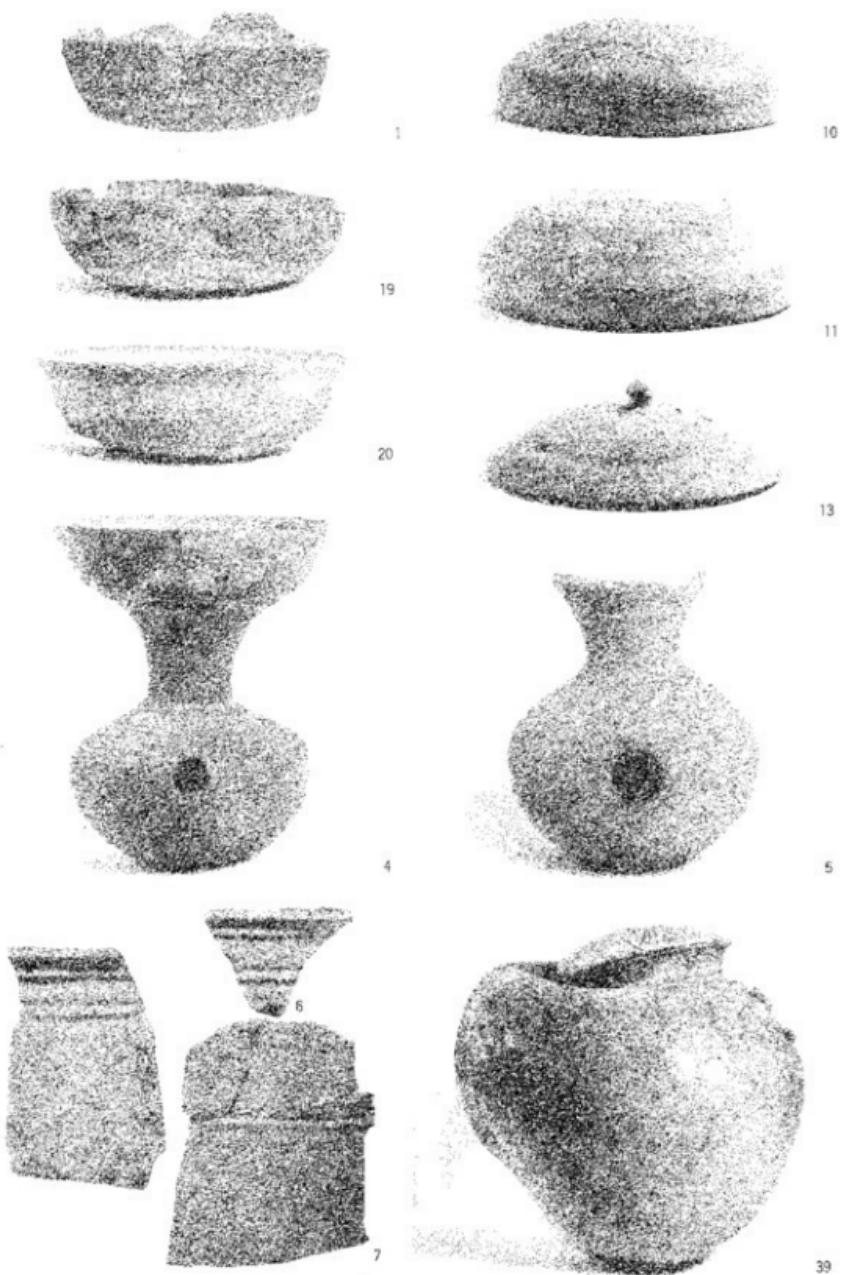
1 6号墳全景（南から）



2 6号墳埴丘断面（西から）

長法寺七ツ塚古墳群第1次調査

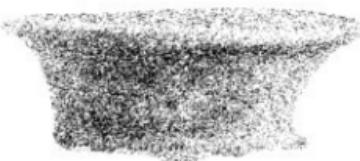
図版八



出土遺物 その1 (4—土壙 SK13805, その他一周溝 SD13801)



31



38



32



34



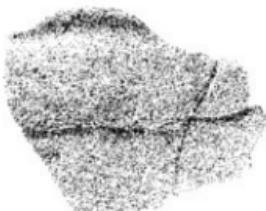
43



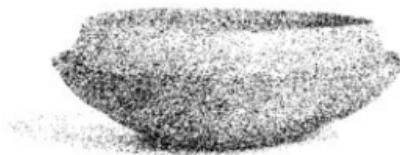
44



67



42

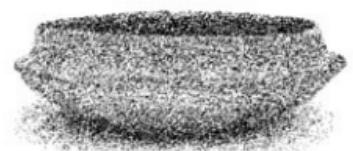
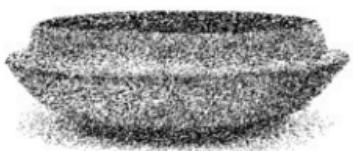
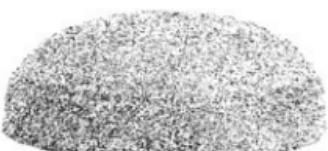
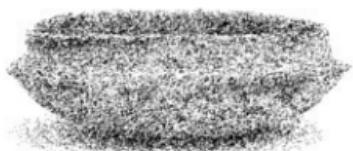


45



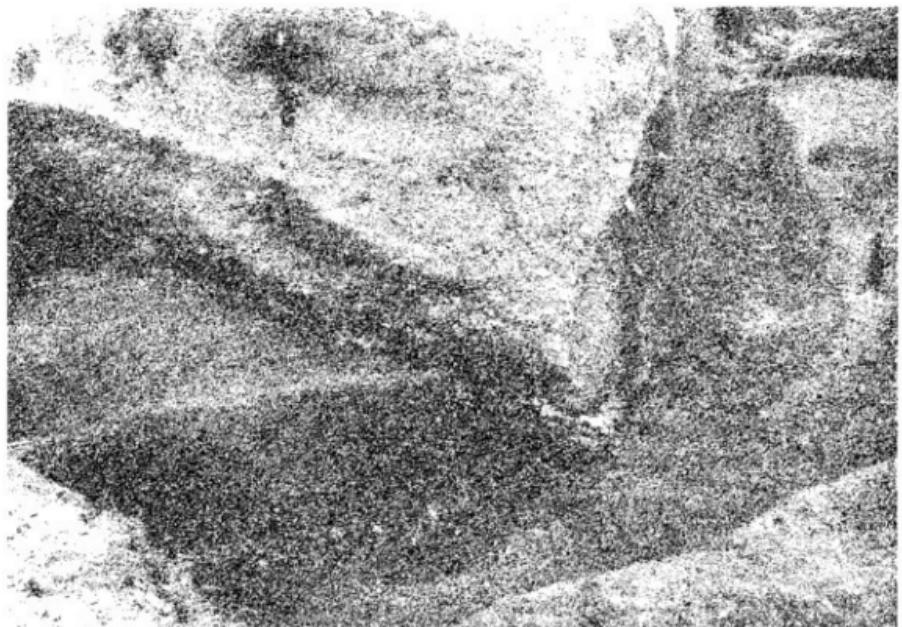
50

出土遺物 その2 (31-32-34 38-43 44-67—周溝 SD13801, 42—溝状遺構 SX13803,
45-50—3分塗採集)

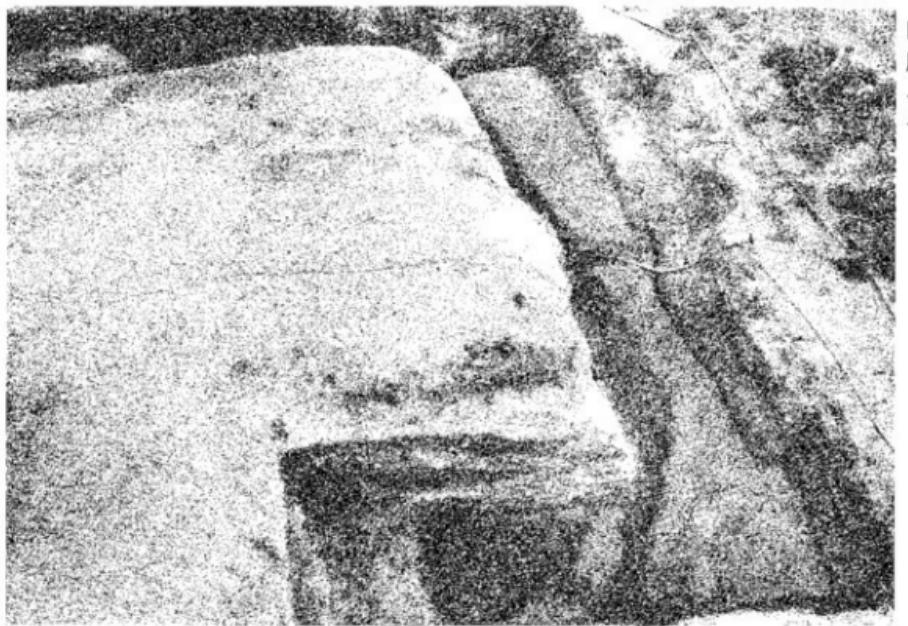




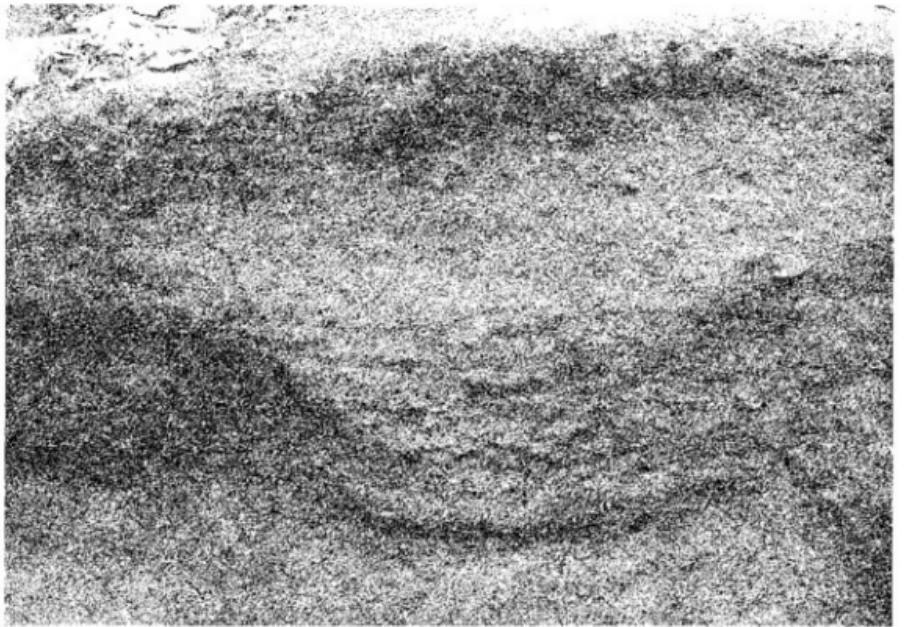
1 溝SD16305検出の2・3・4トレンチ全景（北東から）



2 溝SD16305-(B)全景（3トレンチ南から）



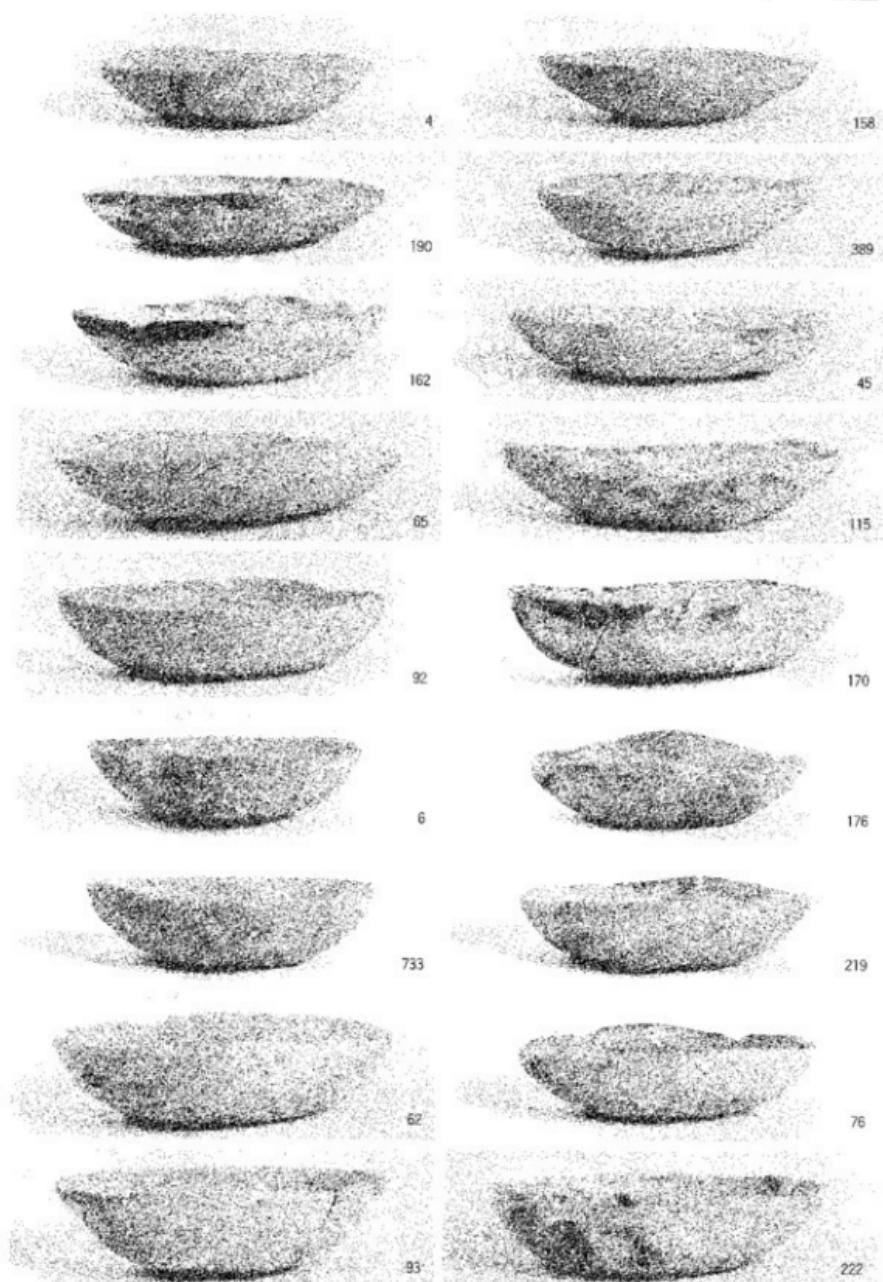
1 SD16305—(C)全景（南から）



2 SD16305断面（第2トレンチ横断面）

長岡京跡右京第163次調査

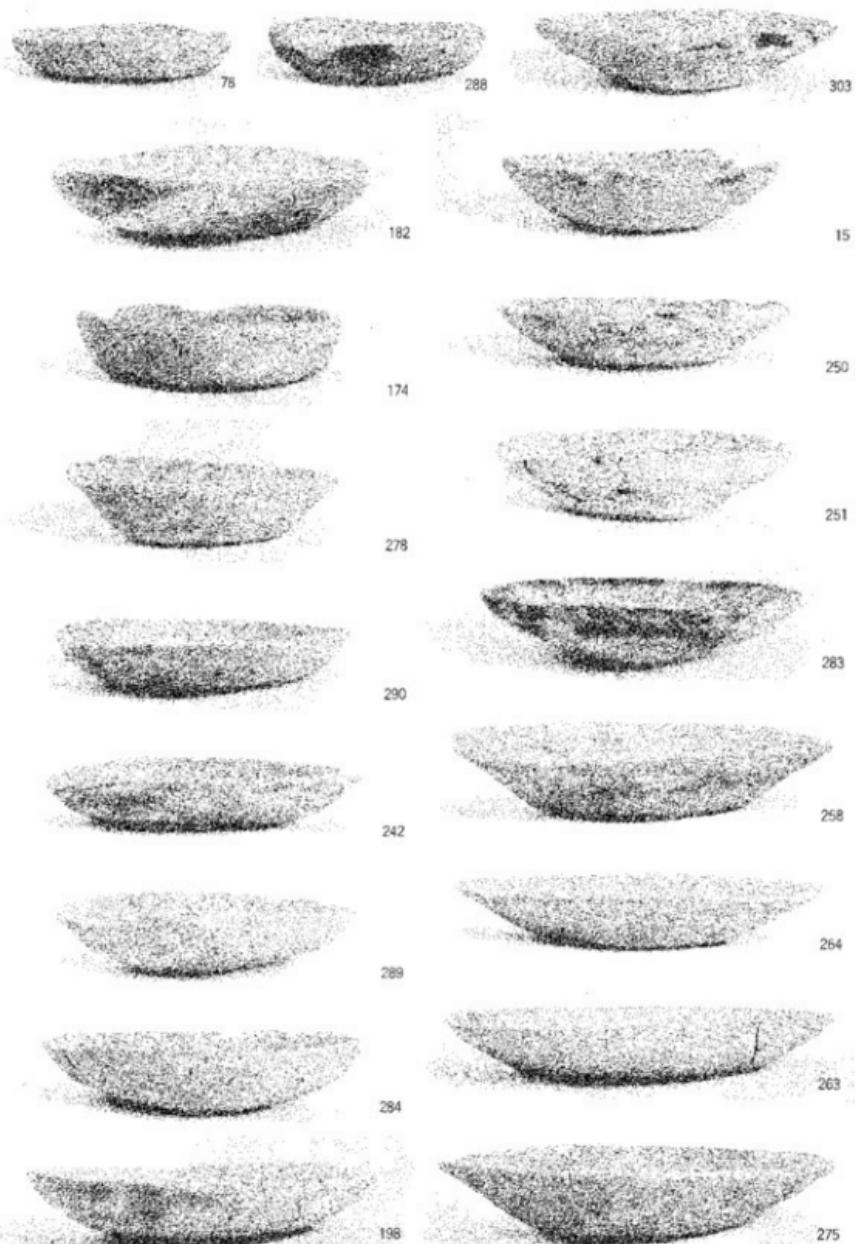
図版
一三



満SD16305出土土師器皿 左列=4・6・733・62=皿K、65=皿O、92=皿N、93=皿C
右列=皿Aa

長岡京跡右京第163次調査

図版
一四



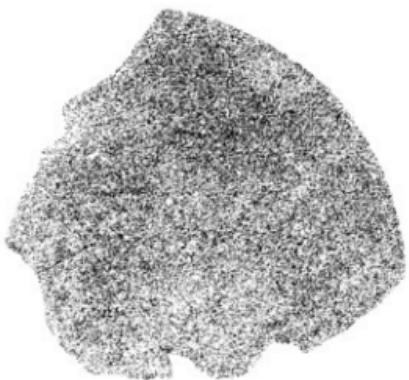
溝SD16305、空堀SD16302出土土師器皿

左列=皿Ab、288=皿Ac、182=皿K、278=皿P、290・242・289・284・198=皿O
右列=皿H



327

1 轉讀札

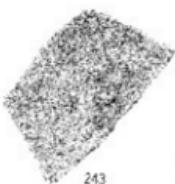


241

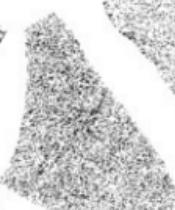
2 墨書き土器(1)



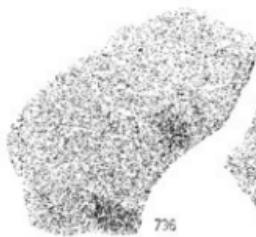
735



243



244



736

737

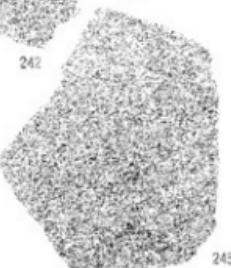


738

339

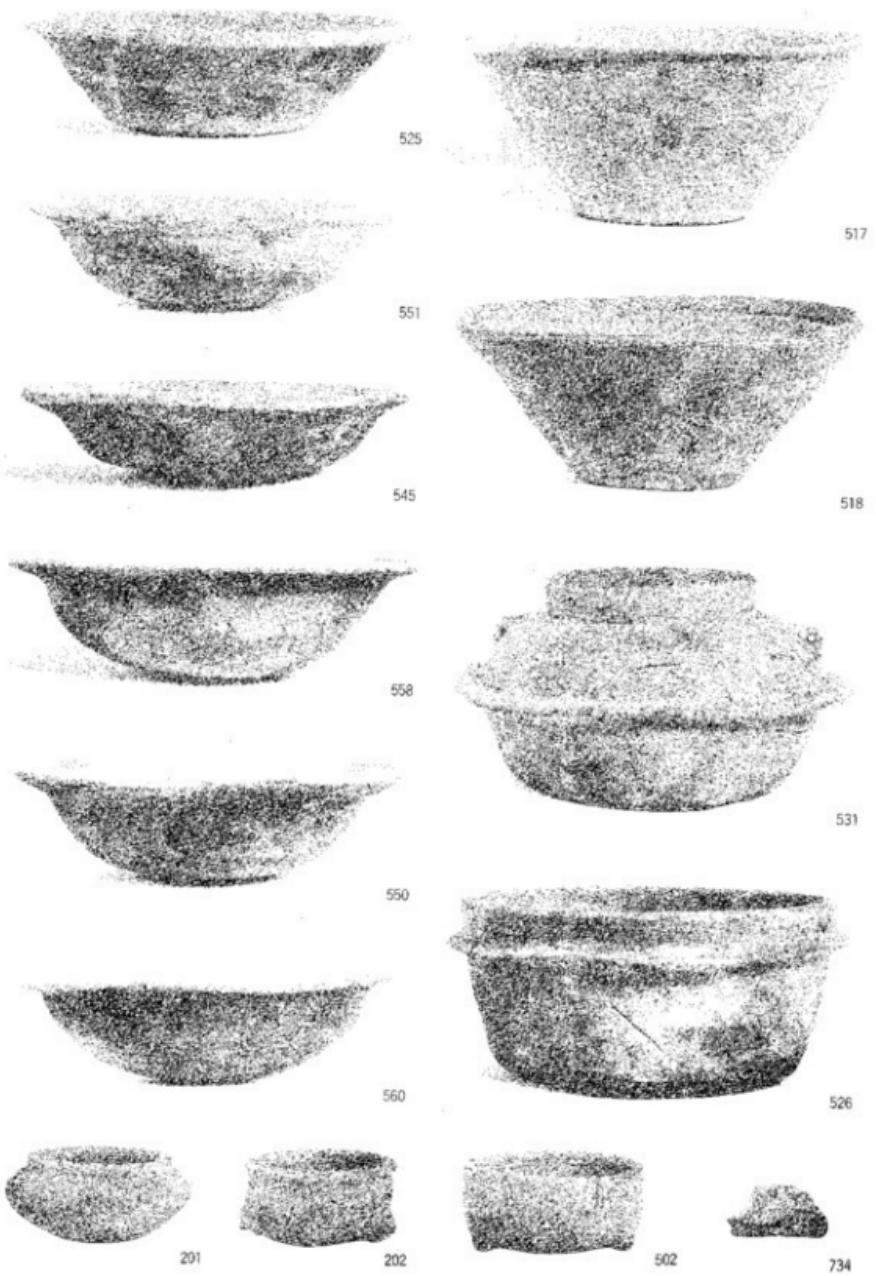


242



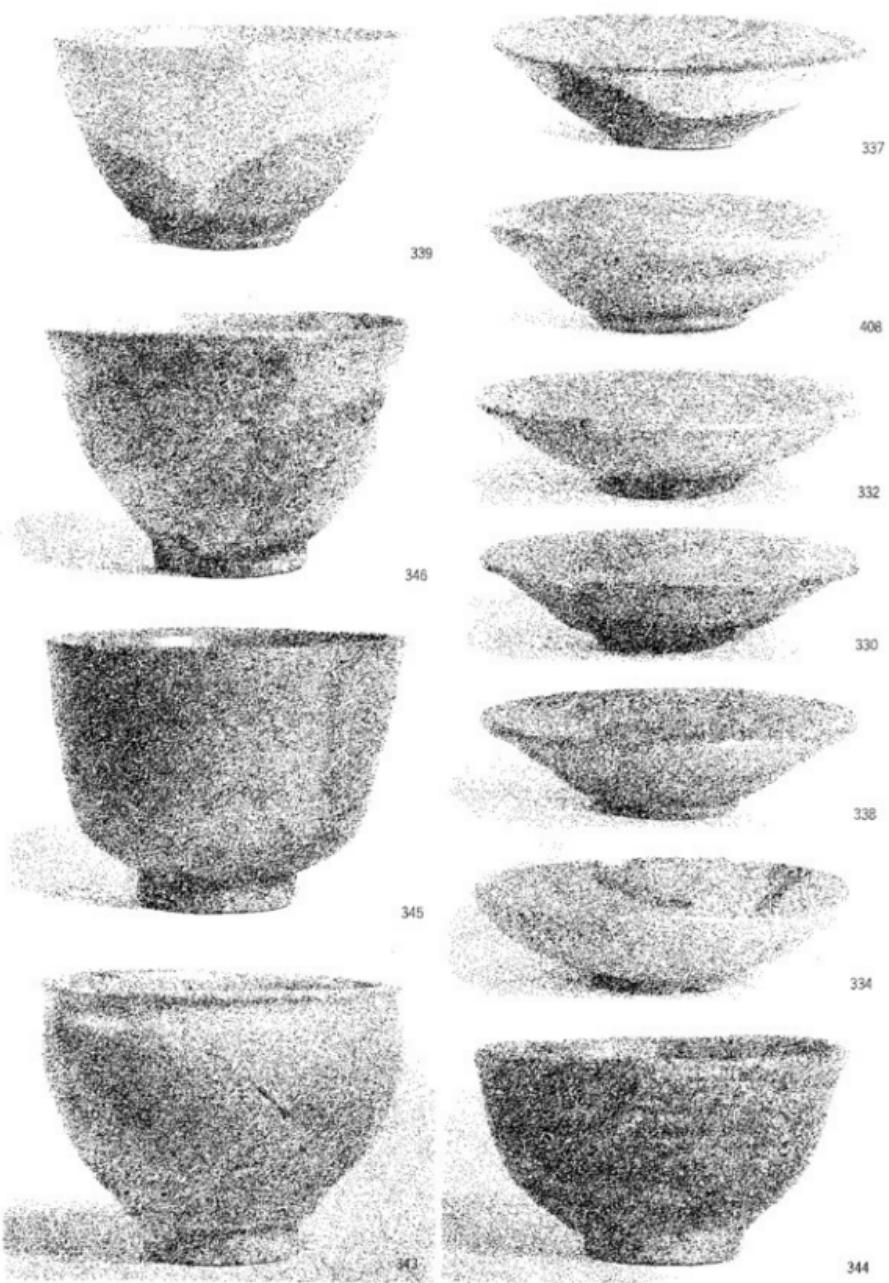
245

3 墨書き土器(2)



長岡京跡右京第163次調査

図版
一七



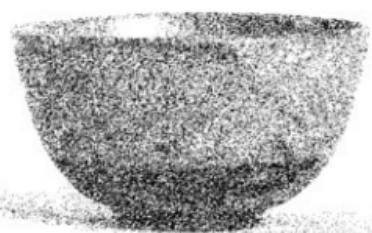
溝SD16305(A)出土唐津焼



333



407



347



337



348



336



406



405



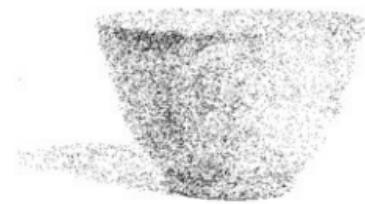
399

398

満S016305(B)出土唐津、信楽焼

長岡京跡右京第163次調査

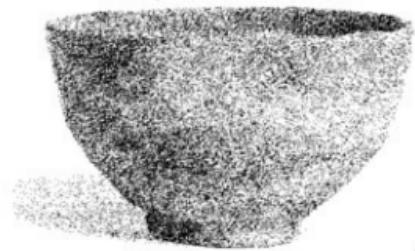
図版
一九



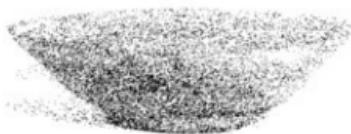
416



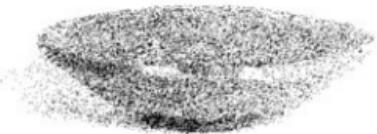
415



419



409



411



421



410



413

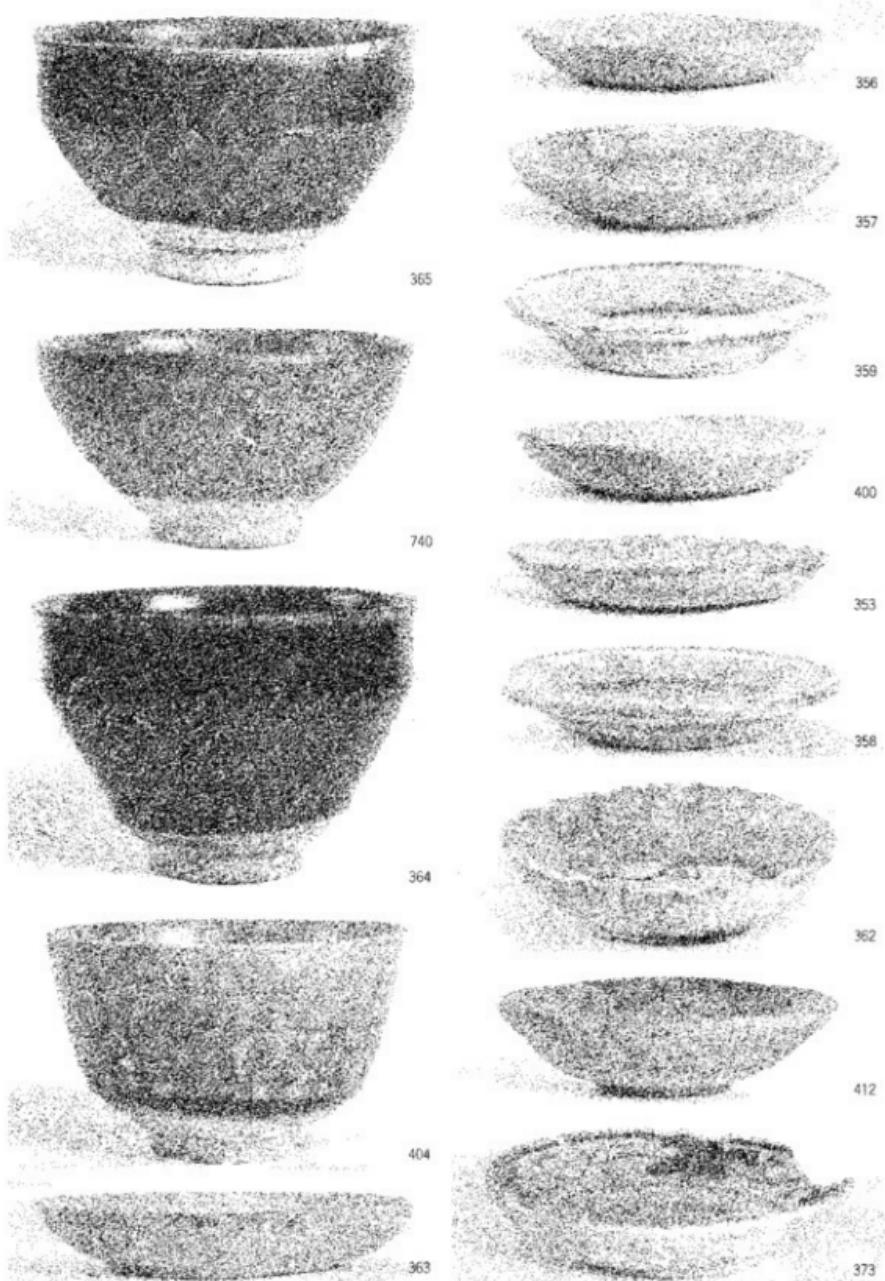


422

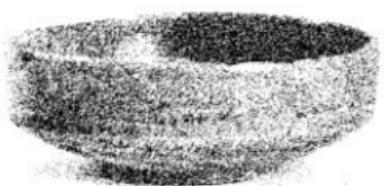


420

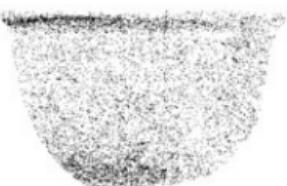
溝SD16305(C)出土唐津焼



溝SD16305出土瀬戸焼系陶器



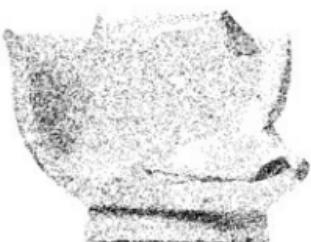
388



453



389



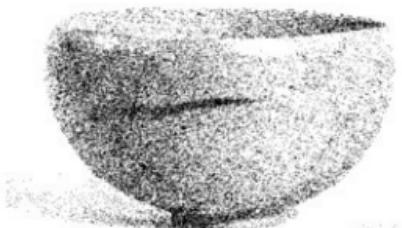
450



390



451

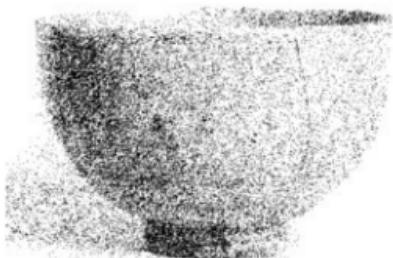


447



741

空堀等から出土した国産陶器（瀬戸、唐津、草焼系）



377



383



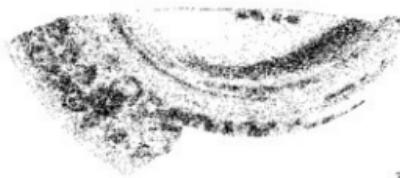
379



382



380



384



428

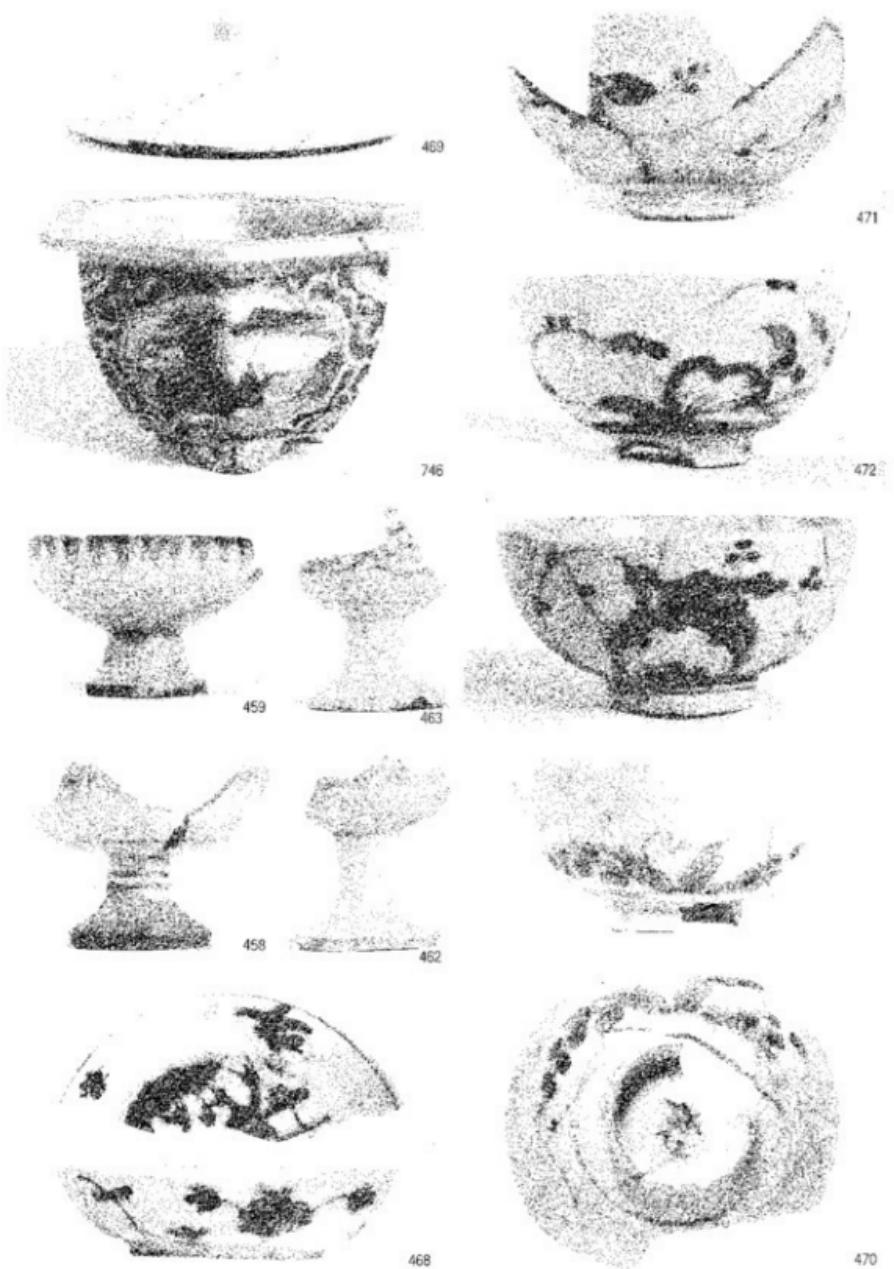


429

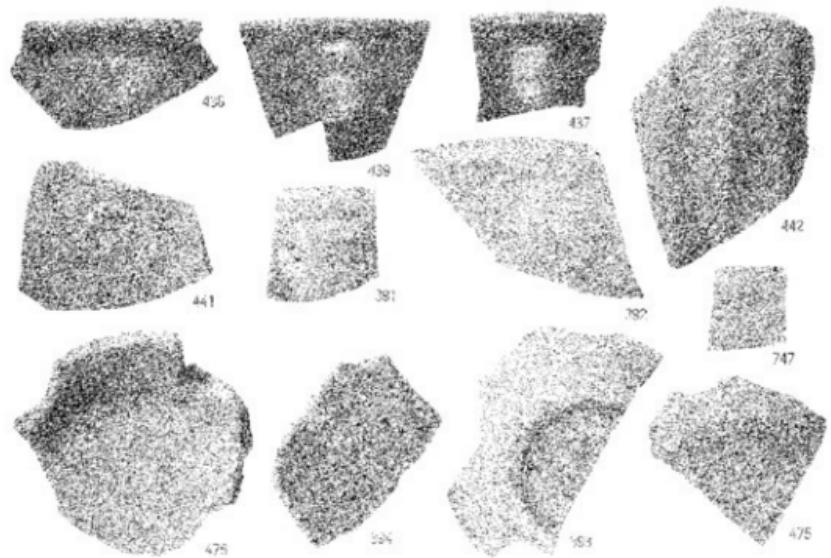


426

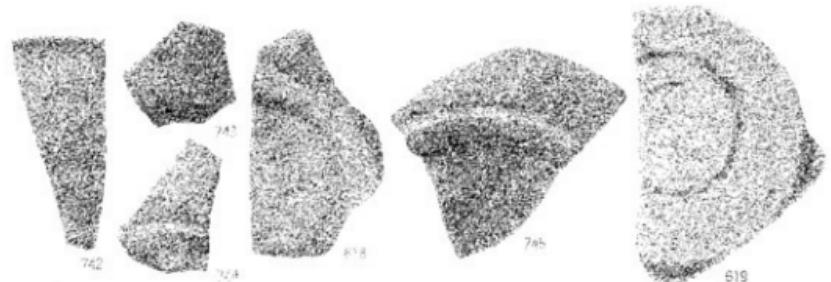
溝SD16305(A)・(B)出土染付



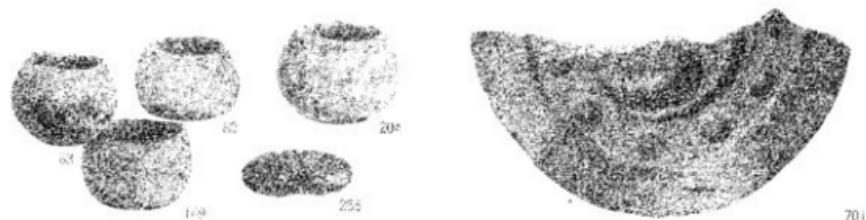
土器・空器出土の染付・白磁



1. 輸入磁器

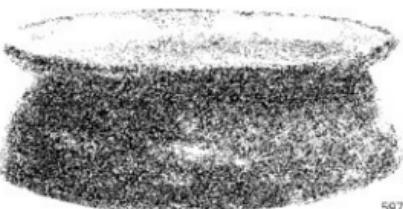
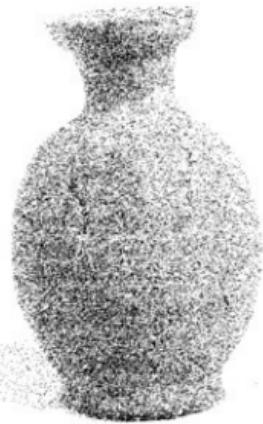


2. 緑釉陶器

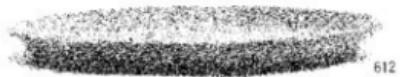


3. 小型土器片

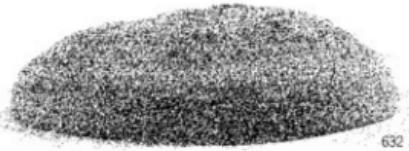
4. 近世軒瓦瓦



2 平安時代上仰壺



1 平安時代須恵器



3 神足古墳出土須恵器蓋



644



640



645



639



646



651



653

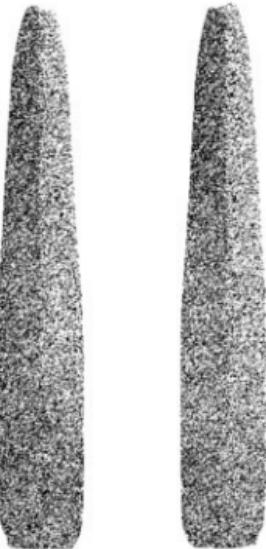


652



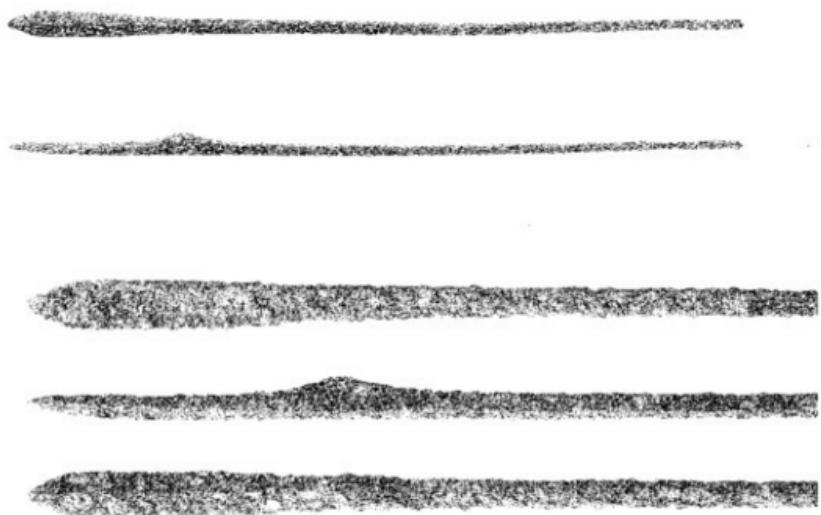
668

1 弥生土器



685

2 磨製石劍

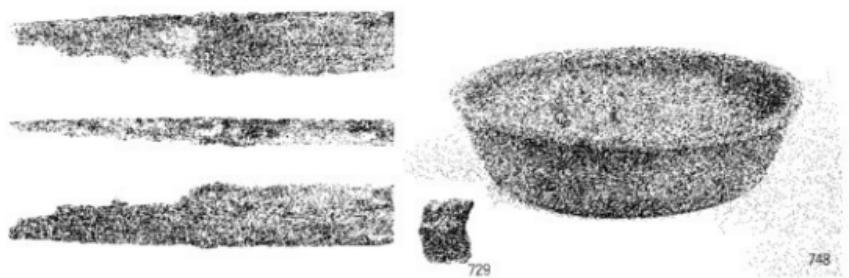


728

1 鉄製槍先



727

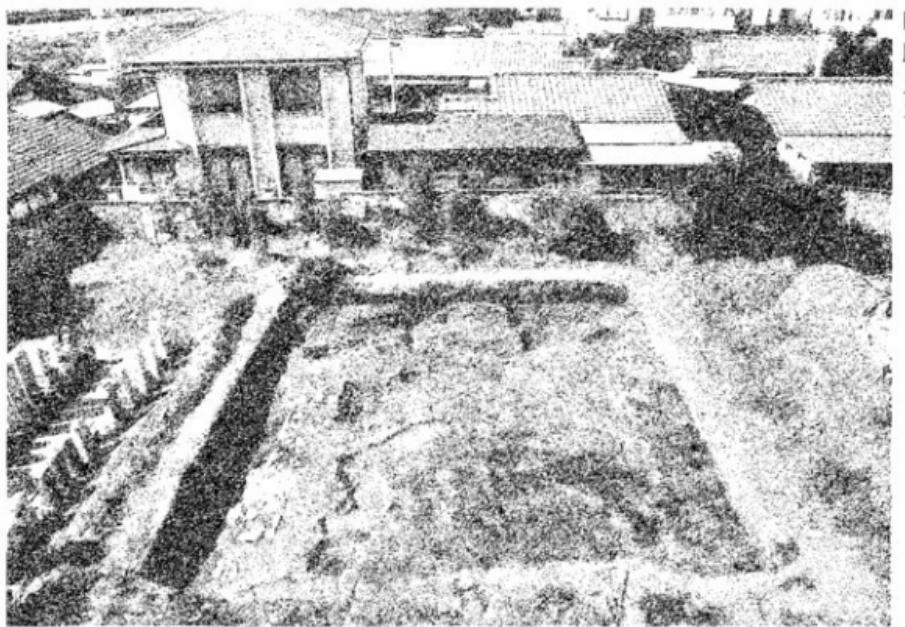


729

2 鉄製直刀

3 青銅製品

728



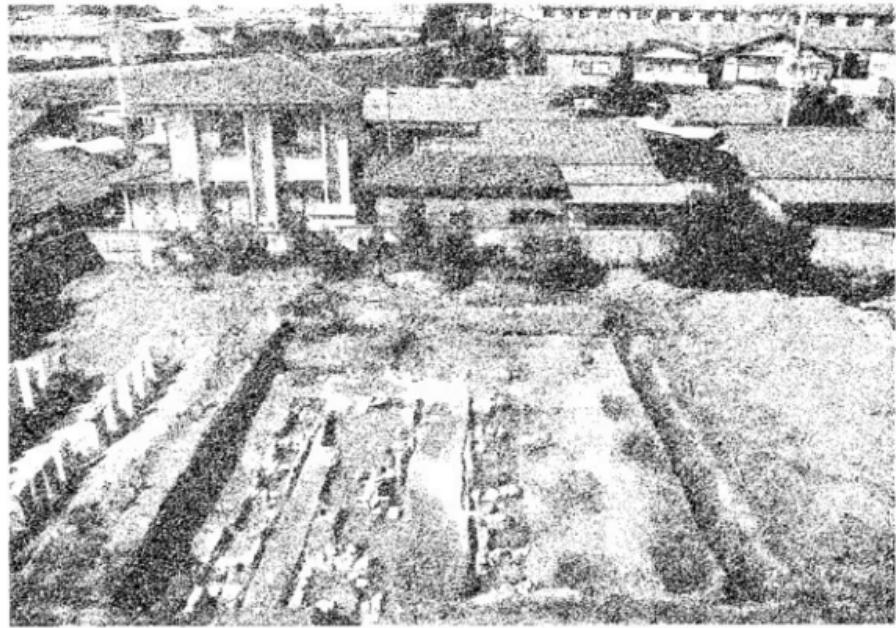
1 第IV期遺構全景（南から）



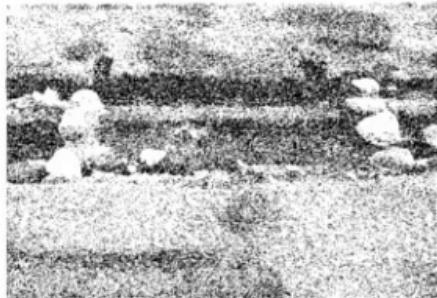
2 池SG20703（南から）



1 第二期造構検出状況全景（南から）



2 第二期造構完掘状況全景（南から）



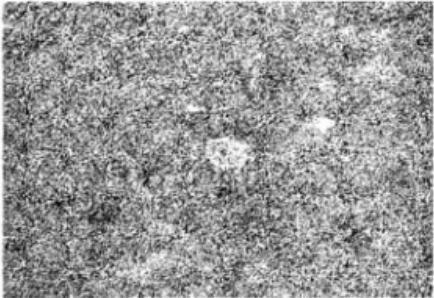
1 火葬墓 SX 20732全景（東から）



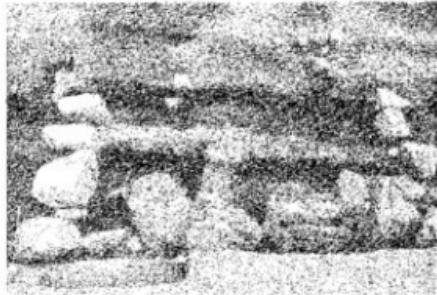
2 宽永通寶出土状況（火葬墓 SX 20732北西端）



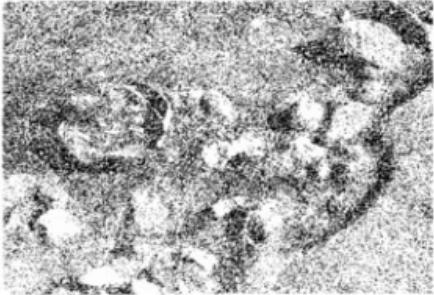
3 唐津焼出土状況（火葬墓 SX 20732北西端）



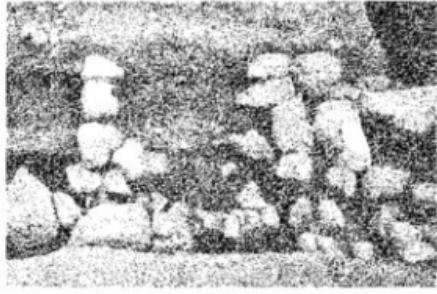
4 元祐通寶出土状況（火葬墓 SX 20732中央）



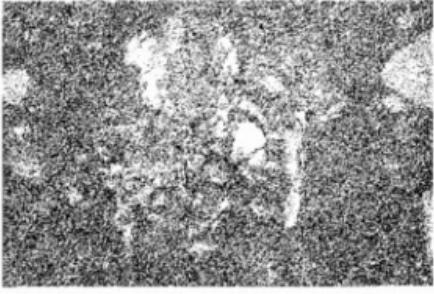
5 火葬墓 SX 20719全景（西から）



6 骨壺出土状況（火葬墓 SX 20719中央）



7 火葬墓 SX 20731全景（西から）



8 火葬骨出土状況（火葬墓 SX 20731中央）

火葬墓A列群の細部



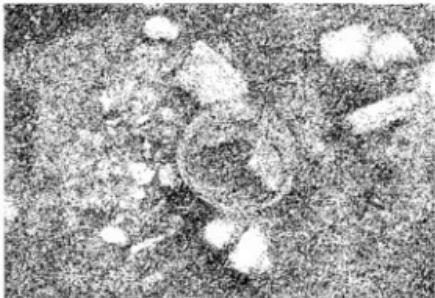
1 火葬墓SX 20715全景（東から）



2 火葬骨出土状況（火葬墓SX 20715中央）



3 火葬墓SX 20727全景（西から）



4 火葬骨出土状況（火葬墓SX 20727）



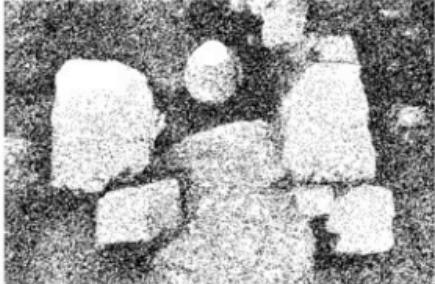
5 火葬墓SX 20729全景（西から）



6 火葬骨出土状況（火葬墓SX 20729南端）

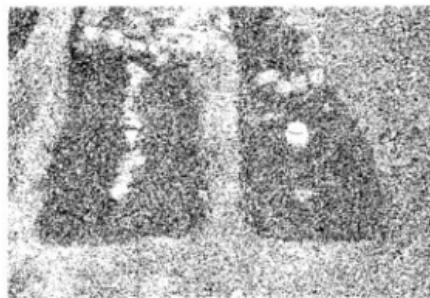


7 火葬墓SX 20717全景（東から）

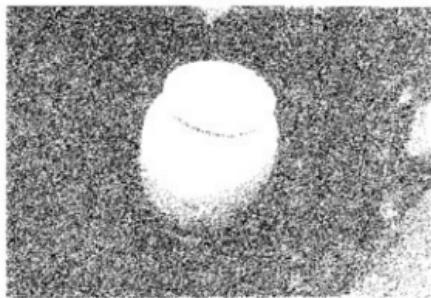


8 納骨器出土状況（火葬墓SX 20717中央）

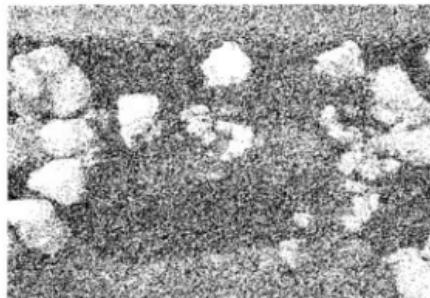
火葬墓B列群の細部



1 火葬墓 SX 20726（北から）



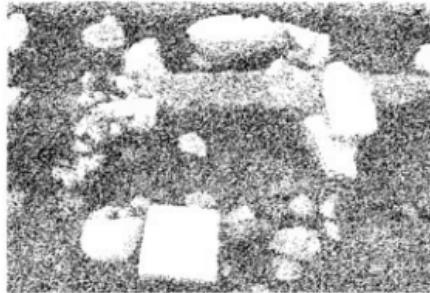
2 骨壺出土状況（火葬墓 SX 20726）



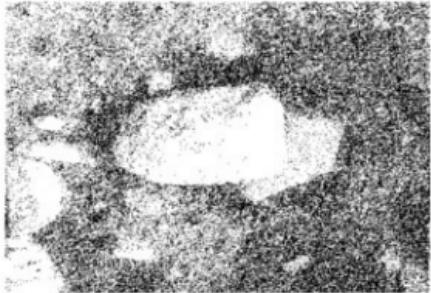
3 火葬墓 SX 20709（東から）



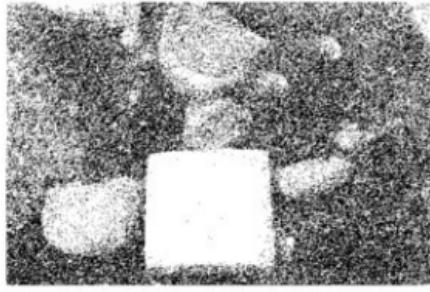
4 藏芥器出土状況（火葬墓 SX 20709）



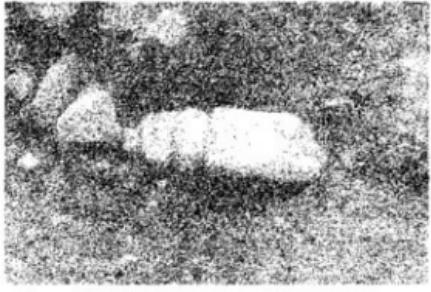
5 火葬墓 SX 20708（西から）



6 石仏出土状況（火葬墓 SX 20708）



7 五輪塔火輪部出土状況（火葬墓 SX 20708）



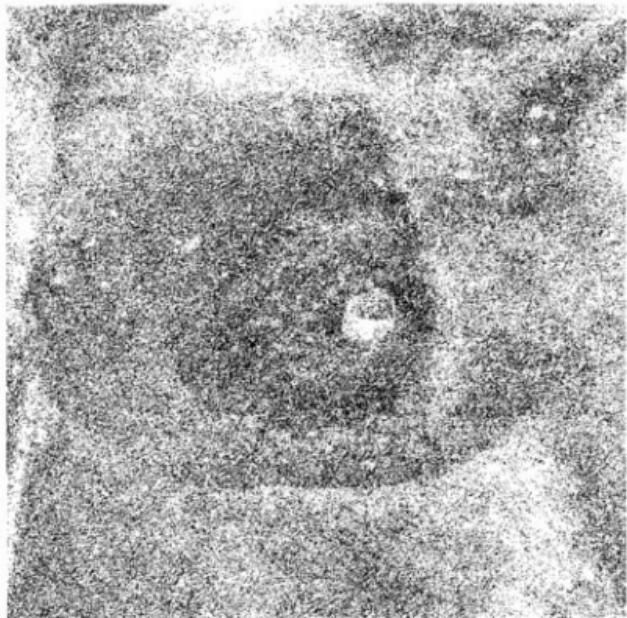
8 一石五輪塔出土状況（火葬墓 SX 20708）



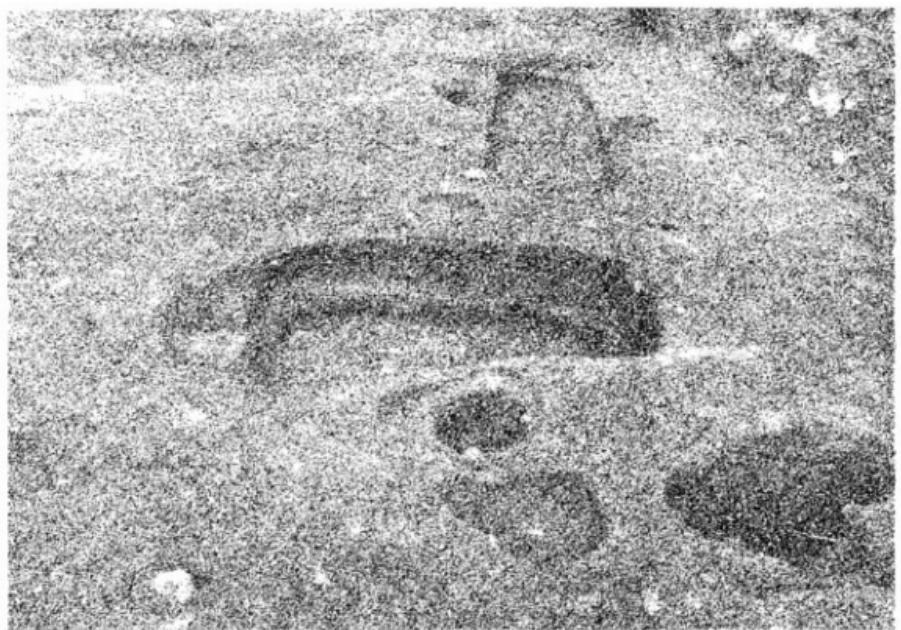
1 第二期造構全景（南から）



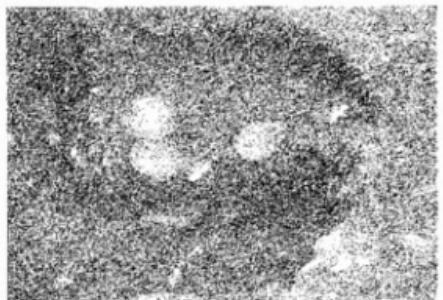
2 第一期全景（南から）



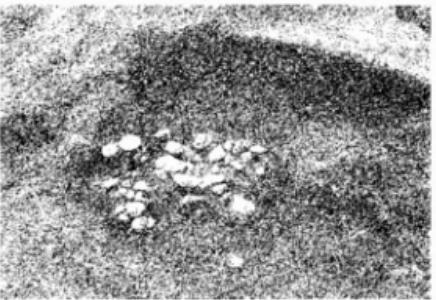
1 上草墓 SX 20738(南から)と頭骨(右上)、副葬品(右下)出土状況



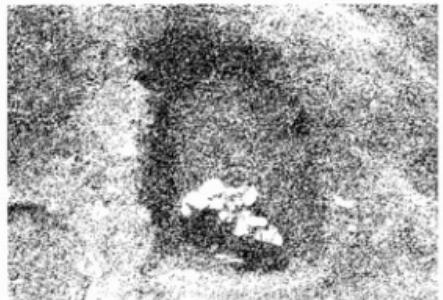
2 寝棺墓群(西から)、(下)一土草墓 SK 20741、(上)二土草墓 SK 20759



1 土壌SK 20736（東から）



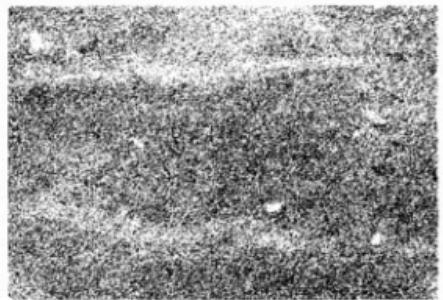
2 土壌SK 20742（東から）



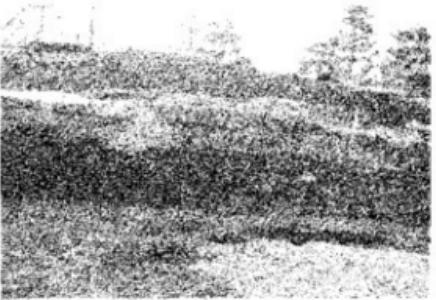
3 土壌SK 20758（北から）



4 土壌SK 20743（北から）



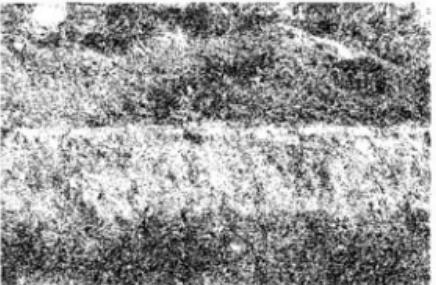
5 整地盛土と第Ⅰ期落ち込み（トレンチ東壁）



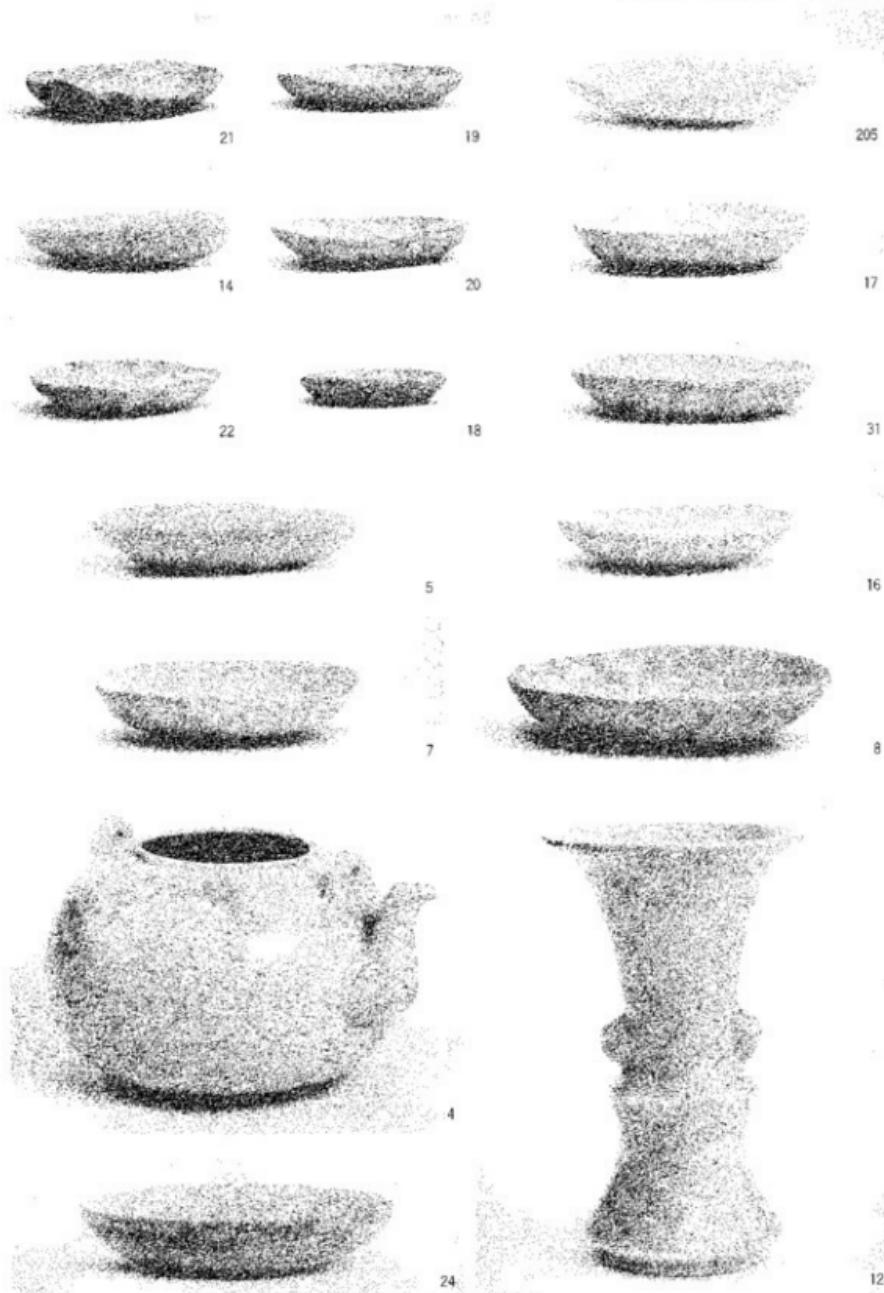
6 整地盛土と火葬墓A列群上層（トレンチ南壁）



7 葬道整地層（トレンチ西壁）



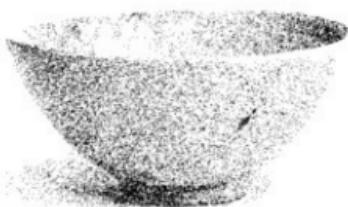
8 土壌SK 20761土層（トレンチ北壁）



第IV期遺構・包含層出土遺物



26



27



120



9



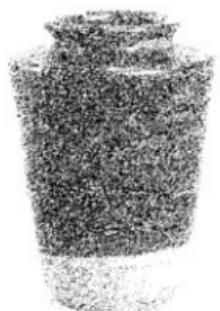
84



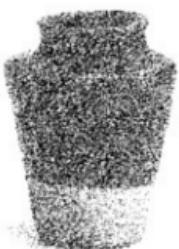
62



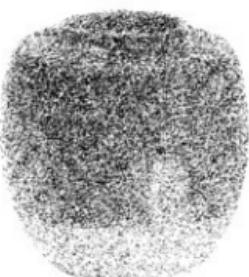
148



99



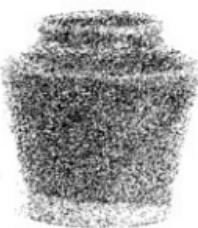
206



40



207



65



208



92

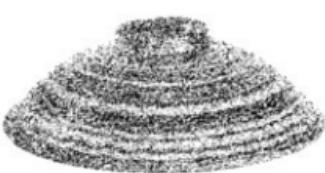


54





97



112



98



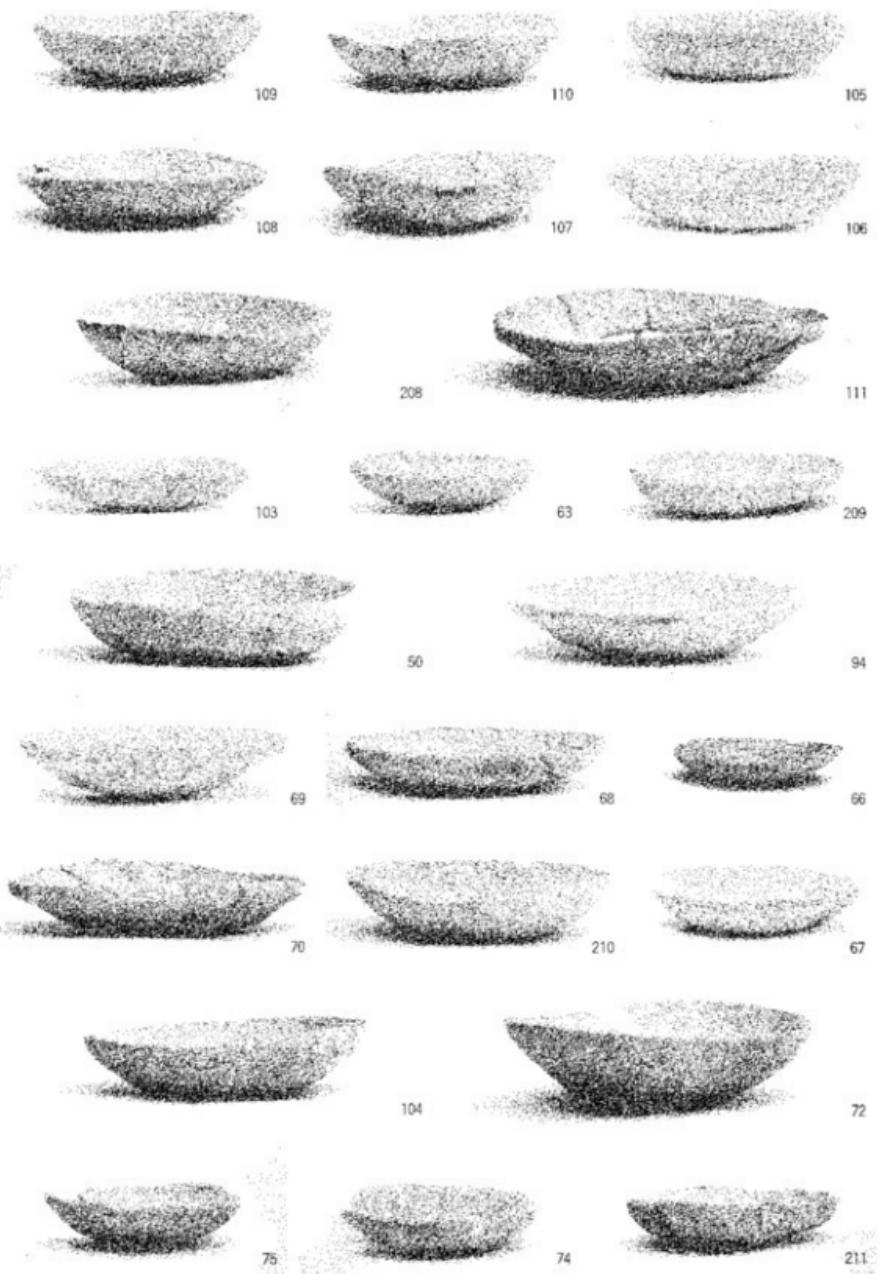
113



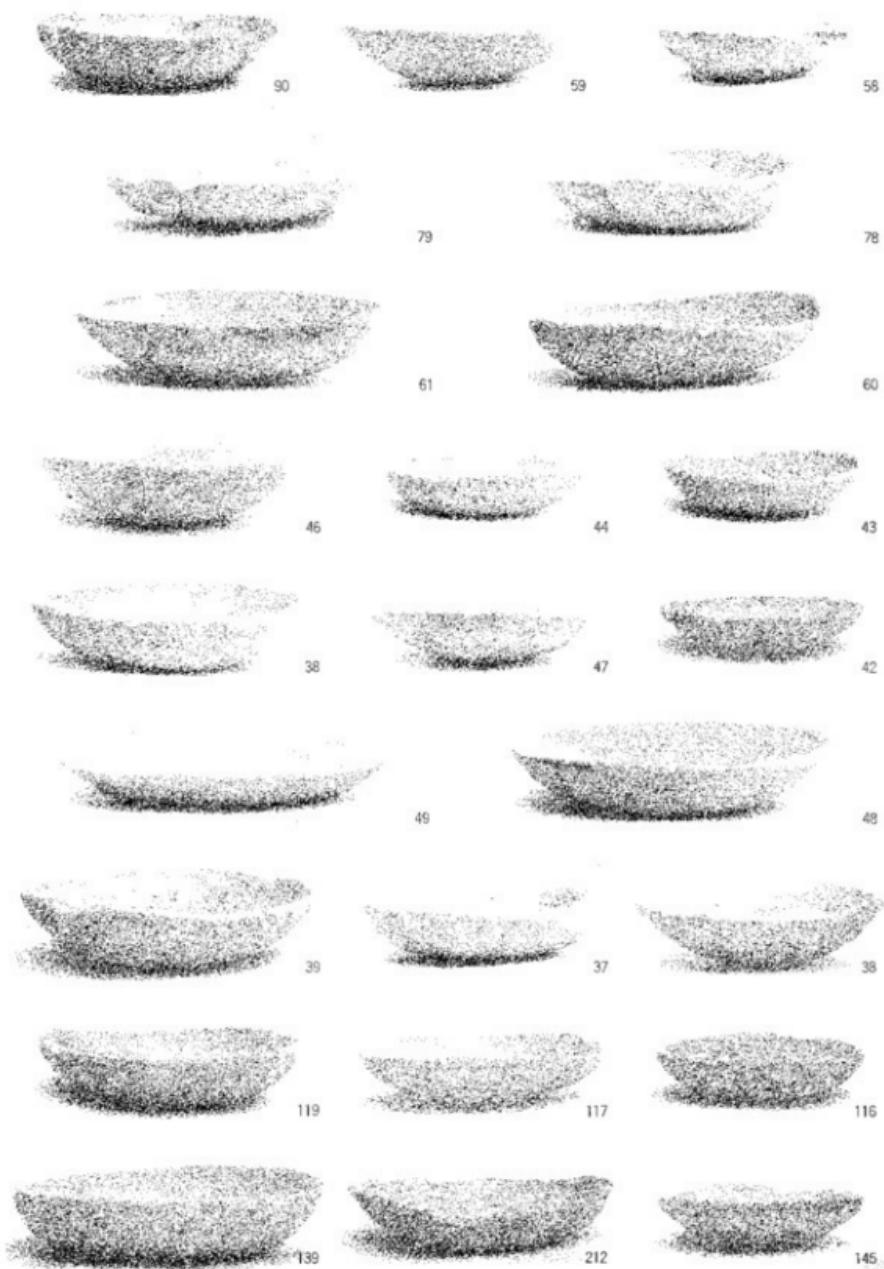
83



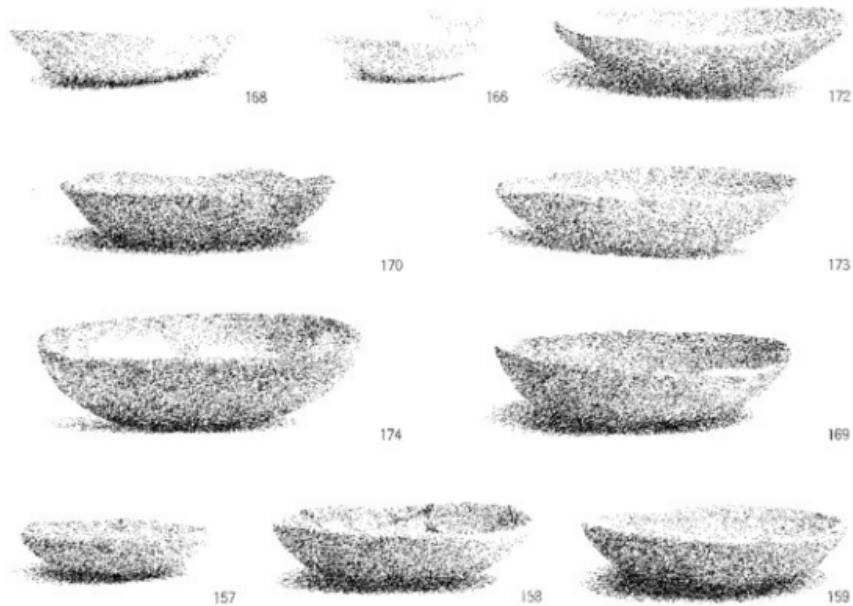
73



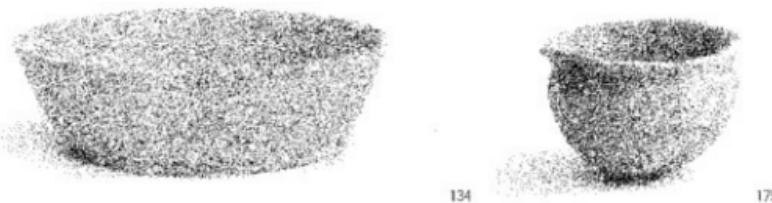
火葬墓出土上土師器皿(1)



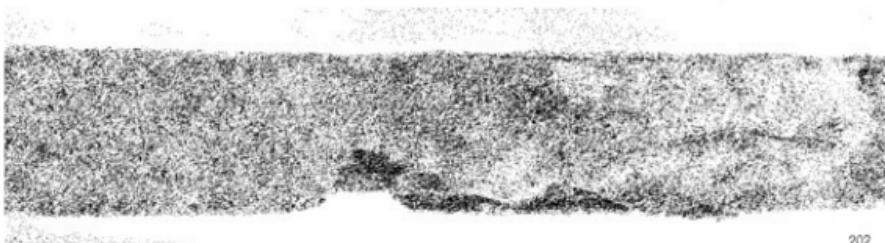
大葬墓出土土器皿(2)



1 第Ⅱ期土壙出土土師器皿

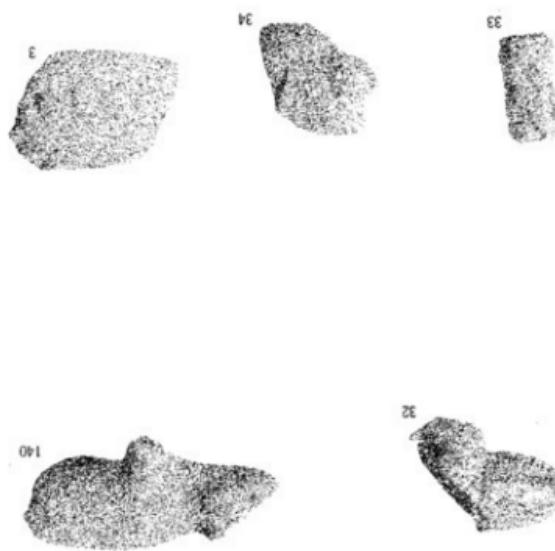
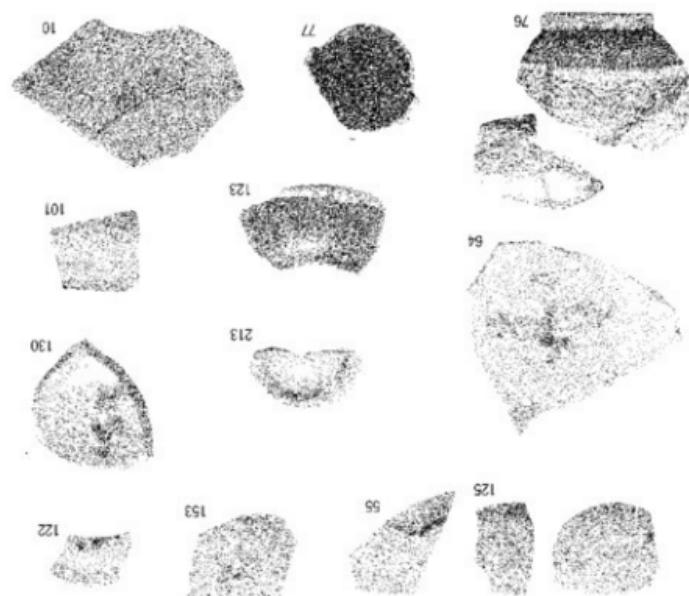


2 長岡京期の遺物

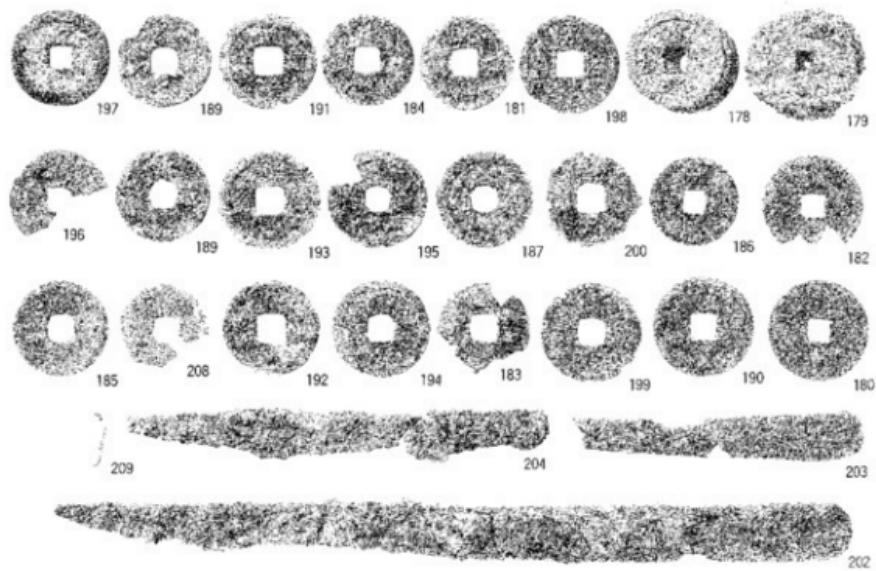


3 刀子の線刻画部分

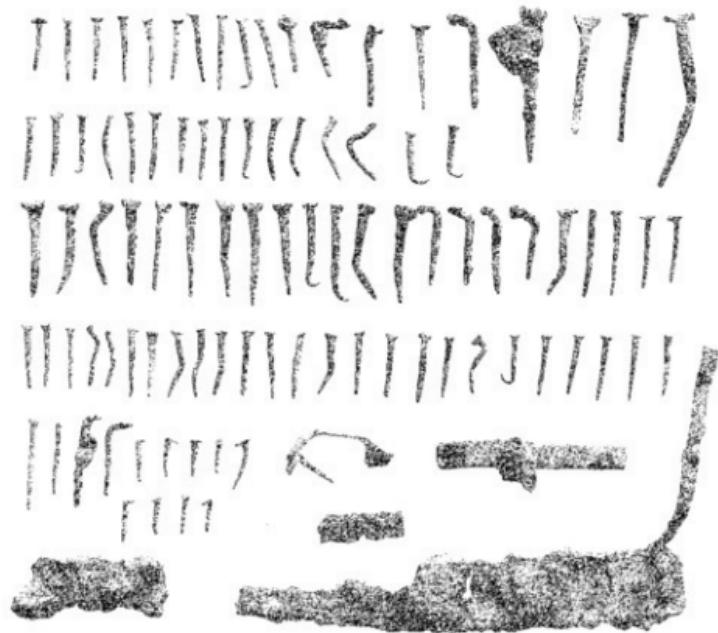
供見人形



長圖草稿右原第207次調查



1 古貨幣と刀子



2 火葬墓 SX 20715出土金銀器



1



2



3

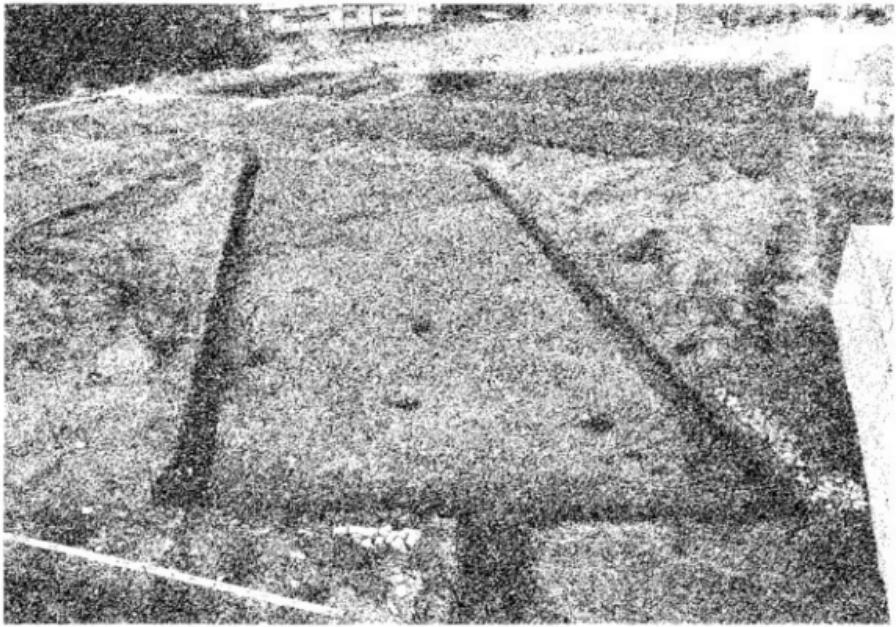
1. 前面観

2. 側面観

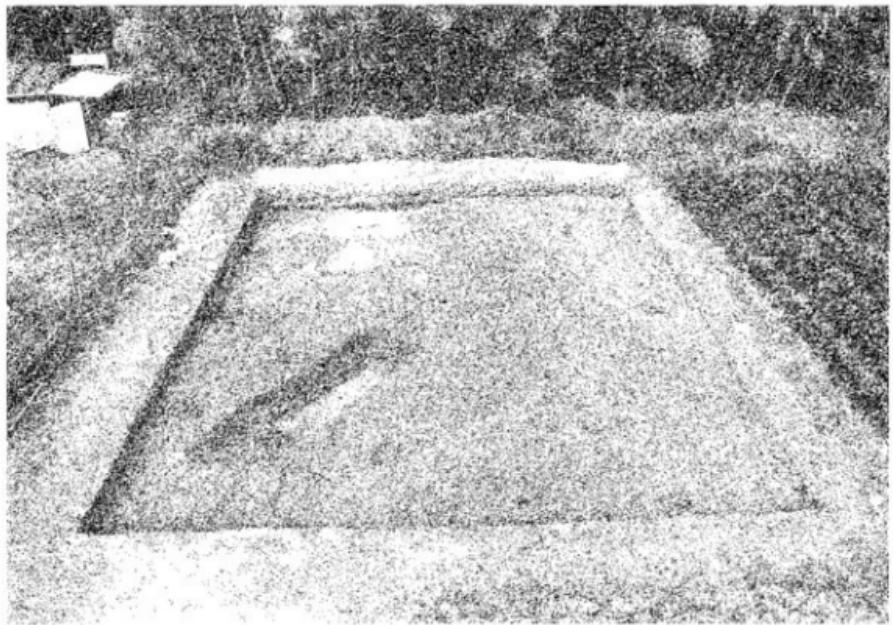
3. 上面観



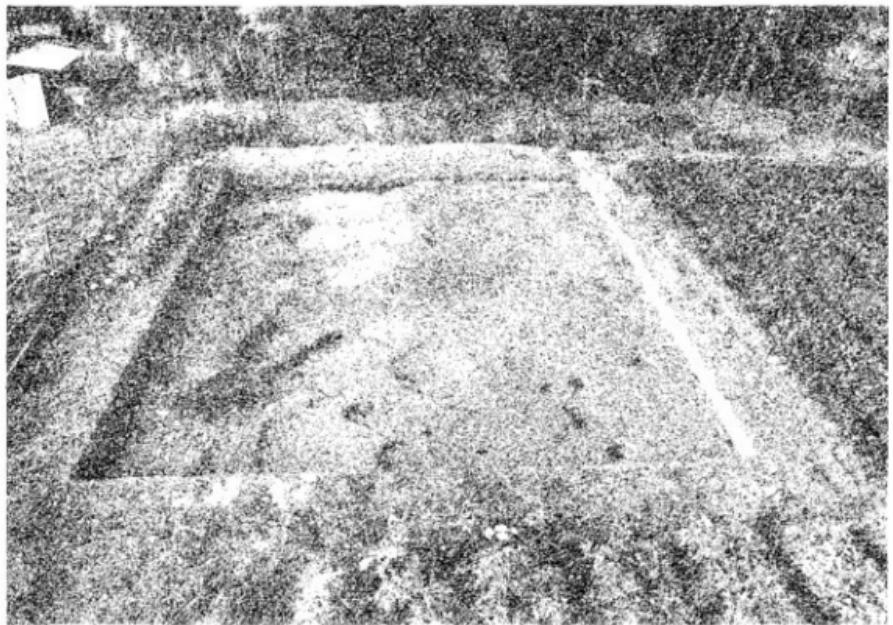
1 調査地全景 (南西から、調査前)



2 Aトレンチ全景 (南から)



1 Bトレンチ全景（土層、南東から）



2 Bトレンチ全景（下層、南東から）

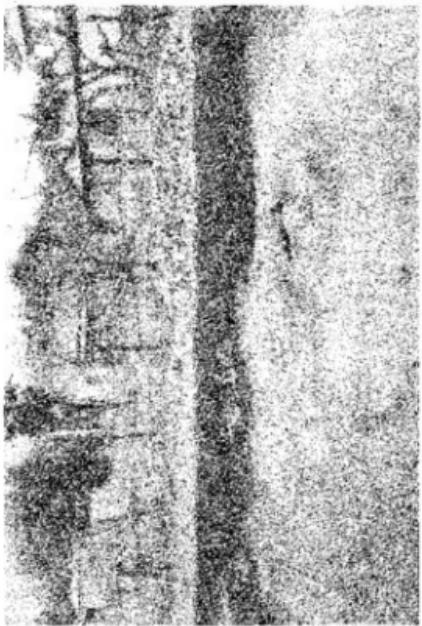
図版九

2 Aトレンチ 東壁南端の土層堆積状況(西から)

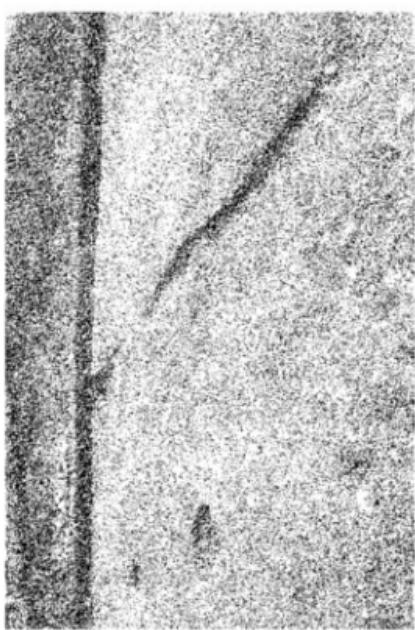


1 Aトレンチ 溝SD21301(北西から)

4 Bトレンチ 南壁の土層堆積状況(北から)



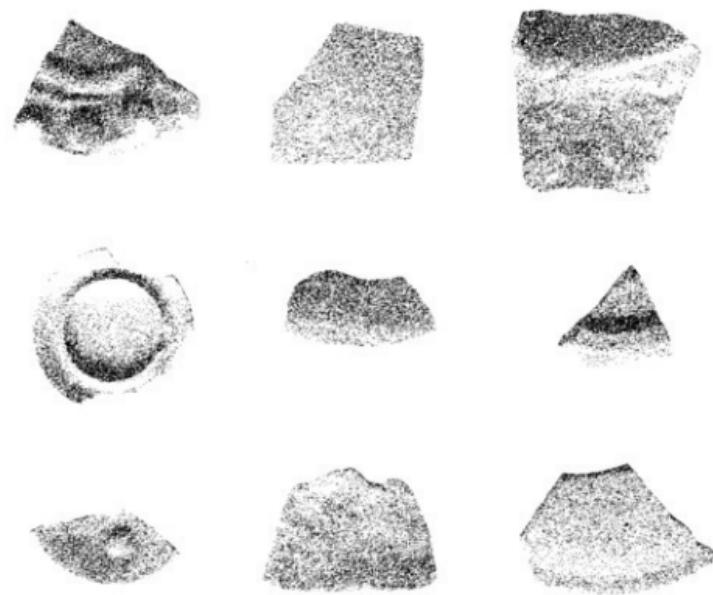
3 Bトレンチ 西壁の上部堆積状況(東から)



2. 出土遺物(402)



1. 出土遺物(401)



長岡京跡古京第213次調査

長岡京市文化財調査報告書 第17冊

発行日 昭和61年3月31日

編集・発行 長岡京市教育委員会

〒617 京都府長岡京市開田一丁目1番1号
電話 075-951-2121

印 刷 株式会社 同朋舎
〒600 京都市下京区中堂寺鍾田町2
電話 075-361-9121